公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（52）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小牧（こまき）遺跡４

（鹿屋市串良町）

縄文時代前期～弥生時代初頭編

第１分冊

（全３分冊）

2023 年 3 月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

巻頭図版1

巻頭図版2

巻頭図版4

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴って，平成27年度から平成29年度にかけて実施した鹿屋市串良町に所在する小牧遺跡の発掘調査の記録です。

小牧遺跡は，旧石器時代，縄文時代早期～晩期，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世以降の遺構や遺物が発見され，各時代の集落や人々の活動の場として使われてきた場所であることがわかりました。

本報告書では，縄文時代前期から弥生時代初頭の調査成果を報告しています。縄文時代後期前半では，窪地を造成し環状に配置する可能性がある竪穴建物跡・土坑・集石などを伴う集落跡が多量の土器・石器とともに発見されました。完形あるいは割れた石皿を立てた状態で埋める行為が行われており，当時，串良川流域で生活していた人々の生業や精神文化，そして集落の在り方を考えるうえで貴重な資料となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解いただくとともに，今後の研究の一助となれば幸いです。

最後に，本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに御指導をいただきました先生方，発掘作業，整理作業に従事された方々，遺跡の所在する鹿屋市串良町細山田の皆様に厚く御礼を申し上げます。

令和５年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　　中村　和美

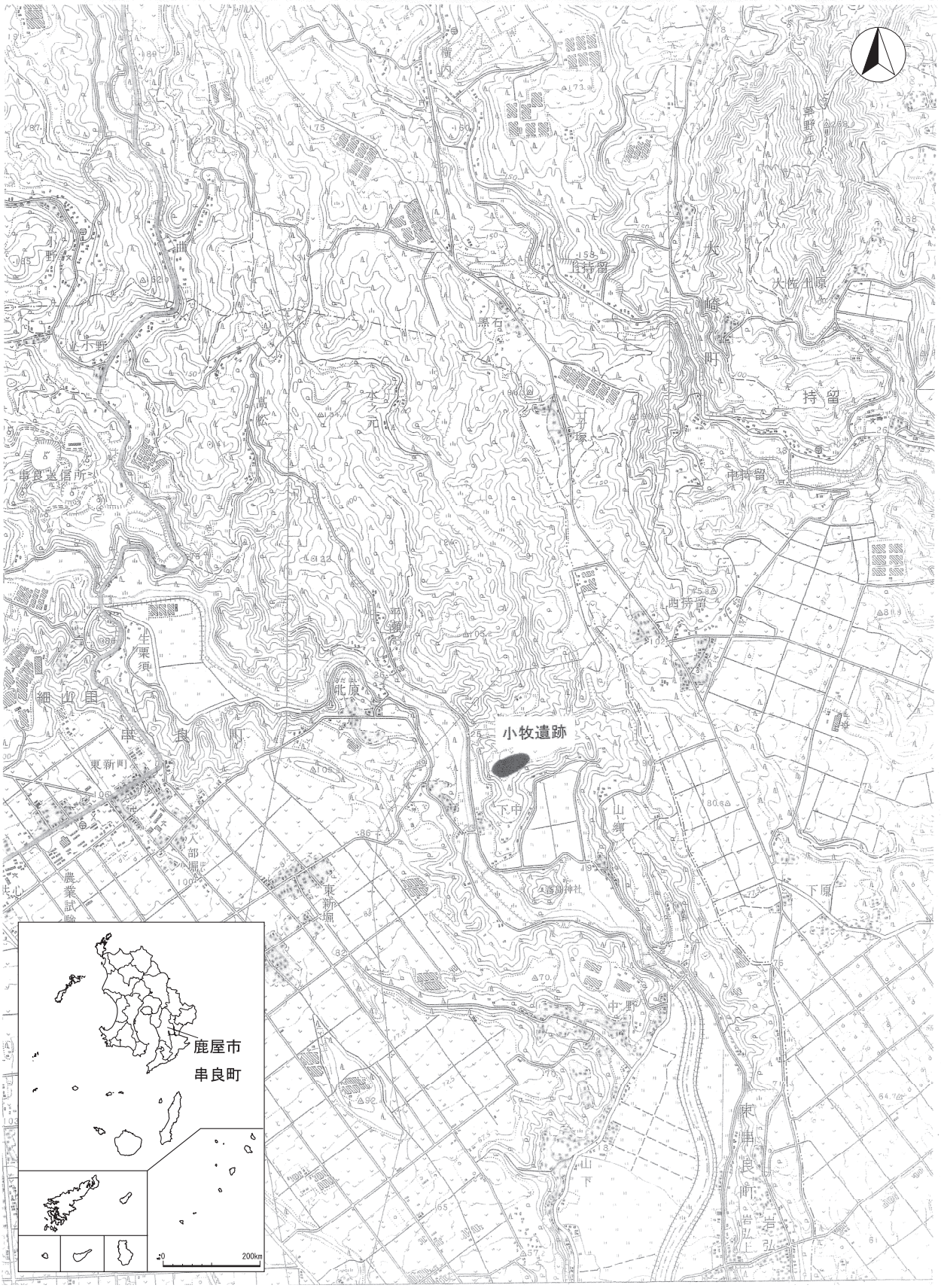
報 告 書 抄 録

ふりがな	こまきいせき　4
書名	小牧遺跡４（縄文時代前期～弥生時代初頭編）
副書名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第52集
編著者名	樋之口隆志・東　和幸・北園和代・西園勝彦
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発行年月	西暦2023年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	発掘原因
小牧遺跡（こまきいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 鹿屋市（かのやし） 串良町（くしらちょう） 細山田（ほそやまだ）	46203	203-350 （旧2-350）	31° 26′ 45″	130° 56′ 43″	分布調査 2000. 2月 2002. 4月 試掘調査 2012. 10月 確認調査 2013. 8. 1 ～2013. 10. 28 2015. 7. 4 ～2015. 7. 28 本調査 ①2015. 7. 13 ～2016. 1. 27 ②2016. 5. 9 ～2017. 1. 27 ③直営2017. 5. 8 ～2018. 2. 23 民活2017. 5. 9 ～2018. 1. 26	延面積 11,129 13,013 14,887 15,791	東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構	主要な遺物 土器	主要な遺物 石器
小牧遺跡	集落	縄文時代 前期・中期	土坑６基，集石４基， ピット11基	曽畑式，深浦式 （石峰段階，日木山段階）	石鏃，石錐，石匙 スクレイパー 二次加工剥片， 剥片，使用痕剥片 石核，原石 磨製石斧，打製石斧 （扁平打製石斧） 礫器 磨・敲石，石皿，砥石 擦切石器 石錘 石製品 軽石加工品
		縄文時代 後期前半	竪穴建物跡24基， 土坑52基，集石69基， 石皿立石遺構32基， 埋設土器３基， 土器集中17か所	大平式，阿高式系， 宮之迫式，福田Ｋ２式系， 中原遺跡Ｖ-a, b類， 指宿式，松山式， 丸尾式土器	
		縄文時代後期末～ 弥生時代初頭	土坑４基，集石２基， 石斧埋納遺構１基	中岳Ⅱ式，上加世田式， 入佐式，黒川式， 干河原段階， 刻目突帯文土器， 組織痕土器	

遺跡の概要	小牧遺跡は，大隅半島中央部を東流する串良川の左岸，笠野原台地の東南端の独立丘陵状の河岸段丘上に立地する。本遺跡では，旧石器時代，縄文時代早期～晩期，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世の遺構や遺物が発見された。縄文時代後期前半のバリエーション豊かな土器を伴い，窪地を造成し環状に配置する可能性をもつ集落跡と，国見山系花崗岩製石皿による多数の石皿立石遺構が注目される。当時の集落構造や人々の精神文化を紐解く上で貴重な資料である。また，縄文時代前・中期および後期末～弥生時代初頭の遺構・土器・石器も多く出土し，長期にわたる人々の営みの痕跡が確認されている。



遺跡位置図（1：25,000）

例　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う小牧遺跡の発掘調査報告書（縄文時代前期～弥生時代初頭編）である。

2　小牧遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下,「県教委」という）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下,「埋文調査センター」という）へ調査委託し，埋文調査センターが平成27～29年度の３年間にわたり実施した。

4　平成27～29年度の発掘調査を行うに当たっては，発掘調査支援業務ならびに基礎整理業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託した。また平成29年度は，支援業務委託に加え埋文調査センターとの２班体制で調査を行った。

5　整理・報告書作成事業（縄文時代前期～弥生時代初頭編）は，平成30年度・令和４年度に埋文調査センターが第一・第二整理作業所で実施した。また，令和２・３年度は，整理作業および報告書作成支援業務を国際文化財株式会社へ委託した。

6　掲載遺構番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表および図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は，土器･石器ごとの通し番号であり，本文･挿図・表および図版の番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は,「コマキ（カタカナ表記）」である。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜高度である。

9　本書で使用した方位は，全て真北であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

10　発掘調査における実測図作成および写真撮影は，主として調査担当者が行った。また空中写真の撮影は，株式会社ふじたに委託した。

11　本編に係る遺構実測図・出土遺物の実測，トレース図の作成は埋文調査センター整理作業担当職員の指示・確認のもと行い，石器実測の一部を株式会社九州文化財研究所と国際文化財株式会社に委託した。

12　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下,「埋文センター」）の写場にて樋之口，東，北園，辻 明啓，西園 勝彦が行った。

13　本報告に係る自然科学分析を，パリノ・サーヴェイ株式会社，株式会社パレオ・ラボ，株式会社加速器分析研究所に依頼した。また，そのうち圧痕分析の一部の結果の分析・考察を熊本大学大学院人文社会科学研究部教授 小畑弘己氏と鹿児島県文化財課 真邉彩氏に，石皿の残存デンプン粒分析の結果の分析・考察を東京大学史料編纂所 渋谷綾子氏に依頼した。また，埋文センターで顔料分析を行った。

14　執筆担当は，以下のとおりである。

第Ⅰ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　北園
第Ⅱ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　北園
第Ⅲ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北園・東
第Ⅳ章・・・・・・・・・・・・・・・樋之口・東・北園
第Ⅴ章　第１節・・・・・・・・・・・・・樋之口・東
　　第２節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・東
第Ⅵ章　第１節・・・・・・・・・・・・樋之口・北園
　　第２節・・・・・・・・・・・・・・・・・・北園
第Ⅶ章　第１節・・・・・・・・・・・・・樋之口・東
　　第２節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・東
第Ⅷ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・樋之口
第Ⅸ章　第１節・・・・・・・・・・・・・・　平 美典
　　第２節・・熊本大学人文社会科学研究部教授
　　小畑 弘己
　　パリノ・サーヴェイ株式会社
　　株式会社パレオ・ラボ
　　株式会社加速器分析研究所
第Ⅹ章　第１節・・・・・・・・・・・・・・・・・・東
　　第２節・・・・・・・・・樋之口・北園・東
　　第３節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・東
　　第４節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・東
写真図版・・・・・・・・・・・・・樋之口・東・北園

15　使用した土色は,『新版　標準土色帖』(1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。

16　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
　SH：竪穴建物跡　SK：土坑　SS：集石
　DKS：土器集中　KK：石皿立石遺構　P：ピット

17　遺構の縮尺は，次を基本とした。
　竪穴建物跡：１/40，１/60
　土坑：１/20，１/40　ピット：１/20
　土器集中，集石：１/20
　石皿立石遺構，埋設土器：１/10

18　遺物の縮尺は，次のとおりである。また，各図中にも縮尺を示している。
　土器　１/３，１/４
　石器，土製品　１/１，１/２，１/３，１/４
　（但し，大型の石皿は１/６で掲載）

19　本報告書に係る出土遺物および実測図・写真等の記録は，埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

総　目　次

【第１分冊】
巻頭図版（カラー）
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の成果……1
　第１節　発掘調査の経過……1
　第２節　整理・報告書作成の経過……6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……11
　第１節　地理的環境……11
　第２節　歴史的環境……11
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第Ⅲ章　調査の方法と層序……21
　第１節　調査の方法……21
　第２節　層序……21
　第３節　層序についての補足……29
第Ⅳ章　遺構および遺物の分類……31
　第１節　遺構の分類……31
　第２節　土器の分類……32
　第３節　石材および石器の分類……36
第Ⅴ章　縄文時代前期～中期の調査……41
　第１節　遺構……41
　第２節　遺物（土器）……51
第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査……71
　第１節　遺構……71
【第２分冊】
第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査……1
　第２節　遺物（土器）……1
第Ⅶ章　縄文時代後期末から弥生時代初頭の調査…109
　第１節　遺構……109
　第２節　遺物（土器）……120
第Ⅷ章　縄文時代前期から弥生時代初頭の石器……155
【第３分冊】
第Ⅸ章　自然科学分析……1
　第１節　概要……1
　第２節　分析結果の報告……1
第Ⅹ章　総括……71
　第１節　縄文時代前期～中期……71
　第２節　縄文時代後期前半……73
　第３節　縄文時代後期末～弥生時代初頭……88
　第４節　発掘調査からみえる小牧遺跡……89
　補遺……94
写真図版……95
奥付

第１分冊目次

第Ⅰ章　発掘調査の成果……1
　第１節　発掘調査の経過……1
　　１　調査期間……1
　　２　調査の組織体制……1
　　３　調査の経過……4
　第２節　整理・報告書作成の経過……6
　　１　作業内容……7
　　２　作業体制……7
　　３　整理作業の経過……8
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……11
　第１節　地理的環境……11
　第２節　歴史的環境……11
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第Ⅲ章　調査の方法と層序……21
　第１節　調査の方法……21
　　１　発掘調査の方法……21
　　２　遺構の認定と検出方法……21
　　３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容…21
　第２節　層序……21
　第３節　層序についての補足……29
第Ⅳ章　遺構および遺物の分類……31
　第１節　遺構の分類……31
　第２節　土器の分類……32
　第３節　石材および石器の分類……36
第Ⅴ章　縄文時代前期～中期の調査……41
　第１節　遺構……41
　第２節　遺物（土器）……51
第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査……71
　第１節　遺構（土器）……71

挿　図　目　次

第１図　グリッド配置図・調査範囲図および確認トレンチ配置図……２
第２図　年度別調査範囲図……10
第３図　周辺遺跡位置図……14
第４図　東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡位置図……20
第５図　土層断面図（１）……23
第６図　土層断面図（２）……24
第７図　土層断面図（３）……25
第８図　土層断面図（４）……26
第９図　土層断面図（５）……27
第10図　土層断面図（６）……28
第11図　１～22区における垂直分布および関連遺構・遺物分布状況……29
第12図　土層の補足……30
第13図　遺構の分類……31
第14図　各時期の遺構および出土土器の分布状況……40
第15図　縄文時代前期～中期土器出土分布図およびＣ・Ｄ区の垂直分布……42
第16図　土坑１・２号……43
第17図　土坑３号と出土遺物……44
第18図　土坑４～６号……45
第19図　集石１号と出土遺物……46
第20図　集石２・３号……47
第21図　集石４号……48
第22図　ピット１～６号とピット３号出土遺物……49
第23図　ピット７～11号……50
第24図　Ⅰ類土器……51
第25図　Ⅱa類土器（１）……52
第26図　Ⅱa類土器（２）……53
第27図　Ⅱa類土器（３）……54
第28図　Ⅱa類土器（４）……55
第29図　Ⅱa類土器（５）……57
第30図　Ⅱa類土器（６）……58
第31図　Ⅱb類土器（１）……60
第32図　Ⅱb類土器（２）……61
第33図　Ⅱb類土器（３）……62
第34図　Ⅱb類土器（４）……63
第35図　Ⅱb類土器（５）……65
第36図　Ⅱb類土器（６）……66
第37図　Ⅱb類土器（７）……67
第38図　Ⅲ類土器……68
第39図　縄文時代後期遺構配置図……72
第40図　縄文時代後期遺物出土状況図（１）……73
第41図　縄文時代後期遺物出土状況図（２）……74
第42図　縄文時代後期遺物出土状況図（３）……75
第43図　縄文時代後期遺物出土状況図（４）……76
第44図　縄文時代後期遺物出土状況図（５）……77
第45図　竪穴建物跡１号……79
第46図　竪穴建物跡１号出土遺物（１）……80
第47図　竪穴建物跡１号出土遺物（２）……81
第48図　竪穴建物跡２号と出土遺物（１）……82
第49図　竪穴建物跡２号出土遺物（２）……83
第50図　竪穴建物跡３号と出土遺物（１）……84
第51図　竪穴建物跡３号出土遺物（２）……85
第52図　竪穴建物跡３号出土遺物（３）……86
第53図　竪穴建物跡４号と出土遺物（１）……87
第54図　竪穴建物跡４号出土遺物（２）……88
第55図　竪穴建物跡５号……89
第56図　竪穴建物跡５号出土遺物……90
第57図　竪穴建物跡６号と出土遺物（１）……91
第58図　竪穴建物跡６号出土遺物（２）……92
第59図　竪穴建物跡６号出土遺物（３）……93
第60図　竪穴建物跡７号と出土遺物（１）……94
第61図　竪穴建物跡７号出土遺物（２）……95
第62図　竪穴建物跡７号出土遺物（３）……96
第63図　竪穴建物跡８・９号と竪穴建物跡８号出土遺物（１）……97
第64図　竪穴建物跡８号出土遺物（２）……98
第65図　竪穴建物跡８号出土遺物（３）……99
第66図　竪穴建物跡９号出土遺物……100
第67図　竪穴建物跡10号と出土遺物（１）……101
第68図　竪穴建物跡10号出土遺物（２）……102
第69図　竪穴建物跡11号と出土遺物（１）……103
第70図　竪穴建物跡11号出土遺物（２）……104
第71図　竪穴建物跡12号と出土遺物（１）……105
第72図　竪穴建物跡12号出土遺物（２）……106
第73図　竪穴建物跡12号出土遺物（３）……107
第74図　竪穴建物跡13号……108
第75図　竪穴建物跡13号出土遺物（１）……109
第76図　竪穴建物跡13号出土遺物（２）……110
第77図　竪穴建物跡14号……112
第78図　竪穴建物跡14号と出土遺物（１）……113
第79図　竪穴建物跡14号出土遺物（２）……114
第80図　竪穴建物跡14号出土遺物（３）……115
第81図　竪穴建物跡15号と出土遺物……116
第82図　竪穴建物跡16号……118
第83図　竪穴建物跡16号と出土遺物（１）……119
第84図　竪穴建物跡16号出土遺物（２）……120
第85図　竪穴建物跡16号出土遺物（３）……121

第86図　竪穴建物跡17号と出土遺物…… 122
第87図　竪穴建物跡18号と出土遺物…… 123
第88図　竪穴建物跡19号と出土遺物…… 124
第89図　竪穴建物跡20号と出土遺物…… 125
第90図　竪穴建物跡21号と出土遺物…… 126
第91図　竪穴建物跡22号と出土遺物…… 127
第92図　竪穴建物跡23号と出土遺物（１）…… 128
第93図　竪穴建物跡23号出土遺物（２）…… 129
第94図　竪穴建物跡23号出土遺物（３）…… 130
第95図　竪穴建物跡24号と出土遺物（１）…… 131
第96図　竪穴建物跡24号出土遺物（２）…… 132
第97図　土坑７号と出土遺物…… 135
第98図　土坑８号と出土遺物（１）…… 136
第99図　土坑８号出土遺物（２）…… 137
第100図　土坑９号と出土遺物 …… 138
第101図　土坑10号と出土遺物 …… 139
第102図　土坑11号と出土遺物 …… 140
第103図　土坑12号と出土遺物（１）…… 141
第104図　土坑12号出土遺物（２）…… 142
第105図　土坑13号と出土遺物（１）…… 143
第106図　土坑13号出土遺物（２）…… 144
第107図　土坑14号と出土遺物 …… 145
第108図　土坑15号と出土遺物（１）…… 146
第109図　土坑15号出土遺物（２）…… 147
第110図　土坑16号と出土遺物 …… 148
第111図　土坑17号と出土遺物（１）…… 149
第112図　土坑17号出土遺物（２）…… 150
第113図　土坑18号と出土遺物 …… 151
第114図　土坑19～21号と土坑19・20号出土遺物 … 153
第115図　土坑22～24号と土坑23・24号出土遺物 … 154
第116図　土坑25号と出土遺物 …… 156
第117図　土坑26・27号と出土遺物 …… 157
第118図　土坑28・29号と出土遺物 …… 158
第119図　土坑30号と出土遺物（１）…… 160
第120図　土坑30号出土遺物（２）…… 161
第121図　土坑31号 …… 162
第122図　土坑32号と出土遺物 …… 163
第123図　土坑33号と出土遺物 …… 164
第124図　土坑34号と出土遺物 …… 165
第125図　土坑35号と出土遺物（１）…… 166
第126図　土坑35号出土遺物（２）…… 167
第127図　土坑36～38号と土坑36号出土遺物 …… 169
第128図　土坑39・40号と土坑39号出土遺物 …… 170
第129図　土坑41号と出土遺物 …… 171
第130図　土坑42～44号と土坑42・44号出土遺物 … 172
第131図　土坑45・46号と出土遺物 …… 173
第132図　土坑47号と出土遺物 …… 174
第133図　土坑48号と出土遺物 …… 175
第134図　土坑49号と出土遺物 …… 176
第135図　土坑50号と出土遺物（１）…… 177
第136図　土坑50号出土遺物（２）…… 178
第137図　土坑50号出土遺物（３）…… 179
第138図　土坑51～53号 …… 181
第139図　土坑54～56号と土坑54号出土遺物 …… 182
第140図　土坑57・58号と出土遺物 …… 183
第141図　集石５～７号と出土遺物 …… 185
第142図　集石８～10号と集石８号出土遺物 …… 186
第143図　集石11・12号と集石11号出土遺物 …… 187
第144図　集石13号と出土遺物 …… 188
第145図　集石14号と出土遺物 …… 189
第146図　集石15号と出土遺物 …… 190
第147図　集石16～18号と集石18号出土遺物 …… 192
第148図　集石19～22号と集石22号出土遺物 …… 193
第149図　集石23号と出土遺物 …… 195
第150図　集石24・25号と出土遺物 …… 196
第151図　集石26・27号と集石27号出土遺物 …… 197
第152図　集石28～30号と集石28・30号出土遺物 … 199
第153図　集石31～33号と集石31号出土遺物 …… 200
第154図　集石34号と出土遺物 …… 201
第155図　集石35号と出土遺物 …… 202
第156図　集石36号と出土遺物 …… 203
第157図　集石37・38号と集石38号出土遺物 …… 205
第158図　集石39・40号と集石40号出土遺物 …… 206
第159図　集石41号 …… 208
第160図　集石41号出土遺物 …… 209
第161図　集石42・43号と出土遺物 …… 210
第162図　集石44号と出土遺物 …… 211
第163図　集石45号と出土遺物 …… 212
第164図　集石46・47号と集石46号出土遺物 …… 213
第165図　集石48号と出土遺物（１）…… 214
第166図　集石48号出土遺物（２）…… 215
第167図　集石49～52号と集石49・50・52号出土遺物
…… 216
第168図　集石53～55号と集石53・54号出土遺物 … 217
第169図　集石56号と出土遺物 …… 218
第170図　集石57～59号と集石59号出土遺物 …… 220
第171図　集石60号と出土遺物 …… 221
第172図　集石61～63号と集石62・63号出土遺物 … 223
第173図　集石64号と出土遺物 …… 224
第174図　集石65号と出土遺物 …… 225
第175図　集石66～69号と集石68・69号出土遺物 … 226
第176図　集石70号と出土遺物 …… 227
第177図　集石71号と出土遺物 …… 228
第178図　集石72・73号 …… 229
第179図　土器集中１号と出土遺物 …… 231
第180図　土器集中２号と出土遺物（１）…… 232

第181図　土器集中２号出土遺物（２）…… 233
第182図　土器集中３号と出土遺物（１）…… 234
第183図　土器集中３号出土遺物（２）…… 235
第184図　土器集中３号出土遺物（３）…… 236
第185図　土器集中４号と出土遺物 …… 237
第186図　土器集中５号と出土遺物 …… 238
第187図　土器集中６・７号と出土遺物 …… 239
第188図　土器集中８号と出土遺物 …… 240
第189図　土器集中９号と出土遺物 …… 241
第190図　土器集中10号と出土遺物（１）…… 242
第191図　土器集中10号出土遺物（２）…… 243
第192図　土器集中11・12号と出土遺物 …… 244
第193図　土器集中13号と出土遺物（１）…… 245
第194図　土器集中13号出土遺物（２）…… 246
第195図　土器集中14号と出土遺物（１）…… 247
第196図　土器集中14号出土遺物（２）…… 248
第197図　土器集中15号と出土遺物（１）…… 249
第198図　土器集中15号出土遺物（２）…… 250
第199図　土器集中16号と出土遺物 …… 251
第200図　土器集中17号と出土遺物（１）…… 252
第201図　土器集中17号出土遺物（２）…… 253
第202図　埋設土器１号 …… 255
第203図　埋設土器１号出土遺物（１）…… 256
第204図　埋設土器１号出土遺物（２）…… 257
第205図　埋設土器２号と出土遺物 …… 257
第206図　埋設土器３号と出土遺物 …… 258
第207図　立石遺構１～３号と立石遺構３号出土遺物 …… 260
第208図　立石遺構４・５号と立石遺構５号出土遺物 …… 261
第209図　立石遺構６・７号と出土遺物 …… 263
第210図　立石遺構８・９号と立石遺構８号出土遺物 …… 264
第211図　立石遺構10号と出土遺物（１）…… 265
第212図　立石遺構10号出土遺物（２）…… 266
第213図　立石遺構11号と出土遺物 …… 267
第214図　立石遺構12・13号と出土遺物 …… 268
第215図　立石遺構14～16号と出土遺物 …… 269
第216図　立石遺構17号と出土遺物 …… 270
第217図　立石遺構18・19号と出土遺物 …… 272
第218図　立石遺構20・21号と出土遺物 …… 273
第219図　立石遺構22・23号と出土遺物 …… 274
第220図　立石遺構24・25号と出土遺物 …… 276
第221図　立石遺構26号と出土遺物 …… 277
第222図　立石遺構27・28号と出土遺物 …… 278
第223図　立石遺構29号と出土遺物 …… 279
第224図　立石遺構30号と出土遺物 …… 280
第225図　立石遺構31・32号と出土遺物 …… 281

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……13
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡一覧表 ……15
第３表　基本層序……22
第４表　縄文時代前期～中期遺構内出土土器観察表…47
第５表　縄文時代前期～中期遺構内出土石器観察表…48
第６表　縄文時代前期～中期遺構観察表……51
第７表　縄文時代前期～中期包含層出土土器観察表…70
第８表　竪穴建物跡一覧表…… 282
第９表　土坑一覧表１…… 282
第10表　土坑一覧表２…… 283
第11表　集石一覧表１…… 283
第12表　集石一覧表２…… 284
第13表　立石遺構一覧表…… 285
第14表　竪穴建物跡土器観察表１…… 286
第15表　竪穴建物跡土器観察表２…… 287
第16表　竪穴建物跡土器観察表３…… 288
第17表　土坑土器観察表１…… 288
第18表　土坑土器観察表２…… 289
第19表　集石土器観察表１…… 289
第20表　集石土器観察表２…… 290
第21表　土器集中土器観察表１…… 290
第22表　土器集中土器観察表２…… 291
第23表　埋設土器観察表…… 291
第24表　立石遺構土器観察表…… 291
第25表　竪穴建物跡石器観察表１…… 292
第26表　竪穴建物跡石器観察表２…… 293
第27表　土坑石器観察表１…… 293
第28表　土坑石器観察表２…… 294
第29表　集石石器観察表１…… 294
第30表　集石石器観察表２…… 295
第31表　土器集中石器観察表…… 295
第32表　立石遺構石器観察表…… 295
第33表　遺構番号新旧対応表…… 296

第Ⅰ章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の経過

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月に志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査や試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅ＩＣ（平成21年４月28日「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は，日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続されることになった。また，日本道路公団からの委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部分は国土交通省からの受託事業となった。

その後，平成23年度からは試掘・確認調査は文化庁の国庫補助事業を導入し，県内遺跡事前調査事業として埋文センターが実施することとなった。

県内遺跡事前調査事業の確認調査は，平成23年度は荒園遺跡の他２遺跡，平成24年度は町田堀遺跡の他３遺跡，平成25年度は小牧遺跡他２遺跡，平成27年度は小牧遺跡を実施した。

東九州自動車道建設等の事業促進に伴い，埋蔵文化財調査の事業量の増大が見込まれ，従前の調査体制では対応が困難な状況となりつつあったため，平成25年４月に，公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」という。）を設立し，国関係の事業に係る発掘調査等をより円滑かつ効率的に実施することにした。

小牧遺跡の調査の組織体制および調査の経過は，以下のとおりである。

１　調査期間

１　分布調査：平成12年２月，平成14年４月
２　試掘調査：平成24年10月
３　確認調査：平成25年８月，平成27年７月
４　本 調 査：平成27年７月～平成30年２月

２　調査の組織体制

【事前調査について】

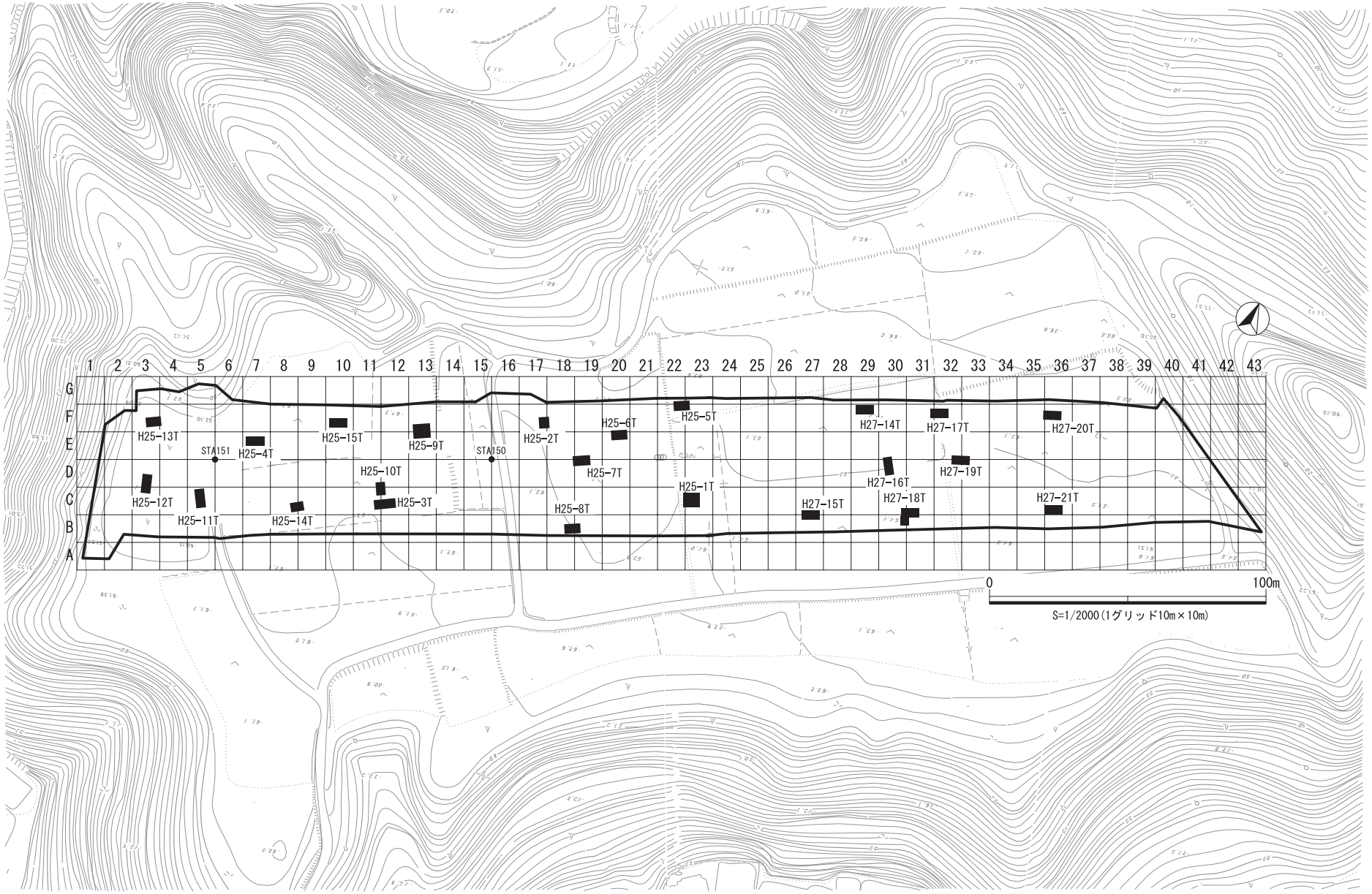
小牧遺跡に関する分布調査は，日本道路公団から志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の分布調査依頼を受け，平成12年２月と平成14年４月に実施した。また，試掘調査は分布調査の結果を受けて，平成24年10月17日に実施した。確認調査は，用地取得の状況から平成25年度と平成27年度に実施した。平成25年度の確認調査の結果，調査対象範囲全域で縄文時代早期の遺物が出土し，西側で縄文時代後晩期，中央で古墳時代の遺構・遺物が検出された。平成27年度の確認調査の結果，調査対象範囲全域で縄文時代早期・後晩期，古墳時代の遺構・遺物が検出され，東側で古墳時代の遺物が出土した。

調査体制（分布調査）

事業主体　日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会

平成24年度試掘調査の組織体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調 査 者　県教育庁文化財課文化財主事　馬籠　亮道
　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　文化財研究員　今村　結記
調査協力者　鹿屋市文化財センター
　　主任主事　稲村　博文



第１図　グリッド配置図・調査範囲図および確認トレンチ配置図

立 会 者　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
　　調 査 第 三 課　　杢田　正文

平成25年度確認調査の組織体制

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　　井ノ上秀文
調査企画　〃次長兼調査課長　　新小田　穣
　　〃調査課長兼南の縄文調査室長
　　堂込　秀人
　　〃調査第一課第二調査係長
　　大久保浩二
調査担当　〃文 化 財 主 事　　吉岡　康弘
　　〃　　切通　雅子

平成27年度確認調査の組織体制

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　　福山　徳治
調査企画　〃次長兼調査課長　　前迫　亮一
　　〃第 一 調 査 係 長　　大久保浩二
調査担当　〃文 化 財 主 事　　光永　　誠
　　〃　　樋之口隆志
事務担当　〃総　務　課　長　　有馬　博文
　　〃主　　査　　草水美穂子

平成27年度本調査の組織体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　セ ン タ ー 長　　堂込　秀人
調査企画　〃総務課長兼係長　　有村　　貢
　　〃調　査　課　長　　八木澤一郎
　　〃調 査 第 二 係 長　　寺原　　徹
調査担当　〃統 括 調 査 員　　横手浩二郎
　　〃副 統 括 調 査 員　　真方　敏行
　　（H27.７～H27.９）
　　〃　　井手上誉弘
　　（H27.12～H28.１）
事務担当　〃主　　査　　荒瀬　勝巳
現地指導　鹿児島県考古学会長　　本田　道輝
　　鹿児島大学埋蔵文化財センター
　　セ ン タ ー 長　　中村　直子

委 託 先　新和技術コンサルタント株式会社
委託期間　平成27年４月13日～平成28年３月11日
作業期間　平成27年７月13日～平成28年１月27日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
　　測量業務　　１式
　　土工業務　　１式
担 当 者　主 任 技 術 者　　井之上公裕
　　主任調査支援員　　鎌田　浩平
　　調 査 員 支 援 員　　賦句　博隆
　　〃　　上川路直光
　　〃　　柳田　　泰
　　〃　　新納　弘恵
　　〃　　竹内　順一
　　〃　　横田　光智
検　　査　中間検査　平成27年11月19日
　　完成検査　平成28年２月23日（実地検査）
　　平成28年３月３日（成果物検査）

平成28年度本調査の組織体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　セ ン タ ー 長　　堂込　秀人
調査企画　〃総務課長兼係長　　有村　　貢
　　〃調　査　課　長　　八木澤一郎
　　〃調 査 第 二 係 長　　宗岡　克英
調査担当　〃統 括 調 査 員　　横手浩二郎
　　〃副 統 括 調 査 員　　平屋　大介
事務担当　〃主　　査　　荒瀬　勝己
現地指導　國學院大學名誉教授　　小林　達雄
　　奈 良 大 学 教 授　　小林　青樹
　　鹿児島県考古学会長　　本田　道輝
　　福 岡 大 学 助 教 授　　桃崎　祐輔
委 託 先　新和技術コンサルタント株式会社
委託期間　平成28年４月11日～平成29年３月10日
作業期間　平成28年５月９日～平成29年１月27日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
　　測量業務　　１式
　　土工業務　　１式
担 当 者　主 任 技 術 者　　井之上公裕
　　主任調査支援員　　新福　　深
　　調 査 員 支 援 員　　賦句　博隆
　　〃　　柳田　　泰
　　〃　　新納　弘恵
　　〃　　米村　　大
　　〃　　宮崎　　拓

検　　査　中間検査　平成28年10月14日
　　完成検査　平成29年３月６日（成果物検査）
　　平成29年３月７日（実地検査）

平成29年度本調査の組織体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　　前迫　亮一
調査企画　〃総務課長兼係長　　中村伸一郎
　　〃調査課長　　中原　一成
　　〃調査第三係長　　福永　修一

【直営】
調査担当　〃文化財専門員　　西園　勝彦
　　〃　　田中時太郎
　　〃　　浦　　博司
　　〃　　井手上誉弘
　　〃　　元田　順子
　　（H29.５～H29.７）
事務担当　〃主　　査　　荒瀬　勝己

【民間支援業務】
調査担当　〃統括調査員　　川口　雅之
　　〃副統括調査員　　平屋　大介
事務担当　〃主　　査　　荒瀬　勝己
現地指導　鹿児島大学名誉教授　　森脇　　広
委託先　新和技術コンサルタント株式会社
委託期間　平成29年４月11日～平成30年３月14日
作業期間　平成29年５月９日～平成30年１月26日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　　井之上公裕
　　主任調査支援員　　新福　　深
　　調査員支援員　　賦句　博隆
　　〃　　柳田　　泰
　　〃　　峯崎　幸清
　　〃　　新納　弘恵
　　〃　　白井　菜実
　　〃　　鎌田　浩平
　　〃　　上川路直光
検　　査　中間検査　平成29年10月27日
　　完成検査　平成30年３月12日（成果物検査）
　　平成30年３月７日（実地検査）

３　調査の経過

縄文時代前・中期～縄文時代後期の遺物はアカホヤ火山灰（Ⅴ層）以上の層から多数が検出された。但し，調査区西側の層堆積が不安定な場所においては，Ⅵ・Ⅶ層からの出土遺物も含むため，本報告では薩摩火山灰層（Ⅷ層）より上層の調査の経過について報告する。Ⅷ層以下の調査の経過については，『小牧遺跡１　古代～近世以降編』を参照していただきたい。

平成27年度

【発掘作業】
６月Ｂ～Ｆ-11～16区表土の重機掘削
７・８月Ｂ～Ｆ-11～16区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出･調査･測量，遺物取り上げ
Ｂ～Ｅ-16～22区表土の重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
９月Ｂ～Ｆ-11～22区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
10月Ｃ～Ｆ-11～22区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ-11・12区，16～22区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ～Ｄ-13～15区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅴ層重機掘削，空撮（22日）
11月Ｄ～Ｆ-13・14区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅴ層重機掘削・Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・中間検査（19日）
12月Ｂ～Ｅ-14～20区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｆ-13・14区，Ｂ・Ｃ-15区，Ｅ・Ｆ-15～22区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｆ-20～22区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出調査・測量，遺物取り上げ・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量・Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｆ･Ｇ-15～22区表土重機掘削･Ⅳ層掘り下げ，遺構検出･調査・測量，遺物取り上げ
１月Ｂ～Ｅ-14～20区，Ｆ・Ｇ-15～22区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅴ層重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出･調査･測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出･調査・測量
Ｂ～Ｆ-13・14区，Ｂ・Ｃ-15区，Ｅ・Ｆ-15～22区Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅷ層

上面遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｆ-13・14区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
【整理作業】
平成25・27年度分遺物洗浄・注記・接合

平成28年度
【発掘作業】
５月Ｂ～Ｆ－６～10区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ～Ｆ-11～13区先行トレンチ調査でⅤ層が見られない範囲，Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ-13区Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
６月Ｂ～Ｆ－６～10区表土の重機掘削・Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量・Ⅴ層重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量，農道仮設道路新設
７月Ａ～Ｇ－１～６区，Ｆ－７～10区表土重機掘削
Ｂ～Ｆ－６～10区Ⅳ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ
Ｆ-11～14区表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅴ層重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量Ｅ・Ｆ-11～13区Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｂ・Ｃ-11・12区先行トレンチ調査でⅤ層があまり見受られない範囲，Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ
Ｂ～Ｆ-11～13区Ⅳ・Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
８月Ａ～Ｇ-1～6区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ～Ｆ－６～10区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｅ・Ｆ-11～13区Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｆ-14区，Ｅ・Ｆ-11～13区Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｂ・Ｃ-11・12区：先行トレンチ調査でⅤ層があまり見受けられない範囲とⅣ～Ⅵ層掘り下げ，遺構検出･調査･測量・遺物取り上げ
Ｂ～Ｆ-11～13区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ
Ｆ-11～13区Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
一部完成検査（19日）
９月Ⅳ層遺構検出･調査･測量，遺物取り上げ，空撮（１日）
10月Ａ～Ｇ－１～10区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，中間検査（14日）
11月Ａ～Ｇ－１～10区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｇ-24・25区表土重機掘削・Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
12月Ａ～Ｇ－１～10区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｇ-24・25区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｅ-26～28区表土重機掘削・Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量
１月Ａ～Ｇ－１～10区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｇ-24～28区Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅴ層上面・遺構検出・調査・測量
Ｂ～Ｅ-29区表土重機掘削・Ⅳ層遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅴ層上面遺構検出・調査・測量・完成測量・発掘作業終了
【整理作業】
平成28年度分遺物洗浄・注記・接合

平成29年度
直営
【発掘調査】
５月Ａ～Ｆ－２～10区Ⅳb・Ⅴ層精査，遺物取り上げ，遺構検出。Ａ～Ｅ－２～10区Ⅴ層重機掘削，Ⅵ層掘り下げ，遺構検出，地形測量
６月Ａ～Ｇ－２～６区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削，遺物取り上げ，遺構検出。Ａ～Ｇ－２～６区Ⅴ層重機掘削，Ⅵ層上面地形測量
７月Ａ～Ｇ－２～６区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削，遺物取り上げ，遺構調査
８月Ａ～Ｇ－７～10区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削，遺物取り上げ，遺構調査。Ａ～Ｇ-23～29区表土剥
９月Ａ～Ｇ－７～10区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削，遺物取り上げ，遺構調査
Ａ～Ｄ-25～29区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削
10月Ｂ～Ｇ－７～10区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削，遺物取り上げ，遺構調査
Ｂ～Ｄ-24～29区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削
11月Ｂ～Ｄ-24～29区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削
12月Ｂ～Ｅ-23区Ⅲ～Ⅳd層人力掘削
Ｂ～Ｄ-24～27区Ⅵ・Ⅶ層，Ｅ・Ｆ-27～29区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削
１月Ｂ～Ｄ-23区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削

Ｅ・Ｆ-27～29区Ⅵ・Ⅶ層人力掘削
２月Ｅ・Ｆ-23区Ⅳ～Ⅶ層人力掘削
Ｂ～Ｆ-24～27区Ⅳ～Ⅻ層人力掘削
【整理作業】
平成28・29年度分遺物洗浄

民間支援発掘業務
【発掘調査】
５月Ｂ～Ｇ-34～41区表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
林１Ｔ・２Ｔ先行トレンチ表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出
６月Ｂ～Ｆ-34～41区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｆ・Ｇ-23～40区表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ｖ層上面遺構検出・調査・測量
Ｆ・Ｇ-23～31区Ｖ層重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ・Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｆ-25・27・29・31区旧石器時代先行トレンチⅨ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量（遺構なし，Ｆ-31区より頁岩剥片出土）
７月Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ～Ｆ-34～41区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｆ・Ｇ-23～40区表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げＦ・Ｇ-23区
Ｆ-25・27・29・30・31区旧石器時代先行トレンチⅨ層～Ⅻ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，（Ｆ-30・31区Ⅸ層石器製作跡１より剥片・チップ多数出土）
直営現場支援Ｂ－２～４区旧石器時代先行トレンチⅨ～Ⅻ層，竪穴建物跡等遺構調査・測量，空撮（14日）
８月Ｂ～Ｆ-34～41区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，
Ｂ・Ｃ-30～34区表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｆ・Ｇ-23区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｆ-33区，Ｆ-38区旧石器時代先行トレンチＸ～Ⅻ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量
直営現場支援（竪穴建物跡等遺構調査・測量）
９月Ｂ～Ｆ-34～41区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅳc層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳc～Ｖ層（無遺物層）重機掘削，Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｂ・Ｃ-30～33区，Ｆ・Ｇ-23区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｄ・Ｅ-30～33区，Ｂ-29区表土掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，直営現場支援（測量）
10月Ｂ～Ｆ-34～41区Ⅳc～Ｖ層（無遺物層）重機掘削，Ⅵ～Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
Ｂ-29区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｆ・Ｇ-23区Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅳc～Ｖ層（無遺物層）重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
直営現場支援（測量）
中間検査（27日）
11月Ｂ～Ｆ-34～41区Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量，
Ｂ～Ｅ-30～33区Ⅳc～Ⅶ層重機掘削，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅷ層重機掘削，Ｅ・Ｆ-30～33区表土・Ｖ層重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
12月Ｂ～Ｇ-40～42区表土重機掘削，Ⅳ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅳc～Ｖ層（無遺物層）重機掘削，Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，
Ｂ～Ｇ-40～42区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ
Ｅ・Ｆ-30～33区Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅷ層（無遺物層）重機掘削
１月Ｂ～Ｇ-40～42区Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量，
Ｆ-30～33区Ⅵ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅶ層掘り下げ，遺構検出・調査・測量，遺物取り上げ，Ⅷ層上面遺構検出・調査・測量
【整理作業】
平成28・29年度分遺物洗浄・注記・接合

第２節　整理・報告書作成の経過

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成30年度から旧福山中学校跡地に新設した第二整理作業所で，令和４年度は第一整理作業所で実施した。

平成30年度は，「小牧遺跡１　古代～近世以降編」の整理・報告書作成作業を埋文調査センターが行い，縄文時代後期～古墳時代の整理作業を埋文調査センター担当者の管理のもと，(株)九州文化財研究所に委託して行った。令和元年度は直営の担当により，「小牧遺跡２　縄文時代早期編」の遺構・遺物の図化作業と併行しながら縄文時代後期の基礎整理作業を行った。令和２・３年度

は縄文時代前期～弥生時代初頭の整理作業および報告書作成支援業務を国際文化財（株）に委託して行った。なお令和３年度は埋文調査センターにより「小牧遺跡３ 弥生時代・古墳時代編」の整理作業・報告書作成を行っている。令和３年度の作業体制等については「小牧遺跡３」を参照していただきたい。

本年度は，縄文時代前期～弥生時代初頭編を「小牧遺跡４」として刊行することとなった。本報告書に関する作業内容・作業体制について記述する。

１　作業内容

遺構については，発掘調査時に作成した実測図と台帳との照合や遺構・時代ごとに実測図の仕分けを行った。その後遺構配置図の作成，各遺構図のトレース・レイアウトを行い，報告書掲載用の写真を選別した。併せて遺構計測表と遺構内出土遺物の観察表を作成した。

土器については遺物台帳との照合･接合･実測･トレース・拓本等の各作業のあとに挿図作成，報告書掲載用の写真撮影及び図版作成，土器観察表を作成した。

石器については仕分け･分類を行った後に実測･トレース・観察表作成を行い，報告書に掲載する挿図を作成した。また，報告書掲載用の写真撮影及び図版作成を行った。原稿執筆については，遺構・遺物の整理作業と併行して随時行った。なお,石器実測の一部を（株）九州文化財研究所と国際文化財（株）に，土器・石器の水洗い注記を（株）パスコに委託した。

２　作業体制

平成30年度以降の体制は，以下のとおりである。

平成30年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画･調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　前迫　亮一
作成企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃調査課長　中原　一成
　　〃調査第一係長　福永　修一
事務担当　〃主査　小牧　智子

【直営】
作成担当　〃文化財専門員　田中時太郎
　　〃文化財調査員　北園　和代

【民間支援業務】
統括調査員　〃文化財専門員　平屋　大介
委託先　株式会社九州文化財研究所
委託期間　平成30年５月７日～令和元年２月15日
作業期間　平成30年５月７日～令和元年２月15日
委託内容　整理および報告書作成支援業務
担当者　主任調査支援員　鮫島　伸吾
　　調査支援員　長野　眞一
　　〃　西谷　彰
　　〃　田上　智也
遺物指導　鹿児島県考古学会長　本田　道輝
　　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中村　直子
検査　中間検査　平成30年10月24日
　　完成検査　令和元年３月６日（成果物検査）

令和元年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画･調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中原　一成
作成企画　〃総務課長兼係長　中島　治
　　〃調査課長　寺原　徹
　　〃調査第二係長　有馬　孝一
作成担当　〃文化財専門員　西園　勝彦
　　〃　田中時太郎
　　〃　肥後　弘章
事務担当　〃主査　有川　剛弘

令和２年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画･調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中原　一成
作成企画　〃総務課長兼係長　中島　治
　　〃調査課長　寺原　徹
　　〃調査第一係長　福永　修一
作成担当　〃文化財専門員　西園　勝彦
　　〃　樋之口隆志
事務担当　〃主査　有川　剛弘
【報告書作成支援業務の委託】
委託先　国際文化財株式会社
委託期間　令和２年５月７日～令和３年３月12日

作業期間　令和２年５月７日～令和３年３月12日
委託内容　整理作業及び報告書作成支援業務
担 当 者　主任調査支援員　川田　秀治
調 査 支 援 員　鳥越　道臣
〃　堀苑　孝志
〃　新平　直彦
〃　島崎　直行
〃　谷口　晴美
検　　査　中間検査　令和２年10月26日
完成検査　令和３年３月４日

令和３年度
事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画･調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
セ ン タ ー 長　中村　和美
作成企画　〃総務課長兼係長　中島　　治
〃調　査　課　長　福永　修一
〃調査第一係長　永濵　功治
作成担当　〃文化財専門員　樋之口隆志
事務担当　〃主　　査　有川　剛弘
整理指導　鹿児島県考古学会元会長　本田　道輝
【報告書作成支援業務の委託】
委 託 先　国際文化財株式会社
委託期間　令和３年４月８日～令和４年３月11日
作業期間　令和３年４月８日～令和４年３月11日
委託内容　整理作業及び報告書作成支援業務
担 当 者　主任調査支援員　堀苑　孝志
調 査 支 援 員　鳥越　道臣
〃　谷口　晴美
（５月６日～12月24日）
〃　青島　邦夫
（１月４日～２月10日）
検　　査　中間検査　令和３年10月27日
完成検査　令和４年３月１日

令和４年度
事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画･調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
セ ン タ ー 長　中村　和美
作成企画　〃総務課長兼係長　中島　　治
〃調　査　課　長　三垣　恵一
〃調査第一係長　平　　美典
作成担当　〃文化財専門員　樋之口隆志
作成担当　〃　東　　和幸
作成担当　〃文化財調査員　北園　和代
事務担当　〃主　　事　坂元　宏光
整理指導　鹿児島県考古学会元会長　本田　道輝
弘前大学人文社会学部教授　上條　信彦
11月21日
報告書作成指導委員会　調査課長ほか７名
11月25日
報告書作成検討委員会　センター長ほか10名

３　整理作業の経過

本報告書作成に関する整理作業の経過は，以下の通りである。

平成30年度
【直営】
４月　遺構図面整理
５～９月　包含層石器実測・トレース委託
９～11月　包含層遺物分類
12月　土器圧痕分析資料選別・分析委託
１月　包含層遺物分類・接合
２月　遺物整理・収納

【民間支援委託】
５～６月　遺構内遺物洗浄・注記
７～12月　遺構内遺物分類・復元
遺構デジタルトレース
１～２月　遺物・遺構図面等整理・収納

令和元年度
４～１月　遺構・遺物整理，分類
遺構図面整理
２月　遺物整理・収納

令和２年度
４月　整理作業事前準備　遺物・図面等確認
５月　遺物接合・復元
石器分類・実測　遺構図面確認
６月　遺物接合・復元　石器・土器実測
遺構図デジタルトレース
７月　遺物接合・復元・実測・拓本
遺構図デジタルトレース
８月　遺物接合・復元・拓本・トレース
遺構図デジタルトレース
９～11月　遺物接合・復元・拓本・トレース
遺構・遺物デジタル図面確認

12月　遺物接合・復元・拓本・トレース
　遺構・遺物デジタル図面確認　注記
１月　遺物接合・復元・拓本・トレース
　遺構・遺物デジタル図面確認
　石器分類　収納準備
２月　遺物接合・復元・拓本・トレース
　遺構・遺物デジタル図面確認
　石器分類　遺物収納
３月　遺物整理　石器分類およびデータ入力

令和３年度

４月　遺物・図面等確認　石器実測準備（抽出)
５月　石器実測準備（抽出）
　土器接合・分類・復元
　石皿接合
６～７月　石器・縄文後期土器実測
　縄文前・中・晩期土器トレース
　遺構配置図作成
８月　石器実測　縄文前・中・晩期土器トレース
　土器圧痕付着試料抽出
９～10月　土器実測・拓本・復元・トレース
　石器実測・トレース
11月　土器実測・拓本・復元・トレース
　石器実測・トレース
　現場写真仮レイアウト　観察表作成
12～１月　土器実測・拓本・復元・トレース
　石器実測・トレース
　現場写真仮レイアウト　観察表作成
　原稿執筆　遺物収納準備
２月　土器復元　土器・石器トレース
　石器仮レイアウト　原稿執筆
　遺物収納
　遺物指導（本田道輝氏）
３月　遺物整理

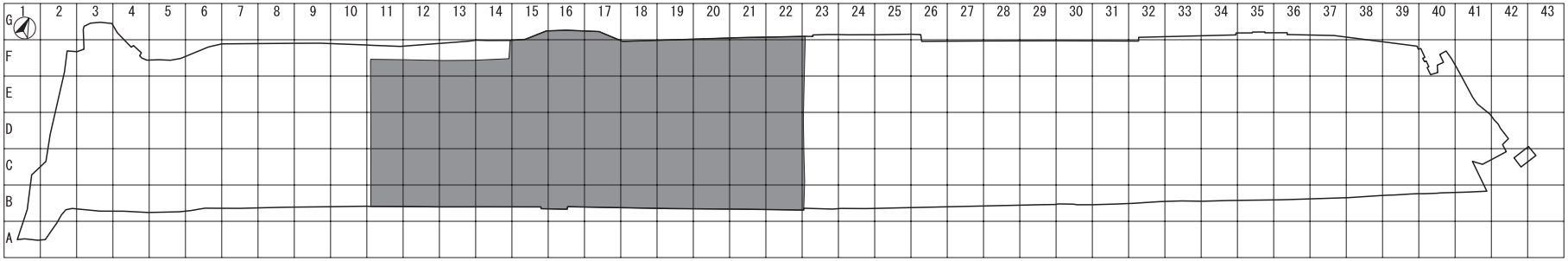
令和４年度

４月　遺物・遺構図面等確認　土器実測・復元
　遺物・遺構図データ修正
５月　土器実測・トレース・拓本・復元
　遺物・遺構図データ修正
６月　土器実測・トレース・拓本・復元
　遺物・遺構図データ修正
　遺物指導（本田道輝氏）
７月　土器実測・拓本・復元
　遺構・遺物レイアウト
　遺物データ入力　原稿執筆
８月　遺構・遺物レイアウト　遺物復元
　遺物データ入力
　遺物写真レイアウト
　観察表作成，原稿執筆
９月　遺構・遺物レイアウト　遺物復元
　観察表作成，原稿執筆
　遺構配置図・遺物分布図作成
　遺構写真整理
10月　遺物写真撮影，レイアウト確認，原稿執筆
　遺物指導（上條信彦氏）
11月　原稿・レイアウト等確認
　遺物写真撮影
12月　印刷・製本入札
１月　校正　遺物収納
２月　校正　遺物収納
３月　納品

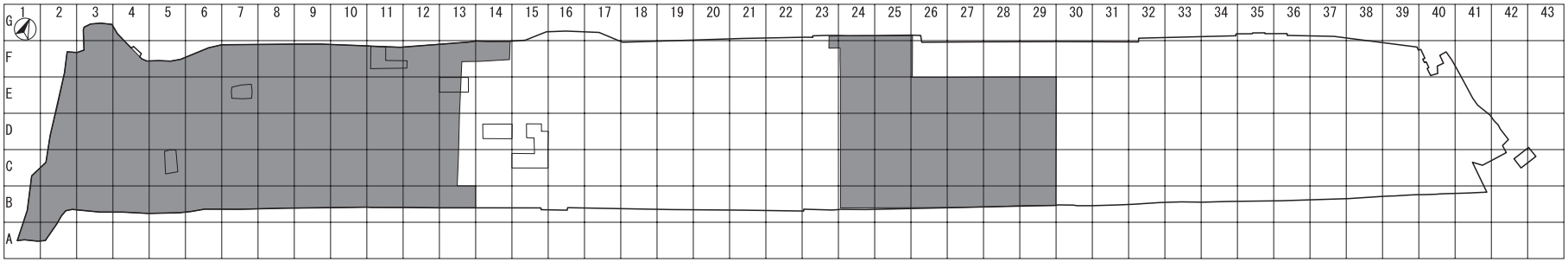
【本田道輝氏　遺物指導風景写真】

【上條信彦氏　遺物指導風景写真】

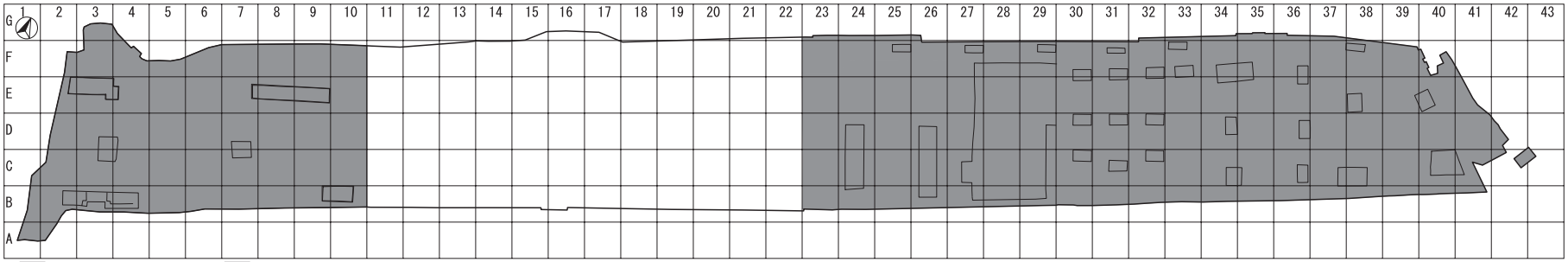
H27年度調査範囲



H28年度調査範囲



H29年度調査範囲



本調査範囲　　本調査時Ⅸ層以下確認トレンチ

0　100m

（1グリッド10m×10m）

第２図　年度別調査範囲図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿屋市串良町は，大隅半島東南部のほぼ中央に位置し，東には東串良町，南には肝属川を隔てて肝付町，西には鹿屋市東原町，旭原町，笠之原町，北東は立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。平成18年１月１日に旧鹿屋市と合併するまでは，広大な笠野原台地を旧鹿屋市と二分していた。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地，その間の丘陵，台地および低地等から構成されている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で，中生代層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，大箆柄岳（1,236m）を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山から成る山地で，山容は急峻で深い森に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山地間を埋めるような形で，洪積世の火山活動である南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，鹿児島湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流が堆積している。また，これらの火砕流をはじめとする噴出物が，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や，ほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。これらの地形の地質は大部分がシラス，ボラ等の火山灰土壌となっている。

一方，低地は，高隈山地や荒磯岳等を水源とする本城川や肝属川，菱田川などの大小の河川が走り，鹿児島湾，志布志湾等に注いでいる。この河川は，上・中流域で谷底平野を形成し，また下流域では，河岸段丘の形成も認められる。

この大隅半島に位置する旧串良町の地形は，東西に6.5㎞，南北に13㎞の狭長で北部の山地中央部の台地，南部の低地に大別されるが，大部分において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ，それによる沖積地が広がり，約560haの水田地帯を形成している（平成16年度旧串良町統計）。また，北部には低い丘陵状地形の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

小牧遺跡は，旧串良町の北東部，串良川東岸の標高80～100mの新調堀台地の南西端に位置している。周囲を串良川やその支流の浸食を受けることで，台地縁辺が開析され，尾根状に形成された標高約65mの小さな舌状台地とも言えそうな河岸段丘上の平坦面に所在する。遺跡の西側を串良川が南流し，北側を支流が流れる。南側には串良川が蛇行した痕跡と考えられる標高約20mの低地が広がり，現在は水田となっており，尾根の裾野に民家が点在する。現在の海岸線からの直線距離は約９㎞である。

小牧遺跡がある平坦面は東側を除く３面が急な傾斜面となって下り開放的であり，北東端は急に高くなり北風を防ぐには良好な場所である。尾根の先端である南西端はやや緩やかな地形となり，現在は唯一の生活道路が通り，畑地として利用されている平坦面で行き止まりとなっている。遺跡が営まれた時代もこの尾根筋が道として主に利用されたと考えられるが，３面の傾斜面や台地へ続く東側にも小道が続いていたと想定される。

小牧遺跡のある平坦面は，東西が約400m，南北が130m～200mとそれほど広い場所ではなく，面積の約半分を発掘調査したことになる。

第２節　歴史的環境

小牧遺跡周辺の主要な遺跡については大隅中央広域農道や東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって次第に歴史的様相が明らかになりつつある。なお，東九州自動車道関連遺跡については，第Ⅱ章第３節で述べたとおりである。ここでは本遺跡周辺の縄文時代前期～弥生時代初頭の歴史的環境について紹介する。その他の時代については『小牧遺跡１』，『小牧遺跡２』，『小牧遺跡３』を参照していただきたい。

縄文時代前期・中期の遺跡としては，細山田段遺跡で200基を超える縄文前期末～中期の土坑が検出され，在地系の野久尾式，深浦式のほかに，近畿地方の大歳山式土器・鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土した。これらの土器の発見は，当時の人々の広範囲での交流を示すとともに，遺跡内での各型式の分布の状況から在地の土器との併行関係を窺える資料となった。

縄文時代後期については小牧遺跡が所在する大隅半島全域に視野を広げて紹介する。後期前葉の土器が出土し，現行の研究で後続すると捉えられる指宿式との層位関係が明らかとなった錦江町の岩崎遺跡や，同じく指宿式に先行するタイプの後期前葉の土器が多く出土した曽於市の宮之迫遺跡など南九州の縄文土器編年上重要な遺跡が知られる。この時期の型式学的な分類の概念には諸論が

あることを前置くが，岩崎（上層・下層）式，宮之迫式の標識遺跡である。また，志布志湾周辺の遺跡としては，志布志市倉園遺跡・中原遺跡では，磨消縄文系，指宿式系，松山式系などの土器が多く出土した。その中でも，肥厚させた口唇部・口縁部に文様帯を形成するタイプの存在が注目され，当時の西日本に広く分布する縁帯文土器の影響を受けたことが想定される。

小牧遺跡周囲の後期の遺跡としては，牧山・立小野Ａ及びＢ・田原迫ノ上・立小野堀・ホンドンガマ遺跡で指宿式・市来式土器が出土している。牧山遺跡からは，主に市来式以降の後期後半の土器がバリエーション豊かに出土した。掘立柱建物跡21棟と2511基の柱穴群が検出され，辛川式・西平式・中岳Ⅱ式を中心とした土器片とともに環状に分布することが報告された。複数の埋設土器と，石冠１点を含む多くの石器も出土した。細山田段遺跡では土坑の検出とともに，丸尾式・北久根山式・西平式・御領式・上加世田式土器が出土している。町田堀遺跡では，中岳Ⅱ式土器が数多く出土し埋設土器としての例も見られる。また，同時期の竪穴建物跡からは橿原文を施す完全な形の石刀が出土した。

縄文時代後期末～弥生時代初頭の遺跡としては，本遺跡から地理的距離の近い川久保遺跡Ｂ地点で入佐式古段階～黒川式古段階に相当する精製の浅鉢や，突帯文期の土器が出土しており，益畑遺跡でも黒川式古段階の土器が出土している。また，細山田段遺跡からは入佐式・黒川式・突帯文系土器が少数出土した。ほかにも牧山遺跡など串良川沿いの多くの遺跡において散在的に晩期の土器片が出土しているため，人々の往来や活動が盛んであったことが窺える。この時期の集落跡としては永吉天神段遺跡で突帯文系土器を伴う竪穴建物跡や鉢，壺，扁平打製石斧，石鏃，石匙，石皿などが発見されている。

【引用・参考文献】

河口貞徳1981「市来式の祖形と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』第15号

（公財）埋蔵文化財調査センター2017『立小野堀遺跡１』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（16）

（公財）埋蔵文化財調査センター2016『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（７）

（公財）埋蔵文化財調査センター2017『永吉天神段遺跡２　第２地点－１』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）

（公財）埋蔵文化財調査センター2020『永吉天神段遺跡５　第２地点－３』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（27）

（公財）埋蔵文化財調査センター2017『牧山遺跡１』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（14）

（公財）埋蔵文化財調査センター2017『牧山遺跡３』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（44）

（公財）埋蔵文化財調査センター2017『田原迫ノ上遺跡1』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（15）

（公財）埋蔵文化財調査センター2020『細山田段遺跡１』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（25）

（公財）埋蔵文化財調査センター2020『細山田段遺跡２』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（35）

（公財）埋蔵文化財調査センター2017『川久保遺跡Ｂ・Ｄ地点』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（31）

末吉町教育委員会1981『宮之迫遺跡』末吉町文化財調査報告書（２）

曽於郡志布志町教育委員会1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）

曽於郡大崎町役場1975『大崎町史』

東串良郷土誌編纂委員会1980『東串良町郷土誌』

串良町郷土誌編纂委員会1973『串良町郷土誌』

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所 在 地	地形	時 代	備　　考
1	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	河岸段丘	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世	本報告書 鹿公財（26），(39)，(46)
2	遠見ヶ丘遺跡	曽於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野Ａ・Ｂ遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文（後），弥生	
5	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚Ａ遺跡	曽於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器，縄文（早･晩） 弥生，古墳	平成11年度本調査 鹿埋（84）
7	二子塚Ｂ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文，弥生	
8	二子塚Ｃ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生（中・後）	
9	大佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方大佐土原	山復緩斜面	弥生（中）	
10	佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方4715-2	台地	縄文，古墳	
11	枦山城跡	曽於郡大崎町持留	台地	弥生，古墳，中世	別称「山ノ城」，推定
12	川上神社遺跡	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	縄文（後）	
13	持留牧遺跡	曽於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文，古墳	平成９年度農政分布調査
14	茶ノ木遺跡	曽於郡大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	細山田段遺跡 （旧：京の塚遺跡）	曽於郡大崎町持留細山田段	台地	縄文（早～晩）	平成25～27年度本調査 鹿公財（25），(35)
16	細山田段遺跡	曽於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文（後・晩） 弥生（前），古墳	平成８年度農政分布， 平成11年度農政分布で拡大
17	京の塚古墳	鹿屋市串良町下中京の塚	台地	古墳	
18	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文，弥生	
19	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
20	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
21	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生，古墳	平成25～28年度本調査 鹿公財（７），(20)
22	川久保遺跡	鹿屋市串良町細山田川久保	河岸段丘	旧石器，縄文，弥生，古墳古代，中世，近世	平成26～30年度本調査 鹿公財（24），(31)，(37)，(38)
23	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
24	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉末）	
25	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
26	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	生栗巣遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生，古墳	平成25～29年度本調査 鹿公財（14），(30)，(44)
29	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳	
30	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生	
32	瓜々良蒔遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	平成12年度本調査
33	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文，弥生	
34	枦場遺跡	鹿屋市串良町有里枦場	台地	弥生	
35	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生，古墳	
36	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
37	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
38	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚2169	台地	古墳	
39	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
40	下原遺跡	曽於郡大崎町持留	台地	縄文（後），弥生，古墳	
41	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	

大崎町
東串良町
鹿屋市
立小野
曲
高松
黒石
上持留
大佐土原
持留
中持留
西持留
子塚
平瀬
串良町細山田
東新町
入部堀
下之段
東新堀
新栄
西新堀
矢柄
下中
山郷
霧島神社
中野
山下
下原
0
1 km

第３図　周辺遺跡位置図

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間（第４図）には，表２に示すとおり26か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については,各報告書等を参照していただきたい。

第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 ※H25・30年度に埋文センター調査（隣接地）	H30年度 刊行 R２年度 隣接地刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，敲石，台石
					縄文早期	土坑，集石	吉田式，石坂式，押型文，下剥峯式，縄文系土器，石鏃，磨石，敲石，石核
					縄文中期	落とし穴，土坑	石鏃，石皿
					縄文後期	溝状遺構	岩崎上層式，丸尾式，辛川式，納屋向タイプ，西平式，中岳Ⅱ式，石匙，石錐，打製石斧，磨石，敲石，石錘
					弥生	—	突帯文，高付式
					その他の時代	土坑，溝状遺構	薩摩焼，染付
		旧石器時代から近世までの複合遺跡であり，主体となるのは縄文時代後期である。赤色顔料を塗布した台付皿形土器が出土し，溝状遺構から出土した丸尾式土器・西平式土器などの一括資料は後期後半の共伴関係をみるうえで貴重である。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	縄文早期	集石	前平式，小牧３Ａタイプ，轟Ａ式
					縄文中期	—	大平式，阿高式
					縄文後・晩期	土坑	丸尾式，西平系，組織痕土器，石鏃，スクレイパー，打製石斧，磨石，石錘，丸玉
					弥生中期	土坑	入来Ⅱ式，山ノ口Ⅱ式，磨製石鏃
					古墳時代	地下式横穴墓，溝状遺構	笹貫式，須恵器，鉄鏃，鉄鐸，
					古代～中世	掘立柱建物跡，竪穴建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面，礫集積遺構	土師器，須恵器，国産陶器，カムィヤキ，瓦器，輸入陶磁器，滑石製石鍋，鉄関連遺物，銭貨，炭化米塊
					近世	土坑，帯状硬化面	薩摩焼，肥前系陶器，瀬戸系陶器，銭貨，鉄製品
		縄文時代から近世までの複合遺跡であり，中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。					
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約３m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
5	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	加栗山式，札ノ元Ⅶ類，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，耳栓，石鏃，石匙，石錐，石核，磨製石斧，礫石器，異形石器
					弥生	—	入来Ⅱ式
					古代～近世	溝状遺構，帯状硬化面	土師器，須恵器，青磁，薩摩焼，染付，土製品，鉄製品，寛永通宝
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。					
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積，配石遺構，石器製作跡，	岩本式，前平式，志風頭式，東九州系無文土器，加栗山式，小牧３Ａタイプ，吉田式，岩ノ上タイプ，札ノ元Ⅶ類，倉園Ｂ式，石坂式，中原式，下剥峯式，桑ノ丸式，辻タイプ，押型文，手向山式，塞ノ神式，石鏃，スクレイパー，石核，磨製石斧，石錘，磨石・敲石類，石皿，トロトロ石器，異形石器
					縄文前期以降	落とし穴	
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了	R３年度 刊行	縄文早期	連穴土坑，土坑，集石， 土器集中	前平式，加栗山式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，石鏃， 石匙，楔形石器，打製・磨製石斧，磨・敲石
					縄文中期	―	春日式，磨製石斧
					古代	―	須恵器
					中世	掘立柱建物跡，ピット列， ピット	土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，常滑焼，備前焼， 中国陶器
					時期不詳	土坑，不明遺構，溝状遺構	―
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の連穴土坑，土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見された。遺物は縄文時代早期の土器や石器を中心に，縄文時代中期から中世の遺物が出土している。また，鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 菱田川右岸 標高約５m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
10	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 R３年度 (2)刊行	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石， 土坑，土器集中，炭化物集中， 落とし穴	岩本式，前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式， 押型文，中原式，塞ノ神式，石鏃，尖頭状石器，石槍， 石匙，削器，掻器，石錐，磨製石斧，磨敲石類，石皿， 環状石斧，トロトロ石器
					縄文後期	落とし穴，土坑	丸尾式，石器
					弥生	竪穴建物跡	山ノ口Ⅰ式
					弥生終末期～ 古墳前期	竪穴建物跡，土坑，遺物集中区	弥生終末期～古墳前期の土器，鉄鏃，敲石，磨敲石，砥石， 台石，磨製石剣
					古墳終末期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡， 溝跡，遺物溜まり， 地下式横穴墓，遺物集中区	笹貫式新段階，甑，須恵器，鉄鏃，青銅製品，敲石， 磨敲石，砥石，軽石製品，棒状石器
					古代	掘立柱建物跡，ピット列， 焼土跡	土師器，須恵器，軽石製品，土製品
					中世	堀跡，道跡，ピット列， 竪穴建物跡，土坑墓	土師器，常滑焼，白磁，青磁
					近世	溝跡，道跡，貝溜まり	
		縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴建物跡，古墳～飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，石器等をはじめ，弥生時代から中・近世の遺物が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					
11	牧ノ上B	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H27年度 H28年度 刊行	縄文早期	竪穴建物跡，竪穴遺構， 連穴土坑，土坑，集石， 土器集中，チップ集中	岩本式，加栗山式，吉田式，石坂式，中原式，下剥峯式， 桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，石鏃，石匙， 石錐，削器，掻器，楔形石器，打製･磨製石斧，磨石，敲石， 凹石，砥石，石錘，石核，線刻礫
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	宮脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石刃，細石刃核， スクレイパー，掻器，使用痕剥片，磨石，叩石
					縄文早期	集石，土坑	志風頭式，加栗山式，札ノ元Ⅶ類，小牧３Ａタイプ， 倉園Ｂ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，平栫式， 塞ノ神式，打製石鏃，石匙，石錐，磨製石斧，磨石，敲石， 石皿，軽石製品
					中世～近世	井戸状遺構	青磁，薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。					
15	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
16	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H28年度 (1)刊行 H30年度 R元年度 R２年度 R３年度 (2)刊行	旧石器	ブロック	細石刃，細石刃核
					縄文早期	集石遺構，磨石集積遺構， 素材剥片集積遺構， 土器集中か所，土坑，ブロック	前平式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式， 平栫式，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，耳栓，石鏃，石匙， 磨石，敲石，石核，フレーク，チップ
					縄文前期～晩期	—	轟Ｂ式，入佐式，石鏃，石斧，礫器，磨石
					弥生	竪穴建物跡，土坑	吉ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石
					古墳	竪穴建物跡	古式土師器，砥石，軽石製品
					古代以前	堀跡	—
					中世以降	掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑	土師器，東播系須恵器，陶器，青磁，華南三彩
		旧石器時代から中近世までの複合遺跡である。縄文時代早期では，40基の集石遺構が検出された。塞ノ神式，苦浜式土器がバリエーション豊かに出土し，石匙・石鏃などの石器も多数出土した。古墳時代では，布留式模倣甕，宮崎平野部の土器のみを伴う竪穴建物跡が検出された。検出された片薬研堀は埋土中に紫コラが堆積し，古代以前の片薬研堀としては県内で初例となる。					
17	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H27年度 (1･第1地点) 刊行 H28年度 (2･第2地点1) 刊行 H29年度 (3･第2地点2) 刊行 H30年度 (4･第3地点) 刊行 R元年度 (5･第2地点3) 刊行	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文， 平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧， 磨石，敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴建物跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥生	竪穴建物跡，掘立柱建物跡， 円形周溝墓，土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古墳	竪穴建物跡，土坑	成川式，須恵器
					古代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，土坑墓， 地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼， 常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
18	細山田段	鹿屋市 串良町 細山田 曽於郡 大崎町 細山田 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 (2)刊行	縄文早期	集石，埋設土器	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文， 平栫式，塞ノ神式，苦浜式，右京西式，石鏃，石匙，磨･敲石， 石核
					縄文前・中期	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，石鏃，石匙， 石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿， 石核，炭化種実
					縄文後期	土坑	辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，石鏃，石匙，石錐， スクレイパー，磨･敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					時期不明	溝状遺構・古道	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。					
19	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘上 標高約65m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 (2)刊行 R３年度 (3)刊行 R４年度 (4)刊行予定	旧石器	—	槍先形尖頭器，ナイフ形石器，三稜尖頭器，細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑， 集石，磨石集積	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文， 平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石錐， スクレーパー，玦状耳飾，軽石製品，石斧，磨敲石，石皿， 石錘
					縄文前・中期	土坑，集石，ピット	曽畑式，深浦式，磨敲石
					縄文後期	竪穴建物跡，石皿立石遺構， 埋設土器，土器集中， 石斧集積遺構，集石，土坑	大平式，阿高式系，宮之迫式，福田Ｋ２式， 中原遺跡Ｖa・b類，指宿式，松山式，丸尾式，中岳Ⅱ式， 上加世田式，石鏃，石匙，石錐，スクレーパー，石斧， 磨敲石，石皿，砥石，石製品（垂飾），石錘，軽石製品
					縄文晩期	土坑，集石，石斧集積	入佐式，黒川式，刻目突帯文，組織痕土器
					弥生	竪穴建物跡，土坑	入来式，山ノ口式，高付式，須久式系統，東海系壺，砥石
					古墳	竪穴建物跡，土坑，土器集中， 礫集中，焼土集中域，ピット	中津野式，東原式，辻堂原式，笹貫式，布留式系土師器， 初期須恵器，須恵器大甕，磨製石鏃，砥石，磨敲石，台石， 鉄製品，勾玉，管玉，臼玉，鞴の羽口，土製紡錘車，土錘
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡， 溝状遺構，土坑，ピット	土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器， 土製紡錘車
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構， 溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子， 鞴羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼
		旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。また大型の花弁形建物跡を伴う古墳時代の集落からは熊本で製作された可能性をもつ布留式模倣甕や宮崎平野部の胎土の土器が出土し，当時の交流の様子が明らかになった。古代・中世の掘立柱建物跡を伴う集落跡も発見されている。串良川流域に暮らす人々の各時代の生活や土地利用の様子を考える上で重要な遺跡である。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (1・C地点) 刊行 R元年度 (2･B･D地点) 刊行 R２年度 (3・A地点) (4・A地点) 刊行 R３年度 刊行 R４年度 (5・A地点) 刊行予定	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，畝原型細石刃核，台形石器，細石刀
					縄文早期	集石，連穴土坑，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟A式，耳栓，石鏃，磨石，敲石，叩石
					縄文前期	集石	西之薗式，轟B式，曽畑式，磨製石斧，石鏃，磨石
					縄文後期	—	宮之迫式，中岳式，動物形土製垂飾品
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	竪穴建物跡	山ノ口式，入来式
					古墳	竪穴建物跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構	東原式，布留式系土師器，辻堂原式，笹貫式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄斧，鉄滓，勾玉，管玉，ガラス小玉，製鉄炉，棒状礫
					古代	掘立柱建物跡，竪穴建物跡	須恵器，土師器，黒色土器，墨書土器，瓦器
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，古道跡	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の鞴の羽口も出土している。製鉄炉も出土しており，古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1)刊行 H29年度 (2)刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平栫式
					縄文後期	竪穴建物跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製･磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡	入佐式，山ノ口式，土製勾玉
					古　　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　　代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，櫃原文を施す完全な石刀が出土している。					
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (1)刊行 H30年度 R元年度 (2)刊行 R２年度 R３年度 (3)刊行	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟Ｂ式，条痕文
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，掘立柱建物跡，ピット，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，納屋向式，納曽式，西平式，辛川Ⅱ式，太郎迫式，中岳Ⅱ式，打製･磨製石斧，磨敲石，剥片，石核，石皿，石冠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	入来式，山ノ口式，打製･磨製石斧，磨製･打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が１点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。					
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H26年度 (1)刊行 H27年度 H28年度 (2)刊行 R元年度 R３年度 (3)刊行 ※H23～24は埋文センター作業	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝	山ノ口式･中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器碗，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴建物跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出され，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されたことも注目される。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24～27年度 H28年度 (1)刊行 R３年度 (2)刊行	縄文前･中期	―	深浦式
					縄文後期	―	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	―	山ノ口式
					古　　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀･剣･槍･鉾･刀子･鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	―
		縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。					
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	―	石坂式
					縄文後期	―	凹線文，市来式，
					縄文晩期	―	黒川式，三万田式
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，磨石，敲石，砥石，棒状敲具，鉄鏃
					古　　墳	―	成川式
					中世～近世	道路状遺構	加治木銭
		弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴建物跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴建物跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。					
26	石縊	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文土器，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	―	山ノ口式，須玖式
		縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟Ａ式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。					

第４図　東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法等，整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

小牧遺跡の発掘調査は，平成25年度と平成27年度に確認調査，平成27～29年度に本調査を実施した。調査対象表面積は19,200㎡，調査対象延面積は54,820㎡である。

調査区割り（グリッド）は，工事用基準杭「STA150（X＝－172321.776，Y＝－5261.309）」と「STA151（X＝－172360.837，Y＝－5353.362）」の延長線を中心に，10m間隔で西から東に向かって１・２・３…，南から北に向かってA・B・C…と設定した。このグリッドを基にして，A－１区の左下を原点（０，０），縦軸をX，横軸をYとし，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，公共座標に基づき基準点を設定した。なお，グリッド線は磁北より約25°西側に振れているが，便宜上グリッドに合わせて東西南北を使用する場合がある。

発掘調査は，重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層は，一部重機を用いて慎重に掘り下げた。

遺構は，移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行った。

出土した遺物については，必要に応じて出土状況の写真撮影を行った後，トータルステーションを使用して取り上げを行った。遺構やまとまった遺物は，遺構の規模等に応じて縮尺１/10～１/20で手測り実測で行った。本編に関わる地形測量は，Ⅴ層（アカホヤ火山灰層）上面で精査を行い実施した。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に調査し，調査担当者間で検討したうえで認定した。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴建物跡・土坑については，埋土や形状，遺物の出土など発掘調査担当で総合的に判断し，分類・認定・時期判断を行った。ただし，遺構の中には，検出面が該当時期の地層よりもかなり下位で検出されたものもあるが，埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のものも含む）遺物等から総合的に検討し，時期判断を行った。

ピットは約1000基ほど検出された。時期の認定ができなかった遺構がほとんどであったが，遺物から時期認定ができたものについては個別に掲載した。

各遺構は，竪穴建物跡はSH，土坑はSK，集石はSS，土器集中はDKSの略記号と番号を付した。発掘調査時の名称と本報告書での名称の関係については，第33表の遺構名の新旧対応表にまとめてある。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出及び調査に際しては，可能な限り当時の生活面を把握することを目指した。しかしながら，小牧遺跡は，Ⅴ層（アカホヤ火山灰層）やⅣ層が浸食により流出し堆積が不安定な箇所もあったため，遺構検出・遺構の切り合いや時期認定等に苦慮した。対策として，ミニトレンチの設定，攪乱部分の埋土除去等，遺構の個々の状況に応じた調査方法を検討し，可能な限り残存部の記録保存と時代特定を行った。

３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成27～29年度は，本発掘調査と併せて（株）新和技術コンサルタントに業務を委託し，遺物の水洗・注記等の基礎整理作業と接合作業を行った。

平成30年度は，基礎整理作業を（株）九州文化財研究所に委託し，本編掲載の遺構図面の整理・トレース作業および遺構内出土土器の水洗・注記・分類・選別・復元作業を行った。また，本編掲載の石器の一部についても実測・トレース作業を同社に委託し行っている。その他の作業の委託の状況については第Ⅰ章第２節を参照していただきたい。

令和元年度は，「小牧遺跡１（古代～近世以降編）」の報告書作成を行いながら，主に包含層から出土した全ての時代にわたる遺物の分類・選別作業を行った。

令和２年度は，「小牧遺跡４（縄文時代前期～弥生時代初頭編）」の整理基礎作業を国際文化財株式会社に委託し，本編掲載の遺構図面の整理・トレース作業および遺構内出土遺物の注記・分類・選別・復元作業を行った。

令和３年度は，整理作業を国際文化財株式会社に委託し，本編掲載の遺物の復元作業や実測・トレース作業を行った。

令和４年度は，遺物の細分類作業および編集作業を行い，「小牧遺跡４（縄文時代前期～弥生時代初頭編）」の報告書作成を行った。

第２節　層序

小牧遺跡は，鹿屋市串良町の北東部，串良川左岸の新調堀台地の南端に位置し,周囲を串良川やその支流の浸

食を受けることで地形面が開析され，標高約65mの独立丘陵状となっている。調査区は東西に約400mあり,東側から西側へと低く緩やかに傾斜している。串良川に近い西側の地形は,雨水等による浸食や各時代の人為的な手が加わっており,アカホヤ火山灰層やⅣ層の一部が流されて堆積が不安定な箇所もあった。そのため，縄文時代から古墳時代までの遺構・遺物が同じ包含層で検出されている。標準土層については，平成29年度の調査時に調査区中央から東側でⅣc層とⅣd層を設定できたことから，調査区の西側（１区～29区）と東側（30区～42区）で層位および色調および土壌の特徴が異なる。

本報告書では，縄文時代前期以降の遺構・遺物の検出層であるⅥ層以上の土層断面を掲載する。Ⅵ層以下の土層および今回図示しなかった区域の土層断面については「小牧遺跡１」,「小牧遺跡２」,「小牧遺跡３」を参考にしていただきたい。

第３表　基本層序

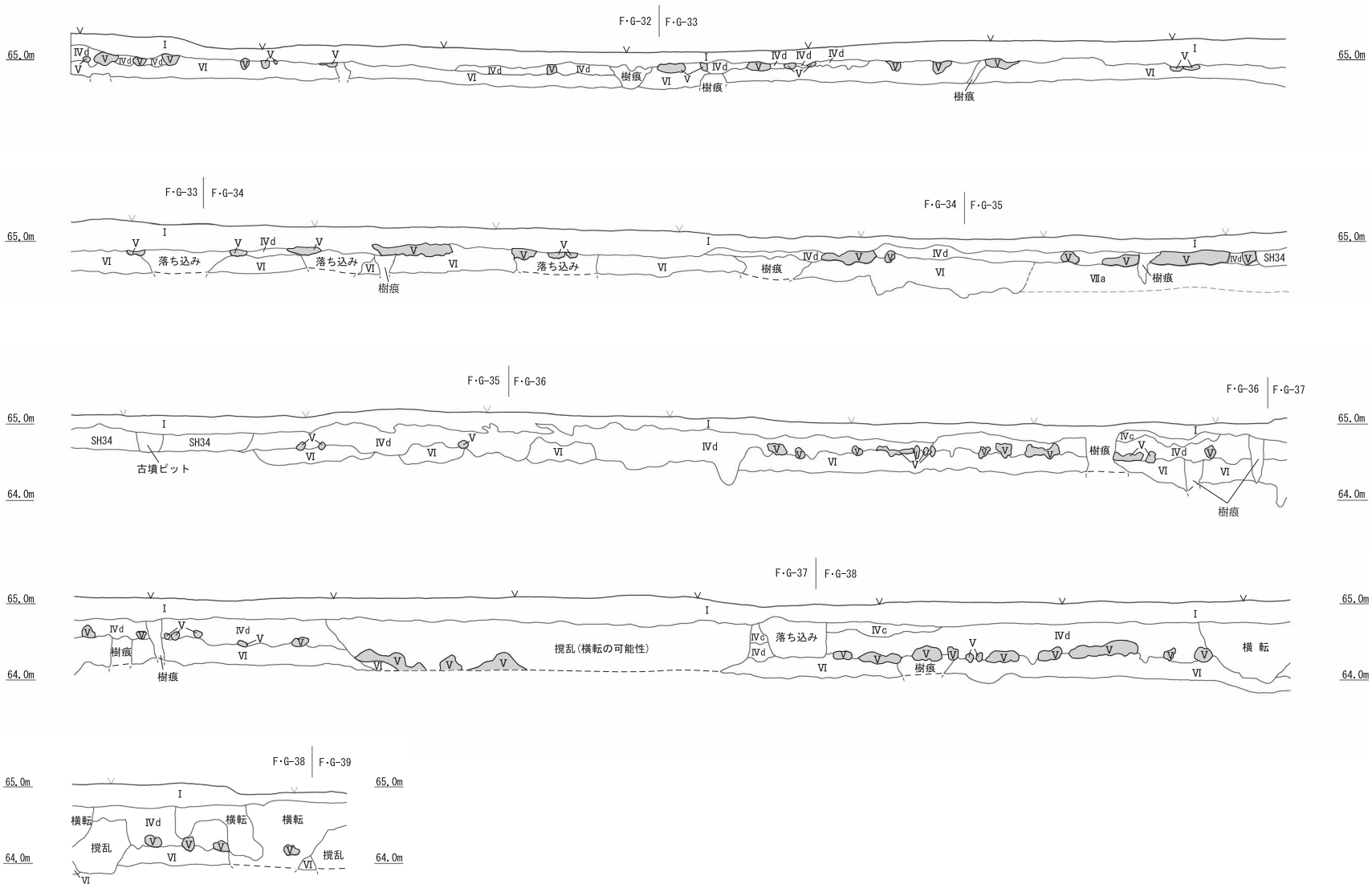
１区～29区

層位	色調等	特徴等	時代
Ⅰ層	表土	Ⅱ層との層界にＰ１火山灰層が堆積している。	
Ⅱ層	黒色土	細かい白色軽石を含む。耕作のためにほとんど残っていない。	
Ⅲ層	黒色土	部分的に残存する。１区から13区は古代から中世，14区以降は古代の包含層である。Ⅲ層を埋土とする遺構を古代Ⅱ期としている。	古代～中世
Ⅳa層	暗褐色土	縄文中期から古墳時代までの遺構・遺物を包含する。30区～42区では，上部に古代（９世紀）遺物を包含する。遺構埋土にわずかにⅣａ層より暗い埋土を持つ遺構を古代Ⅰ期としている。縄文晩期～弥生時代については,堆積が薄く，層位的な上下関係の把握は困難である。	古墳～縄文前期
Ⅳb層	暗褐色土	池田降下軽石をまばらに含む。1区～13区までは，縄文時代後期から古墳時代までの遺物を包含するが，14区より東側は，縄文時代前･中期から後期の遺物を包含する。	
Ⅴa層	黄褐色土	池田火山灰の軽石やアカホヤ軽石の両方を含む。堆積の不安定な西側では,この上面まで遺物を含む。30区から42区では，Ⅳdとして設定。	
Ⅴb層	アカホヤ火山灰	アカホヤ火山灰。4区から10区かけて堆積が薄い。20区から42区では，Ⅴ層として設定。	約7,300年前
Ⅵ層	暗茶褐色土	塞ノ神式土器等を含む，縄文時代早期後葉の遺物包含層である。アカホヤの軽石，炭化物を含む。	縄文早期
Ⅶa層	黒褐色土	加栗山式土器等を含む，縄文時代早期前葉の遺物包含層である。層全体に，Ｐ13，黒色ブロック土をわずかに含む。	
Ⅶb層	青灰色土	薩摩火山灰が多く混在する。黒色ブロック土を含む。	
Ⅷ層	薩摩火山灰	一次堆積層が上下に浮遊している。	約12,500年前
Ⅸa層	濃茶褐色強粘質土	旧石器時代（細石刃）の包含層である。	旧石器時代（細石刃）
Ⅸb層	濃暗茶褐色強粘質土	粘性が強い。	
Ⅸc層	濃茶褐色強粘質土	Ⅸｂ層よりも暗い色調。旧石器時代の遺物を含むが，Ｘ層の遺物が混入した可能性がある。	旧石器時代
Ⅹ層	茶褐色粘質土	層の上部に濁った層があり，そこから旧石器時代の遺物（三稜尖頭器）が出土する包含層である。	
Ⅺ層	黄色褐色粘質土	黒ずんでいて堅い。旧石器の包含層である。Ｐ17と思われる火山灰を少量含む。黒いハードローム層である。	
Ⅻa層	黄褐色粘質土	明るいソフトローム層で，Ｐ17と考えられる火山灰を所々に含む。	
Ⅻb層	黄褐色粘質土	旧石器の包含層黒いハードローム層で，黒ずんでいて堅い。Ｐ17の降下層。Ⅺ層やⅫａ層に見られる赤色パミスは，Ｐ17が混入した可能性がある。	
ⅩⅢ層	二次シラス		

30区～42区

層位	色調等	特徴等	時代
Ⅰ層	表土		
Ⅱ層	黒色土		
Ⅲ層	黒色土	部分的に残存，下部に遺物を包含	古代（９世紀）以降
Ⅳa層	褐色土	上部に古代（９世紀）遺物を包含。縄文晩期～弥生時代については，堆積が薄く，層位的な上下関係の把握は困難である。	縄文後期～古代
Ⅳb層	暗褐色土		縄文中期～後期
Ⅳc層	黄橙色砂質土	池田火山灰･降下軽石がブロック状に堆積	縄文前期～中期
Ⅳd層	暗褐色土	弱い粘性有り	
Ⅴ層	アカホヤ火山灰		約7,300年前
Ⅵ層	黒褐色粘質土		縄文早期
Ⅶa層	灰褐色粘質土	Ｐ13含む	
Ⅶa'層	にぶい黄褐色砂質土	23～41区の南側斜面に堆積	
Ⅶb層	灰黄褐色粘質土	薩摩火山灰混じり	
Ⅷ層	薩摩火山灰		約12,500年前
Ⅸa層	灰黄褐色粘質土	細石刃	旧石器時代
Ⅸb層	褐灰色粘質土		
Ⅸc層	灰黄褐色粘質土	三稜尖頭器	
Ⅹ層	明黄褐色粘質土		
Ⅺ層	褐灰色粘質土	槍先形尖頭器	
Ⅻa層	明黄褐色粘質土		
Ⅻb層	褐灰色粘質土		
ⅩⅢ層	二次シラス		

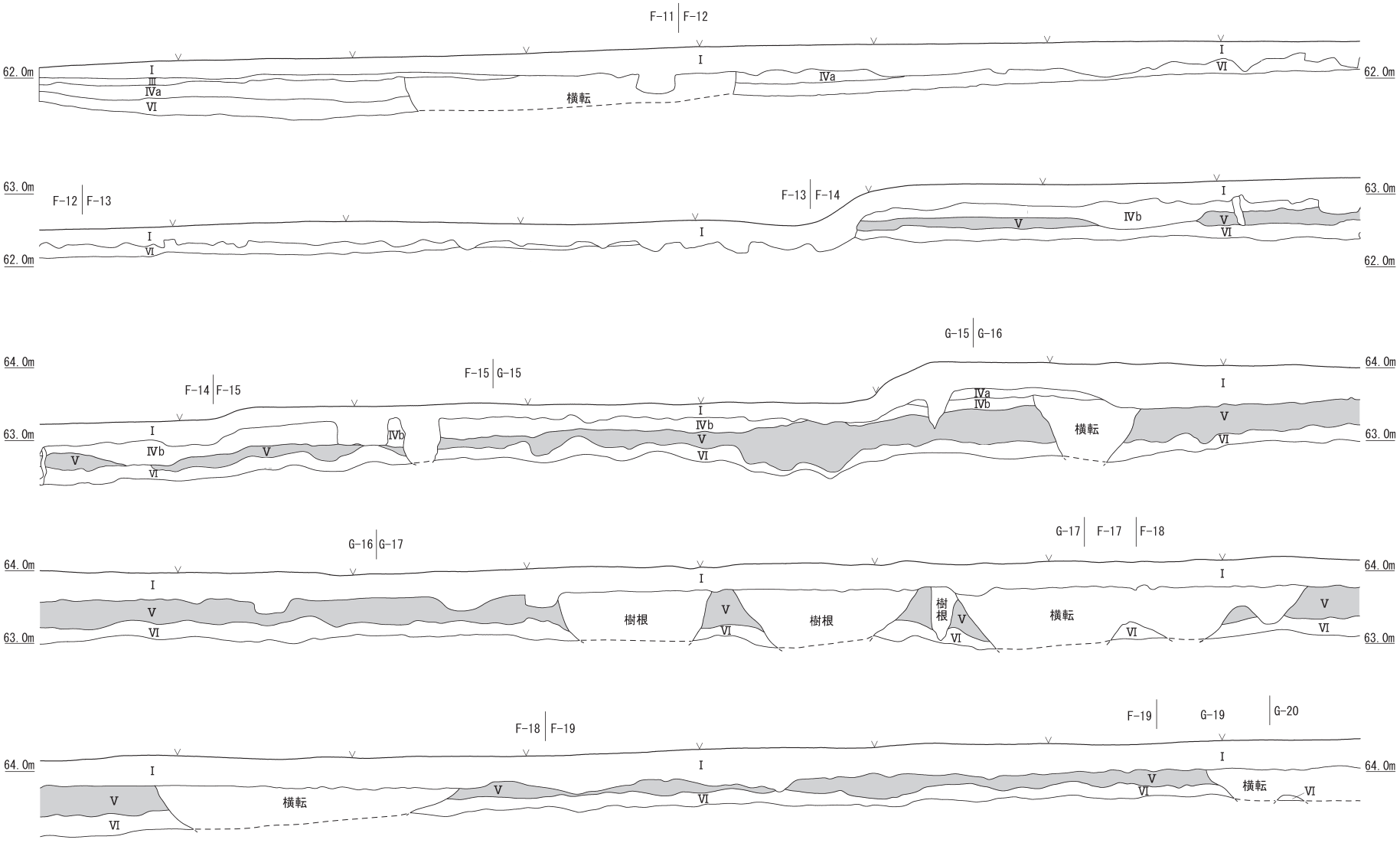
① F・G-32～39区



0 (1 : 80) 5m

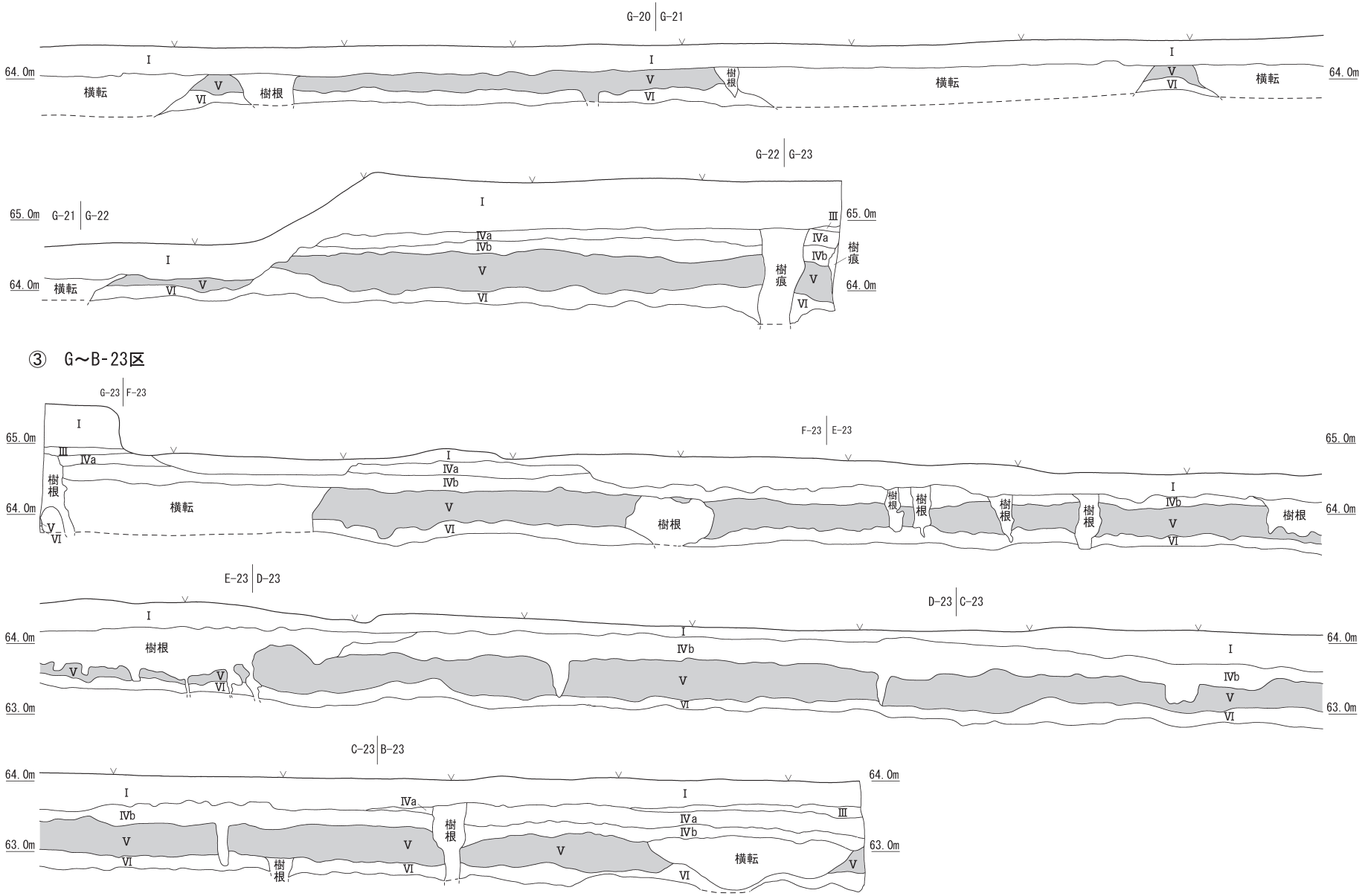
第５図　土層断面図（１）

② F・G-11～23区



第６図　土層断面図（２）

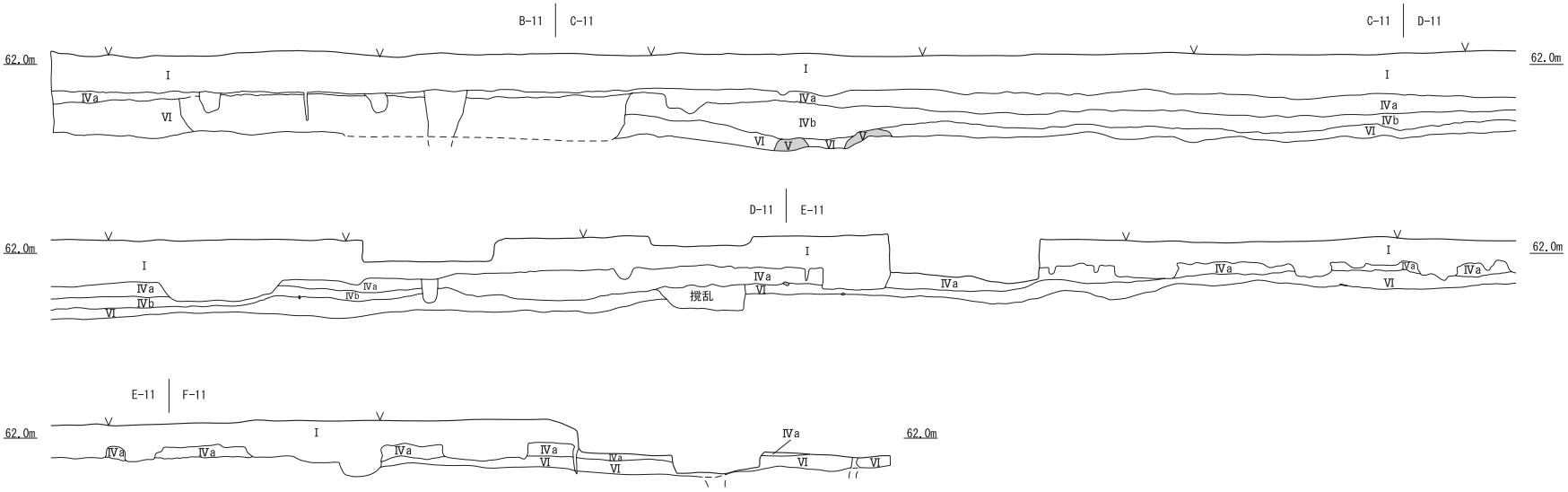
0　（ 1 : 80 ）　5m



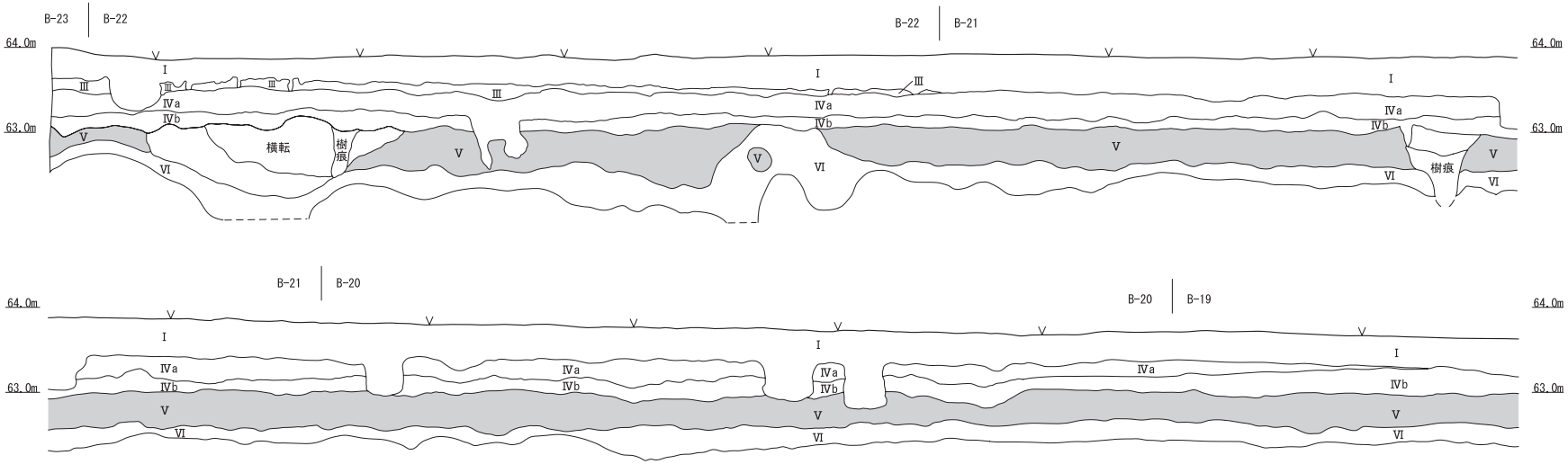
0 (1 : 80) 5m

第７図　土層断面図（３）

④ B～F-11区

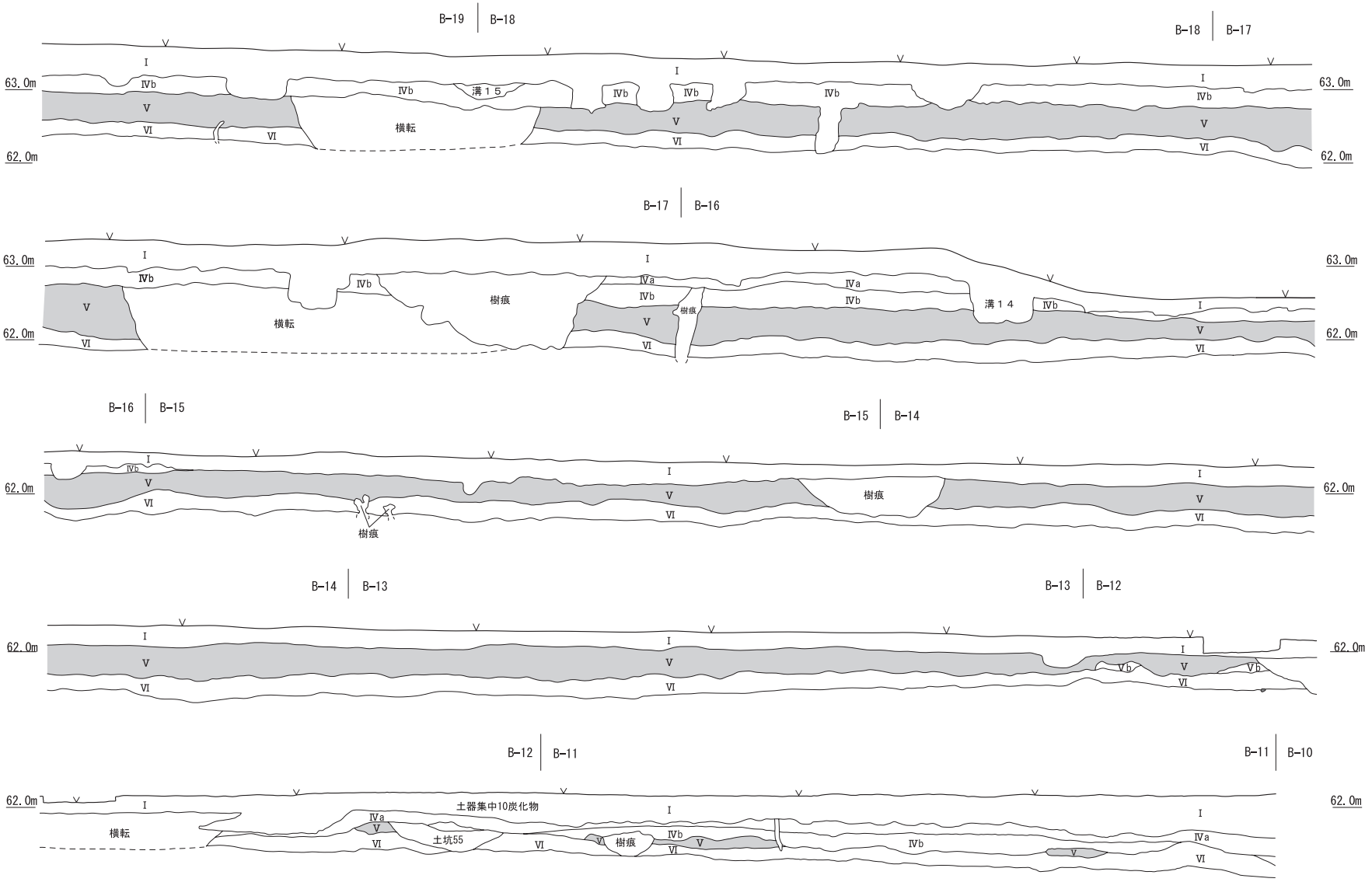


⑤ B-23～7区



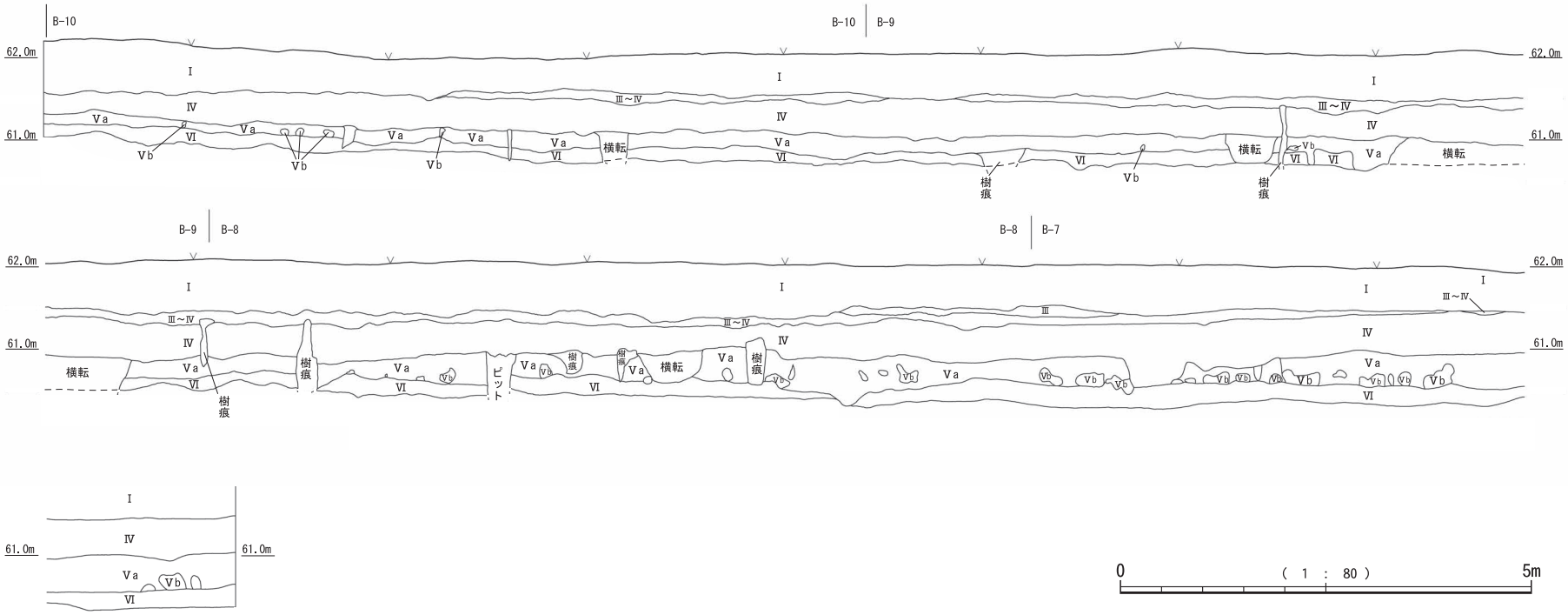
第８図　土層断面図（４）

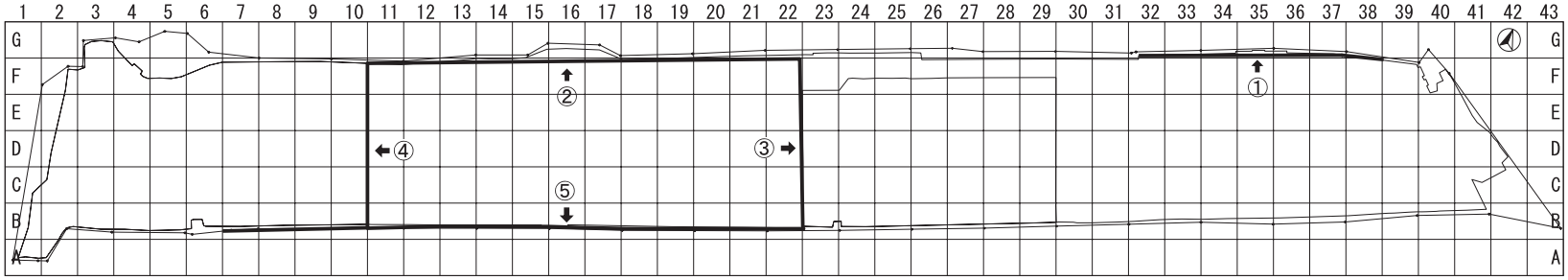
0　（ 1 : 80 ）　5m



0 (1 : 80) 5m

第９図　土層断面図（５）





——：当該土層実測箇所位置

0 (1:2000) 50m

第10図　土層断面図（6）

第３節　層序についての補足

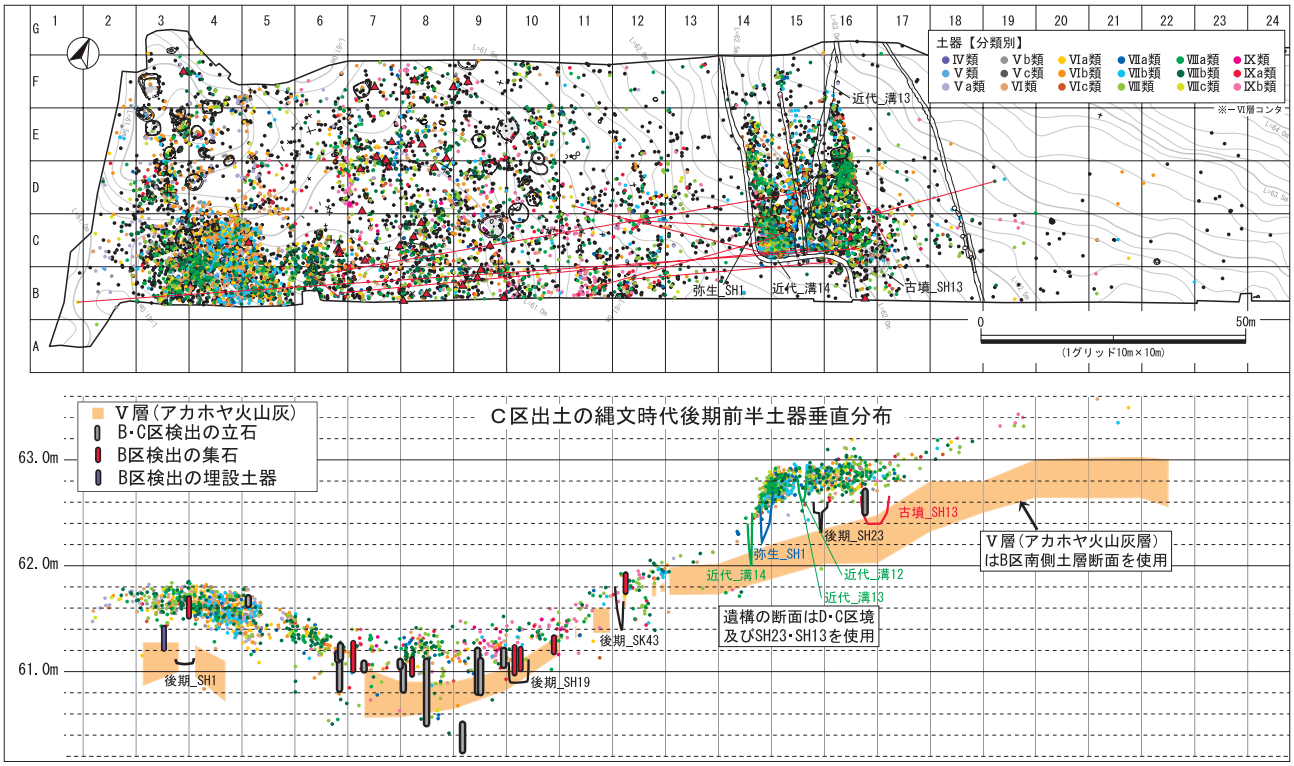
１～23区周辺までは，Ⅴ層のアカホヤ火山灰層より上層が後世に撹乱を受けていたり，発掘調査時に指摘されていたアカホヤ火山灰層が全部もしくは一部みられない地点があることから，若干の補足説明をしておきたい。なお，１～６区の土層断面図は，Ⅴ層までの層がなかったり，調査範囲が直線でなかったため欠けている。第11図で示したように，レベル差を強調するため水平方向と垂直方向の縮尺を変えている。

まず，記録された土層断面図で確認しておきたい。北側断面図が記録されているのは，11～22区である。11区と12区東側３ｍまではⅥ層の上にⅤ層はなく，Ⅳa層が直接覆っている。12区東側３ｍ～13・14区境までは表層下がⅥ層であり近世以降の削平である。13・14区境から15・16区境の西側3.6ｍ地点までは，Ⅳb層下のⅤ層の厚さが16～20cmと薄いことが確認できる。15区と16区境では，Ⅳa・b層の下に約40cmの厚さのⅤ層が確認できる。16区途中～22区途中までは表層下がアカホヤ火山灰層であり近世以降の削平によるものであるが，東側はⅤ層のアカホヤ火山灰層の厚さは約40cmで安定している。一方，南側断面図が記録されているのは，７～22区である。７・８区のアカホヤ火山灰層は，軽石混じりの噴出物を含めて40cmほどの厚みがある。９・10区は20cmから10cmへと薄くなり，11・12区は部分的にしかアカホヤ火山灰層がみられない。13～15区にかけてアカホヤ火山灰層上面から上層が削平されているのは，近世に撹乱を受けているからである。15・16区境から東側はⅣb層の下に約40cm厚のアカホヤ火山灰層が安定して堆積している。

一つ目の課題であるアカホヤ火山灰層の削り取りについては，土層断面図で東側の範囲が想定できる。土層断面図のない区域でⅤ層のアカホヤ火山灰層が削り取られた範囲を復元する手段として，空中写真が手掛かりとなる。第12図写真③を参考にすると，１～４区にかけてはⅤ層の黄褐色土が明確であり，６区から東側はⅣ層の暗褐色土およびⅥ層の暗茶褐色土がみられる。以上のことから，第12図の範囲でⅤ層のアカホヤ火山灰層を含めた地層の削り取りが人為的に行われたと推察される。B-３・４区にもⅣ層の範囲がみられ，縄文時代後期前半の遺物が多く出土している。この区については，地形的に谷頭状になっていることが地形図や写真から読み取れる。

もう一つの課題は，後世における撹乱が多い14～16区の遺物の出土状況についてである。この区で出土した遺物が集中しているようにみえるのは，両側の遺物包含層が後世に削平されているのが一因である。分布状況を把握した時点では，後世に削平した遺物包含層を客土した可能性も疑ってみたが，発掘調査時の所見等でもそのような状況はみられなかった。また，遺物の出土レベルや接合状況をみても，他の地点と遜色ない。したがって，この区の出土状況は原位置を保っていると考えられる。

以上の２点については，第Ⅹ章の総括で詳述したい。



第11図　１～22区における垂直分布及び関連遺構・遺物分布状況

①Ｂ－３区南壁断面

Ⅻ層（二次シラス）上面から表土層まで安定した土層の堆積がみられる。全体の層の厚さは約３ｍである。

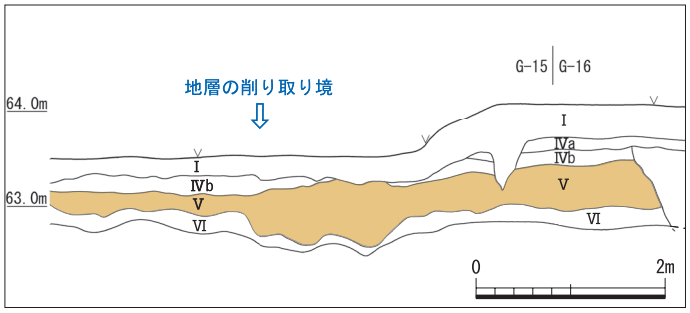
②Ｂ-20～22区南壁およびＢ・Ｃ-22区東壁断面

縄文時代早期の遺構検面（Ⅷ層・薩摩火山灰）からⅣ層まで水平に堆積している。Ⅴ層（アカホヤ火山灰）は40～50cmの厚さで安定している。

③１～10区のⅤ層・Ⅵ層上面検出状況

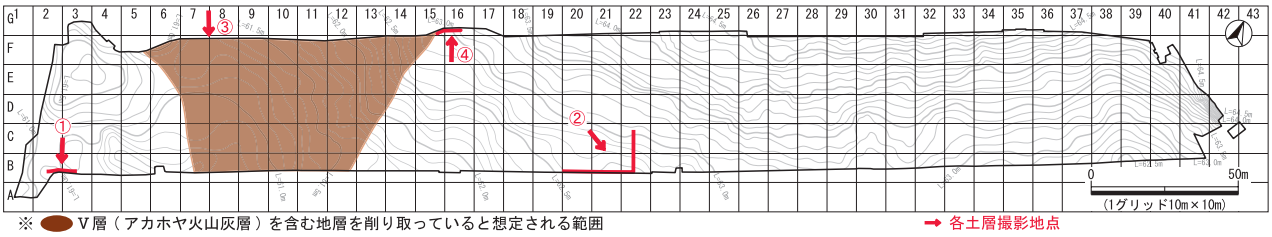
小牧遺跡の北側上空から南側に向かって撮影した空中写真である。南側奥に花崗岩からなる大隅半島南部の国見山地があり，西側を串良川が南流する。河岸段丘上の平坦面は東側が広くなり，西端の３方向は傾斜面となっている。

西側の１～５区は黄褐色をしたⅤ層のアカホヤ火山灰層が露出している。東側の６～10区は暗茶褐色のⅥ層であり，Ⅴ層のアカホヤ火山灰層が削り取られ，全体的に窪んでいることがわかる。



④G-15・16区境周辺の土層断面図

G-15・16区境から西側3.6mのところで，Ⅴ層のアカホヤ火山灰の厚さが変わっていることが観察できる。Ⅵ層とⅣb層に挟まれたⅤ層の厚さに注目すると，東側は大隅半島の台地部で一般的な約40cmであるのに対し，西側は16～20cmと薄いことがわかる。アカホヤ火山灰層の途中まで，人為的に削り取られた可能性が高い。



第12図　土層の補足

第Ⅳ章　遺構および遺物の分類

第１節　遺構の分類

本報告書では縄文時代前期から弥生時代初頭までの発掘調査成果を報告するが，検出された遺構には竪穴建物跡や土坑など各時期を通してみられるものや，特定の時期にしかないものもある。各遺構は形状や属性によって分類が可能であるので，分類基準を報告する。

遺構名については発掘調査年度や調査時に判断した種類や遺構番号があるが，整理・報告する段階で遺構名の変更あるいは遺構番号を改めて整理した。遺構番号の新旧対応については，第33表に掲載してある。なお，遺構の種類を省略する場合は次のような略号を用いる。

竪穴建物跡　……　ＳＨ
土坑　……　ＳＫ
集石　……　ＳＳ
ピット　……　Ｐ

各遺構の計測箇所については下記のとおりである。

長　軸：検出面で，遺構の一番長い部分の長さ。集石の場合，構成する礫の端から端までの最大幅の長さのこと。
短　軸：長軸に直角に交わり，最も短い軸の長さ。
深　さ：遺構の断面で最も深い部分の長さ。
推定面積：実測図面からIllustratorを用いて算出した。

竪穴建物跡（ＳＨ）

竪穴建物跡の形状を把握するため，長軸と短軸から長短比を算出し，下記のように平面の形状を類型化した。

長短比　：短軸÷長軸
隅丸方形：長短比が0.7から１で数値が１に近いほど正方形に近い。
隅丸長方形：長短比が0.7未満で，数値が小さいほど横長に広がる。
楕円形　：長短比が0.7～１で，数値が１に近いほど円形に近い。
不　明　：平面形状が切り合い等によって全体の形状がわからない遺構。

土坑（ＳＫ）

平面の形状を楕円率により４タイプに分類した。

楕円率：（短軸÷長軸）で算出（０＜楕円率≦１）
楕円率を元に下記のように土坑を分類した。

タイプⅠ：長楕円　（楕円率＜0.5）
タイプⅡ：楕円　　（0.5≦楕円率＜0.8）
タイプⅢ：円形　　（0.8≦楕円率）
タイプⅣ：不明

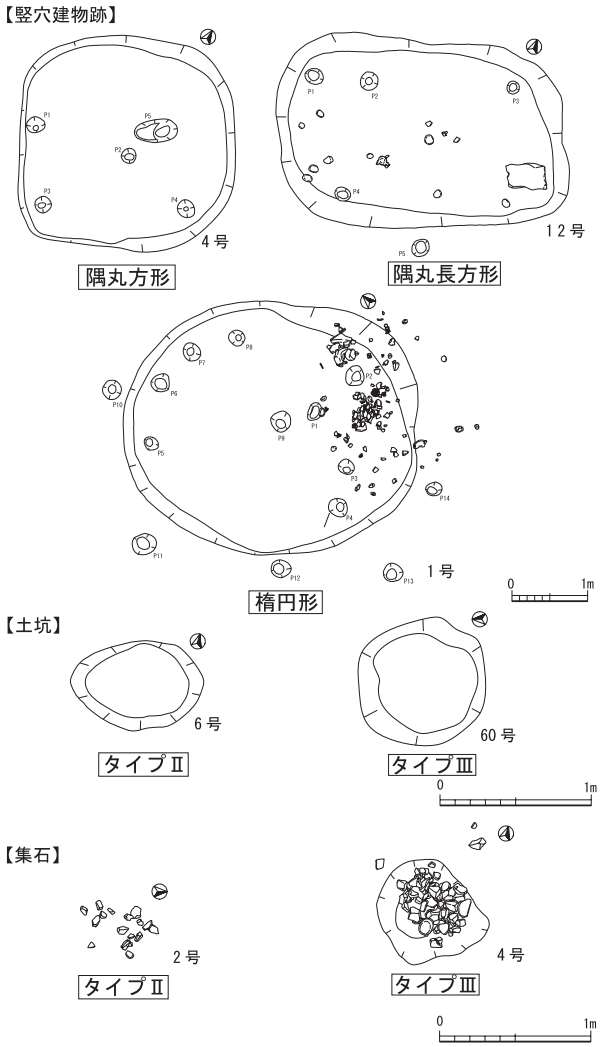
集石（ＳＳ）

集石については，掘り込みの有無，散密の状況で下記のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部及び掘り込み部のないもの。（散石状態）
タイプⅡ：構成礫の明確な集中部はあるが，掘り込み部のないもの。
タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部を伴うもの。
タイプⅣ：構成礫の明確な集中部はないが，掘り込み部が若干確認できるもの。

なお，総礫数は個々の集石を構成している石器を含めた礫の総数である。

これらの細分できる遺構のほかに，土器集中，埋設土器，立石遺構，ピット，遺物埋納遺構があり，該当する時期で説明する。なお，凡例の図は任意の縮尺である。



第13図　遺構の分類

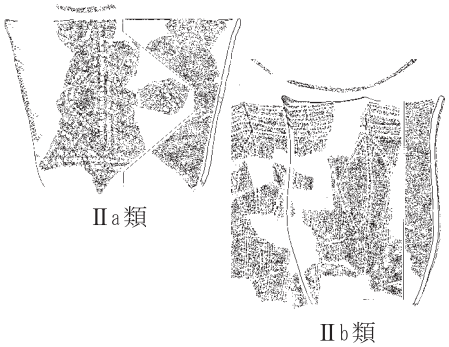
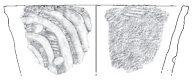
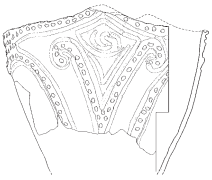
第２節　土器の分類

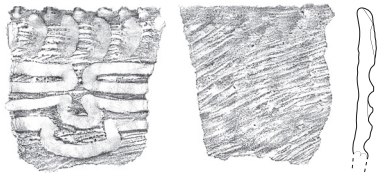
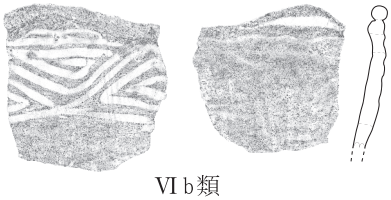
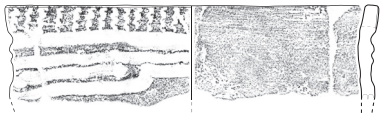
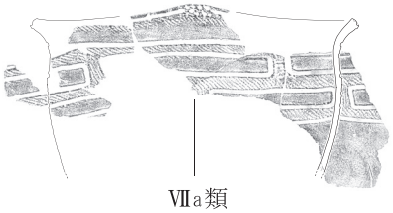
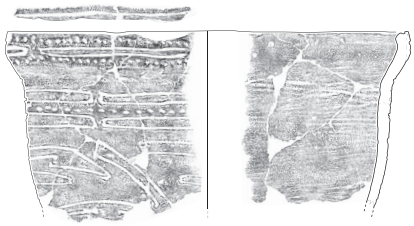
本報告書で扱う時代は縄文時代前期～弥生時代初頭であり，多種多様な遺構や遺物が出土している。特に土器は各時期において多彩な形態や文様がみられ，本来ならば層位的な上下関係で時期を判断すべきである。しかし，前節で述べたように，対象となるアカホヤ火山灰層上位のⅣａ層～Ⅳｄ層は東西400ｍの長い調査区の中で混在している部分もある。また，Ⅴ層のアカホヤ火山灰層が削り取られた区域があり，Ⅵ・Ⅶ層をアカホヤ火山灰層上位の層と誤認し，縄文時代前期以降の遺物や遺構に対してⅥ・Ⅶ層と記載したものもある。

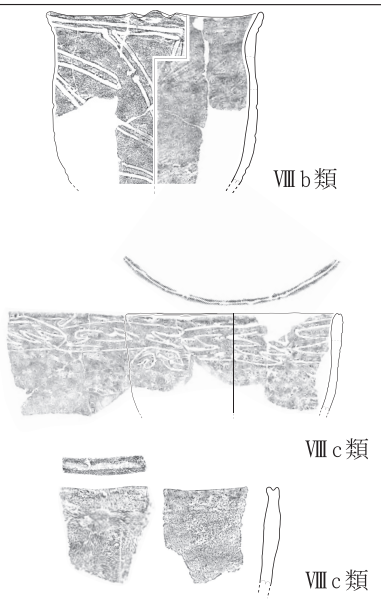
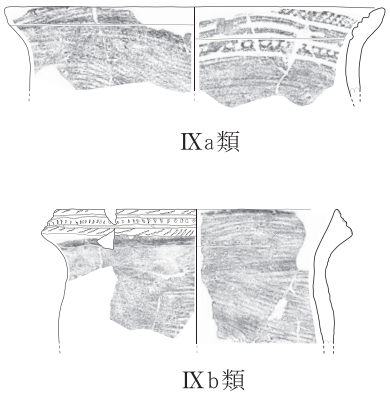
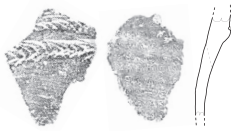
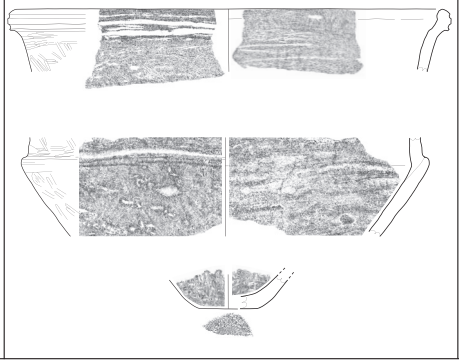
そこで，これまでの研究史や調査成果を踏まえ土器を分類することによって，各時期の指標とするとともに時期を追って遺構や遺物の内容を説明することとする。

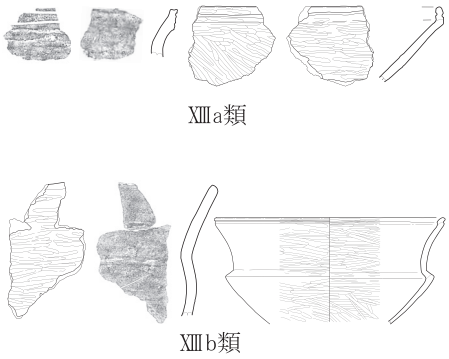
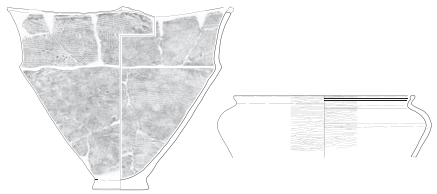
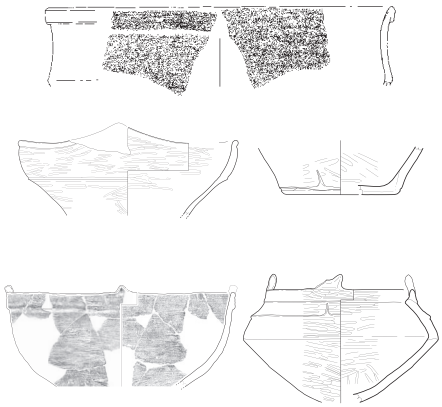
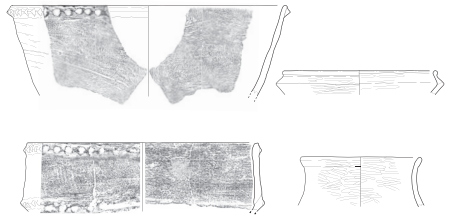
なお，分類した土器については，縄文時代前期後半～中期初頭，縄文時代後期前半，縄文時代後期後半～弥生時代初頭に大きく分けて各章ごとに紹介する。第14図に各時期における概略の出土分布図を示すので予め参考にしていただきたい。

＊表中の土器図面の縮尺は任意である。

Ⅰ類土器		【Ⅰ類土器】 短沈線で幾何学文を外面全面に描くもので，口縁部内面にも文様を施す。本遺跡では２点のみの出土である。縄文時代前期後半の曽畑式土器に該当する。
Ⅱ類土器	 Ⅱａ類 Ⅱｂ類	【Ⅱ類土器】 丸底の底部からバケツ状に開くものや胴上部で括れる器形がある。口縁部は平縁に近いものや波状のものがみられ，突起を施すものもある。肋のある二枚貝の腹縁をロッキング状に施すことによって，縦位・横位・斜位の文様を描く。口縁部内面にも施文がみられる。 貝殻腹縁によるもののみ施文したものをⅡａ類，貼付文や沈線文を加えたものをⅡｂ類として分類した。縄文時代前期末～中期初頭に位置づけられる深浦式土器に該当する。
Ⅲ類土器		【Ⅲ類土器】 本類はⅡ類土器に伴うか，あるいはその時期に近いと考えられるものである。出土量が少なく，一つの類にまとめてある。上水流タイプや鞍谷タイプなど縄文時代前期末～中期初頭に位置づけられるものである。
Ⅳ類土器		【Ⅳ類土器】 二叉状の工具による細い沈線文を施す。沈線文は部分的に鋸歯状に描かれる特徴がみられる。本遺跡では口縁部外面に段を有するものと直口のものがある。 縄文時代中期末～後期前半の大平式に該当する。
Ⅴ類土器	 Ⅴａ類  Ⅴｂ類  Ⅴｃ類	【Ⅴ類土器】 口縁部に指頭幅の凹線によって，１帯あるいは２帯構成の文様帯を形成する。凹線の幅は太く，１㎝以上のものが主流である。口唇部に指や棒状工具による刺突を巡らせたものもみられる。平坦口縁が主で，口唇部に突起を有するものもみられる。ナデ調整ものと，器面に条痕が残るものとが出土し，調整の違いにより前者をⅤａ類，後者をⅤｂ類に細分した。 また，円形の刺突文を施した突帯に区画された阿高系の凹線文（三角形状のモチーフ）をもつものが１点のみ出土した。これはⅤ類との時期差が小さいと捉え，Ⅴｃ類に分類した。 阿高式の系統であると考えられ，なかでもⅤｂ類は器面に条痕を残す宮ノ前タイプ（新東1985）に該当する。

Ⅵ類土器	 Ⅵａ類  Ⅵｂ類  Ⅵｃ類	【Ⅵ類土器】 胴部上位に凹線により文様帯が形成される。文様帯は口縁部～頸部に集約され横位に展開する。凹線の幅はⅤ類土器よりもやや細くなる傾向がみられ，幅４～５㎜程度のものが主流である。線がさらに細いものもみられ，Ⅷ類との分類が難しかったが，そのうち単沈線によりひと筆書き様のモチーフを横位に繰り返して展開させるものをⅥ類に分類した。円形・三角形・四角形状の渦巻文，鉤型文、多重の凹線文，大波文など文様のバリエーションも非常に豊かである。Ⅴ類よりも凹線同士の間隔が狭まり，文様の密度がさらに高い印象となる。調整は，器面に条痕を残すものの比率が高い。 Ⅵ類は，従来，岩崎下層式・上層式と呼称されていた一群，そして，それらを包括して捉えられる宮之迫式系統に該当すると考えられる。口縁部の形態・文様の特徴により以下のように細分した。 Ⅵa類…口縁部外面の文様帯が２帯構成である。口縁部上位に爪や工具による縦位の連続刺突文を巡らせ，その下に凹線による文様帯を形成する。岩崎下層式を含むと考えられる。 Ⅵb類… 口縁部外面の文様帯が１帯構成のものが多く，胴部上位に集約される。口縁端部を平たく成形し刻目や円形刺突文を巡らせるもの，口縁部に突起や粘土紐による装飾を施すものが多く出土した。岩崎上層式を含むと考えられる。 Ⅵc類… 口縁部の文様帯が２帯構成である。口縁部直下に貝殻腹縁刺突文を巡らせる。宮之迫遺跡（曽於市）などで多く出土したタイプである。
Ⅶ類土器	 Ⅶａ類 Ⅶｂ類	【Ⅶ類土器】 口縁部や頸部から胴部に縄文あるいは貝殻腹縁などによる密な刺突文を施す。巻貝の表面を回転させた可能性をもつものも少数出土した。頸部から胴部には２条単位の平行沈線文が描かれ，その間を縄文や貝殻腹縁刺突文などで充填させる。縄文が施されるものをⅣａ類に，貝殻により施文した擬似縄文をⅣｂ類に細分した。
Ⅷ類土器	 Ⅷａ類	【Ⅷ類土器】 頸部以下に，平行沈線や単沈線により文様を描くもの。線の始点・終点をやや深く刺突し，入組状に施す傾向がみられる。文様を描く線は２～３㎜幅の細沈線から７～８㎜幅の凹線まで様々である。器形は，胴部が張り出し丸みを帯びるプロポーションのものがⅥ類と比較して多い。平坦口縁と波状口縁のものとがあり，口唇部の一部や口縁部上位に把手などの装飾を施すものも出土した。口縁部の形態は直口，内湾，外反とバリエーションが非常に豊かで，頸部で絞まり外反するものの比率が高い。Ⅷ類は指宿式およびそれと併行する時期の土器と考えられる。口縁部の形態と口縁部文様帯の特徴から以下のように細分した。 Ⅷａ類…口縁部上位に，胴部とは別の文様帯を有するもの。口縁部を肥厚させたものが多い。多くは口唇部にも文様を施す。文様を描く沈線が細い傾向が顕著である。口縁部外面の文様は，横位の平行沈線，巻貝などによる連続刺突を巡らせるものが主である。胴部には斜位の平行沈線を基調にした大胆な幾何学文を描くものが多い。胴部文様帯の幅は広く，胴部下位に及ぶものもみられる。縁帯文系の土器の影響を受けていると考えられ，中原遺跡（志布志市）で報告されたⅤ－ａ，ｂ類に該当する一群であると考えられる。

Ⅷ類土器		Ⅷb類…口縁部が外反するものの比率が高い。波頂部内面に文様を描くものや，波頂部口唇部に数個の刻目を施すものが多く出土している。口縁端部を丸くおさめるものが多く，口縁部直下を無文とし，頸部の胴部文様帯との境目に１条ないし２条の横位の沈線を巡らせて区画し，その直下を文様帯とするパターンのものが多く出土する。胴部の文様は平行沈線文を主体とする。南薩地域の同じ時期の遺跡で出土するような，長靴文や矩形の文様パターンを横位に展開させるものも一定数出土するが，胴部に斜位の大胆な沈線を基調とした文様を描き，線の連結部分を鉤手状に入り組ませるもの（Ⅷa類とも文様パターン が似る。ただし口縁部の形態的な特徴はⅧb類である。中原遺跡Ｖ－ｃ類に該当する一群）が特に多い。平行沈線が曖昧に描かれた，規則性の弱い崩れた文様パターンのものも確認できる。 Ⅷc類… Ⅷ類土器の文様の特徴をもつもののうち，口唇部に沈線を１条巡らせるもの。口縁端部の角は丸みを帯び不明瞭である。口縁部の形態はⅧb類に類似し，Ⅷａ類のようには肥厚させない。胴部は，有文のものと無文のものとが出土する。少数ではあるが，Ⅵ類土器の文様の特徴をもつものがある。
Ⅸ類土器		【Ⅸ類土器】 口縁部内面の上位，あるいは平坦面を作った口唇部に，平行沈線文，貝殻や篦状工具による連続刺突文，貝殻腹縁刺突文などの組み合わせによる文様帯を形成する。Ⅷ類土器と比較すると文様のバリエーションが少ない。上面施文タイプ。平坦口縁と波状口縁とがある。胴部は無文が主流で，内外面に粗い貝殻条痕を施すものが多い。一部は口縁部外面にも文様を有する。口縁端部の形態は先細るものと，丸みを帯びるもの，面取りにより角張るものとが出土する。口縁端部にまで口唇部の文様が及ぶものもみられる。口縁部の形態により以下のように細分した。松山式に該当する一群である。 Ⅸa類…口縁部内面に文様帯を有するもの。あるいは口唇部に平坦面を形成し文様帯とするもののなかで，平坦面が内傾するもの。 Ⅸb類…口縁部内面に文様帯を有するものと口唇部に平坦面を形成し文様帯とするもののなかで，平坦面が外傾し断面が正三角形状となるもの。
Ⅹ類土器		【Ⅹ類土器】 口縁部と頸部との境目に緩い逆「く」の字状の段を形成する。段の直上あるいは上下に貝殻腹縁刺突文を巡らせるもの。丸尾式に該当すると考えられる。
Ⅺ類土器		【Ⅺ類土器】 分類が難しかったもののうち，形態・文様・器面の調整・胎土などの特徴から縄文時代後期前半に該当すると判断されるもの。
Ⅻ類土器		【Ⅻ類土器】 尖底に近い接地面の狭い底部から内湾気味に開く体上部で内側に屈曲し，外反して開く頸部に至り，肥厚する口縁部をもつ。口縁肥厚部あるいは体上部の屈曲部に凹線を巡らすものもある。器壁が厚く，ミガキによる器面調整である。色調は栗色に近い極暗赤褐色で，深鉢形土器を主体とする。縄文時代後期後半に位置づけられる中岳Ⅱ式土器に該当する。

XIII類土器	 XIIIa類 XIIIb類	【XIII類土器】 深鉢形土器は，上げ底あるいは低く立ち上がる平底の底部から内湾気味に立ち上がる体上部で内側に屈曲し，外反して開く頸部に至り，口縁部文様帯をもつものもある。口縁部文様帯はやや幅広くて厚みがなく沈線を巡らすもの（XIIIa類）と，口縁部文様帯がないもの（XIIIb類）がある。 浅鉢形土器は，口縁部のみを内側に屈曲させ沈線を巡らすもの（XIIIa類）と，体上部で内側に屈曲し，さらに外反して長く延びる頸部をもち，口縁端部内面に粘土を重ねて成形するもの（XIIIb類）がある。深鉢および浅鉢ともミガキによる器面調整である。縄文時代後期末～晩期初頭に位置づけられる上加世田式土器や入佐式土器に該当する。
XIV類土器		【XIV類土器】 深鉢形土器は，台形状の張り出しのある平底の底部から直線的に開く体部上位で内側に屈曲し，外反して口縁部に至る。屈曲部に短いものの肩部をもつ。口縁部に文様帯や肥厚部はなく，器面調整は条痕やナデによるものである。口唇部や頸部下位に突起をもつものもある。 浅鉢形土器は，丸く内湾する胴部や肩部をもち，口縁部は外側に屈曲して短く立ち上がる。口縁部内面は凹線状となる。器面調整はミガキによるものである。縄文時代晩期に位置づけられる黒川式土器に該当する。
XV類土器		【XV類土器】 深鉢形土器は，張り出しのある底部から外傾気味に立ち上がる体部上位で逆「く」字状に屈曲し，直行する口縁部をもつ。口縁端部は外面が肥厚するものや無刻目の突帯を巡らすものがある。また，口縁部にリボン状あるいは鰭状の突起をもつものもある。内外面とも条痕あるいはナデによる器面調整である。外面の器面調整や口縁部形態に深鉢と共通点の多い中華鍋形をした土器もこの類で紹介することとする。内面はミガキ様のナデによる器面調整で平滑なものが多く，外面に組織痕をもつものもある。 浅鉢形土器は，沈線を巡らす底部から外反しながら開く体部上位で内側に屈曲し，内湾気味に立ち上がる口縁部をもつものがある。口縁端部は削り出しの手法により玉縁状となる。また，茶家形もしくは算盤玉形をした精製鉢など多彩な器形がみられる。これらの浅鉢類には三叉文が施されている。縄文時代晩期終末～弥生時代初頭の干河原段階に該当する。
XVI類土器		【XVI類土器】 時期的には弥生時代に相当するものである。一条あるいは屈曲部をもつ二条の刻目突帯を巡らす甕形土器がある。 浅鉢形土器は，円盤状の底部から直線的に開き，体部上位で内側に屈曲し，口縁端部のみを外側に折り返したものがみられる。 また，壺形土器とともに，全形は不明であるが縄文時代から除外した多彩な器形の土器もこの類で扱うこととする。

以上，分類した土器の内容を説明してきたように，本報告書で紹介する時期は，縄文時代前期～弥生時代初頭に位置づけられる。各類の土器を以下の様に大きく３時期に区分し，章ごとに紹介したい。

縄文時代前期～中期（第Ⅴ章）　：　Ⅰ類～Ⅲ類
縄文時代後期前半　（第Ⅵ章）　：　Ⅳ類～Ⅺ類
縄文時代後期後半～弥生時代初頭（第Ⅶ章）：　Ⅻ類～XVI類

第３節　石材および石器の分類

本遺跡出土の石器及び石製品に使用される石材については，肉眼観察により，以下のように分類した。また，縄文時代前期から弥生時代初頭の石器の器種についても，以下のように分類した。

【小牧遺跡の石材分類】

石材	分類	特徴
黒曜石	A類	黒色～飴色の基質で，１～２㎜大の淡い灰色のガラス質の粒子，白色粒子を中心とした不純物を非常に多く含む。光沢があり，透光性はやや高い。三船産と考えられる。
	B類	黒色の基質でわずかに不純物を含む。光沢はにぶく，透光性は低いかほぼない。上牛鼻，平木場産と考えられる。
	C類	飴色の基質で，白色粒子や角閃石などの不純物をわずかに含む。 A類・B類に比べ，光沢と透明感があり，透光性は高い。桑ノ木津留，日東，腰岳と考えられる。
	D類	青みがかったグレーの基質で不純物は少ない。光沢はにぶく，透光性はほぼない。針尾などの西北九州系の石材と考えられる。
	E類	薄いグレーの基質で不純物は少ない。光沢はにぶく，透光性は低い。姫島産と考えられる。
頁岩	A類	粒子が細かく，珪質化しておりにぶい光沢がある。基質は灰色とオリーブ褐色のものがみられる。珪質頁岩。
	B類	粒子が細かく，均質である。不純物が少ない。鉄分が付着しているものも多数確認できる。この素材の剥片が多く出土しており，一部に加工・使用の痕跡がみられる。石鏃，石錐，使用痕剥片などに利用される。粘板岩質のものもみられる。
	C類	節理が発達した硬質なもの。
安山岩	A類	不純物をわずかに含み，基質はざらついた質感で黒灰色～明灰色を呈するもの。
	B類	石英・長石を主体とした砂粒状の斑晶の混入が確認できる。多孔質のものと緻密なものがみられる。礫石器類に利用される。
	C類	A・B類と比較すると淡い灰色の色調である。素材剥片が多く出土しており，一部に加工・使用の痕跡がみられるが使用法は不明である。輝石安山岩。
砂岩		粒子が細かく不純物が少ないものと，礫混じりのものとがみられ，比較的軟質である。砥石・礫石器類に利用される。
凝灰岩		クリーム色・ピンク色を呈するものが多い。異質岩片を含む粒子の大きいものもみられる。軟質である。
ホルンフェルス		粒子が比較的細かく，やや緻密で硬質。橙色の微粒を含むものと，節理が発達したものとがみられる。泥岩～砂岩質のものがある。
花崗岩		石英・長石・雲母の細粒結晶の集合体。国見山系のもの(結晶が大きく金色の雲母を多量に含む)と高隈山系のもの(結晶が小さく黒雲母を含む)とがみられる。礫石器類に利用される。
蛇紋岩		緑がかった黒色を呈し，非常に硬質。磨製石斧として用いられる。
チャート		油脂光沢に富む。灰・緑・白・茶・黒・赤など色調は様々である。剥片石器に利用される。
玉髄		基質が珪質分に富み，白色・灰色・黄褐色・赤色のマーブル状の色調を呈するもの。剥片石器に使用される。
鉄石英		玉髄のなかで，鮮やかな赤色を呈するもの。剥片石器に利用される。
石英		乳白色を呈する。円礫化したものが多いが，硬質なためわずかに角が残る。本報告では水晶化した透明なものも含む。
軽石		白色の多孔質で，非常に軽い。姶良カルデラの噴出物と考えられる。

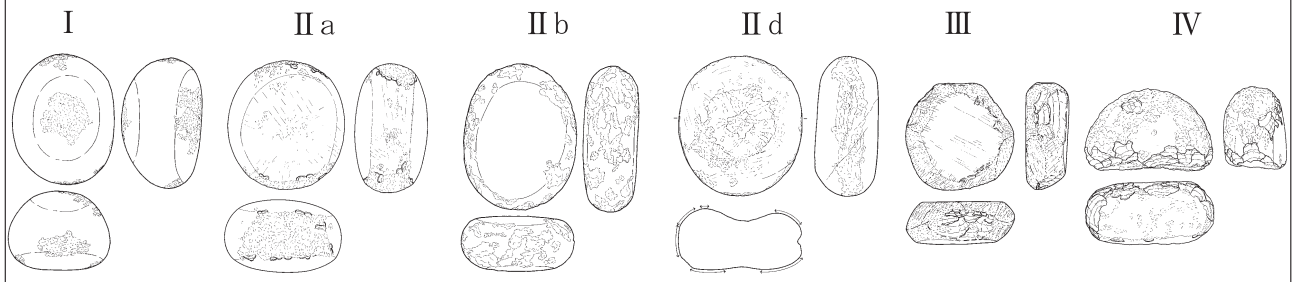
【石器の器種分類】

	器種	分類	概要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施した小型から中型の三角形・五角形状の石器群を石鏃とした。
		Ⅰ	基部と縁辺部の辺の長さが1.2倍以内の正三角形状を呈するもの。
		Ⅱ	基部と縁辺部の辺の長さが1.2倍以上のやや身が長い二等辺三角形状を呈するもの。
		Ⅲ	基部の抉りが深く，円脚もしくは凹基のもの。側縁が鋸歯状のものも含む。
		Ⅳ	側縁に頂点（角）をもつタイプでロケット状の五角形に近いもの。側縁がわずかに内湾するものを含む。
		Ⅴ	以上のいずれにも含まれないものを一括した。未製品や欠損品などを含む。
	石錐		素材となる剥片の一端に表裏，左右方向から丁寧な剥離を加え，小さく突起する錐部が作り出しているものを石錐とした。
	石匙		素材となる剥片の上端につまみ部を成形し，剥片の下縁部や側縁の両面に剥離による調整を加え，刃部を作り出しているものを石匙とした。
		Ⅰ	縦型で刃部が側縁にあるもの。
		Ⅱ	横型で刃部が下縁にあるもの。
	スクレイパー		原石や石核などから剥離した剥片の形状に合わせて，剥片の縁辺部に両面または片面から微細な剥離による調整を加え，刃部を作り出したものをスクレイパーとした。
	二次加工剥片		素材剥片に対し二次加工とみられる加工痕のある剥片を二次加工剥片とした。二次加工が明瞭でない剥片も含む。
	使用痕剥片		素材となる剥片に対し，微細な剥離など刃こぼれ状の使用痕がある剥片を使用痕剥片とした。

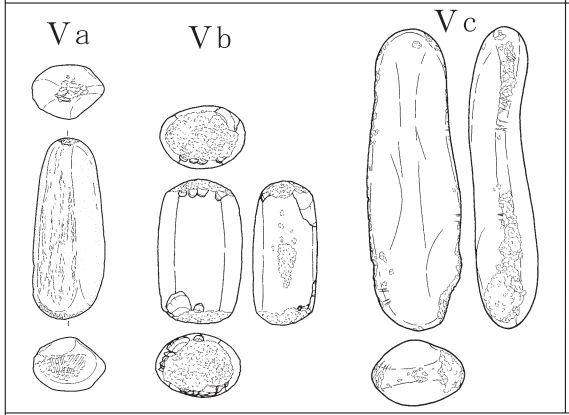
	器種	分類	概要
剥片石器	石核・原石		礫および分割礫を素材とし，小型の剥片が剥出されたと考えられるものを石核とし，剥片が剥出されていない自然礫の状態のものを原石とした。
	磨製石斧	Ⅰ	基部が細く断面が楕円形で厚みがあり，平面形が撥形を呈し刃部付近が最大幅となる，いわゆる乳房状石斧を含むもの。
		Ⅱ	完形で15cm以上の大型で伐採具の可能性があり，側面に研磨が施されている，いわゆる定角式磨製石斧を含むもの。
		Ⅲ	Ⅱ類より小さく，完形で15cm以下の中型のもの。
		Ⅳ	Ⅲ類より薄く厚さが３cm以下の中型もしくは小型のもの。
		Ⅴ	Ⅳ類よりも小型で，加工具の可能性のある扁平や柱状の石鑿状の磨製石斧を含むもの。
		Ⅵ	磨製石斧から剥離し，破片状のもの。また，楔や敲石への転用可能性があるが，欠損品としたもの。
	打製石斧 （扁平打製石斧）	Ⅰ	基部の幅と刃部の幅に大きな差がなく，長方形に近い形状のものでいわゆる撥形や短冊形のもの。刃部が研磨によって整形された局部磨製石斧の可能性のあるものも含めている。
		Ⅱa	基部の幅と刃部の幅がほぼ同じか刃部がやや広く，基部から体部にかけての両側縁がわずかに抉れるもの。
		Ⅱb	基部の幅と刃部の幅がほぼ同じか刃部がやや広く，基部から体部にかけての両側縁が深く抉れるもの。いわゆる有肩石斧と呼ばれるもの。
		Ⅲ	幅の狭い基部に対し刃部の幅が広く，形状がいわゆるラケット形や杓文字状となるもの。
		Ⅳ	Ⅰ～Ⅲ類の基部や刃部片，不明な欠損品，他器種に転用されたと考えられるものや打製石斧の未製品のもの。
	礫器		基本的に扁平で角の取れた礫の一端に剥離調整を行い，両面もしくは片辺の刃部を成形しているものを礫器とした。
礫石器	磨・敲石	Ⅰ	平面形や断面形が不定型で河原にある自然礫に近い形状で，全面もしくは部分的に磨面や敲打痕をもつもの。
		Ⅱa	基本的に表裏面に擦面がある，いわゆる石鹸型。平面形が円形に近く，縁辺に敲打痕がみられるもの。
		Ⅱb	基本的に表裏面に擦面がある，いわゆる石鹸型。平面形が少し縦長で楕円形に近く，縁辺に敲打痕がみられるもの。
		Ⅱc	基本的に表と裏に擦面が二面あり，平面形が方形や長方形に近いもの。擦り面は確認できるが敲打痕は明瞭でないもの。
		Ⅱd	形状はⅡa・Ⅱb類を基本とし，正面や裏面または両面に凹みが確認できるもの。
		Ⅲ	形状が多角的になっているものやなりつつあるもので，多面的に摩耗面のあるもの。
		Ⅳ	磨・敲石を割って平面形がおおよそ半円形（カマボコ状）に成形し，割れ面を下面にしてスタンプを押すかのように敲打面として使用したもの。
		Ⅴa	ハンマータイプで敲打痕が上または下もしくは両方にあり，上下の幅の違うもの。
		Ⅴb	ハンマータイプで敲打痕が上下の両方あり，上下の幅がおおよそ同じくらいのもの。
		Ⅴc	ハンマータイプで敲打痕が主に側面にあるもの。
		Ⅵ	欠損品で分類を断定するものが難しいもの。
	石皿	Ⅰa	平面形が楕円形で，図上の平面の上部から下部にかけて摩耗面である凹みや平滑面があり，一方向に掻き出し口をもつもの。
		Ⅰb	平面形が楕円形で，図上の上部から下部にかけて摩耗面である凹みや平滑面があり，下部と左の２方向に掻き出し口をもつもの。
		Ⅱ	平面形が楕円形で，図上の中央上部から下部の全体にかけて摩耗面である凹みや平滑面があるが，掻き出し口が一定の幅をもって整形されず不明瞭なもの。
		Ⅲ	平面形が方形で，図上の中央のやや上部から下部にかけて摩耗面である凹みや平滑面があるもの。
		Ⅳ	平面形は様々な形状のものがある。板状のものが多く，厚さや裏面の形状によらず摩耗面がほぼ平坦なものでいわゆる台石。
		Ⅴ	縦長の楕円礫で部分的に擦痕がみられるもの。台石の可能性があるが，摩耗面の使用痕は顕著でない。
		Ⅵ	石皿のⅠ～Ⅴ類の欠損品または小型のもの。
	砥石		素材となる礫の形状が磨・敲石と類似するものもあるが，平坦な面をもつものやU字状の凹面等から砥石とした。
	擦切石器		扁平な剥片の上面と左右両側辺を剥離により整形し，剥片の一辺あるいは二辺を研磨によって刃部として仕上げたもの擦切石器とした。
その他	石錘	Ⅰa	扁平な円礫・亜円礫の長軸の両端を打ち欠いて製作されたもの。
		Ⅰb	扁平な方形礫の長軸の両端を打ち欠いて製作されたもの。
		Ⅰc	扁平で角のとれた三角形状の礫の長軸の両端を打ち欠いて製作されたもの。
		Ⅰd	扁平な楕円礫・不定形な礫の両端を打ち欠いて製作されたもの。
		Ⅱ	扁平でおおよそ方形を呈する礫を素材とし，紐を十字に掛けて結束したと考えられ，長軸，短軸の両端をあわせ３～４か所を打ち欠いて製作したもの。
	石製品		玦状耳飾りや大珠などの装飾品や用途不明なものも含めて石製品とした。
	軽石加工品		軽石を素材とした，人為的な穿孔や溝状の凹み，磨面があるものを軽石加工品とした。

＊表中の石器図面の縮尺は任意である。

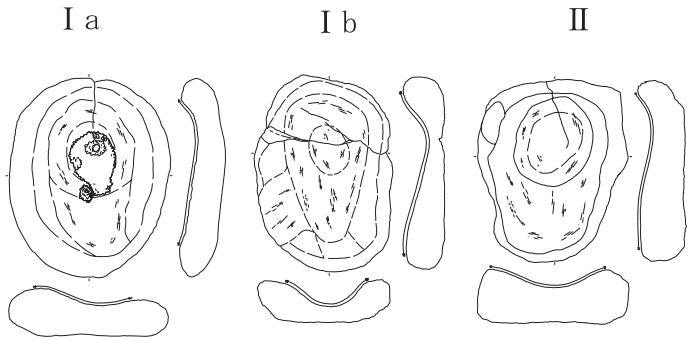
磨・敲石



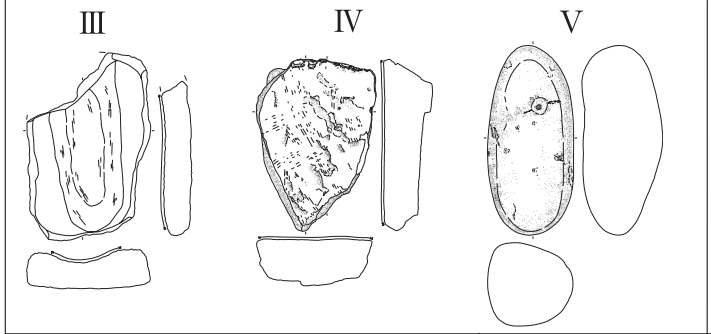
磨・敲石



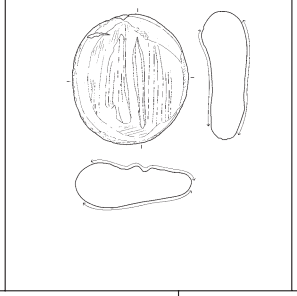
石皿



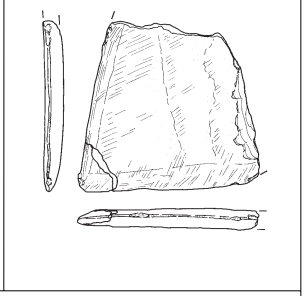
石皿



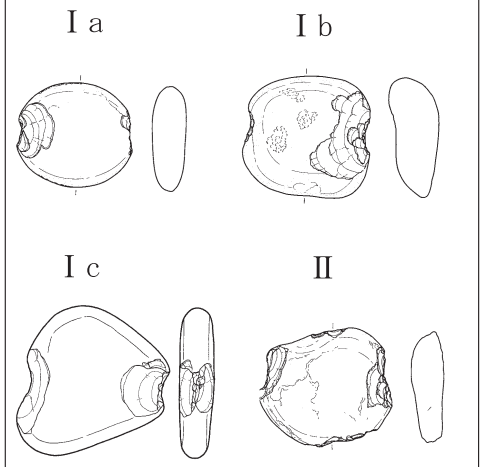
砥石



擦切石器

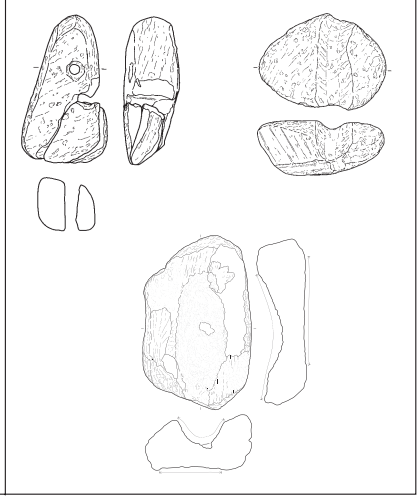


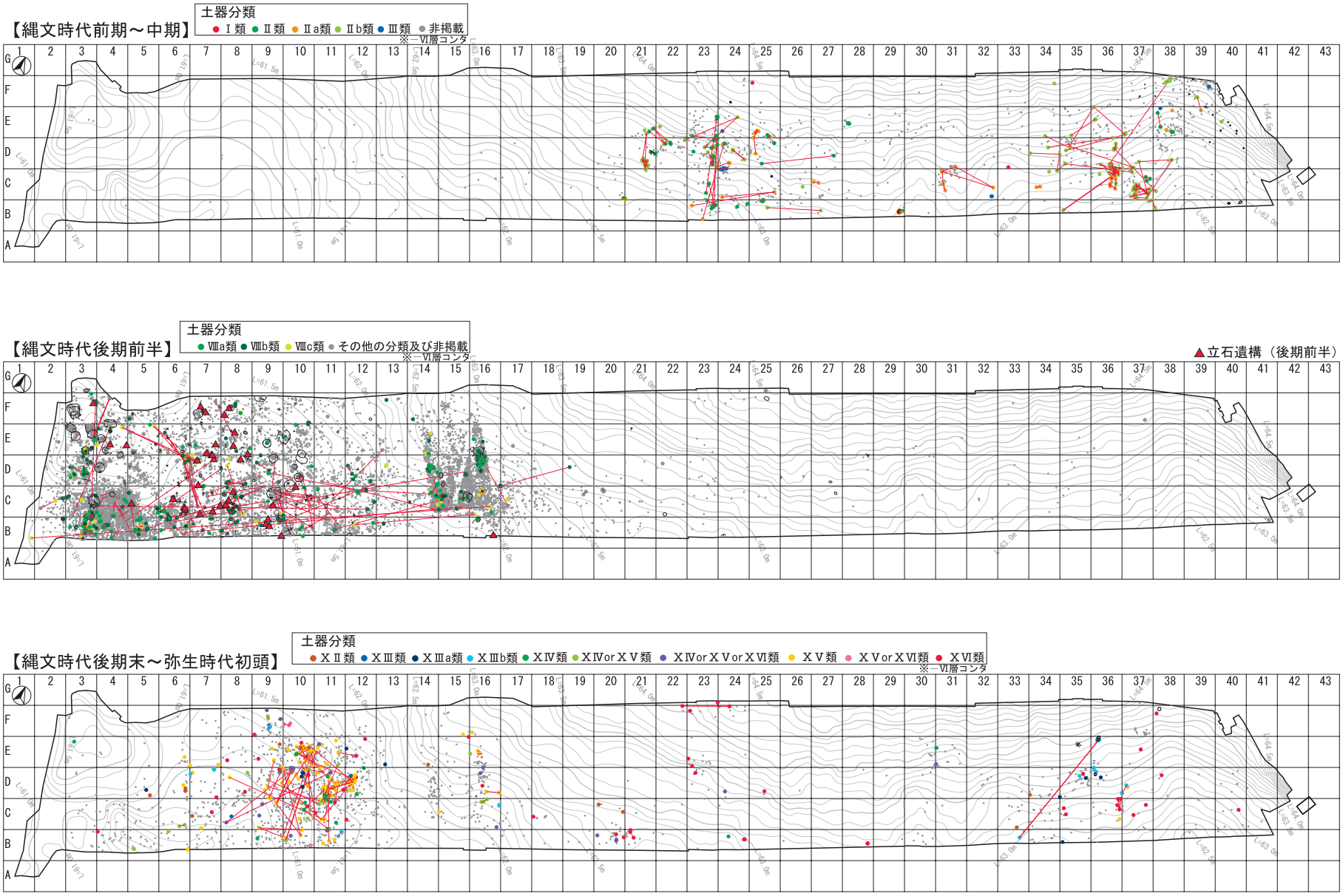
石錘



石製品

軽石加工品





第14図　各時期の遺構および出土土器の分布状況

第Ⅴ章　縄文時代前期～中期の調査

縄文時代前期および中期の遺物は調査区の全域にみられるものの，19区より西側での出土点数は極端に少ない上に，本報告書に図化できる状態の土器はなかった。この時期の生活区域は20区より東側にあり，第15図に示した様に大きく23区周辺と37区周辺に分かれ，その間は遺物点数は少ないものの，完形に近い土器を伴う土坑がある。区域によっては層が不明瞭なところがあり，遺構によっては他時期のものが含まれている可能性もある。この時期の遺構は土坑６基，集石４基，ピット11基が検出されているが，時期を判断できる遺物がないものもあり，中には新しい時期の遺構が含まれていることも否めない。土器については，確認できた総数824点18,850ｇの内75点を掲載した。なお，石器については20区から東側で出土したもので，明らかに晩期に属するもの以外は前期および中期に使用された可能性がある。特に，近くの細山田段遺跡で深浦式土器に伴って多く出土した玉髄系や鉄石英を素材とする石鏃や石匙などの剥片石器については，より可能性が高いと考えられる。

第１節　遺構

（１）土坑（第16～18図）

土坑１号（第16図）

検出状況：SK１は，Ｆ-24区のⅣb層で検出された。長軸は0.64m，短軸0.55m，深さ17㎝，推定面積は0.26㎡を測る。楕円率0.86の円形である。掘り込みの断面は深めの皿状である。

分類：タイプⅢ

埋土：埋土は，暗褐色土である。やや砂質で池田パミスや炭化物を含み，基本層はⅣb層である。

出土遺物：出土なし。

土坑２号（第16図）

検出状況：SK２は，Ｃ-25区のⅣb層で検出された。長軸は0.69m，短軸0.46m，深さ42㎝，推定面積は0.27㎡を測る。楕円率0.67の楕円である。底面に一段低い部分がある。南側の掘り込みは斜めであるが，他は垂直に近い。

分類：タイプⅡ

埋土：埋土は，暗褐色土である。池田降下軽石，橙色パミスや極小の炭化物を含む。基本層はⅣb層である。

出土遺物：出土なし。

土坑３号（第17図）

検出状況：SK３はＢ-29区のⅣb層で，古墳時代のSK30に一部切られた状態で検出された。長軸は1.34m，短軸0.85m＋α，深さ23㎝，推定面積は0.94㎡を測る。楕円率0.63の楕円である。断面の形状は深めの皿状である。床面より15㎝浮いて土器が割れた状態で出土した。

分類：タイプⅡ

埋土：埋土は褐色のやや砂質で軟質である。池田降下軽石，橙色パミスや炭化物などをごくわずかに含む。基本層はⅣb層である。

出土遺物：１は接合作業により胴部中位から口縁部にかけて復元できたものである。ほぼ直線的な胴部から，口縁部がわずかに外反する。口径32㎝の波状口縁をもつ。出土した波頂部は３か所であるが，全部で４か所のなだらかな波頂部が想定される。外面全面と口縁部内面に文様を施し，口唇部に対して直角に貝殻腹縁を刺突することによって刻目を入れる。基本的には５条の貝殻肋を単位とする貝殻連点文により有軸の羽状の文様を施す。有軸となる縦位の貝殻連点文は頂部から若干ずれた位置で垂下している。接合した部分には８か所の縦軸がみられるが，間隔の割合では９か所の縦軸が想定される。奇数の縦軸で羽状にならない箇所があるのか，間隔が狭くても10か所の縦軸があるのか判断できない。５条の連点のうち中心が最も密であり，外側ほど連点は粗となることから，貝殻をロッキングしながら施文したことが分かる。

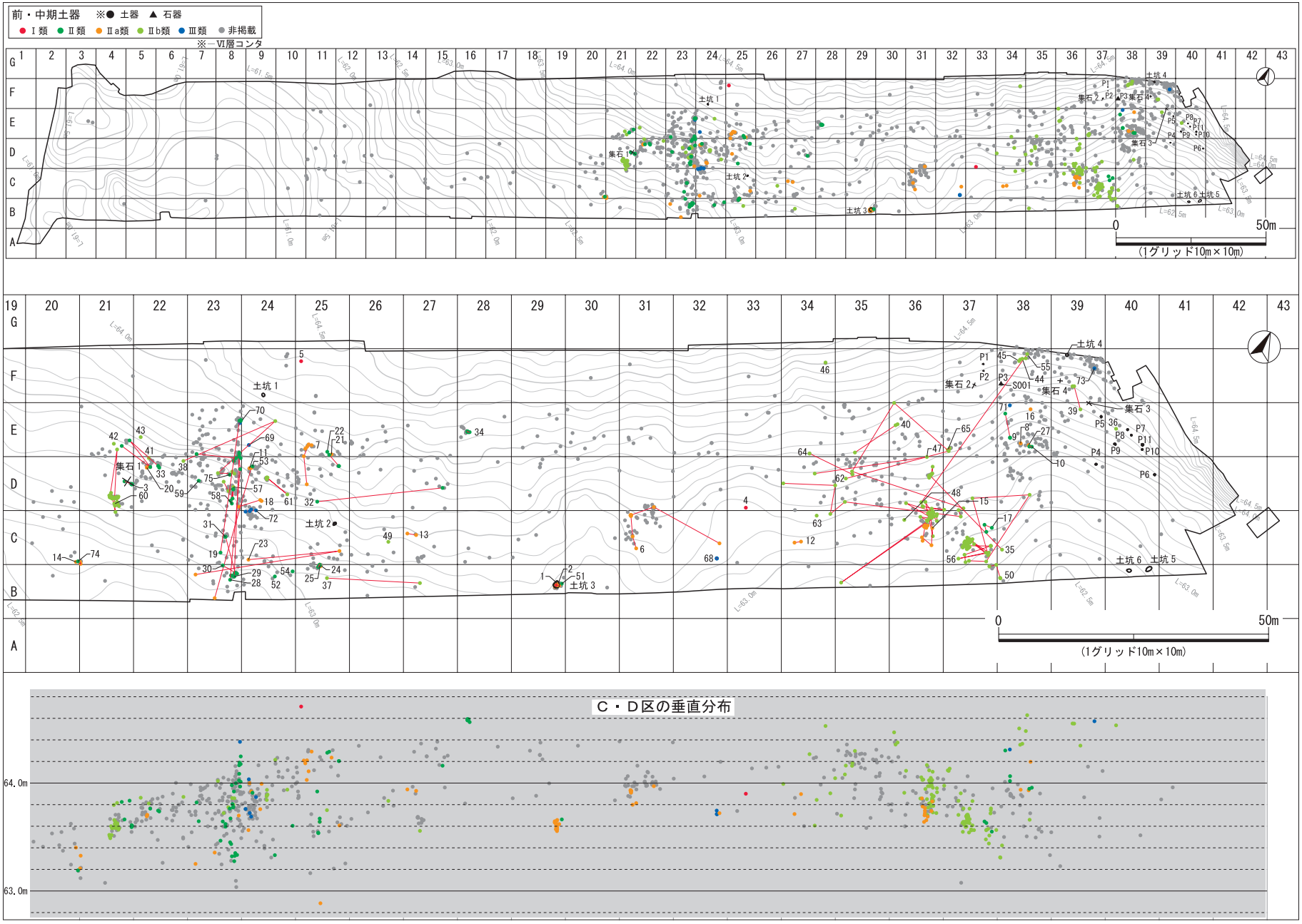
さらに貝殻連点文の両側を二枚貝の腹縁による刺突線文で区画している。貝殻腹縁を刺突する際，縦方向の場合は貝殻腹縁の外面が左側になっている。左下がりの斜線の場合は貝殻腹縁の外面が上に，右下がりの斜線の場合は貝殻腹縁の外面が下になるように刺突している。腹縁の肋が３単位あたり18㎜であることから，刺突と連点は同じ道具を使っていることが想定できる。

なお，内面の条痕は３単位あたり12㎜であることから，外面の文様に用いた施文具とは異なる可能性がある。外面の下地の器面調整は斜め方向の粗めのナデである。内面の器面調整は貝殻条痕であり，胴部から口縁部へ順に調整される。胴部内面は横方向に，口縁部内面は斜め方向の貝殻条痕である。外面文様の施文順序は，縦方向の貝殻連点文を施した後，斜位の貝殻連点文を施す。その後，貝殻連点文の両縁に貝殻刺突線文を施している。さらに，口縁部内外面に連点を巡らせた後，口唇部に貝殻腹縁による刺突を加え刻目としている。

２は１と接点はないが同一個体と考えられる。丸底の底部に近い部分であり，文様の空白部をおいてロッキング状の貝殻連点文が横方向に少なくとも２段巡る。貝殻連点文の上下縁に貝殻刺突線文はみられない。直線的な器形と貝殻連点文が主文様となることから，Ⅱa類の深浦式土器日木山段階に位置づけられる。

土坑４号（第18図）

検出状況：SK４はＦ-39区の表土層下のⅣb層で検出された。長軸は0.56m，短軸0.56m，深さ69㎝，推定面積は



第15図　縄文時代前期～中期土器出土分布図およびC・D区の垂直分布

0.22㎡を測る。楕円率1.00の円形である。ほぼ垂直に掘られ，床面は平坦である。

分類：タイプⅢ

埋土：埋土は，灰黄褐色で砂質である。基本層はⅣb層で下部ほど粘性がある。

出土遺物：遺物なし。

土坑の形状は幼児の墓坑とも考えられるが，短時間に埋め戻したような埋土の状況ではない。また，落とし穴にしては規模が小さい。トーテムポール状の柱が建てられていた可能性もあるが，用途は不明である。

土坑５号（第18図）

検出状況：SK５はＢ-40区のⅣc層で検出された。長軸は1.27m，短軸0.73m，深さ29㎝，推定面積は0.65㎡を測る。楕円率0.57の楕円である。ほぼ垂直に掘り込まれ，床面は平坦である。

分類：タイプⅡ

埋土：埋土は，暗褐色の砂質を基本とするが，３層に分かれレンズ状に堆積している。埋土の詳細については図中のとおりである。

出土遺物：出土なし。

比較的大きめの遺構であり，埋土がレンズ状に堆積していることから，開放的な施設だったことが想定されるが，用途は不明である。

土坑６号（第18図）

検出状況：SK６はＢ-40区のⅣc層上面で検出された。土坑５号の西側約３ｍの位置にある。長軸は0.88m，短軸0.59m，深さ35㎝，推定面積は0.38㎡を測る。楕円率0.67の楕円である。掘り込み面はやや垂直に近く，床面は深めの皿状である。掘方も土坑５号と類似している。

分類：タイプⅡ

埋土：埋土は暗褐色でやや硬質の砂質土である。池田軽石，橙色・黄色パミス，炭化物を含み，基本層はⅣa層である。

出土遺物：埋土に土器の小片を含んでいたが，時期を確定することはできなかった。

（２）集石（第19～21図）

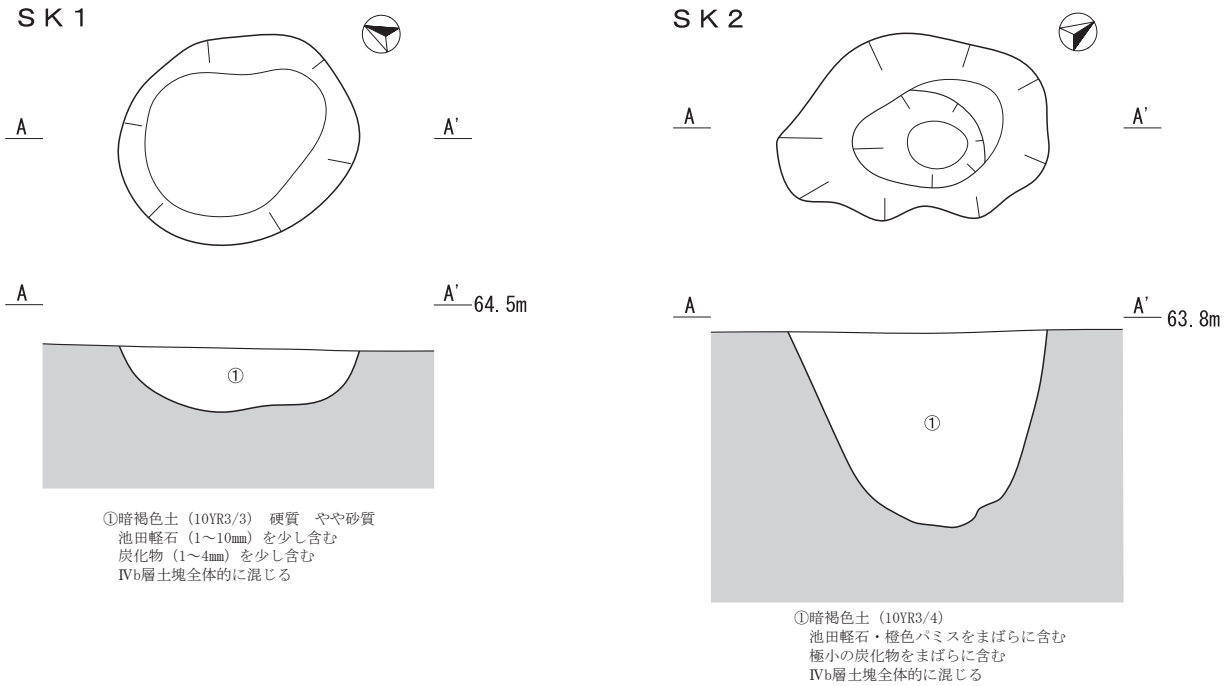
集石１号（第19図）

分　類：タイプⅠ

検出状況：SS１はＤ-21区のⅤ層で検出された。構成礫に明確なまとまりはなく，ほぼ水平に散乱した状態である。構成礫は４～８㎝大の砂岩20個，頁岩９個，安山岩７個，凝灰岩４個，軽石４個である。ほとんどが円・亜円礫で角礫はなく，被熱が確認できる礫も１個しかなく，一般的に調理施設とされる集石遺構とは異なる可能性もある。集石の外縁で土器が出土した。

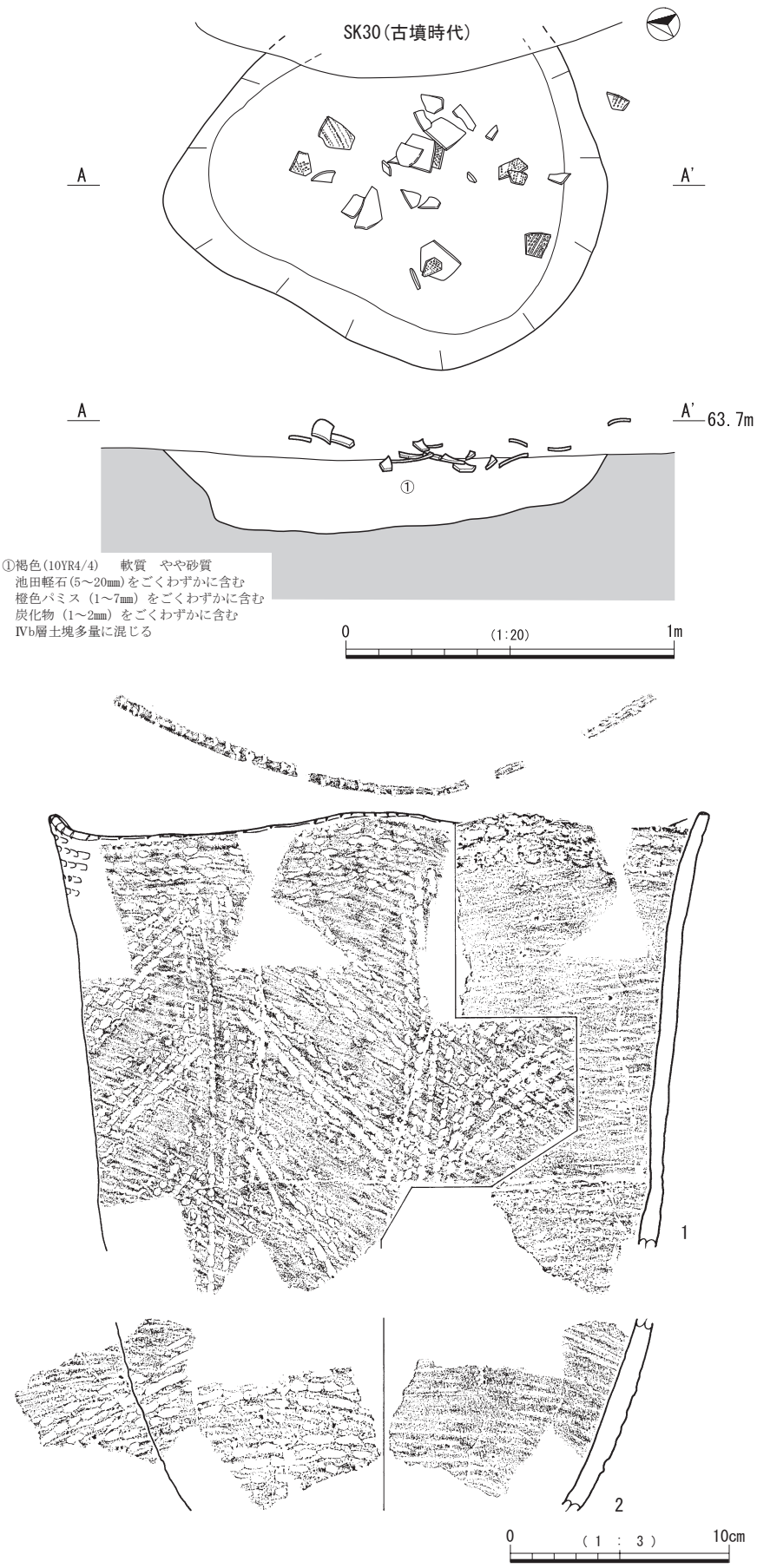
規　模：構成礫数50個，総重量は3,950ｇで，１個平均の重さが79ｇである。礫は，長軸2.22m，短軸1.74mの範囲に広がる。

出土遺物：３は丸底の底部上部付近から胴部中位付近にかけて外傾する破片である。胴部中央付近での直径は約28㎝であり，中型の土器である。外面には４条もしくは



第16図　土坑１・２号

ＳＫ３



第17図　土坑３号と出土遺物

５条の貝殻肋を単位とした貝殻連点文を施す。底部付近では横方向に巡らし，胴部全面には縦位と斜位にほとんど隙間なく施文している。施文具は貝殻肋３単位幅20mmである。内面はナデによる器面調整である。補修孔を想定したと考えられる回転による未貫通の孔がみられる。このような特徴からⅡａ類の深浦式土器日木山段階に位置づけられる。

集石２号（第20図）

分　類：タイプⅡ

検出状況：SS２はＦ-37区のⅥb層で検出された。まとまりはあるが，掘り込みはない。構成礫は５～９cm大の頁岩９個，砂岩３個，安山岩２個，凝灰岩１個，軽石１個で，被熱礫は９個である。

規　模：構成礫数16個，総重量は2,060ｇで１個平均の重さが128ｇであった。礫は，長軸0.51ｍ，短軸0.39ｍの範囲にまとまっている。

出土遺物：土器の胴部片が１点出土したが，図化できなかった。

集石３号（第20図）

分　類：タイプⅢ

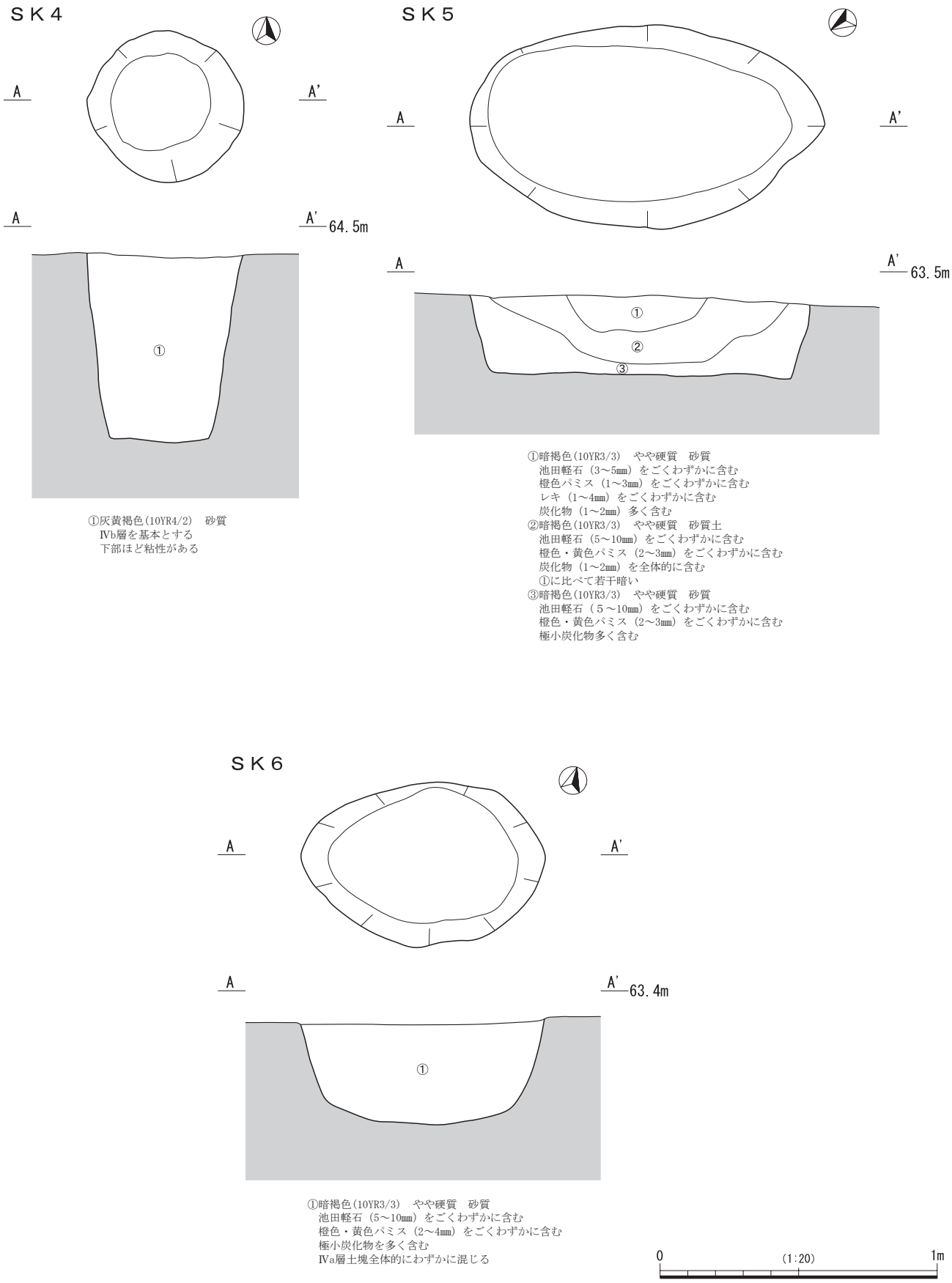
検出状況：SS３はＥ-39区のⅥb層を掘り下げている途中で検出された。掘り込みがあり，礫は床から10cmほど浮いた状態でほぼ水平に出土した。埋土はⅣb層相当層にアカホヤ火山灰のブロックが混入する砂質土である。炭化物等は含まれていない。構成礫は６～10cm大の安山岩15個，砂岩11個，凝灰岩11個，頁岩３個で，15個が被熱している。

規　模：構成礫数は42個で，総重量は5,321ｇで，１個平均の重さが127ｇであった。礫は，長軸1.03ｍ，短軸0.74ｍ＋αの範囲にまとまる。掘り込みは62cm×62cmで，検出面からの深さは８cmである。

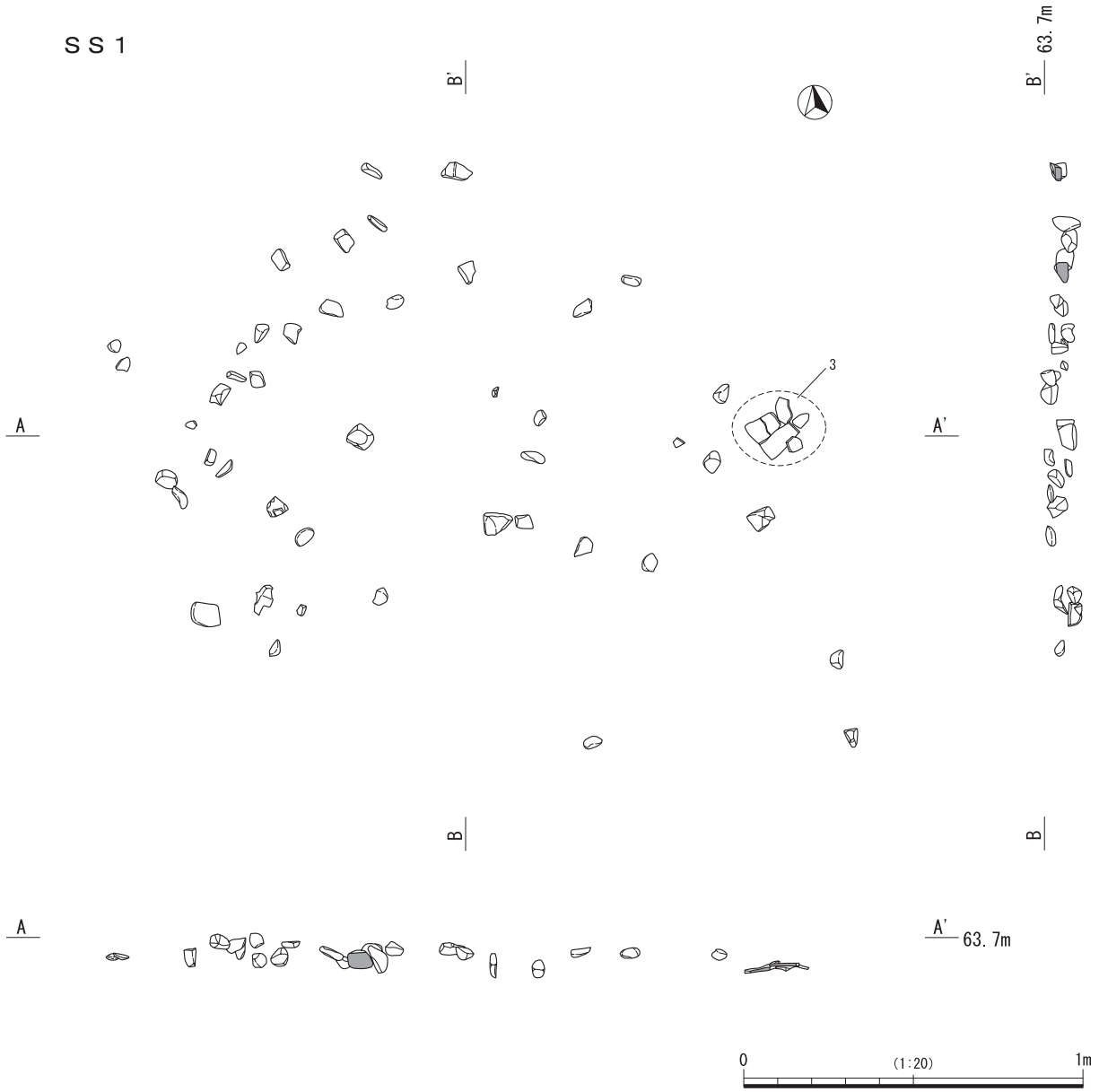
出土遺物：土器の小片が１点出土したが，図化していない。

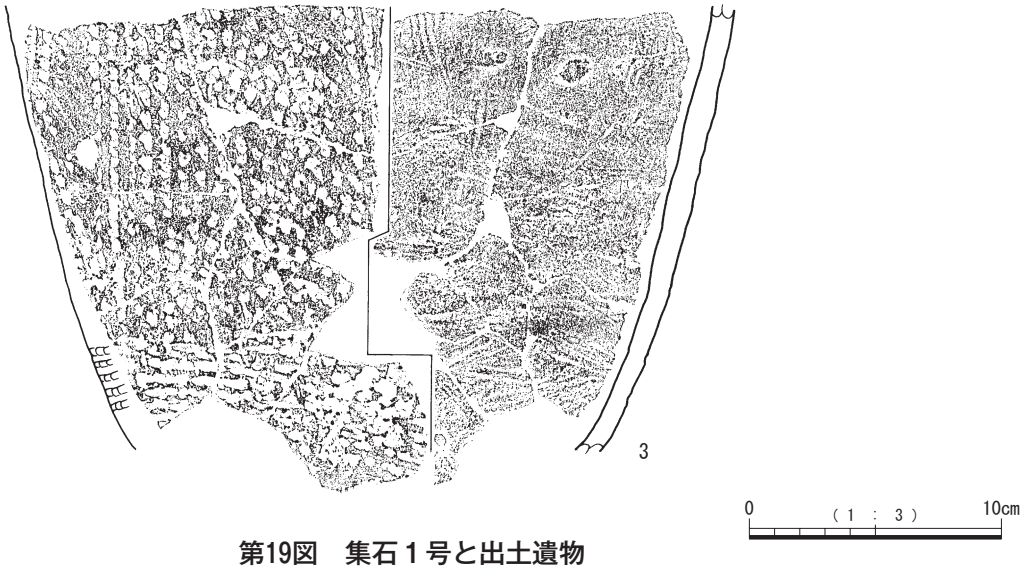
集石４号（第21図）

分　類：タイプⅢ

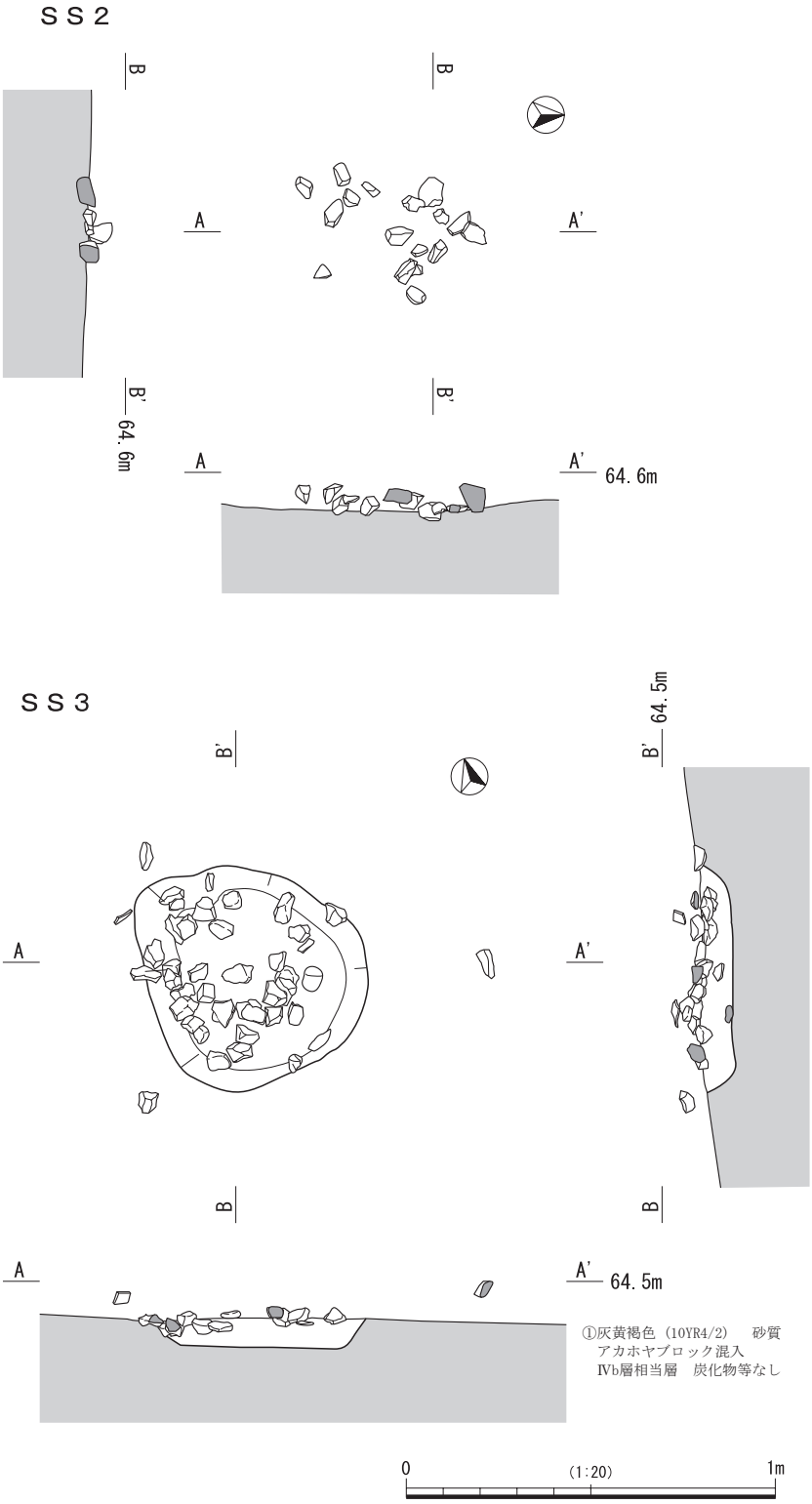

ＳＫ４
A
A'
A
A'
64.5m
①
①灰黄褐色(10YR4/2)　砂質
Ⅳb層を基本とする
下部ほど粘性がある
ＳＫ５
A
A'
A
A'
63.5m
①
②
③
①暗褐色(10YR3/3)　やや硬質　砂質
池田軽石（3～5mm）をごくわずかに含む
橙色パミス（1～3mm）をごくわずかに含む
レキ（1～4mm）をごくわずかに含む
炭化物（1～2mm）多く含む
②暗褐色(10YR3/3)　やや硬質　砂質土
池田軽石（5～10mm）をごくわずかに含む
橙色・黄色パミス（2～3mm）をごくわずかに含む
炭化物（1～2mm）を全体的に含む
①に比べて若干暗い
③暗褐色(10YR3/3)　やや硬質　砂質
池田軽石（５～10mm）をごくわずかに含む
橙色・黄色パミス（2～3mm）をごくわずかに含む
極小炭化物多く含む
ＳＫ６
A
A'
A
A'
63.4m
①
①暗褐色(10YR3/3)　やや硬質　砂質
池田軽石（5～10mm）をごくわずかに含む
橙色・黄色パミス（2～4mm）をごくわずかに含む
極小炭化物を多く含む
Ⅳa層土塊全体的にわずかに混じる
0
(1:20)
1m

第18図　土坑４～６号





第19図　集石１号と出土遺物



第20図　集石２・３号

検出状況：SS４はＦ-39区のⅥb層を掘り下げる途中で検出された。まとまりがあり，掘り込みがある。礫は床面より10cm浮いた位置で重なりながらまとまっている。発掘調査時には，礫を並べた可能性を想定している。埋土は池田軽石を少量含むⅣb層相当層の砂質土である。構成礫は６～10cm大の安山岩12個，砂岩43個，凝灰岩２個，頁岩３個，流紋岩１個である。39個が被熱している。

規　模：構成礫数61個，総重量12,052ｇで，１個平均の重さは約197ｇであった。礫は，長軸0.94m，短軸0.76mの範囲に広がる。掘り込みは73cm×70cmで，検出面からの深さは20cmである。

出土遺物：土器片２点と磨石状の円礫１点が出土したが，図化していない。

（3）ピット（第22・23図）

ピットは11基あり，37～41区で検出された。これらの区はⅡ層およびⅢ層が削平されており，表土の下でⅣ層が検出されている。時期を示す遺物の出土はないが，柱痕跡がはっきりしている。縄文時代前期に該当するのは，石器が出土したピット３号のみである。それ以外については，検出した地点や柱穴の規模が重なることから，古代の可能性もある。

ピット１号（第22図）

検出状況：Ｐ１はＦ-37区Ⅳb層で検出された。長軸0.26m，短軸0.25m＋α，深さ16cm，推定面積0.05㎡を測る。

埋土：灰黄褐色の砂質土を黒みを帯びた混土層がとりまく。

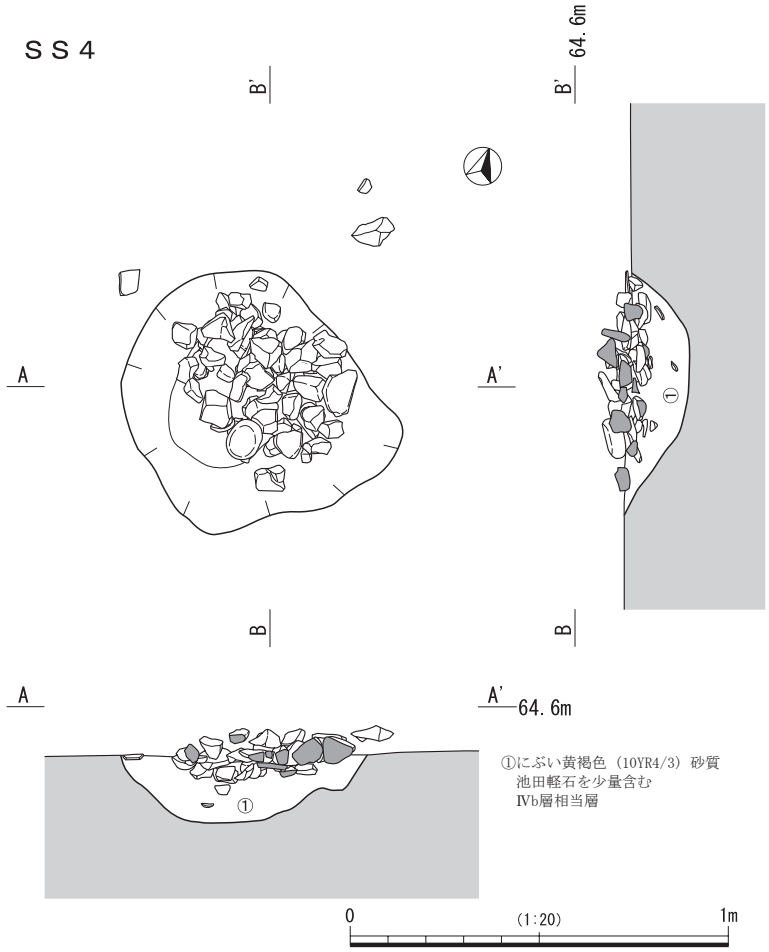
出土遺物：遺物はない。

ピット２号（第22図）

検出状況：Ｐ２はＦ-37区Ⅳb層で検出された。長軸0.19m，短軸0.17m＋α，深さ22cm，推定面積0.03㎡を測る。

第４表　縄文時代前期～中期遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	遺構名	文様･器面調整等		色調		胎土						取上番号	備考	写真図版
							外面	内面	外面	内面	石英長石	角閃石輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	その他			
17	1	深鉢	Ⅱa	B-29	Ⅳb	土坑３	粗いナデ	貝殻条痕	にぶい褐	褐	◎	○					46570他	－	1･3
	2	深鉢	Ⅱa	B-29	Ⅳb	土坑３	粗いナデ	貝殻条痕	にぶい褐	褐	◎	○					46579他	－	1･3
19	3	深鉢	Ⅱ	D-21	Ⅴ	集石１	丁寧なナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	◎	○					18774他	－	3



第21図　集石４号

埋土：灰黄褐色の砂質土とより硬い灰黄褐色土がある。
出土遺物：遺物はない。

ピット３号（第22図）

検出状況：Ｐ３はＦ-38区Ⅳc層で検出された。長軸0.30m，短軸0.26m，深さ７㎝，推定面積0.06㎡を測る。床面から７㎝上で，石皿片（発掘調査時の注記）と磨石が重なった状態で出土した。調査時点では，埋納の可能性も考えられている。

埋土：埋土は褐色でⅣb層相当の砂質土である。

出土遺物：S001は9.42㎝×9.85㎝，厚さ４㎝，重さ501.2ｇの磨石である。比較的薄めで，円形に近いが，河原の転石をそのまま利用している。多孔質の安山岩で，両面に磨面がわずかにみられる。周縁に明確な敲打痕はみられず，使用頻度は低かったと考えられる。石皿片については図化していない。

ピット４号（第22図）

検出状況：Ｐ４はＤ-39区Ⅳc層で検出された。長軸0.42m，短軸0.33m，深さ43㎝，推定面積0.11㎡を測る。

埋土：黒褐色の砂質土を灰黄褐色の砂質土がとりまいている。炭化物を含まない黒褐色の埋土は縄文時代前期から晩期にはみられないので，新しい時代の可能性がある。

出土遺物：遺物はない。

ピット５号（第22図）

検出状況：Ｐ５はＥ-39区Ⅳc層で検出された。長軸0.43m，短軸0.32m，深さ26㎝，推定面積0.10㎡を測る。二段掘りしている状況がみられる。

埋土：黒褐色の砂質土の外側に灰黄褐色の砂質土がある。炭化物を含まない黒褐色の埋土は新しい可能性もある。

出土遺物：遺物はない。

ピット６号（第22図）

検出状況：Ｐ６はＤ-40区Ⅳc層で検出された。長軸0.38m，短軸0.37m，深さ45㎝，推定面積0.11㎡を測る。

埋土：黒褐色の砂質土を灰黄褐色の砂質土がとりまいている。形状から柱穴の可能性もあり古代に該当する可能性も否定できない。

出土遺物：遺物はない。

ピット７号（第23図）

検出状況：Ｐ７はＥ-40区Ⅳc層で検出された。長軸0.35m，短軸0.33m，深さ45㎝，推定面積0.09㎡を測る。

埋土：黒褐色の砂質土を灰黄褐色の砂質土がとりまく。炭化物を含まない黒褐色の埋土は新しい可能性もある。

出土遺物：遺物はない。

ピット８号（第23図）

検出状況：Ｐ８はＥ-40区Ⅳc層で検出された。長軸0.33m，短軸0.30m，深さ29㎝，推定面積0.08㎡を測る。

埋土：黒褐色の砂質土を灰黄褐色の砂質土がとりまく。炭化物を含まない黒褐色の埋土は新しい可能性もある。

出土遺物：遺物はない。

ピット９号（第23図）

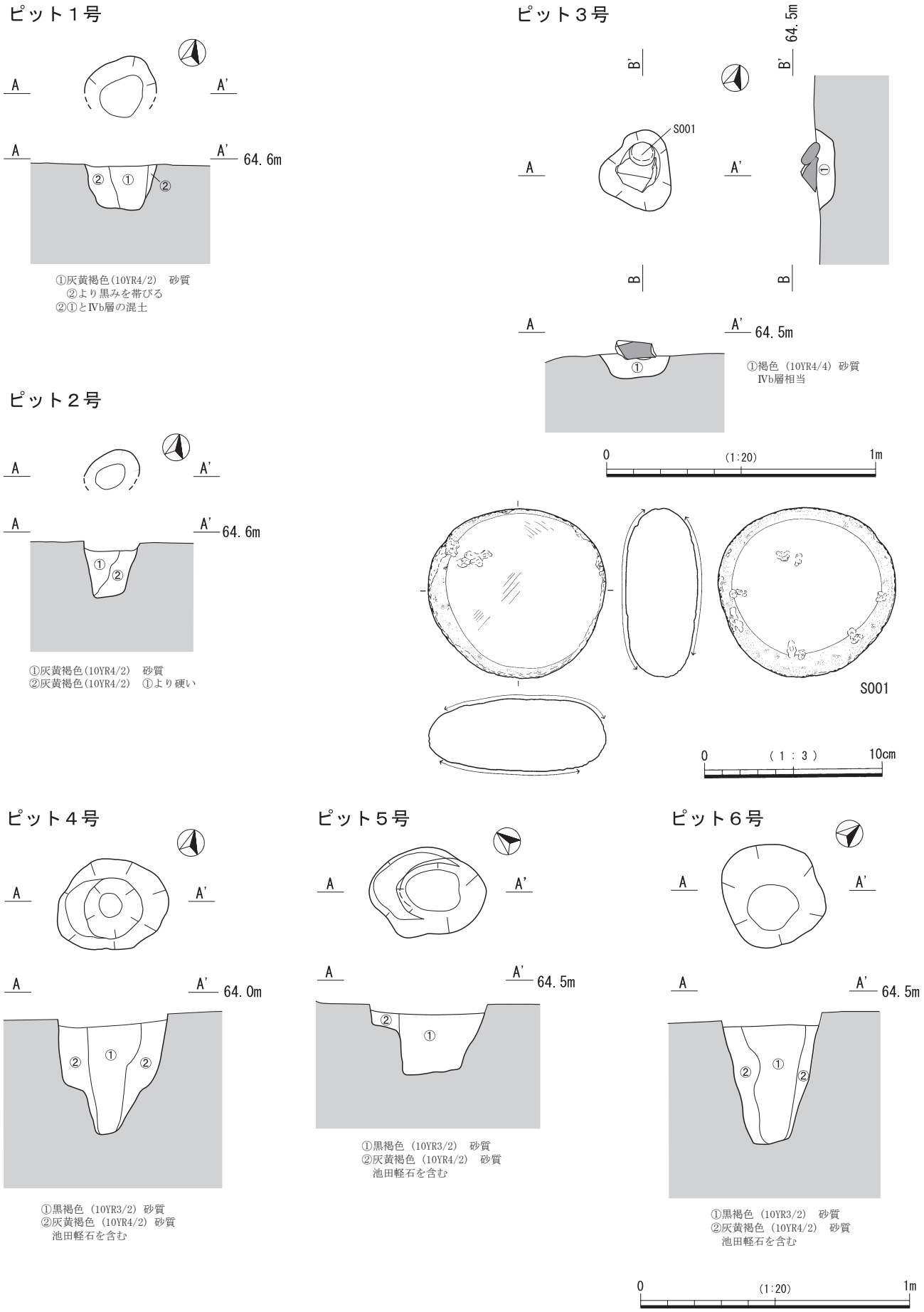
検出状況：Ｐ９はＥ-40区Ⅳc層で検出された。長軸0.46m，短軸0.33m，深さ23㎝，推定面積0.13㎡を測る。掘方は片側が深く，柱痕も斜めになっている。東側の建物を支えていたと考えられる。

埋土：黒褐色の砂質土を灰黄褐色の砂質土がとりまく。炭化物を含まない黒褐色の埋土は新しい可能性もある。

出土遺物：遺物はない。

第５表　縄文時代前期～中期遺構内出土石器観察表

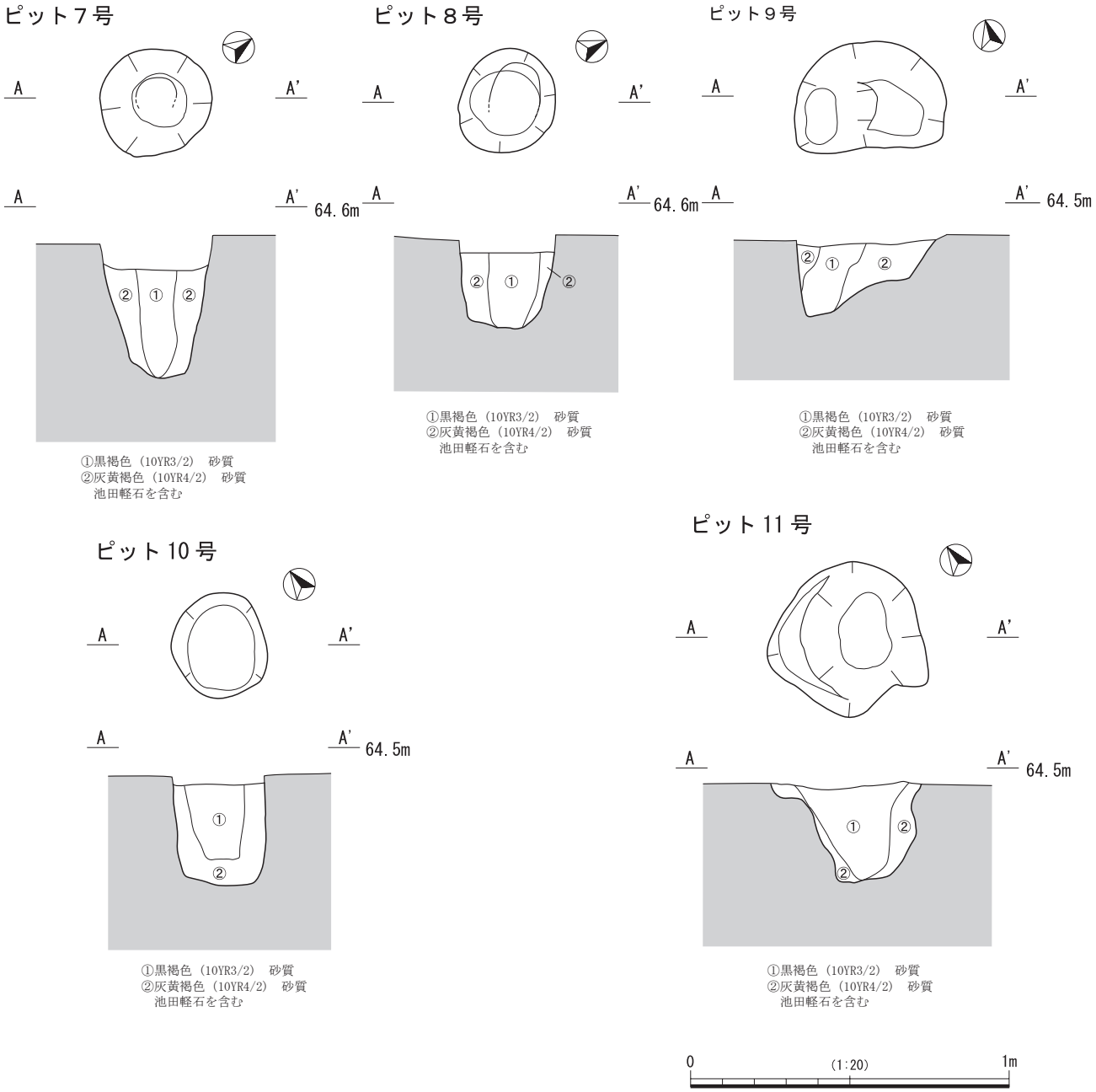
挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層	器種	分類	法量				石材	取上番号	備考	写真図版
							長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
22	S001	ピット3	F-38	Ⅳb層土	磨・敲石類	－	9.42	9.85	4.00	501.20	安山岩	102080	-	2·3



第22図　ピット１～６号とピット３号出土遺物

ピット10号（第23図）
検出状況：Ｐ10はＥ-40区Ⅳc層で検出された。長軸0.33ｍ，短軸0.29ｍ，深さ35㎝，推定面積0.07㎡を測る。
埋土：黒褐色の砂質土を，灰黄褐色の砂質土が底面を含めとりまく。
出土遺物：遺物はない。
ピット11号（第23図）
検出状況：Ｐ11はＥ-40区のⅣc層で検出された。長軸0.49ｍ，短軸0.48ｍ，深さ30㎝，推定面積0.20㎡を測る。掘方は片側が深く，柱痕も斜めになっている。西側の建物を支えていたと考えられる。
埋土：黒褐色の砂質土を灰黄褐色の砂質土がとりまく。
出土遺物：遺物はない。

前述したように，ピットの中には古代の可能性を否定できないものがある。本遺跡における古代の中心となる区域は南側のＢ・Ｃ-31～40区であるが，古代の土坑１号はＥ-37区で検出されており，古代のピット２・３もＤ-40区で検出されている。古代の土坑１号の埋土はⅣa層に該当すると報告されており，墨書土師器の出土がなければ時期判断が難しかったようである。ここで紹介したピットは，『小牧１（古代～近世編）』の整理作業段階で縄文時代前期に振り分けられたものであり，ピット３を除いて引用に際しては注意が必要である。



第23図　ピット７～11号

第６表　縄文時代前期～中期遺構観察表

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	埋土基本層	大きさ(cm) 長軸	大きさ(cm) 短軸	楕円率	深さ(cm)	面積(㎡)	旧遺構番号	備考	写真図版
16	土坑１号	F-24	Ⅳb層	Ⅳb層土	64	55	0.86	17	0.26	土坑162	－	1
	土坑２号	C-25	Ⅳb層	Ⅳb層土	69	46	0.67	42	0.27	土坑133	－	1
17	土坑３号	B-29	Ⅳb層	Ⅳb層土	134	85＋α	(0.63)	23	0.94	土坑174	深浦式土器	1･3
18	土坑４号	F-39	Ⅳb層	Ⅳb層土	56	56	1.00	69	0.22	土坑189	－	1
	土坑５号	B-40	Ⅳc層	暗褐色砂質土	127	73	0.57	29	0.65	土坑222	－	1
	土坑６号	B-40	Ⅳc層	Ⅳa層土	88	59	0.67	35	0.38	土坑224	－	1
19	集石１号	D-21	Ⅴ層上面	－	222	174	－	－	－	集石13	深浦式土器	2･3
20	集石２号	F-37	Ⅳb層	－	51	39	－	－	－	集石89	－	2
	集石３号	E-39	Ⅳb層	Ⅳb層土	103	74＋α	－	8	－	集石95	－	2
21	集石４号	F-39	Ⅳb層	Ⅳb層土	94	76	－	20	－	集石94	－	2
22	ピット１号	F-37	Ⅳb層	埋土注記の通り	26	25＋α	－	16	0.05	ピット842	－	2
	ピット２号	F-37	Ⅳb層	埋土注記の通り	19	17＋α	－	22	0.03	ピット844	－	－
	ピット３号	F-38	Ⅳc層	Ⅳb層土	30	26	－	7	0.06	ピット877	磨石	2･3
	ピット４号	D-39	Ⅳc層	埋土注記の通り	42	33	－	43	0.11	ピット864	－	－
	ピット５号	E-39	Ⅳc層	埋土注記の通り	43	32	－	26	0.10	ピット860	－	－
	ピット６号	D-40	Ⅳc層	埋土注記の通り	38	37	－	45	0.11	ピット863	－	－
23	ピット７号	E-40	Ⅳc層	埋土注記の通り	35	33	－	45	0.09	ピット861	－	－
	ピット８号	E-40	Ⅳc層	埋土注記の通り	33	30	－	29	0.08	ピット862	－	－
	ピット９号	E-40	Ⅳc層	埋土注記の通り	46	33	－	23	0.13	ピット865	－	－
	ピット10号	E-40	Ⅳc層	埋土注記の通り	33	29	－	35	0.07	ピット876	－	－
	ピット11号	E-40	Ⅳc層	埋土注記の通り	49	48	－	30	0.20	ピット873	－	－

第２節　遺物（土器）

小牧遺跡で出土した縄文時代前期から中期にかけての土器は，大きく３つに分類できる。第１分冊の第Ⅳ章に概略は紹介したが，Ⅰ類が曽畑式土器，Ⅱ類が深浦式土器，Ⅲ類は少数ではあるが，この時期の土器である。Ⅱ類土器については，貼付文や沈線文を施さないものをⅡa類，貼付文や沈線文を施すものをⅡb類としている。

各類ごとに紹介する前に，この時期の土器分布状況を第15図に示す。発掘調査範囲である１～43区は，小牧遺跡が所在する河岸段丘上の平坦部全域を東西に渡って横断している。遺構・遺物の分布状況は当時の人々が平坦面のどの位置で生活を営んだかを示すこととなる。全体図をみると明らかであるが，縄文時代前期から中期にかけての人々は20～40区に集中しており，串良川から離れた平坦面の東側を好んだ状況が窺える。この時期の主体となるⅡ類の深浦式土器については，総括で検討することとする。なお，20～40区の範囲でも分布の集中が21～27区と60mほどの距離をおいた34～40区周辺にあり，同一時期における住み分けなのか，あるいは時期差によるものか検討を要する。類別の分布状況では同一時期の可能性が高いが，34～40区はⅡb類が主体となる。

Ⅰ類土器

４はやや外反気味に開く口縁部であり，器壁は６～７㎜と比較的薄い。外面には棒状工具で１㎝あたり３本の斜線を施す。口縁部内面にも同じ工具で３条の凹線，面取りした口唇部に斜位の凹線を刻目状に施している。色調は暗褐色を呈する。

５は胴部片である。 外面には棒状工具で１㎝あたり３本の短沈線を施す。縁無しの三角形を描くように，長さを変えながら縦横の線を引いている。内面の調整は横方向の丁寧なナデである。

縄文時代前期中半～後半に位置づけられる曽畑式土器と考えられる土器片は，この２点のみである。

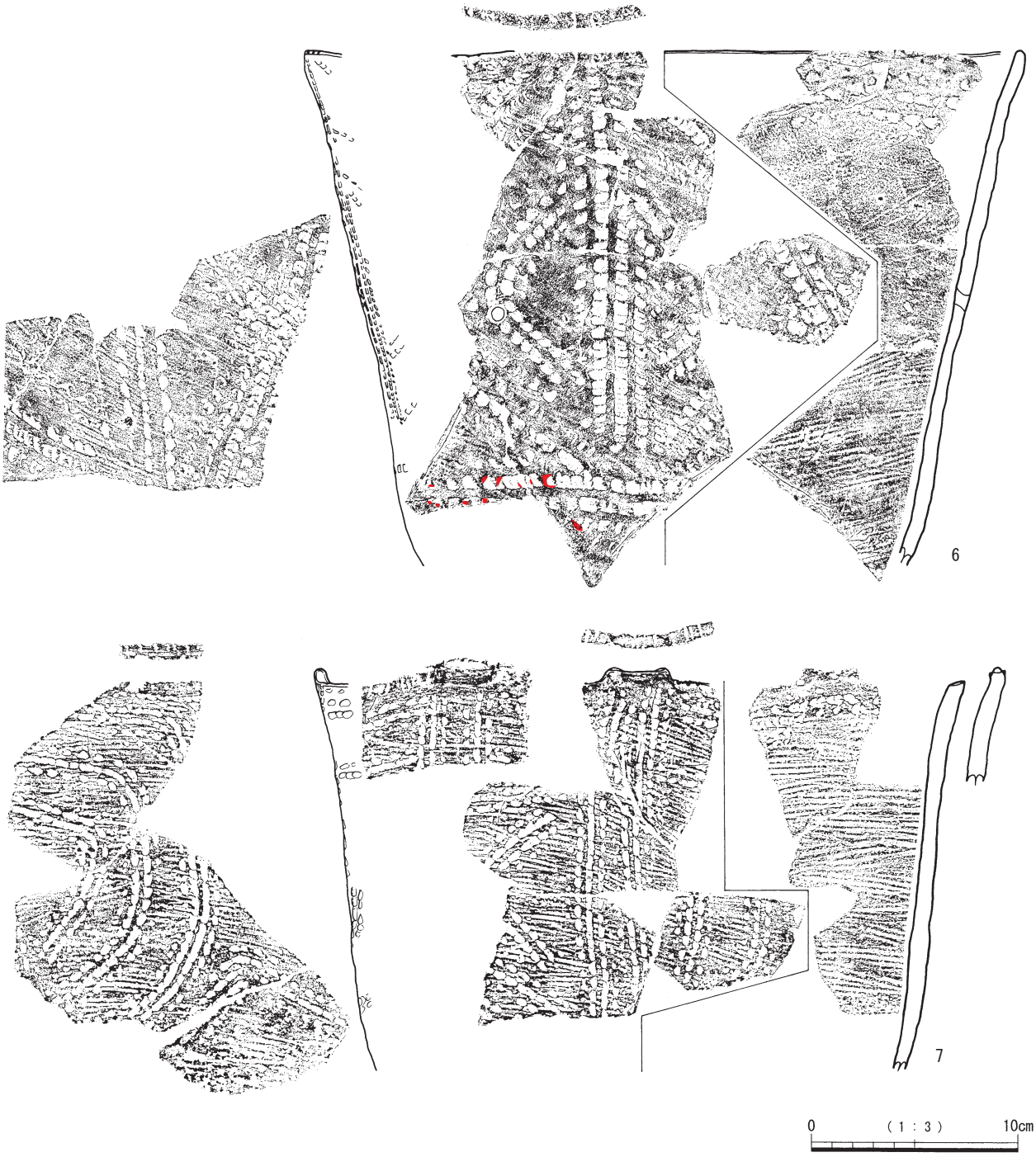
第24図　Ⅰ類土器

Ⅱ類土器

当該期において，主体を占める土器である。前述したように，貼付文や沈線文を施さないものをⅡa類，貼付文や沈線文を施すものをⅡb類とした。口縁部での貼付文の有無は確定できるが，胴部や底部などについては単にⅡ類としている。Ⅱa類とⅡb類は明確に時期差を示すものではないが，Ⅱa類の器形に括れ部がみられないのに対し，Ⅱb類の中には括れ部が明確なものもある。これらについては個別の説明の中で，示すこととする。

Ⅱa類土器

6は復元口径34.5cmで，口縁部はわずかに外反する。丸底と考えられる底部上位からほぼ直行して外開きするが，胴下部でわずかにくびれる。外面全面と口縁部内面に文様を施す。縦方向の連点を施す部分の口縁部が欠けているため，波状口縁になるかどうかは不明である。縦方向の連点と胴部下位に横方向に巡らした連点および口縁部との交差部分が起点となり，羽状を基本とした文様が描かれる。口縁部からは下開きに，胴部下位からは上

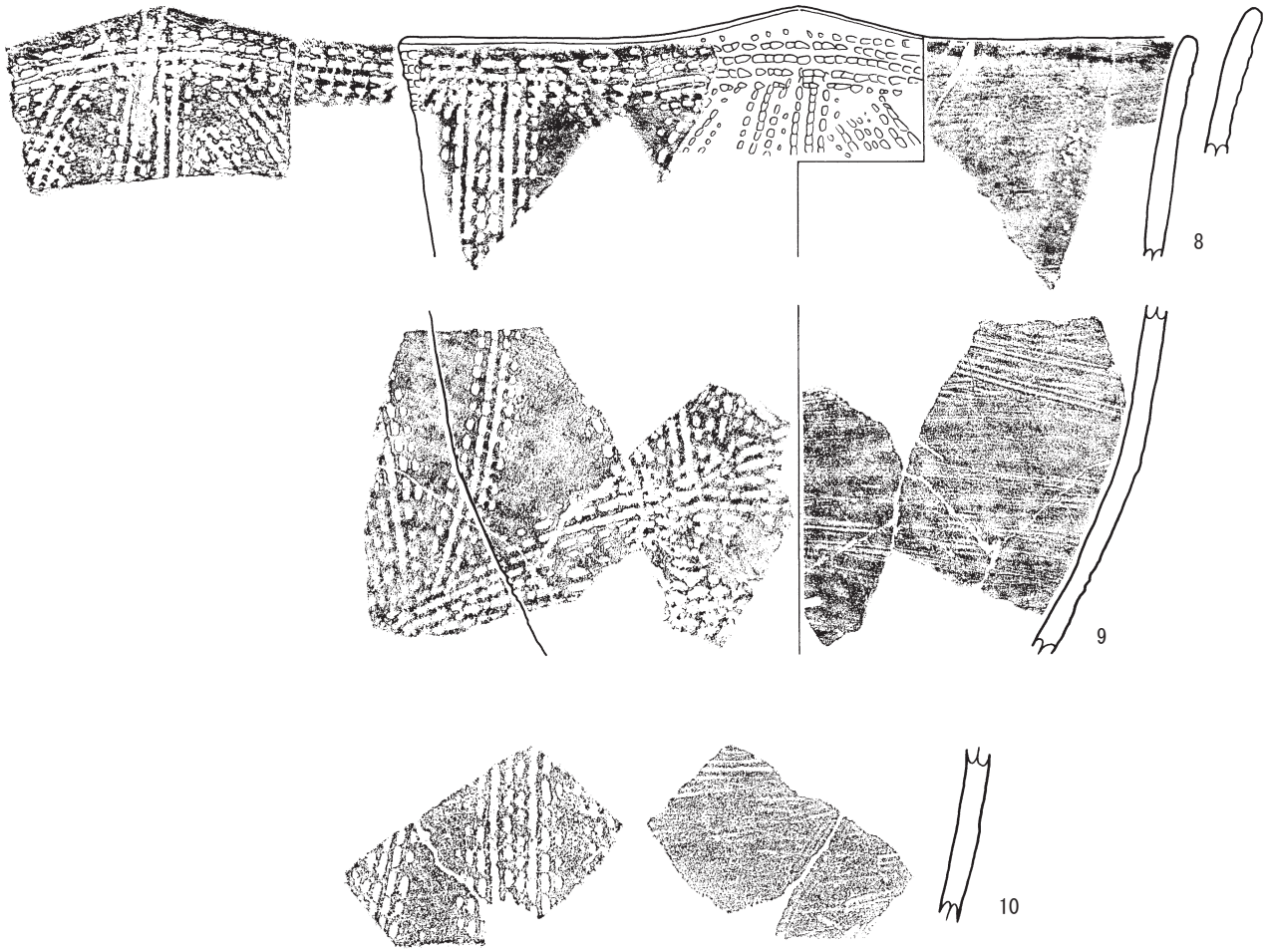


第25図　Ⅱa類土器（1）

開きの羽状文がそれぞれ二重に描かれるが，内側の文様は一筆で描かれており，角が明瞭でない。連点の単位は３単位ないし５単位の貝殻肋と考えられる施文具であり，貝殻肋３単位あたり26㎜の幅があり，他の施文具よりも大きい。横方向は左から右へ施文し，縦方向および斜め方向の施文は下から上への順である。口縁部内面は右から左へ施文している。口唇部には刻目がみられる。内面胴部以下には横方向の貝殻条痕が残り，胴部内面から口縁部内面にかけては丁寧なナデである。内外面からの回転穿孔による補修孔がみられる。外面下部の一部には赤色顔料が確認できる。煤の上にも赤色顔料がみられることから，煮炊きに使用した後に塗布された可能性もある。分析の結果，鉄分を多く含むことからベンガラによるものであることがわかった。直に接合はしなかったが，同一個体と考えられる破片には，大型の二枚貝腹縁による刺突線文が連点文に沿った部分と文様の空白部分に２条単位で施されている。

７は直立する胴部からわずかなくびれをもって外開きする口縁部に至る。口縁部の一部に幅37㎜，高さ５㎜の突起が付く。突起の両端をわずかに盛り上げ，口唇部を浅く凹ませてある。突起を含めた口唇部には，貝殻腹縁による刻目が施される。文様は突起部分から縦方向に４条を単位とする貝殻肋３単位幅14㎜の連点文を２列分施し，右側縁には貝殻腹縁による刺突線文がみられる。口縁部に沿って横方向の連点文が巡り，胴部には「X」字状もしくは「く」字状の施文がある。接点はなかったが同一個体の破片には逆「く」字状の連点文を三重に施す。内側の逆「く」字状は角が明瞭であるが，外側にいくにつれ角が取れ弧状となる。最も外側の連点文は口縁部に沿った連点文がそのまま弧を描いている。口縁部内面にもロッキング状の文様が施される。内外面とも横方向の貝殻条痕による器面調整であり，外面はその後ナデている。

８は口径31.5㎝に復元される波状口縁である。波頂部は４か所と想定され，波頂部および波底部から縦位の連点文が垂下する。４ないし５単位の貝殻肋と考えられる施文具で縦方向の連点文を描き，その間をおそらく「X」状に文様を描いていると想定される。施文具は貝殻肋３単位幅13㎜である。斜位に連点を施文した後，口縁部に沿って連点文を施す。口縁端部がわずかに外反し口唇部



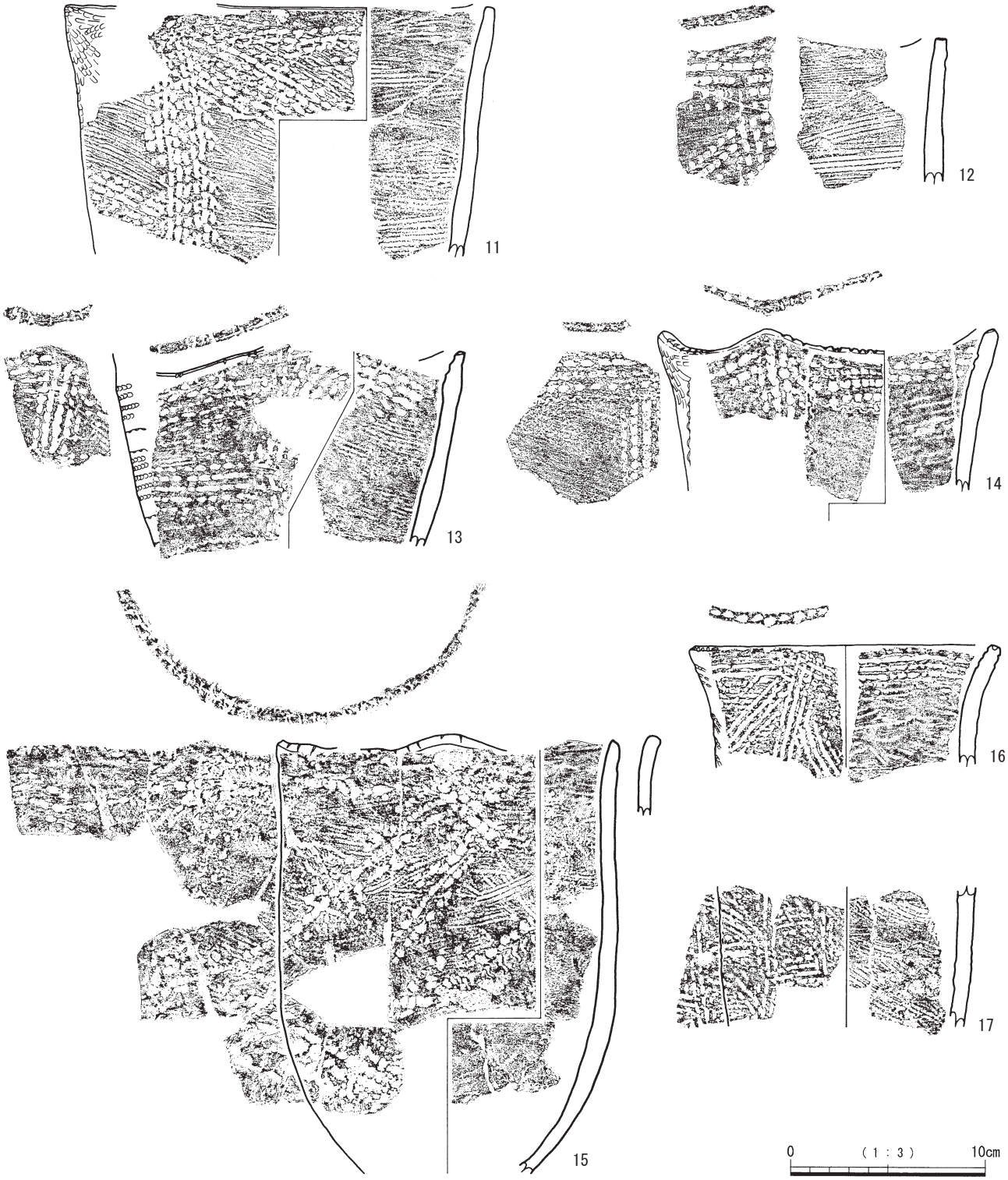
年代測定 3638-3513 cal BC

0 （1：3） 10cm

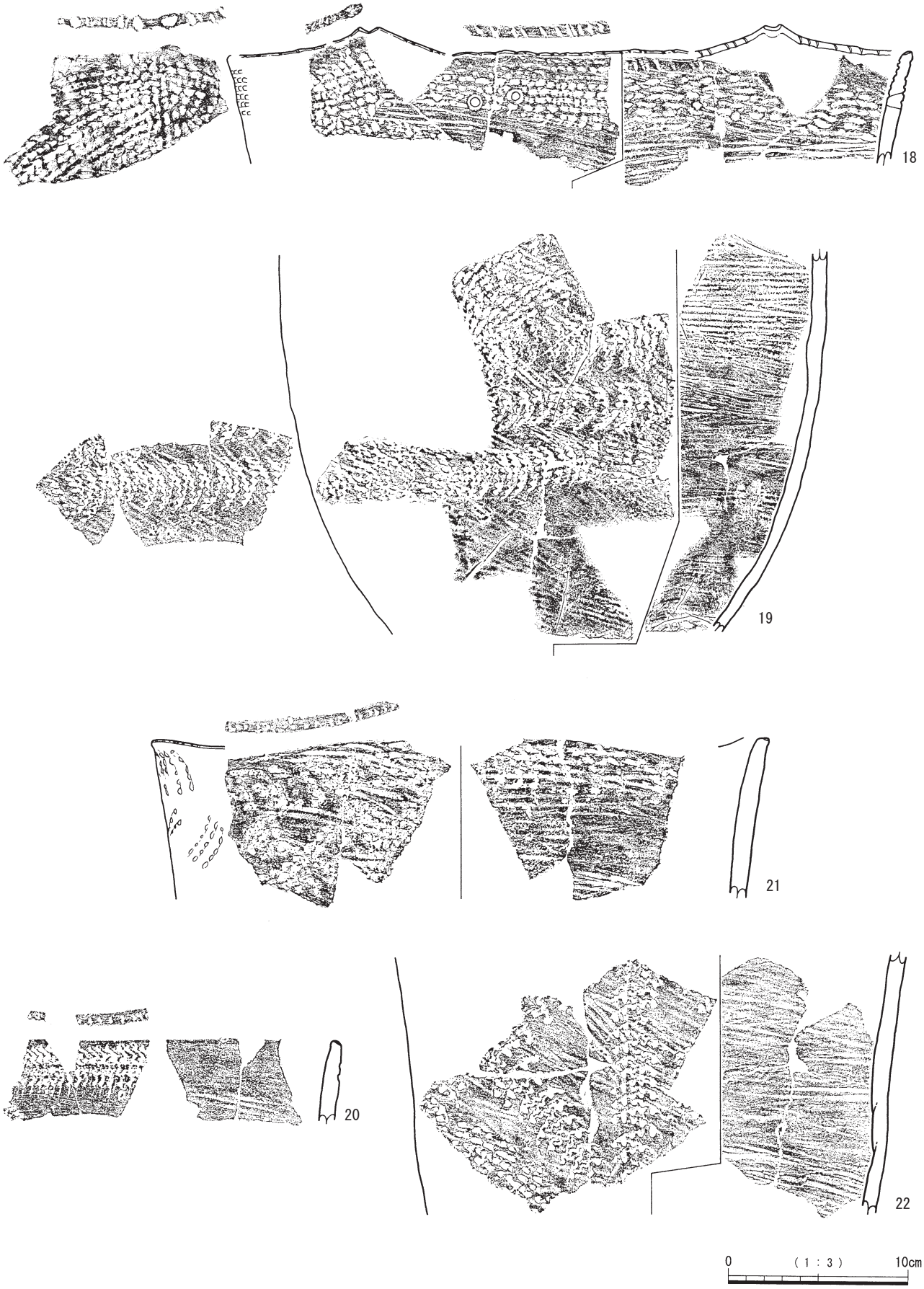
第26図　Ⅱa類土器（２）

は丸くおさめ刻目はない。内面は横方向のナデであり，口縁部内面の施文はみられない。９は10と同一個体の胴部下半である。底部上位に連点文が巡り，縦位と斜位の連点文の交点がみられる。10は貝殻肋３単位幅13㎜の連点文を施す胴部片であり，８・９と同一個体である。外面に付着した煤を年代測定した結果，^{14}C年代が4,755±29yrBP，２σ暦年代範囲が3638－3513calBC（86.2％），3423－3383calBC（9.2％）である。

11は直線的な胴部から胴上部でわずかにくびれ，口縁部はほぼ直行する。復元口径約21.5㎝である。縦方向の連点文と口縁部に沿った横方向の連点文の交点から，斜位方向の連点文が施される。貝殻肋３単位幅13㎜である。口唇部および口縁部内面には文様はない。器面調整は内外面とも貝殻条痕であり，外面は斜位に内面は横位に施



第27図　Ⅱa類土器（３）



第28図　Ⅱa類土器（4）

す。12は口縁部頂部から縦方向の連点文が描かれ，斜位および口縁部に沿って貝殻肋３単位幅17㎜の連点文が施される。縦位の連点文の左縁には貝殻刺突線文がみられる。口唇部には間隔をおいて貝殻腹縁による刻目が施される。内面は貝殻条痕による器面調整であり，口縁部内面に施文はみられない。

13と14は器形や文様意匠が似ている。13は復元口径17.8㎝で，器厚に凹凸があるがほぼ直行する波状口縁である。波頂部は欠けてはっきりしないが，波頂部から縦方向や斜位に貝殻肋３単位幅14㎜の連点文を施す。口縁部および胴部には横方向の連点文を間隔を開けながら巡らす。連点文はロッキング状に施され，上下を貝殻肋３単位幅13～18㎜の貝殻腹縁による刺突線文で区画している。口唇部には貝殻腹縁刺突の刻目がみられる。口縁部内面にはロッキング状の連点文を施す。外面の器面調整は丁寧なナデで，内面は貝殻条痕による。14は復元口径17.3㎝を測る波状口縁である。直行する胴部からわずかに外反して口縁部に至る。口唇部は内傾し，波頂部左側を串状工具の刺突，波頂部右側を貝殻腹縁による刻目を施す。波頂部から縦方向に貝殻肋３単位幅18㎜の連点文を施した後，口縁部に沿って横方向の連点文を施す。縦方向の連点文の両側および横方向の連点文の下位を貝殻肋３単位幅21㎜の貝殻腹縁による刺突線文によって区画する。口縁部内面にも口縁部に沿って連点文を施す。外面は丁寧なナデで，内面は貝殻条痕の後ナデによる。

15は口径17.5㎝に復元される中型の土器である。器高は23㎝前後と想定される。胴部の膨らみは弱く，わずかにくびれ外反気味の口縁部に至る。ほぼ水平の口縁部に５㎜ほど盛り上がった頂部をもつ。口唇部には貝殻腹縁を刺突した刻目を施す。文様は２条ないし３条を単位とする貝殻肋３単位幅18㎜の連点文を左下がりに施す。胴上部の一部と底部に近い部分には右下がりの連点文もみられる。口唇部から15㎜ほど下がった外面に横方向の連点文もみられるが，全周はしていない。口縁部内面に連点文は施されない。内面は貝殻条痕の後ナデによる器面調整であり，外面にも貝殻条痕による器面調整がみられる。文様は全体的に浅く施され，軸となる縦方向の施文もなく，他の土器よりも規格性に乏しい印象を受ける。

16は口径15.8㎝に復元されるやや小型の土器である。頸部でくびれ，外反する口縁部である。貝殻肋３単位幅10㎜の連点文を縦方向に施した後，羽状に施文している。口縁部に沿った連点もみられる。口唇部には深めの連点を丁寧に施してある。内面は貝殻条痕の後ナデ調整を行い，口縁部内面に連点文を巡らす。17は復元直径13㎝の小型の胴部である。約30㎜間隔で縦方向に貝殻肋３単位幅10㎜の連点文を施し，それぞれの空間を横位や斜位方向の連点文で密に埋めている。内面は粗い条痕である。16と同一の胎土である。

18は復元口径37.5㎝を測るやや外開きの波状の口縁部である。高さ８㎜ほどの頂部があり，10㎜幅で凹ませている。口唇部に貝殻腹縁刺突による刻目をもつ。波頂部には縦位や斜位に貝殻肋３単位幅12㎜の連点文がみられ，口縁部の内外面にロッキングによる連点文を施す。内面は１段で，外面は２段で幅広く巡らす。内面は貝殻条痕による器面調整である。外面から穿孔した補修孔が３か所みられる。19は復元径30㎝を測る胴部である。10㎜の間隔を置いた横位のロッキングが少なくとも３条は巡る。斜位に施したロッキングもみられるが，文様構成は不明である。施文具は貝殻肋３単位幅12㎜である。内面は貝殻条痕による。18と19は施文具や施文方法，胎土に違和感がなく同一個体の可能性がある。

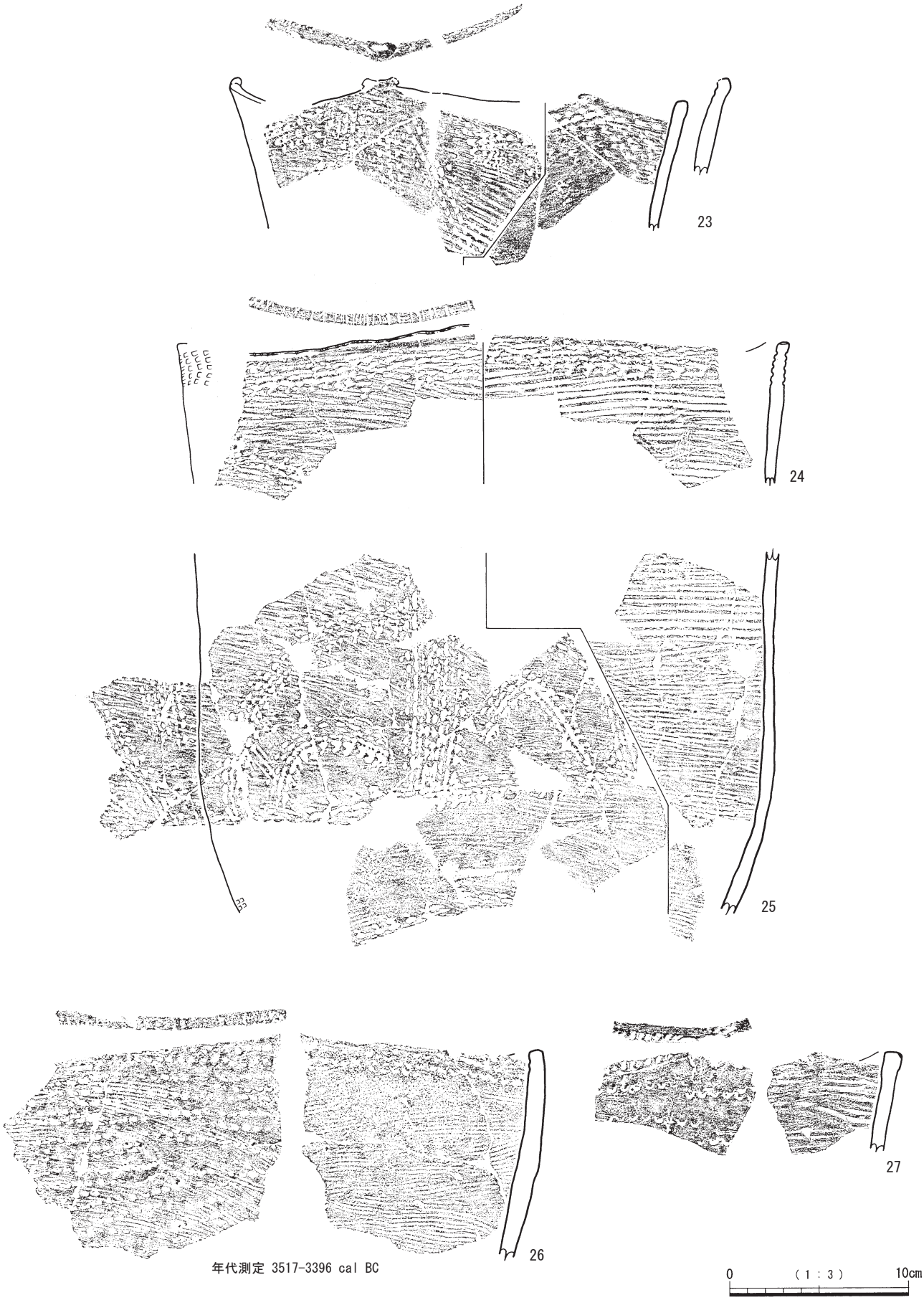
20は口縁部に沿って貝殻腹縁をロッキング状に密に施している。施文具は貝殻肋３単位幅20㎜である。口唇部には同じ施文具を刺突した刻目がある。内面は貝殻条痕の上をナデており，口縁部内面の施文はみられない。

21はほぼ直行する口縁部であり，口唇部は面取りし外面よりに浅い刻目を施す。外面および内面口縁部に相交弧文を浅く施す。施文具は貝殻肋３単位幅16㎜である。内外面とも粗い条痕の後ナデによる器面調整である。22は復元径28㎝を測る，縦位および斜位の相交弧文を施す胴下部である。施文具は貝殻肋３単位幅16㎜である。内面は貝殻条痕である。22と21は施文具や胎土に違和感がなく同一個体の可能性がある。

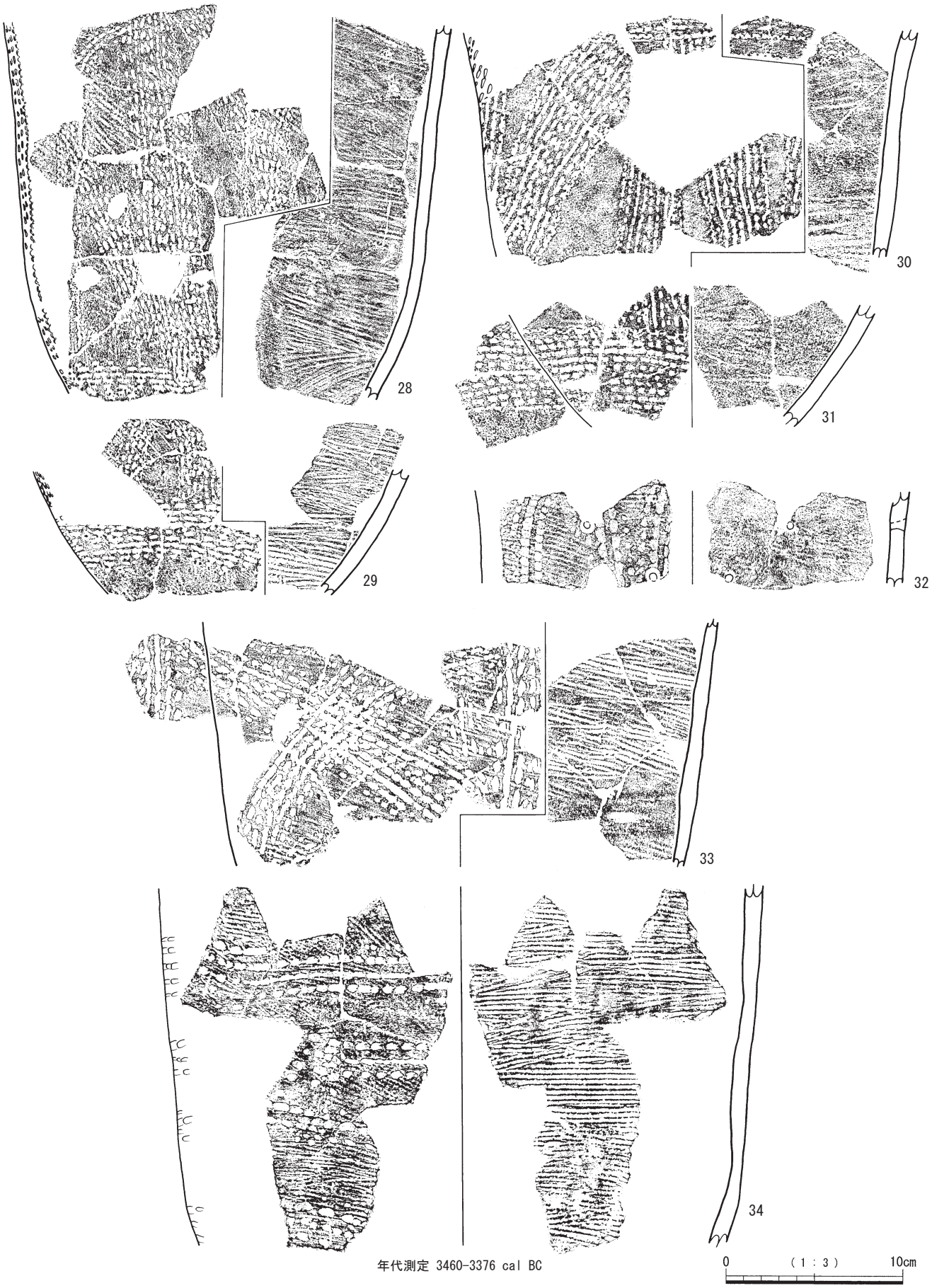
23は復元口径25㎝の口縁部である。ほぼ直線的に外開きする器形で，口唇部は面取りし貝殻肋の浅い押圧がみられる。欠けてはいるが波頂部に突起が付く。リボン状の形が想定され，突起の内側を凹めているのは18と共通する。口縁部に沿って連点文が巡り，波頂部から縦位と両斜位の三方に貝殻肋３単位幅16㎜の連点文が施される。口縁部内面にも２段の連点文が施される。外面は貝殻条痕で，内面は丁寧なナデである。

24は復元口径33.8㎝を測る波状の口縁部であり，口縁部に沿って内外面にロッキングに近い連点文を施す。施文具は貝殻肋３単位幅11㎜である。口唇部には細い工具による刻目が入る。25は復元径32㎝の大型の胴部である。膨らんだ胴部からわずかに締まった頸部をもつ。縦位にロッキング状の連点文を施し，その後に横位のロッキングに近い連点文を施す。縦位を軸に弧状のロッキングに近い連点文が左右に描かれる。胴部最大径部分では下弦の弧状あるいは山形のロッキング様の連点文となる。内面は横位の貝殻条痕であり，外面はナデ調整の前に斜位の貝殻条痕が認められる。施文具や胎土に違和感がなく24と同一個体と考えられる。

26は内湾気味に立ち上がる口縁部で，貝殻肋３単位幅16㎜の刺突文を浅く横方向に施す。口縁部内面にも同様の文様を15㎜幅で施す。口唇部は面取りする部分と丸く



第29図　Ⅱa類土器（5）



第30図　Ⅱa類土器（6）

収める部分がみられ，貝殻肋を押圧している。内面は貝殻肋３単位幅８㎜の貝殻条痕による器面調整である。外面に付着した煤の^{14}C年代が4,649±29yrBP，２σ暦年代範囲が3517－3396calBC（80.8％），3386－3363calBC（14.6％）である。

27は内湾気味に直行する波状の口縁部である。頂部は欠けており明確でない。口唇部を面取りし棒状工具で外端部に刻目を施す。貝殻肋３単位幅20㎜で大きめの貝殻腹縁による刺突文を横方向に施す。外面は丁寧なナデで，内面は貝殻条痕による。内面に文様はみられない。

28～34は口縁部がなく，貼付文の有無が明らかでないため，単にⅡ類としている。

28は復元径25㎝の中型の土器である。25～35㎜の間隔を置いて縦位や斜位のロッキングによる連点文を施す。さらに連点文の両側を貝殻腹縁による刺突線文で区画している。ロッキングは１列の部分と，２列に施して幅広くしている部分がみられる。底部に近い部位では２列のロッキングを巡らしている。施文具は連点文が貝殻肋３単位幅９㎜で，刺突線文は13㎜である。内面は貝殻条痕による器面調整である。29は接点がなかったが，28と同一個体と考えられる底部近くである。

28・29は黒色鉱物が目立つのに対し，30・31は白色鉱物が多く胎土は異なるが，器形や文様構成がよく似た個体である。30はわずかに膨らみのある胴部から，わずかなくびれをもって口縁部に至ると考えられる。口縁部は欠けているが，内面の文様から口縁部近くと判断できる。胴部の復元径は25㎝の中型である。縦方向の連点文の間に斜位の連点文を左右に施す。連点文は35～40㎜幅で描いており，両側を貝殻腹縁による刺突線文で区画している。口縁部内外面にも貝殻腹縁による横位の刺突線文がみられる。施文具は連点文および刺突線文とも貝殻肋３単位幅13㎜である。外面は丁寧なナデであり，内面は横位の貝殻条痕による器面調整である。31は30の底部近くの破片ではないかと考えられる。幅広く描かれた縦位および斜位の連点文の下に貝殻肋３単位幅13㎜の連点文を２列分施し，幅50㎜の連点文を巡らす。上下の縁を貝殻刺突線文で区画するが，貝殻肋３単位幅13㎜と28㎜の２種類が使われている。

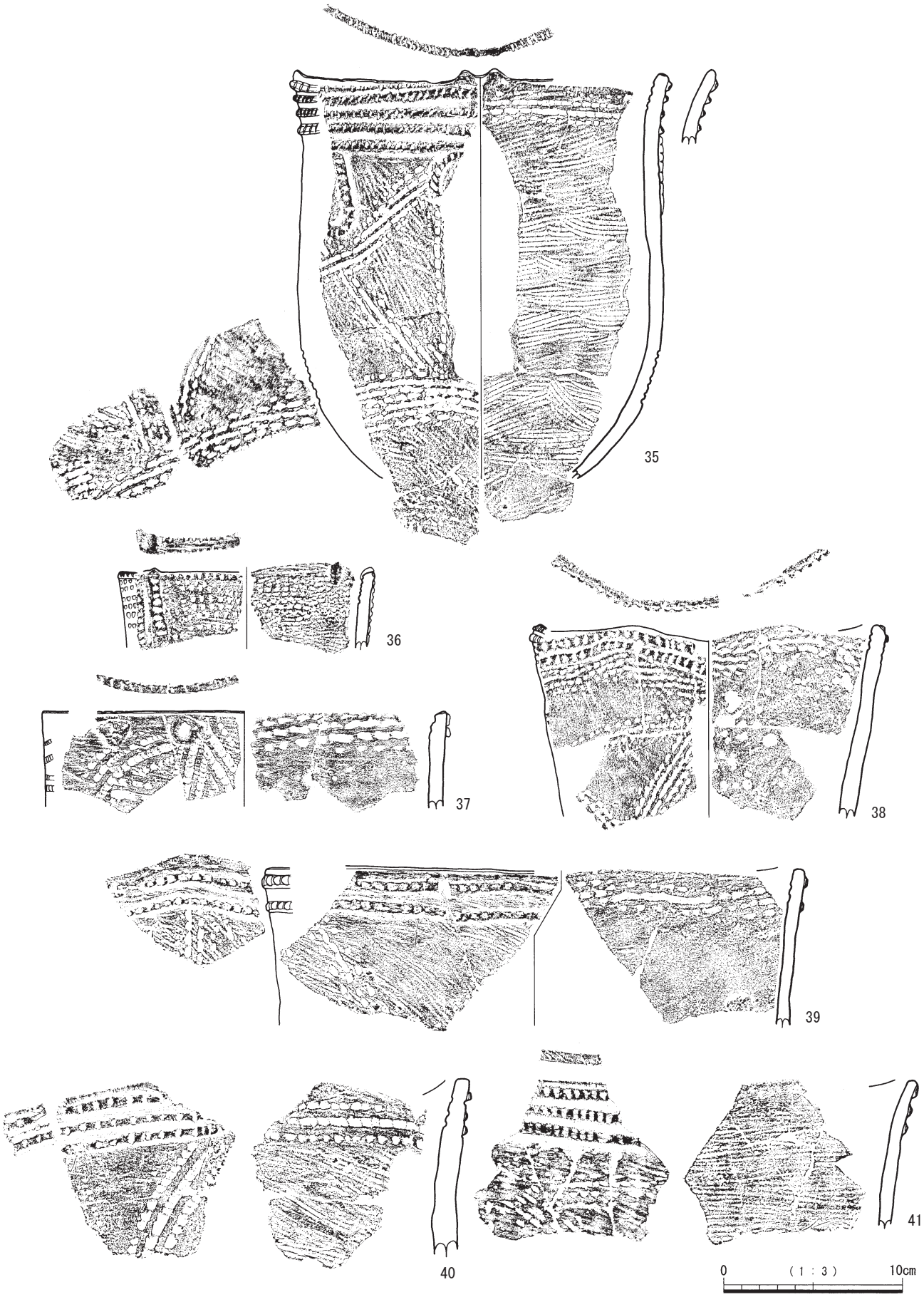
32は復元径24㎝の胴部上部片である。貝殻肋３単位幅19㎜の連点文を縦方向に施す。外面は貝殻条痕を丁寧にナデており，内面はナデ調整である。２か所に補修孔があり，外面からのみ穿孔したものと両面から回転して開けたものがみられる。33は復元径28.5㎝のほぼ直線的な胴部である。４か所に縦方向の連点文があると想定され，間を埋めるように「Ｘ」字状に連点文を施す。一部の連点文の縁に貝殻腹縁による刺突線文がみられる。施文具は貝殻肋３単位幅15㎜である。内面は横方向の貝殻条痕による調整である。口縁部との接点はないが，胎土に違和感がない点や出土地点が重なることから，突帯を巡らす41のような口縁部となる可能性もある。

34は底部上位からわずかにくびれをもちながら直線的に立ち上がる胴部片である。25～40㎜の間隔を置いて横位に巡る少なくとも５条の連点文がみられる。連点文の貝殻肋３単位の幅は20㎜である。口縁部を含めて全体の形状や文様構成は不明であるが，同一個体と考えられる破片を含めて，縦位や斜位の連点文はみられない。内面は貝殻条痕が明瞭に残る。胎土に透明な石英が目立つ。外面に付着した煤を年代測定した結果，^{14}C年代が4,717±29yrBP，２σ暦年代範囲が3632－3561calBC（31.5％），3536－3496calBC（20.7％），3460－3376calBC（43.3％）である。

Ⅱb類土器

35は丸底の底部からほぼ直立する胴部をもち，わずかにくびれ外反する口縁部に至る。底部は欠けているが，口径20.8㎝，推定器高約24㎝に復元できる。基本は平縁であるが，少なくとも２か所に双頂の突起をもつ。口唇部に沿って４条の細い粘土紐を貼り付け，貝殻腹縁刺突による刻目を施す。突起部分には山形に粘土を貼り付け，棒状工具で刻目を施す。胴部下部には少なくとも２条の連点文を巡らす。突起部分の下には縦位の連点文を施し，空間を連点文による「Ｘ」字で埋めている。「Ｘ」字の交点の上には「Ｊ」字もしくは「し」字に棒状工具で刻目を入れた貼付文を施す。内面は貝殻条痕が明瞭に残り，口縁部に沿って連点文を施す。施文具は貝殻肋３単位幅12㎜である。

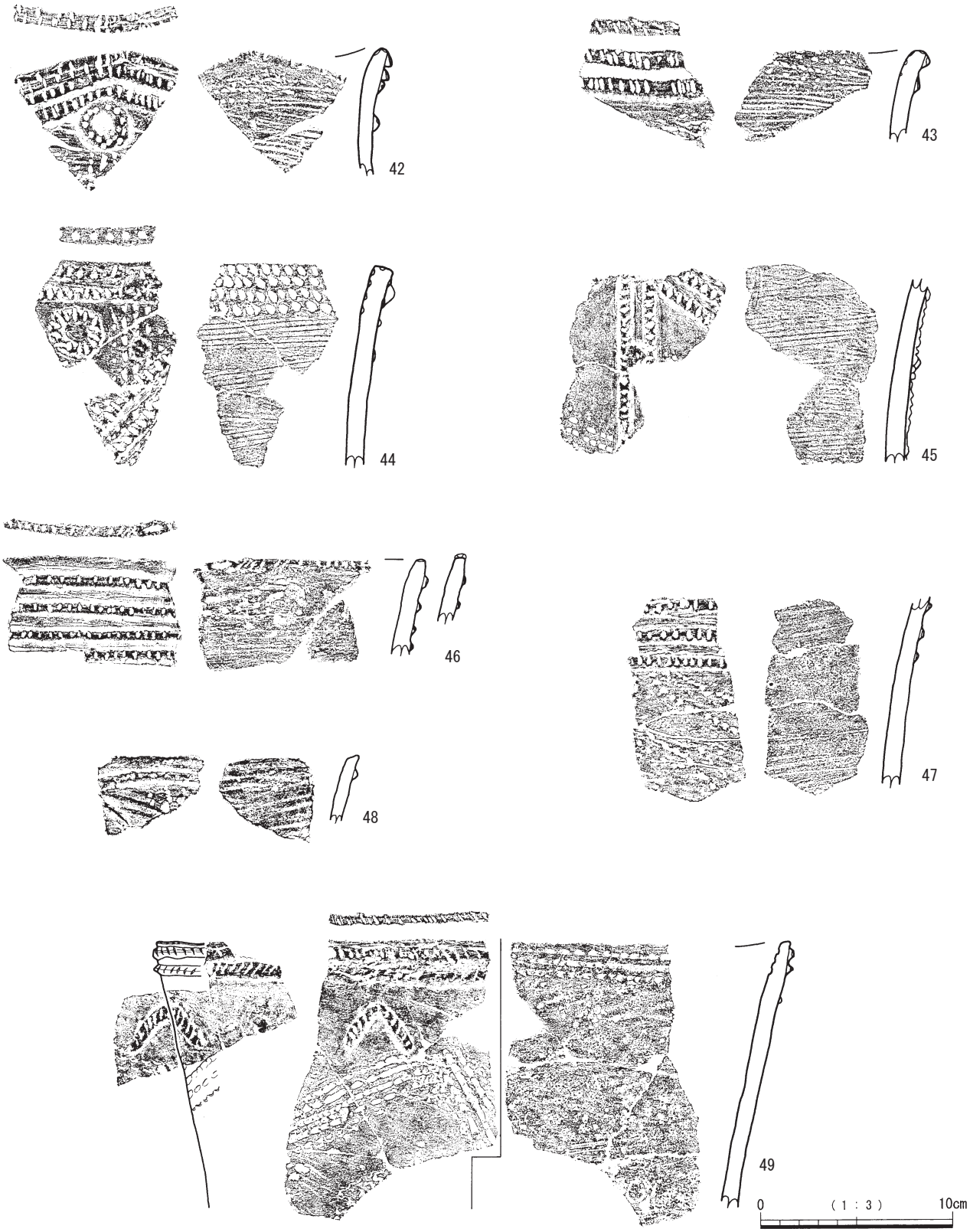
36は復元口径14.2㎝のほぼ直行する口縁部である。口唇部は貝殻条痕により整えられ，口唇部外端に刻目を施す。外面と口縁部内面には貝殻肋３単位幅12㎜の貝殻腹縁を横にして施文した連点文がみられる。その後，少なくても２本の粘土紐を縦方向に口唇部から口縁部内面まで貼り付け，口縁端部と同じ貝殻の肋による刻目を施す。37は復元口径22.4㎝のわずかに外反する口縁部である。貝殻肋３単位幅18㎜の幅広い連点文を施した後，直径15㎜ほどのドーナツ状の貼付文をもつ。口縁端部を起点に縦位の後，左右斜位に連点文を施す。口唇部に刻目を入れ，口縁部内面には深い連点文を巡らす。38は復元口径19.6㎝で低い波状の口縁部をもつものである。胴上部でわずかにくびれ，口縁部は内湾気味に立ち上がるが，全体的にはほぼ直線的である。口唇部に沿って２条の粘土紐を巡らし，ヘラ状工具で刻目を施す。刻目は上の突帯が右下がりで，下の突帯は左下がりである。突帯下と口縁部内面に貝殻肋３単位幅10㎜の施文具でロッキング状の連点文を施す。外面の文様は，口縁部近くで横位に，胴上部で「Ｘ」字状に描かれると想定される。横位の連点文からそのまま左下がりの連点文に移る部分もみられ



第31図　Ⅱb類土器（1）

る。波頂部に縦位の連点文はみられない。器面調整は内外面ともナデによる。

39は復元口径30cmでわずかに外反気味に開く口縁部である。口唇部は面取りする部分と丸くおさめる部分があり，刻目はみられない。緩く盛り上がる波頂部をもち，口縁部に沿って２条の粘土紐を巡らし，連点状の刻目を施す。外面は波頂部から縦位や斜位に貝殻肋３単位幅18mmの連点文を施し，内面は口縁部に沿って連点文を巡ら

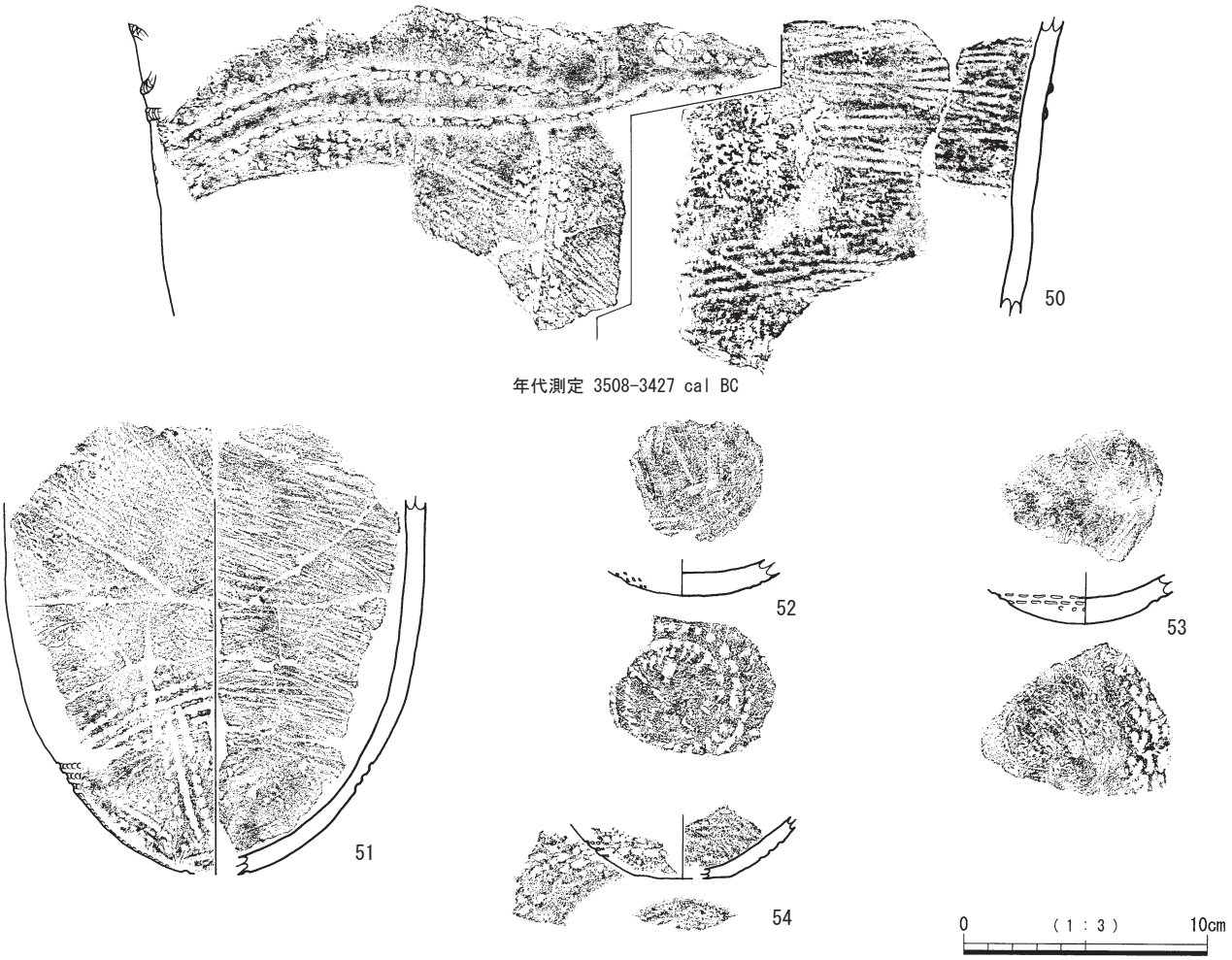


第32図　Ⅱb類土器（２）

す。外面の器面調整は斜位の貝殻条痕であり，内面はナデによる。40はわずかにくびれた頸部から外開きする口縁部である。口唇部は平らに面取りするが，刻目はみられない。口縁部に沿って３条の突帯を貼り付け，貝殻腹縁による刻目を３条同時に施している。貝殻肋３単位幅23㎜の貝殻腹縁による連点文が，外面は縦位と斜位に，口縁部内面もやや斜位に施される。器面調整は内外面とも浅い貝殻条痕による。41はわずかに外反する口縁部である。口唇部に沿ってやや太めの粘土紐を３条巡らし，棒状の工具で刻目を施す。外面には貝殻肋３単位幅14㎜の連点文を施す。丸みをもつ口唇部にも浅い刻目を施す。口縁部内面に文様はみられない。

42はわずかに外反する口縁部の波頂部分である。口縁部に沿って２条の粘土紐を巡らし，棒状工具で刻目を施す，波頂部分の下には粘土紐を直径27㎜の円形に貼り付け，断面が丸い直径３㎜の棒状工具で刺突している。波頂部分には貝殻肋３単位幅14㎜の連点文が縦位にみられる。口唇部の内外端部に交互に刻目を施し，口縁部内面にも連点文を浅く施す。施文の順序は，縦位の連点文→円形貼付文→口縁部突帯の順である。43は口唇部に沿って太めの粘土紐を２条巡らし，棒状工具による刻目を施す。丸みのある口唇部には斜位の刻目の後，内端に施した刻目がある。外面と口縁部内面に浅い連点文がみられる。42と同一個体の可能性がある。

44は大型の土器で口縁部がわずかに外反する。口唇部を平らに面取りし，巻き貝状の工具を等間隔に刺突する。外面には貝殻肋３単位幅15㎜の連点文を縦位に施した後，口縁部に沿って２条の粘土紐を貼り付け棒状工具で刻目を入れる。その後，連点文のある部分の突帯間とその下に幅11㎜・高さ６㎜の粘土を貼り付ける。また，粘土紐を直径25㎜ほどの円形に貼り付け，棒状工具で左下から反時計回りに刻目を入れた文様もみられる。内面口縁部には「往復半転削り手法」による貝殻連点文ではなく，１点ずつ押して描いた連点文が巡る。連点文は右から左へ，下から上の順に描かれる。45は44と同一個体と考えられ，２条単位の刻目のある粘土紐を縦位に貼り付け，それを軸にして同様の２条単位の粘土紐を羽状に配している。縦位の粘土紐間には44と同様の粘土突起が貼り付けられる。また，縦位の粘土紐からは斜位の連点も施される。器面調整は外面が丁寧なナデで，内面は貝殻条痕



第33図　Ⅱb類土器（３）

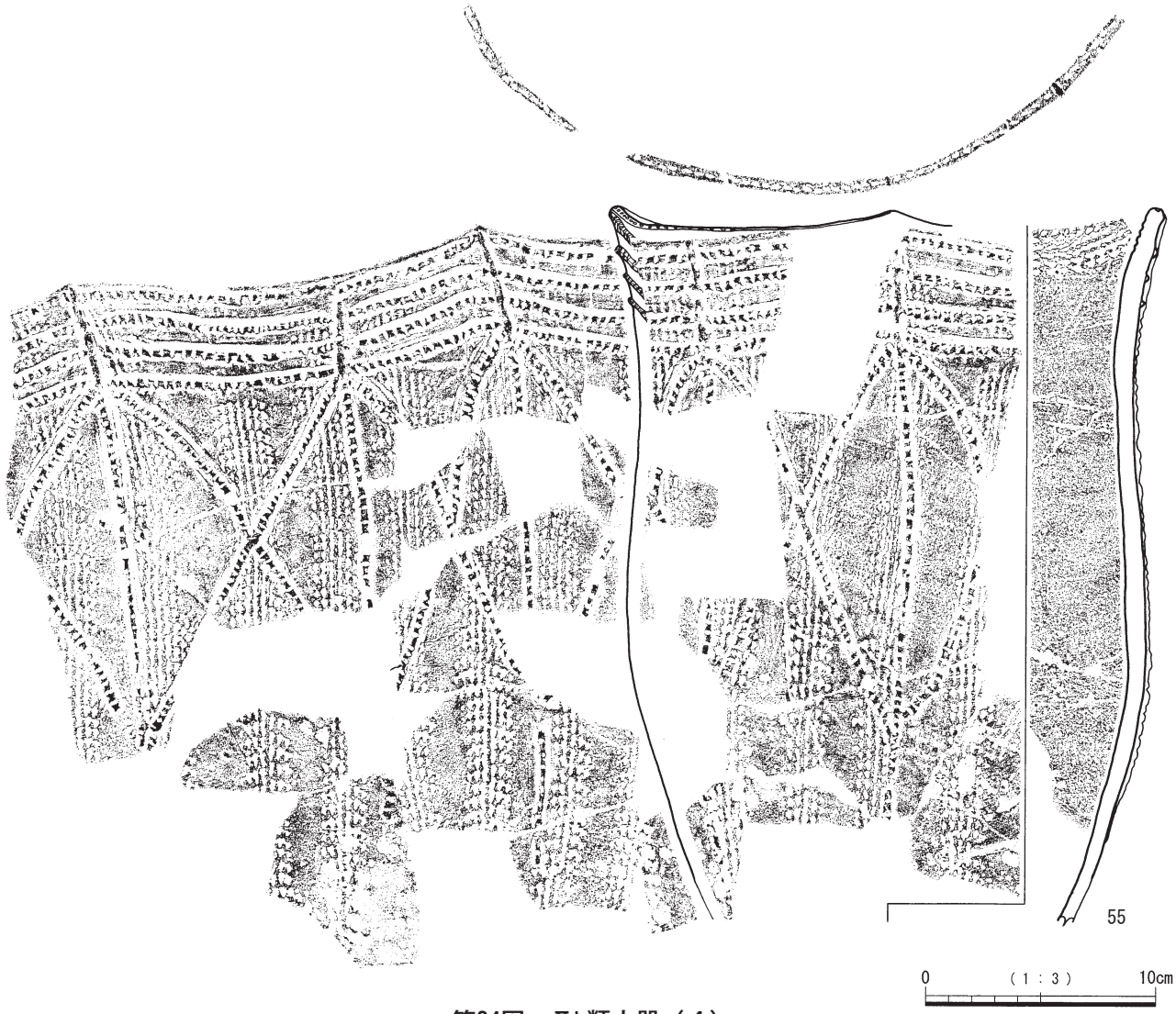
による。

46は少なくとも４条の突帯を巡らす口縁部であり，１条ごとにヘラ状工具による刻目を施す。口唇部には幅17㎜の低い突起があり，内側を凹めている。口唇部には貝殻腹縁による刻目を施し，突起部の内面のみに連点文をまばらに施す。47は46と同一個体と考えられる。刻目のある突帯文の下に不規則な連点文を斜位に施し，２条の浅い沈線が横位に施される。47は少なくとも３条の突帯が巡る。

48はわずかに外開きする口縁部である。口唇部は内傾ぎみに面取りしてあり，刻目はない。外面には連点文が施され，細めの粘土紐が貼り付けられる。突帯に刻目があるのかどうか判断できない。口縁部内面には連点文はみられない。

49は復元口径32.8㎝の大型の土器である。口縁部に沿って２条の粘土紐を巡らせ，貝殻腹縁を刺突した羽状の刻目をもつ。その下に山形の粘土紐を間隔をおいて貼り付ける。その間には直径８㎜，高さ６㎜の粘土を尖りぎみに貼り付ける。外面には貝殻肋３単位幅17㎜の連点文の両縁を貝殻刺突線文で囲んだ文様がみられる。口唇部には刺突による刻みが入り，口縁部内面には口縁部に沿って連点文を巡らす。外面の器面調整は丁寧なナデであり，内面には横方向の貝殻条痕が残る。同一個体と考えられる破片には，粘土を摘まみ上げた円形の浮文が山形貼付文と同じ高さのところに施される。

50は部分的にわずかな凹凸はあるが，ほぼ直線的な胴部である。復元径約38㎝を測る。胴上部に刻目のある突帯と貝殻肋３単位幅20㎜の連点文を施す。85㎜の間隔をおいた縦位の連点文の後，２条を単位とする粘土紐を巡らし，連点状の刻目を施す。上の１条の粘土紐は左右に折り返し横長の枠をつくる。両方の弧を描きながら折り返す「⊃⊂」の部分は，縦位の連点文の中間に位置すると想定される。粘土紐の枠内には横位の連点文を施す。外面は丁寧なナデであり，内面は横方向の貝殻条痕をナデている。外面に付着した煤を年代測定した結果，^{14}C年代が4,611±29yrBP，２σ暦年代範囲が3508－3427calBC



第34図　Ⅱb類土器（４）

(59.0%)，3382－3341calBC（36.4%）である。

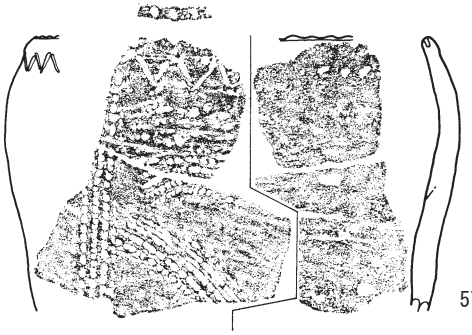
51は丸底の底部から胴部下位の破片である。胴部に近い箇所での復元径は約19cmを測る。３～５条の貝殻肋を単位とする連点文で文様を構成する。底部上位に連点文を巡らせ，底部中心で交差するように４条の連点文で８方向の縦位の文様を施していると想定される。３条を単位とする連点の中心は，両側の連点より密である。施文具は貝殻肋３単位幅15mmである。口縁部付近の文様がどのようなものか不明であるが，胴部下半は無文である。内面は横方向の条痕をナデている。色調は内外面とも淡黄褐色である。胴上位に煤が薄く付着している。52は丸底で，直径30mmほどの空白をおいて，渦巻き状に貝殻肋３単位幅16mmの連点文を施す。53は厚さ10mmの丸底である。接地面に貝殻条痕があり，直径６cmほどの空白をおいて貝殻肋３単位幅12mmの連点文を巡らす。外面に白い粉状のものが付着する。内面は丁寧なナデである。54は接地面がほとんどない復元径４cmの丸底気味の平底である。内側に少し屈曲して丸底風となる。貝殻肋３単位幅12mmの連点文はやや斜位に巡る。深浦式土器に平底はみられず，希少な例である。

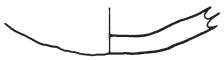
55は口径24cm，推定高約31cm前後に復元できる胴下部から口縁部にかけての土器である。やや膨らみのある胴部から緩くくびれながら外反する口縁部に至る。４つの波頂部があり，波頂部と波底部に文様の起点がみられる。波頂部分と波底部間に３か所，縦位のロッキング状の連点文を施し，口唇部に沿って４条の細い粘土紐を貼り付ける。連点文の施文具は貝殻肋３単位幅10mmである。波頂部分と波底部に縦位の細い粘土紐を４条の粘土紐の上から貼り付けており，この部分には刻目を施さない。その後，口縁部に沿って貼り付けた４条の粘土紐の上側をヘラ状工具で強くナデて，１条ごとに刻目を施している。波頂部分と波底部にはさらに粘土紐を縦位に延ばし，その間を粘土紐で「X」字状に貼り付け，刻目を入れる。縦位の粘土紐は連点文の縁に沿って貼り付けてある。口唇部は平らに面取りし，刺突を施す。口唇部刺突後に縦位の粘土紐を貼り付けた箇所もある。口唇部内面にはロッキング状の連点文が巡る。外面および内面の器面調整は丁寧なナデである。全体的に丁寧な作りである。

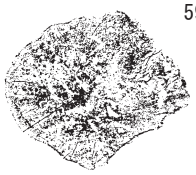
56は直接の接合点はないが，胎土，調整，施文具が同一であることから，３つの破片を同一個体と考え図上で復元した。口径34.2cm，胴部最大径33.6cmに復元される大型の土器である。丸底と考えられる底部から強く張り出す胴部をもち，わずかに締まる頸部から少し外開きする波状の口縁部に至る。波頂部分から縦位の連点文が施され，左右に羽状の連点文が描かれる。その後，４か所と想定される波頂部から描かれたと考えられる斜位の連点文が重なり，「X」字状の文様を描く。口唇部に沿って連点文が施された後，３条の細めの粘土紐を貼り付ける。粘土紐には刻目はみられない。波頂部下および波底部下には山形あるいは弧状に粘土紐が貼り付けられると想定される。貼付文の下側あるいは空白部分を連点文で埋めている箇所もみられる。連点文の一部には貝殻腹縁による刺突線文がみられる。胴部最大径部分に横位の連点文が巡り，口縁部からの斜位の連点文の接点となる。さらに，胴部下半に幅広の連点文が２条巡る。施文具は貝殻肋３単位幅16mmである。口唇部には貝殻腹縁の刺突による刻目があり，口縁部内面にも連点文が巡る。内面の器面調整は胴部付近の貝殻条痕が明瞭で，口縁部に近いほど丁寧なナデとなる。

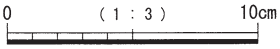
57は張りのある胴部から胴上部でわずかにくびれ，内湾しながら立ち上がる口縁部である。復元した口径は15.5cmであり，中型の土器である。口縁部下位の張りのある部分では復元径18cmを測る。縦位の連点文を軸に，斜め上下に延びる連点文が描かれる。口縁部には山形の単沈線が連続して描かれる。口唇部には串状の工具が深く突き刺さり，口縁部内面の一部にも連点状の文様がある。施文具は貝殻肋３単位幅11mmである。58は復元径17.2cmの胴下部であり，丸底に至ると考えられる。横方向に連点文を巡らした後，縦方向の連点文を描く。さらに左下りから右下りの連点文を描いたことが観察できる。内外面は貝殻条痕の後丁寧なナデである。59はわずかに平坦面がある丸底である。57～59は出土地点が重なり，胎土に違和感がないことから，同一個体の可能性がある。レイアウト後，口縁部と胴部がつながったことから，口径が若干大きくなる。図上復元による値は，口径18.5cm，口縁部下位20cm，くびれ部18.6cm，胴部18.8cmで，器高は約21cmである。

60は口縁部・胴部・底部に分かれ，接合点はないものの胎土・施文方法・復元径などが同じであり，同一個体と考えられ図上復元した。復元による器高41.5cm，口径40cmの大型の土器である。丸底からわずかに張りのある胴部に至り，頸部で緩くくびれてから内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。２か所もしくは４か所の緩い波頂部をもつと考えられ，波頂部と波底部から縦位の連点文を50mm幅で施す。施文具は貝殻肋３単位幅16mmである。連点間を２分するように羽状の沈線文を施し，軸となる部分に３本の沈線を縦位に施す。また，連点文の両縁にも１本の沈線を施す。底部から胴部下半には間隔をおいて連点文を巡らす。口縁部の波頂部分には細い粘土紐を紡錘形に貼り付け，文様の起点としている。口縁部に沿った粘土紐が少なくとも６条巡り，粘土紐の上側を棒状工具で刺突する。波頂間を４等分すると考えられる位置に縦位の粘土紐を貼り付け，棒状工具で刻目を施す。この時の刺突の強弱は粘土紐の左右に規則性はみられない。胴上部で途切れる縦位の粘土紐は，羽状の沈線文の軸となる部分に貼り付ける。縦位の連点文の部分に二等辺三

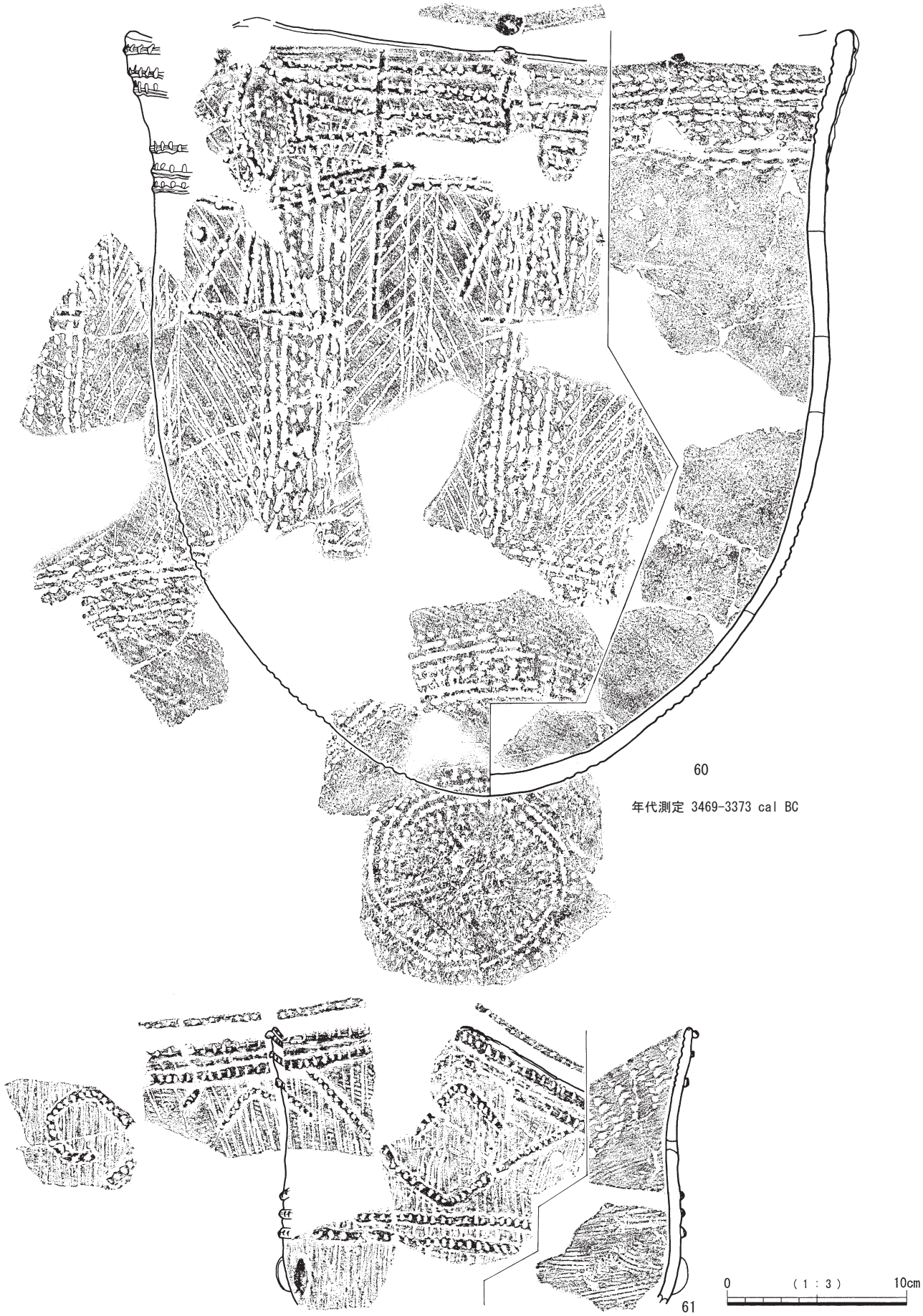








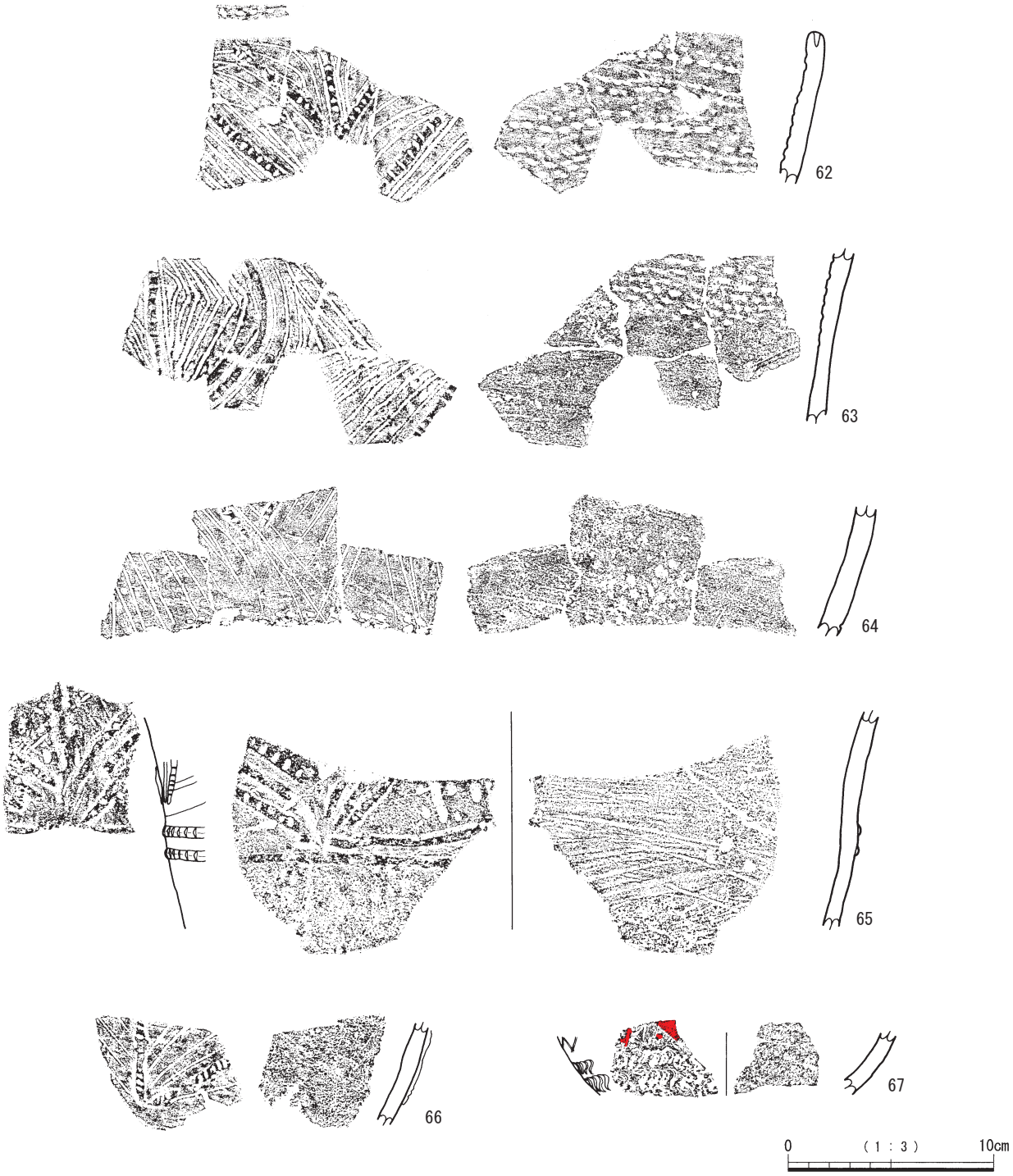
第35図　Ⅱb類土器（5）



第36図　Ⅱb類土器（6）

角形状の貼付文がある。また，三角文の左右には小さな浮文が貼り付けられ，棒状工具による凹点もみられる。縦位の粘土紐が延びる口唇部には貼付文の中心を凹ませた小さな浮文がある。丸みを帯びた口唇部には刻目はなく，口縁部内面に幅広の連点文が巡る。底面は十字に連点文を施し，時計回りに「の」字を描くように連点文を巡らす。その上に25～30㎜の間隔を置いて50㎜幅の連点文を巡らす。さらに55㎜の間隔をおいた位置に55㎜幅で巡らされた連点文が，胴部文様の下端になる。内面の器面調整は丁寧なナデで平滑である。60の外面に付着した煤を年代測定した結果，^{14}C年代が4,707±29yrBP，２σ暦年代範囲が3631－3579calBC（21.2%），3535－3492calBC（21.4%），3469－3373calBC（52.8%）である。

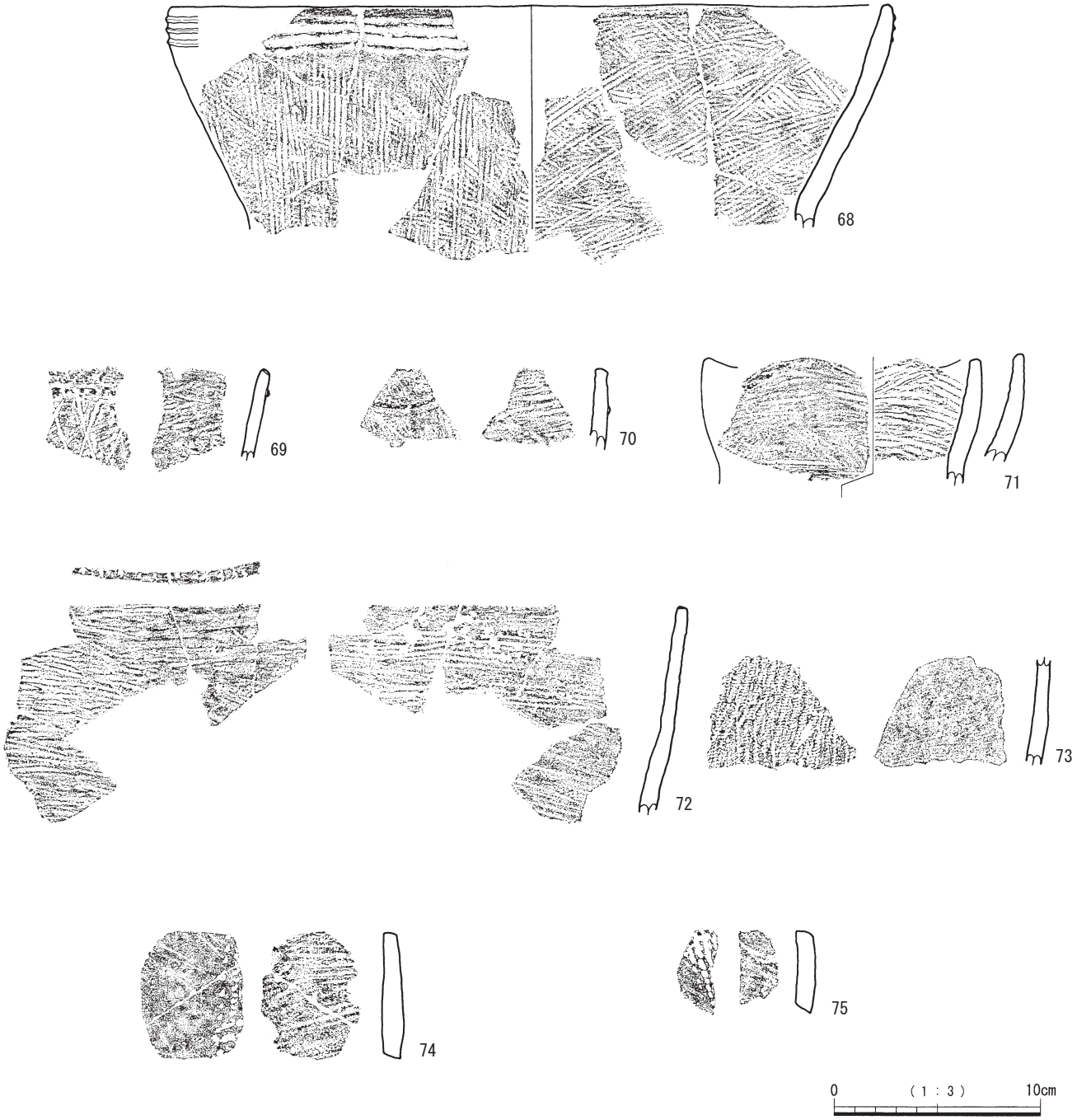
61は接合点はないものの，胎土・器面調整・施文方法に共通点が多く，同一個体と考えられる。張りのある胴部をもち，わずかに締まる頸部から緩く外反する大きな波頂部のある口縁部に至る。復元した口径23.2cm，頸部括れ部径21.5cm，胴部最大径22cmを測る。外面に縦位の



第37図　Ⅱb類土器（７）

条痕を残したままである点は他の個体にはみられない。口縁部に沿って２条の粘土紐を巡らせ，縦筋のある工具で刻目を施す。また，波頂部の下に山形に粘土紐を貼り付け，刻目を入れる。その下には波頂部を横長の菱形に見立てるような粘土紐の貼り付けがみられる。波底部の口縁部下にも山形の貼り付けが施される。胴上部付近には２条の突帯が巡り，その下には22㎜×11㎜，高さ７㎜の粘土を縦長に貼り付ける。なお，頸部の一部には半円の粘土紐も貼り付けられている。口唇部には串状工具による刺突が施され，口縁部内面にはロッキングによる連点文が巡る。施文具は貝殻肋３単位幅14㎜である。内面の器面調整は横方向の貝殻条痕である。内外面からの穿孔による補修孔がみられる。

62・63は胎土・施文方法から同一個体と考えられる。わずかにくびれ部をもち，内湾気味に外傾する口縁部である。丸みを帯びた口唇部には，平面形が菱形に近い工具で深い刺突を５～８㎜間隔で施す。縦位に貼り付けられた粘土紐を軸に，刻目を入れた後，縦および紡錘状の沈線が引かれる。また，縦位の粘土紐から羽状の粘土紐が延び，刻目を入れた後，両側を平行した沈線文で埋めている。紡錘状に貼り付けた部分もみられ，粘土紐に沿って平行した沈線文が施される。口縁部内面には貝殻肋３



第38図　Ⅲ類土器

単位幅12㎜の連点文が少なくとも４条分80㎜幅で巡る。64も同一個体と考えられる。粘土紐の下端から40㎜ほどの間隔をおいた位置に連点文が巡り，左右斜位の沈線が施される。外面および内面上部は丁寧なナデにより，内面下部はケズリ様のナデによる器面調整である。

65はわずかにくびれのある胴部付近である。復元径33.3㎝の胴部中央部分に２条の粘土紐が巡り，少なくとも３条の粘土紐が羽状に貼り付けられる。粘土紐上には浅い刻目が施される。外面には貝殻肋３単位幅20㎜の連点文が縦位に施される。連点文が縦位に施される位置は，突帯が交差する上下と想定される。突帯と連点文の間には極細の沈線が施されている。内面は粗いナデによる器面調整である。連点文と粘土紐の前後関係は明らかでない。66は縦位と斜位の貼付文に貝殻肋による浅い刻目を施し，間を沈線で羽状に埋めている。

67は丸底の底部付近である。貝殻肋２単位幅16㎜の大型の二枚貝で連続した刺突文を巡らす。その上から斜格子状の浅い沈線が描かれている。外面はミガキ様のナデで内面はナデによる。斜格子部分には赤色顔料が施される。赤色顔料を分析した結果，鉄分を多く含むことからベンガラによるものであることが解った。出土区は離れているが，施文具が類似することと赤色顔料が塗布されている点から，６との関係性も否定できない。

Ⅲ類土器

68～73は，１個体ずつしかみられず，時期的には深浦式土器の新しい段階から次の春日式土器の古い段階と重なる時期のものと考えられる。

68はくびれた胴上部から大きく外開きし，内湾気味に立ち上がる口縁部である。復元した口径は34.4㎝を測る。口縁部に沿って刻目のない細めの突帯が３条巡り，口唇部は丸くおさめる。口唇部に刻目はなく，口縁部内面にも文様はみられない。外面は斜位の貝殻条痕の後，縦位の貝殻条痕を強調するように施している。内面は交差した斜位の貝殻条痕がみられる。このタイプの土器は，上水流遺跡（南さつま市）でまとまって出土したことから，上水流タイプと呼ばれている。深浦式土器に伴う例も多く，口縁部を除く全体の器形は春日式土器に近い。上水流遺跡での付着炭化物による炭素年代値が4550±40yr BPで暦年較正年代は2940－2850calBC（72.5％）であることから，縄文時代前期末～中期前半に位置づけられる。この土器の外面にも煤が付着していることから，機会があれば年代測定用のサンプルとして良好な資料である。

69はほぼ直行する口縁部である。口縁部下に細い粘土紐を巡らし，貝殻腹縁刺突による刻目を施す。その下には右下から左下の順に斜位の沈線で斜格子文を描く。口唇部は尖り気味で，貝殻腹縁刺突による刻目を施す。内外面とも貝殻条痕による器面調整である。斜格子の文様は一般的ではないが，鞍谷遺跡（枕崎市）などで出土している。また，深浦式土器で左右から斜位の沈線を施したとき，重なる部分が斜格子文に見える場合もある。

70は内湾気味の口縁部で，口唇部に接した箇所とその下に低い突帯をもつ。下位の突帯は直線ではなく，緩い弧を描くと想定される。口唇部や突帯に刻目はみられない。内面は横方向の貝殻条痕で，外面は縦方向に近い斜位の粗いナデである。68や71・73とともに同時期頃のものと考えられる。深浦式土器鞍谷段階から春日式土器の古い段階に位置づけられると考えられる。

71は締まりのある頸部から内湾する口縁部の波頂部である。内外面とも貝殻条痕による器面調整で，外面は軽くナデている。文様や口唇部の刻目はみられない。口縁部が内湾する土器は春日式土器にみられるが，春日式土器の口縁部の内湾は強い例が多く，春日式土器と断定するには躊躇する。時期的には縄文時代中期前半と考えられる。

72はわずかに外開きして直行する口縁部である。内外面とも貝殻条痕による器面調整のみで，文様はみられない。口唇部に貝殻腹縁の刺突による刻目がある。時期を特定するのは難しいものの，この類で紹介することとする。

73は単節Ｒ撚りの縄文か貝殻の細かな肋を押圧したものか見分けのつかない土器である。１㎝あたり７つの単位がある。外面全面に施文され，内面は丁寧なナデである。器壁は５㎜で薄いが，焼成は良好で硬質である。胎土に金色雲母や丸みのある小礫を含む。地元では見かけない胎土や施文であり，搬入品と考えられる。全面に縄文を施すのは，瀬戸内系の大歳山式や船元式土器があり，これらの影響を受けたものと想定される。相美伊久雄氏により船元式土器との教示を得た。

円盤状土製加工品

74は64×51㎜，重さ37.9ｇの楕円形で，加工途中と考えられる円盤状土製加工品である。貝殻肋３単位幅14㎜の連点文が縦横にみられる。75は径約43㎜の円盤状土製加工品の破片である。およそ半分の重さは，8.9ｇである。貝殻肋３単位幅11㎜の連点文がみられる。

文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010 『上水流遺跡４』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（150）
枕崎市教育委員会　1990 『鞍谷遺跡』枕崎市発掘調査報告書（６）

第７表　縄文時代前期～中期包含層出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土						取上番号	備考	写真図版
						外面	内面	外面	内面	石英長石	角閃石輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	その他			
24	4	深鉢	Ⅰ	D-33	Ⅳb	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗褐	褐	◎	○					104561	-	4
	5	深鉢	Ⅰ	F-25	Ⅳb	ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙	橙	◎	○					40457	-	4
25	6	深鉢	Ⅱa	C·D-32·32	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	褐灰	にぶい橙	◎	○					104616他	赤色顔料 貝殻刺突線文	4
	7	深鉢	Ⅱa	D·E-25	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい橙	◎	○					40912他	貝殻刺突線文	4
26	8	深鉢	Ⅱa	E-38	Ⅳb	ナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	◎	○					102125	-	4
	9	深鉢	Ⅱ	E-38	Ⅳb	ナデ	条痕→ナデ	橙	にぶい橙	◎	○					101449他	-	4
	10	深鉢	Ⅱ	E-38	Ⅳb	ナデ	条痕→ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	◎	○					102048他	炭素年代測定	4
27	11	深鉢	Ⅱa	B-23·D-24	Ⅳb·Ⅴa	貝殻条痕	貝殻条痕	灰褐	にぶい褐	◎	○					39277他	-	4
	12	深鉢	Ⅱa	C-34	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい赤褐	◎	○					103836他	貝殻刺突線文	4
	13	深鉢	Ⅱa	C-27	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい黄橙	◎	○					44330他	貝殻刺突線文	4
	14	深鉢	Ⅱa	C-20·21	Ⅳa	丁寧なナデ	貝殻条痕→ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	◎	○					8360他	貝殻刺突線文 煤付着	4
	15	深鉢	Ⅱa	C-36	Ⅳb	貝殻条痕後押引文	貝殻条痕→ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	◎	○					103453他	-	-
	16	深鉢	Ⅱa	E-38	Ⅳb	ナデ	貝殻条痕→ナデ	褐灰	褐灰	◎	○					102114	-	4
	17	深鉢	Ⅱ	C-37	Ⅳb	ナデ	粗い条痕	灰褐	にぶい褐	◎	○					103185他	補修孔	4
28	18	深鉢	Ⅱa	D-23·24	Ⅳb·Ⅴa	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	橙	◎	○					36909他	-	5
	19	深鉢	Ⅱ	C·E-23	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい褐	◎	○					56035他	-	5
	20	深鉢	Ⅱa	D-22	Ⅴ	ナデ	貝殻条痕→ナデ	灰褐	にぶい橙	◎	○					18739他	-	5
	21	深鉢	Ⅱa	E-25	Ⅳb	条痕→ナデ	条痕→ナデ	褐灰	にぶい褐	◎	○					40932他	-	5
	22	深鉢	Ⅱ	D·E-25	Ⅳb	ナデ	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい褐	◎	○					40930他	-	5
29	23	深鉢	Ⅱa	B·C-23～25	Ⅳb	貝殻条痕	丁寧なナデ	灰褐	灰黄褐	◎	○					36887他	-	5
	24	深鉢	Ⅱa	B-25	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい黄橙	◎	○					40988他	-	5
	25	深鉢	Ⅱ	B-25	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい黄橙	◎	○					40412他	-	5
	26	深鉢	Ⅱa	B·C-31	Ⅳb	貝殻条痕	貝殻条痕	黄灰	暗灰黄	◎	○					221他	炭素年代測定 貝殻刺突線文	5
	27	深鉢	Ⅱa	E-38	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	褐灰	にぶい黄橙	◎	○					102124	-	5
30	28	深鉢	Ⅱ	B～E-23	Ⅳa·Ⅳb	ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	灰褐	◎	○					55318他	貝殻刺突線文	6
	29	深鉢	Ⅱ	B～E-23	Ⅳb·Ⅴa	ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい褐	◎	○					56053他	貝殻刺突線文	6
	30	深鉢	Ⅱ	B-23	Ⅳa·Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	黒褐	明赤褐	◎	○					55308他	貝殻刺突線文	6
	31	深鉢	Ⅱ	B·C-23	Ⅳa·Ⅳb	ナデ	貝殻条痕	明赤褐	にぶい黄褐	◎	○					55404他	貝殻刺突線文	6
	32	深鉢	Ⅱ	D-25·27	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	◎	○					42208他	補修孔	6
	33	深鉢	Ⅱ	D·E-21·22	Ⅳb	ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	灰黄	○	○	○			礫	7650他	貝殻刺突線文	6
	34	深鉢	Ⅱ	E-28	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	褐灰	灰黄褐	◎	○					44351他	炭素年代測定	6
31	35	深鉢	Ⅱb	D-36	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	灰褐	◎	○					103073他	-	-
	36	深鉢	Ⅱb	E-40	Ⅳb	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	◎	○					101080	-	7
	37	深鉢	Ⅱb	B-25·27	Ⅳb	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい褐	◎	○					40408他	-	7
	38	深鉢	Ⅱb	D-22·23, E-24	Ⅴ	ナデ	ナデ	灰褐	にぶい橙	◎	○					16929他	-	7
	39	深鉢	Ⅱb	E·F-39	Ⅳb	貝殻条痕	ナデ	にぶい橙	灰褐	◎	○					100845他	-	7
	40	深鉢	Ⅱb	E-36	Ⅳb	貝殻条痕	貝殻条痕	褐灰	にぶい褐	◎	○					102873他	-	7
	41	深鉢	Ⅱb	D-22	Ⅳb	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄	◎	○					7647	-	7
32	42	深鉢	Ⅱb	E-21	Ⅴ	ナデ	貝殻条痕→ナデ	黄灰	浅黄	◎	○					8683	-	7
	43	深鉢	Ⅱb	E-22	Ⅳb	ナデ	貝殻条痕	灰黄褐	灰黄	◎	○					8691	-	7
	44	深鉢	Ⅱb	F-38	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	灰褐	にぶい黄橙	◎	○					101478他	-	7
	45	深鉢	Ⅱb	F-38	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい黄橙	◎	○					100869他	-	7
	46	深鉢	Ⅱb	F-34	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	ナデ	灰褐	にぶい橙	◎	○					102021	-	7
	47	深鉢	Ⅱb	D-34·36	Ⅳb·Ⅶa	貝殻条痕→ナデ	条痕	灰黄褐	にぶい赤褐	◎	○					102786他	-	7
	48	深鉢	Ⅱb	C-36	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	灰黄褐	黄灰	◎	○					103561	-	7
	49	深鉢	Ⅱb	C-26	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕	にぶい褐	にぶい黄橙	◎	○					43267	貝殻刺突線文	7
33	50	深鉢	Ⅱb	B-37·38	Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕→ナデ	褐灰	灰黄褐	◎	○					103009他	炭素年代測定	7
	51	深鉢	Ⅱ	B-29	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	淡黄褐	淡黄褐	◎	○					46594	-	7
	52	深鉢	Ⅱ	B-24	Ⅳb	丁寧なナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	◎	○					40981	-	7
	53	深鉢	Ⅱ	D-24	Ⅳb	貝殻条痕→ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	◎	○					42134	-	7
	54	深鉢	Ⅱ	B-24	Ⅳb	丁寧なナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	◎	○					39318	-	7
34	55	深鉢	Ⅱb	B～F-35～38	Ⅳa·Ⅳb	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい褐	◎	○					100066他	-	-
35	56	深鉢	Ⅱb	C·D-37·38	Ⅳa·Ⅳb	丁寧なナデ	貝殻条痕→ナデ	にぶい褐	にぶい褐	◎	○					102920他	貝殻刺突線文	-
	57	深鉢	Ⅱb	D-23	Ⅳb·Ⅴa	貝殻条痕→丁寧なナデ	貝殻条痕→ナデ	黄灰	にぶい黄	◎	○					55815他	-	8
	58	深鉢	Ⅱ	D-23	Ⅳb·Ⅴa	貝殻条痕→丁寧なナデ	貝殻条痕→ナデ	黄灰	にぶい黄	◎	○					55646他	-	8
	59	深鉢	Ⅱ	D-23	Ⅴa	貝殻条痕→丁寧なナデ	貝殻条痕→ナデ	灰黄	にぶい黄	◎	○					56208	-	8
36	60	深鉢	Ⅱb	C～E-21	Ⅴ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄褐	灰黄褐	◎	○					8440他	炭素年代測定	-
	61	深鉢	Ⅱb	D-24	Ⅳb	縦方向の条痕	横方向の貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄	◎	○					39289他	補修孔	8
37	62	深鉢	Ⅱb	D-35,E-37	Ⅳb	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○				礫	102826他	-	8
	63	深鉢	Ⅱb	C-34	Ⅳb	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○				礫	104132	-	8
	64	深鉢	Ⅱb	D·E-34·35	Ⅳb	丁寧なナデ	ケズリ様のナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	○				礫	102829他	-	8
	65	深鉢	Ⅱb	E-37	Ⅳb	ナデ	粗いナデ	暗灰黄	にぶい黄	◎	○					103086他	-	8
	66	深鉢	Ⅱb	B·C-31	Ⅳa	丁寧なナデ	ケズリ様のナデ	暗灰黄	にぶい黄橙	◎	○					180	-	8
	67	深鉢	Ⅱ	C-33	－	ミガキ様のナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	◎	○					カクラン	赤色顔料	8
38	68	深鉢	Ⅲ	C-32	Ⅳb	縦方向の貝殻条痕	斜位の貝殻条痕	褐灰	灰黄褐	◎	○					104574他	-	8
	69	深鉢	Ⅲ	E-24	Ⅳb	貝殻条痕	貝殻条痕	暗灰黄	暗灰黄	◎	○					42154	-	8
	70	深鉢	Ⅲ	E-23	Ⅳb	粗いナデ	貝殻条痕	にぶい黄	にぶい黄	◎	○					56247	-	8
	71	深鉢	Ⅲ	E-38	Ⅳb	貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐	灰黄	◎	○					101447	-	8
	72	深鉢	Ⅲ	C·D-24	Ⅳb	貝殻条痕	貝殻条痕	灰黄褐	にぶい黄橙	◎	○					36906他	-	8
	73	深鉢	Ⅲ	F-39	Ⅳb	ナデ	丁寧なナデ	暗灰黄	にぶい黄	◎	○				礫	101092	-	8
	74	円盤状土製加工品	Ⅱ	C-20	Ⅳb	ナデ	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい褐	◎	○					18743	円盤状土製加工品	8
	75	円盤状土製加工品	Ⅱ	D-23	Ⅴa	ナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	◎	○					56228	円盤状土製加工品	8

第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査

1　調査の方法

縄文時代後期前半の遺構･遺物はⅣ層～Ⅶ層から検出･出土する。Ⅳ層は，アカホヤ火山灰より上位の層である。Ⅳ層は，土層堆積が良好でない調査地点もあり，遺構は，検出面を基本としながらも，遺構埋土のパミス混入状況や色調等から判断し，帰属時期を決定した。遺物は出土層を基本としながら型式も考慮し，帰属時期の決定を行った。また，整理作業・報告書作成作業時に，発掘調査の所見や写真，周囲の遺物出土状況も吟味し，総合的に判断を行った遺構・遺物もある。

本遺跡では，Ⅳ～Ⅴ層が縄文時代前期から弥生時代初頭の遺物を包含する基本文化層であるが，土層堆積が良好でない調査地点もありⅥ層やⅦ層からも縄文時代後期前半の遺物が出土する。

遺構の実測については，個々の検出状況の写真撮影後，各遺構を手実測を中心として実施した。実測の方法は，長軸を設定し，長軸に対して直交する短軸を設定後，長軸方向のベルトを残すなどして行った。

出土遺物は，グリッド毎にトータルステーションで取り上げ，出土地点の記録を行った。

第１節　遺構

1　縄文時代後期前半の遺構

遺構検出面は，土色が明瞭に変化するアカホヤ火山灰上面での検出がほとんどであり，本来の生活面での検出はほぼできなかった。

縄文時代後期前半の遺構については，竪穴建物跡24基，土坑52基，集石69基，土器集中17ヵ所，埋設土器３基，立石遺構32基を検出した。

（1）竪穴建物跡（第45～96図）

縄文時代後期前半の竪穴建物跡は，遺構が単独に検出されたものや，他の遺構と重複するが全形を想定できるものを含め24基であった。尚，竪穴建物跡は記号SHで表記し，１から24番まで番号を振ってある。

遺構の記載順番は，西側のグリッド番号が小さい方から，また南から北側への順で記載している。

本報告書では，下記に示すように竪穴建物跡の各部分に名称を付し，遺構の詳細を報告した。

長　軸：検出面で，竪穴建物跡のほぼ中央を通り，長さが一番長い部分。
短　軸：長軸の中心と直交する部分。
深　さ：長軸ないし短軸でその竪穴建物跡の一番深い部分。

検出状況

縄文時代後期前半の竪穴建物跡は，調査区３・４区と調査区９・10区に南北に連なるように集中して分布する。環状に配置された可能性をもつ。15・16区にも２基が検出された。なおSH５・６，SH８・９，SH21・22は後者を下にして切り合って検出された。

形　状

竪穴建物跡の形状を把握するため，長軸と短軸から長短比を算出し，下記のように平面の形状を類型化した。

長　短　比：短軸÷長軸
隅 丸 方 形：長短比が0.7から１で数値が１に近いほど方形に近い。平面形の角に丸みを帯びる。
隅丸長方形：長短比が0.7未満で，数値が小さいほど横長に広がる。平面形の角に丸みを帯びる。
楕　円　形：長短比が0.7から１で，形状が円形に近い。
不　　明：平面形状が切り合い等によって全体の形状が分からない遺構

表８　竪穴建物跡の形状

形　状	基　数
隅丸方形	6
隅丸長方形	1
楕円形	15
不明	2

検出面の形状は，表８からわかるとおり，隅丸方形が６基と隅丸長方形１基と，楕円形15基，不明２基であった。

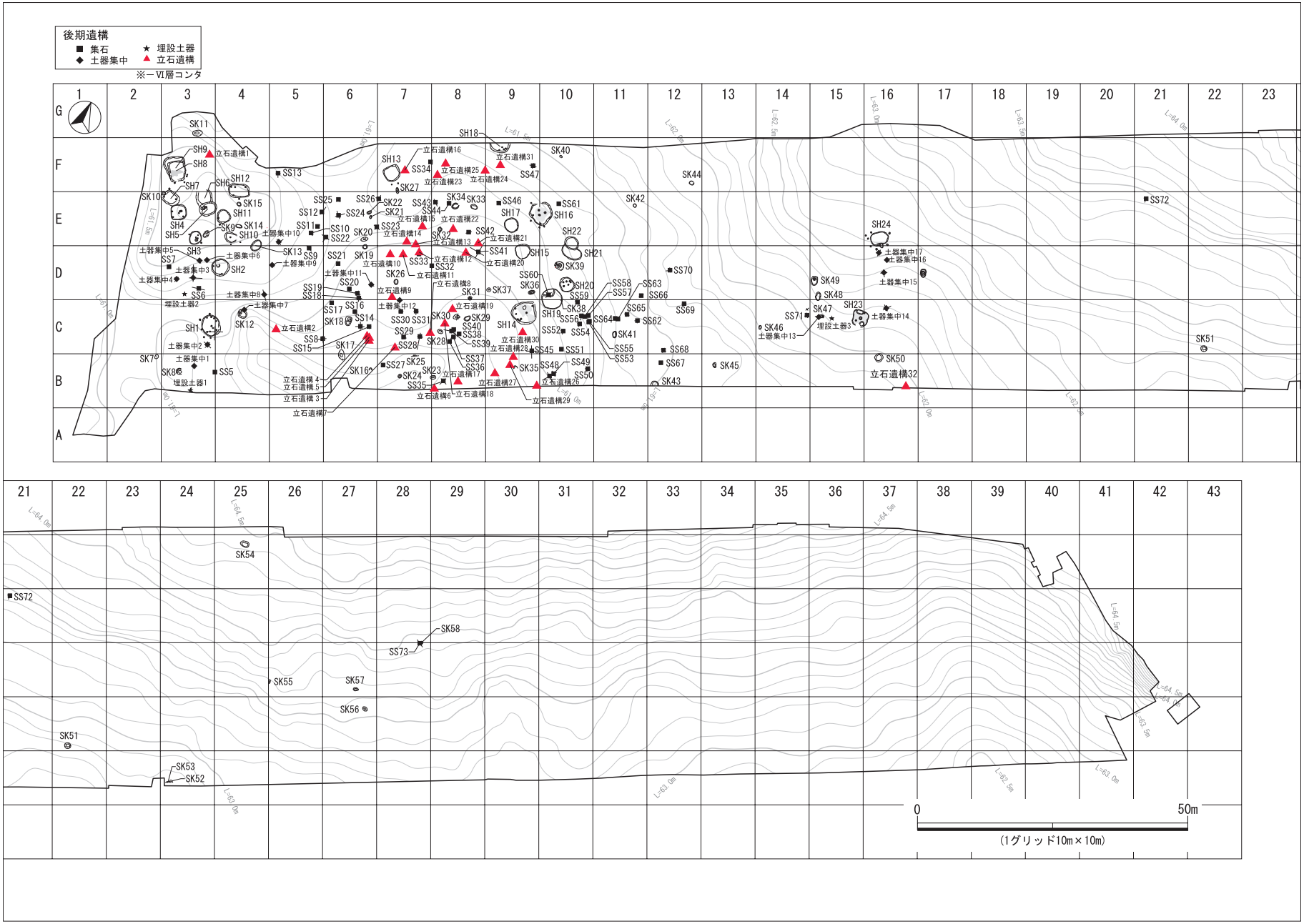
しかし，竪穴建物跡には床面に柱穴痕と考えられるピット及び炉跡の検出は少なく，竪穴建物跡の全体的な構造の解明には至らなかった。

規　模

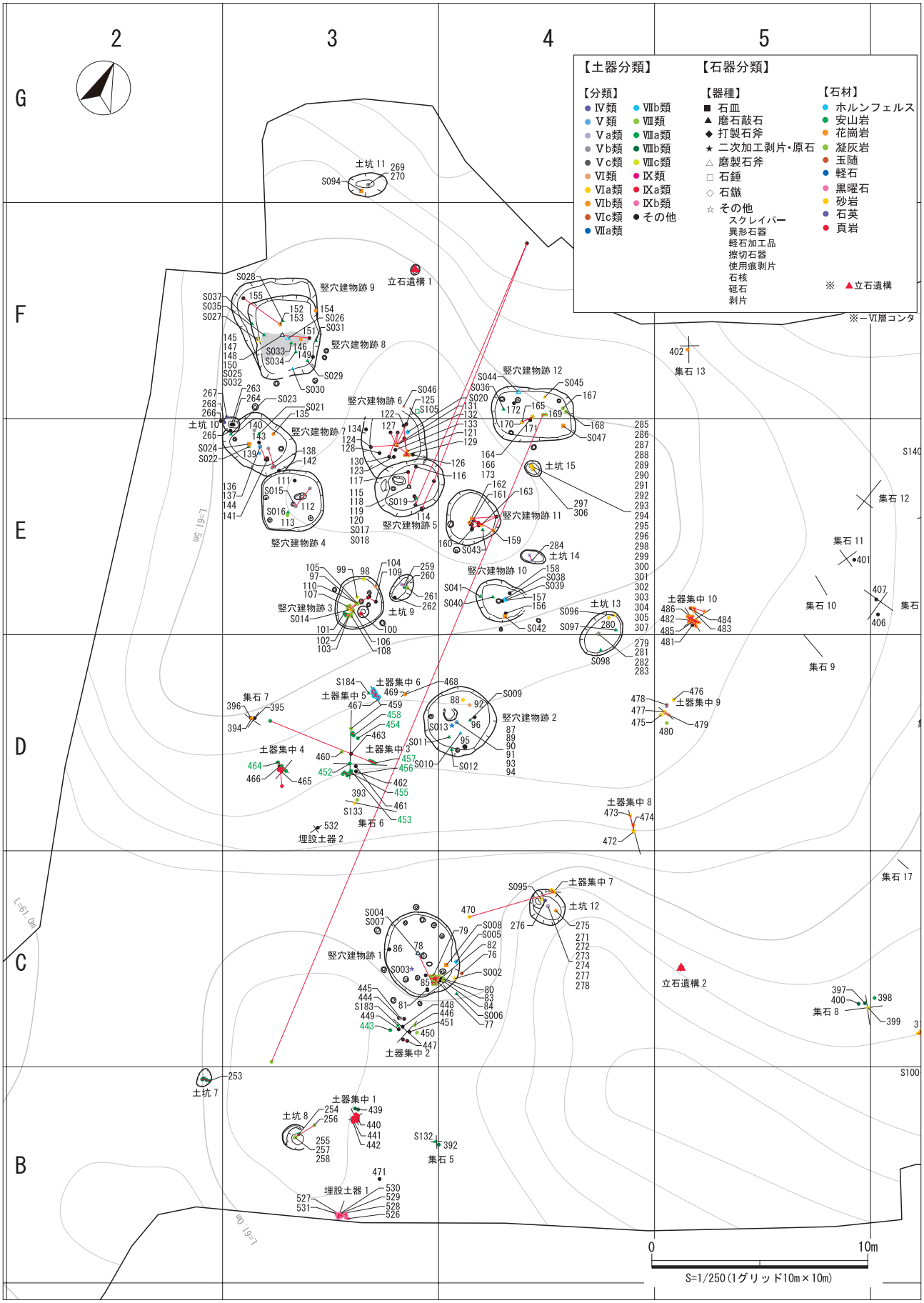
小牧遺跡Ⅳ層・Ⅴ層検出の縄文後期前半の竪穴建物跡の規模は，平均値が長軸（309.9㎝）短軸（287.0㎝）であり，最大値が長軸（448㎝）短軸（415㎝）で最小値が長軸（240㎝）短軸（190㎝）である。

尚，面積については，推定面積ソフトを活用し，図面から計算した。竪穴建物跡の検出面の面積は，平均値が約7.8㎡で，最大値が約15.38㎡，最小値が約3.48㎡である。

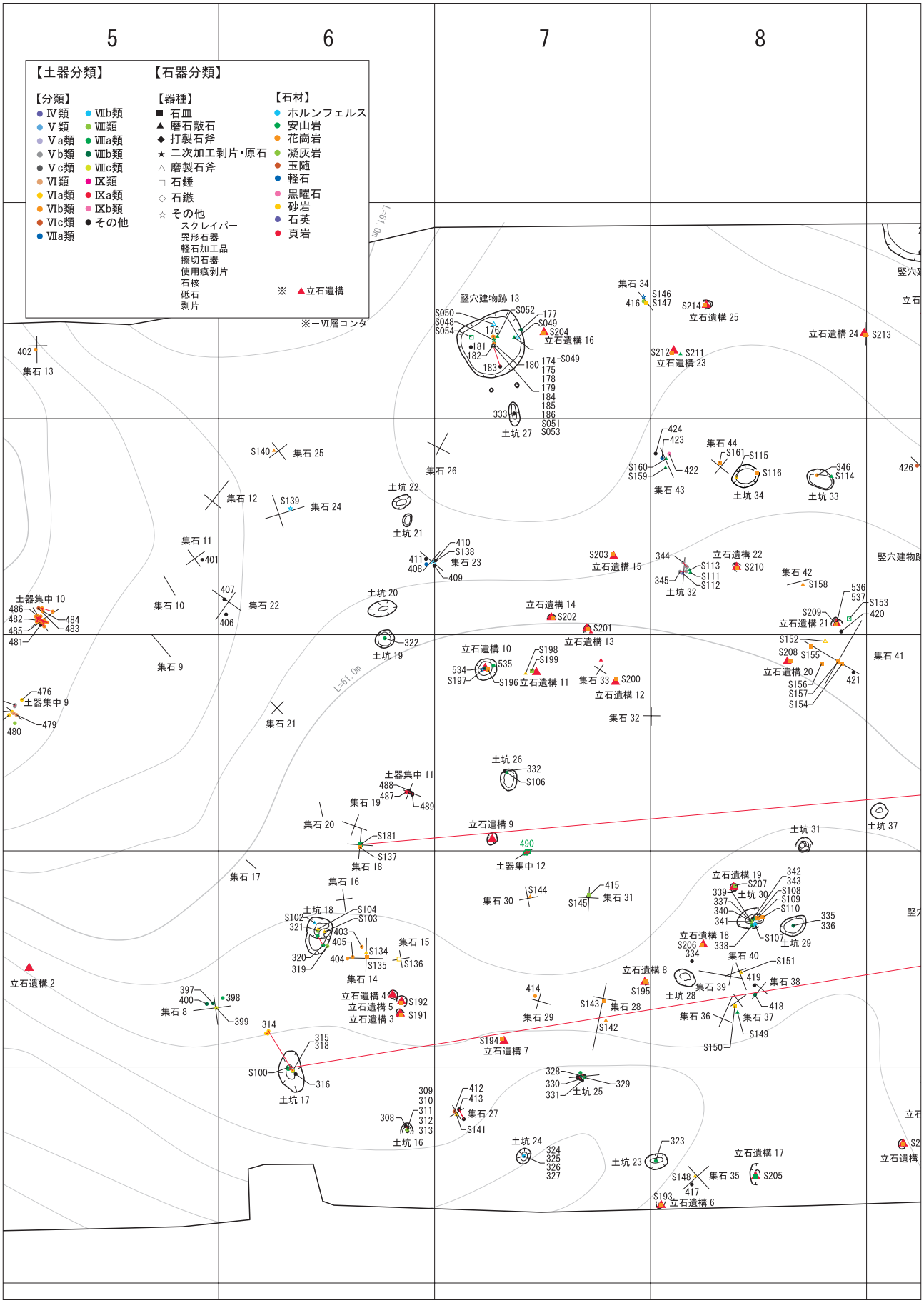
平均面積が約7.8㎡に対して，SH14の15.38㎡（楕円形）やSH９の15.12㎡（隅丸方形）は小牧遺跡の竪穴建物跡の中では大型の竪穴建物跡といえる。形状については，



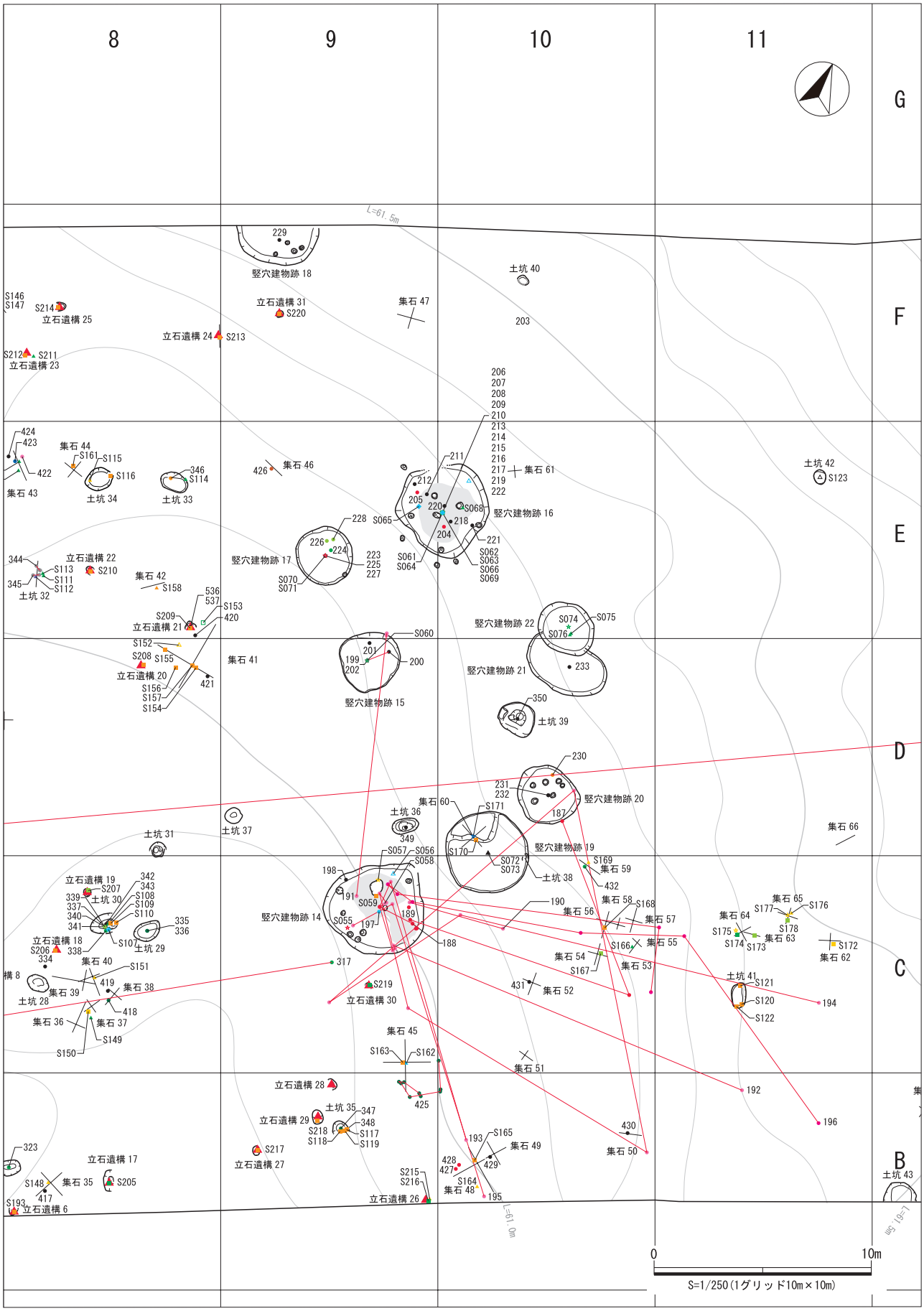
第39図　縄文時代後期遺構配置図



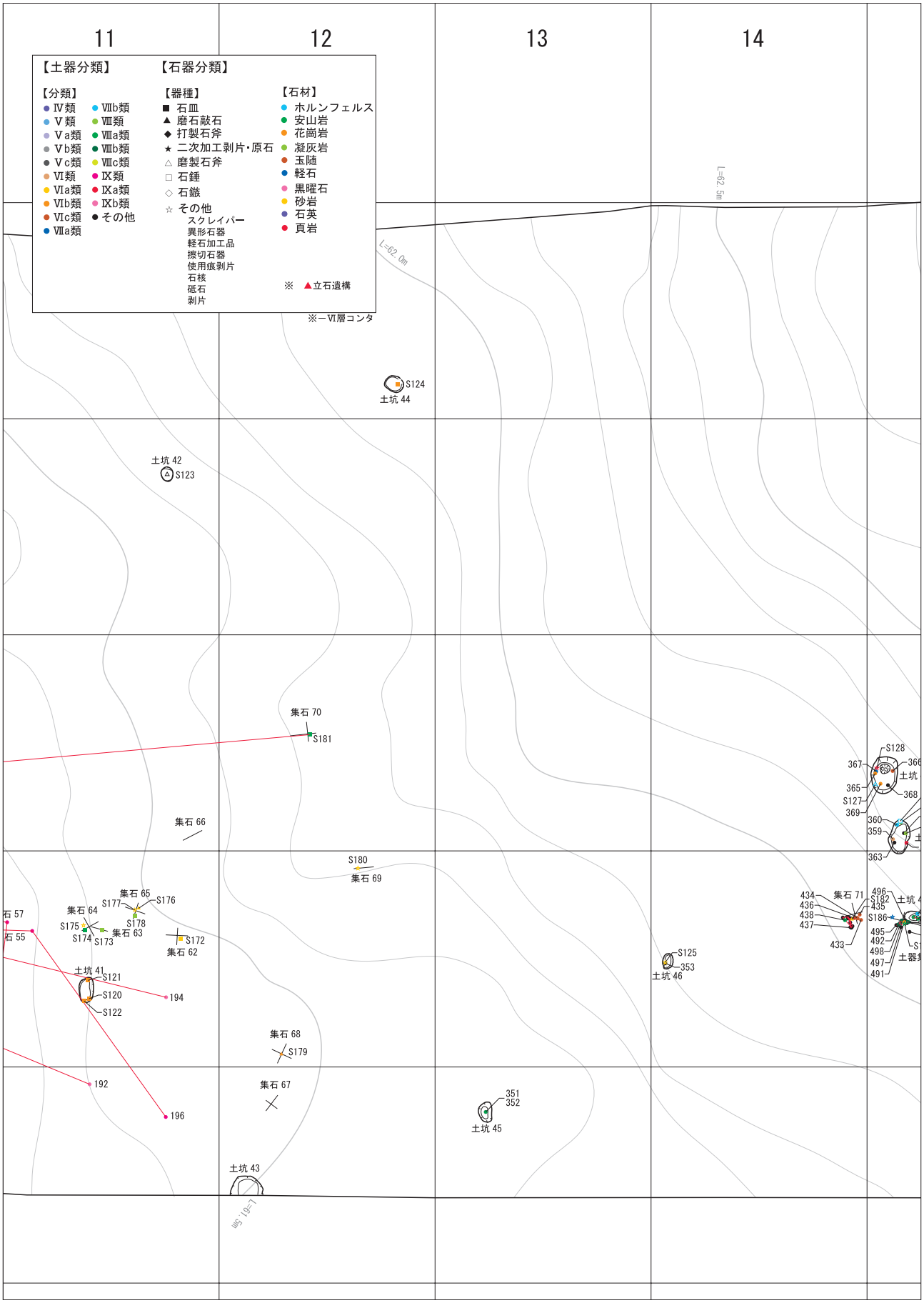
第40図　縄文時代後期遺物出土状況図（1）



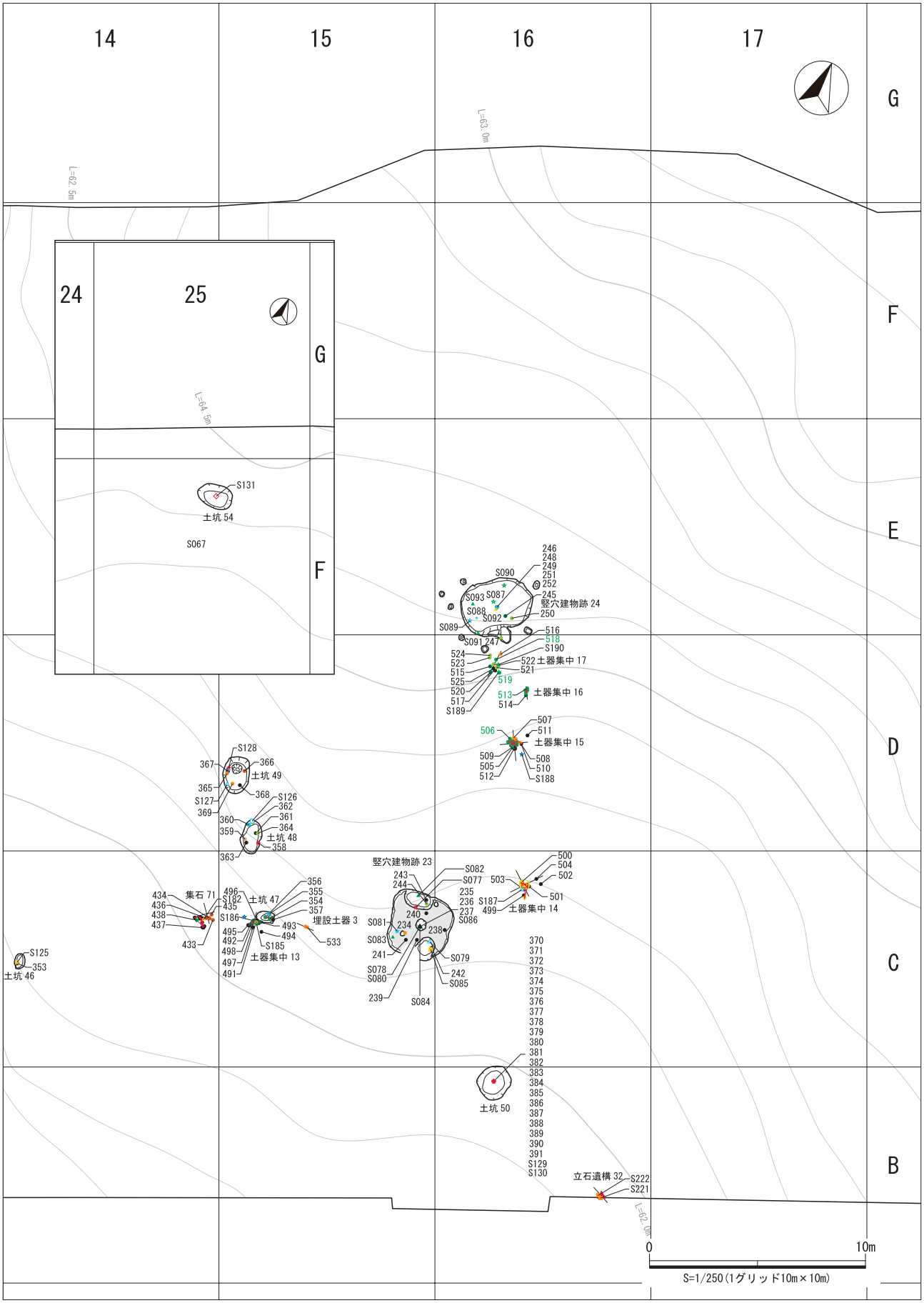
第41図　縄文時代後期遺物出土状況図（２）



第42図　縄文時代後期遺物出土状況図（3）



第43図　縄文時代後期遺物出土状況図（４）



第44図　縄文時代後期遺物出土状況図（５）

ほとんどが隅丸方形ないし隅丸長方形であるが，隅丸方形の平均面積が約8.5㎡で楕円形の平均面積が7.7㎡であり，少し隅丸方形が大きいが明瞭な違いというほどではなかった。

分布

竪穴建物跡は，小牧遺跡の西側である３区から16区にかけて検出されているが，竪穴建物跡の形状による土地利用の明確な区別はできなかった。隅丸方形であるSH13と楕円形であるSH11とSH16出土土器の付着炭化物の放射性炭素年代測定を行っている。SH13からの出土土器180は，暦年較正で3755±23yrBP，2209－2128calBC（確率69.09％）で，SH11からの出土土器162は暦年較正で3700±20yrBP，2144－2028calBC（確率89.93％），SH16からの出土土器204は暦年較正で3856±23yrBP，2410－2278calBC（確率66.59％）という結果を得た。竪穴建物跡の形状による時期差については，判断することができなかった。

竪穴建物跡１号（第45～47図）

検出状況

SH１は，C－３・４区のⅣb層において検出された。調査区の西側エリアにおいて，縄文時代後期の竪穴建物跡で最南部に位置する。

規模と形状

平面プランは楕円形で，長軸は3.86m，短軸は3.40mを測る。長短比は0.88，深さ約23㎝，遺構の推定面積は10.63㎡であった。中規模の浅い遺構である。外周に径約0.2～0.3m，検出面からの深さ約0.1～0.3mのピット５基，壁面付近に径約0.2m，深さ約0.3mのピット４基，中心部に径約0.3m，深さ約0.3mのピット１基を検出した。P1内には石皿の欠損品が認められたが，竪穴建物跡と伴うものであるかは不明である。

埋土

埋土は，灰黄褐色・にぶい黄褐色・褐色の３枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含みやや砂質土である。一部Ⅴa層土が混じる。

出土遺物

土器，石器は南東側の埋土①上層からまとまって出土した。一部は掘り込みの外にはみ出している状況であった。

76はⅥc類土器の深鉢の口縁部片である。口縁部直下に縦位の貝殻刺突を連続して施し，その直下に平行沈線を施す。78は中型で無文のほぼ完形に復元できた深鉢である。器面は貝殻条痕を施した後になでて仕上げられる。網代底で，底部中央が剥落する。内外面に煤が付着し，放射性炭素年代測定により3432±22yrBP，1775－1668calBC（74.96％）という結果が出ている。器形の特徴からⅧ類の範疇であると考えられる。77は外反する口縁部片で，Ⅷb類の特徴をもつ。79～82は胴部片である。79・80は文様の特徴からⅧ類土器の深鉢と考えられる。ナデ仕上げのものが多いが，81の器面には貝殻条痕が残る。83～86は底部片である。胴部に向かって開く器形であると推測され，底面には網代痕が明瞭に残る。底面には白色付着物がみられる。

S002は，砂岩製のスクレイパーである。右側縁に正面側から押圧剥離を施し片刃状の刃部を形成する。S003は，石英製の剥片である。使用の痕跡は判然とせず器種や用途は不明である。S004はホルンフェルス製の打製石斧Ⅳ類の基部片である。下辺は本来の刃部が欠損した後に押圧剥離を施し二次加工を行ったと推測される。風化が著しい。S005はホルンフェルス製の打製石斧片で表裏には局所的に研磨面を残す。基部側を欠損する。残存部下面と右側面が敲き潰れており，敲石への転用が考えられる。S006は安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ⅱa類である。上端に欠けた部分があるので紐掛けが作出され，石錘として転用あるいは使用された可能性もある。S007は安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ⅵ類でⅠ類の破片の可能性がある。S008は花崗岩製の石皿Ⅵ類で下半を欠く。中央部が凹み，凹みの中心に敲打痕が残る。特に正面・側面の被熱が顕著である。Ⅰ類もしくはⅡ類に該当する。

竪穴建物跡２号（第48・49図）

検出状況

SH２は，D－３・４区のⅤ層において検出された。

規模と形状

平面プランは楕円形で，長軸は3.20m，短軸は3.09mを測る。長短比は0.97，深さ約23㎝，遺構の推定面積は8.15㎡であった。壁面付近に径約0.2m，深さ約0.1～0.3mのピット３基と中央には，土坑１基を検出した。

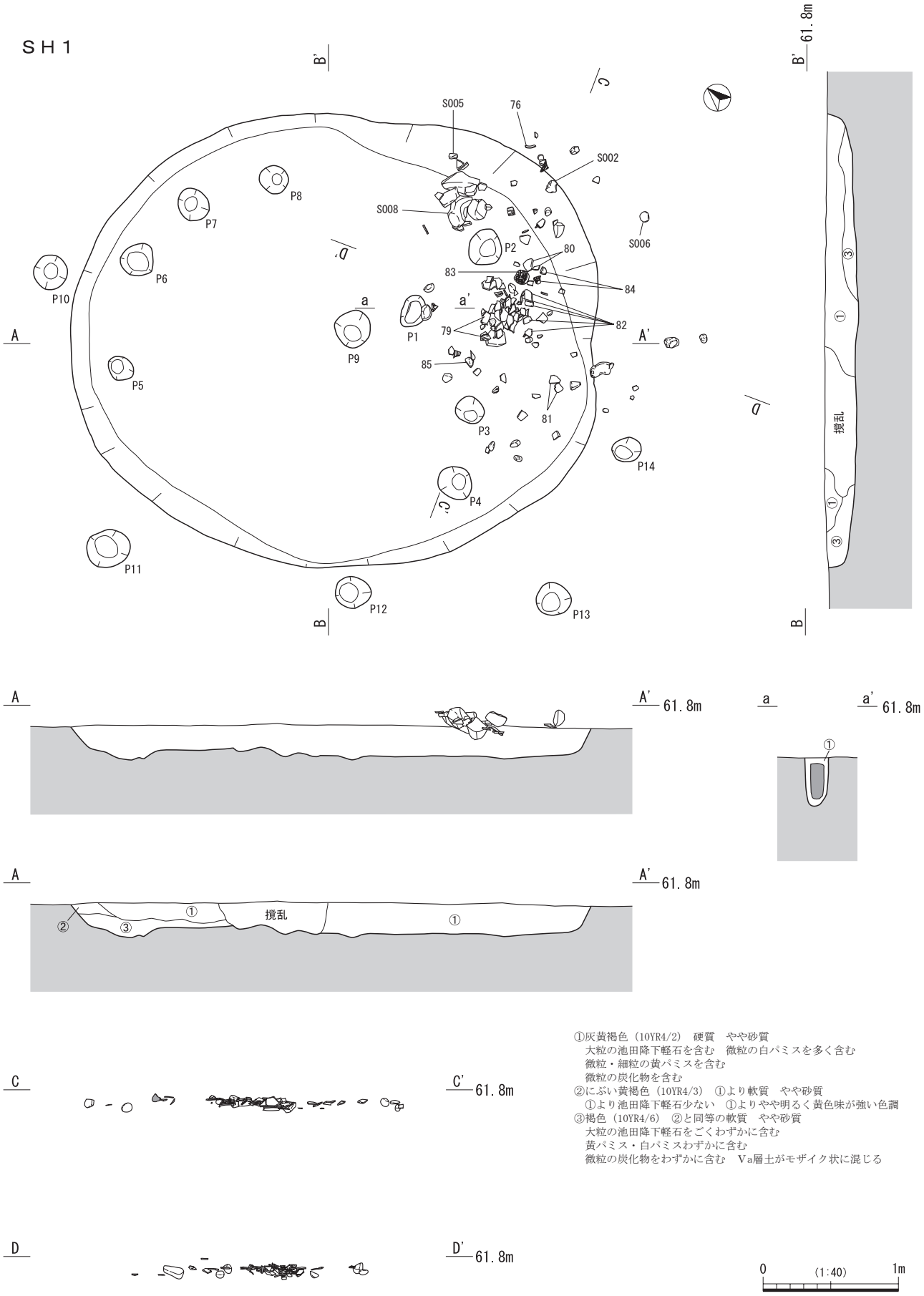
埋土

埋土は，褐色・黄褐色の２枚である。池田降下軽石，黄パミスや炭化物を含み，硬質土である。一部Ⅳb層が混じる。

出土遺物

土器小片は，掘り込みの中央よりやや西側の土坑あたりの埋土中～上位から少数出土した。

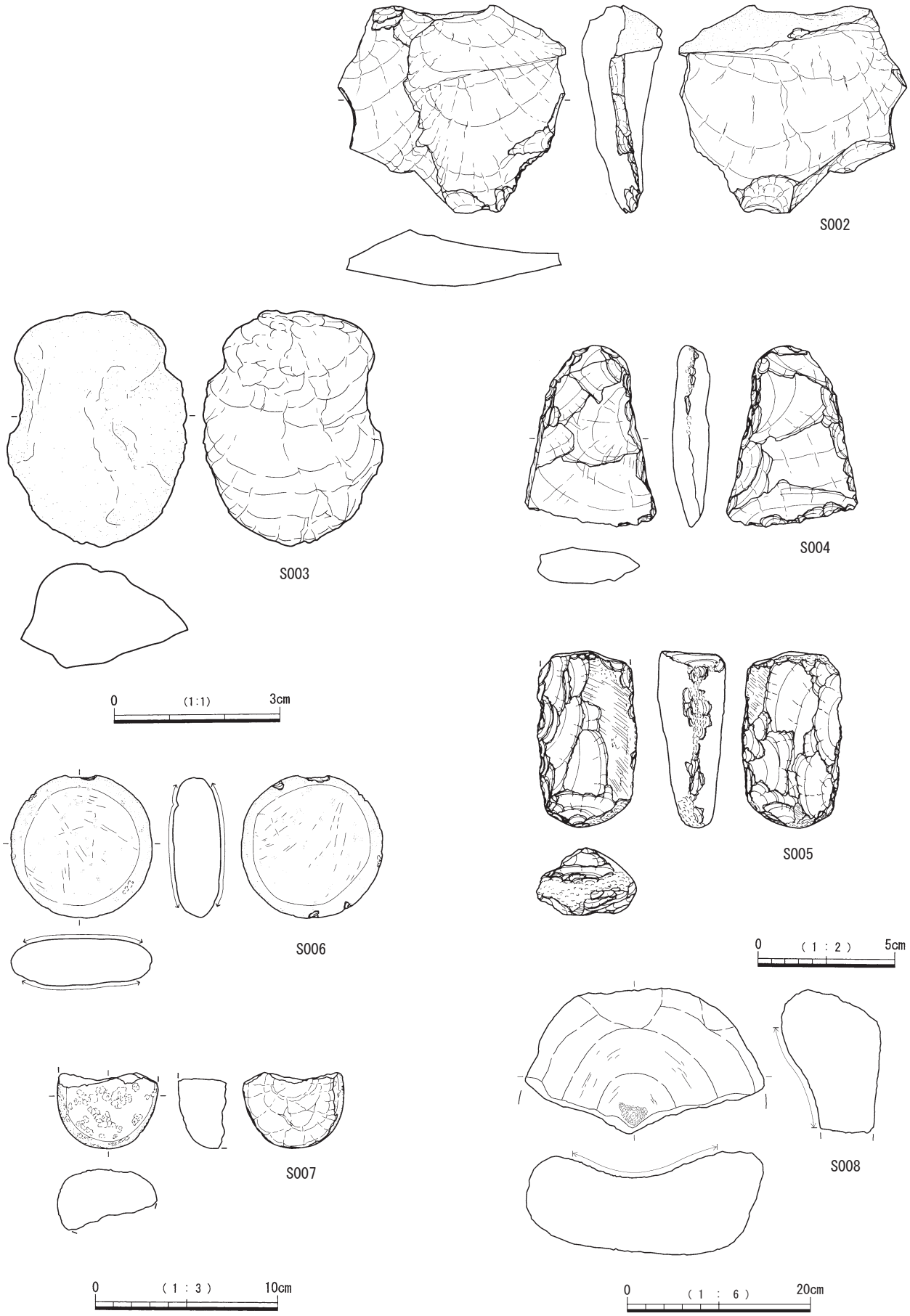
87～91は深鉢の口縁部片である。87は平坦口縁の上端に突起を有する。突起の口唇部と外面最上位に指頭による押圧を施す。Ⅴ類～Ⅵ類の時期の遺物と考えられる。88は波状の口縁部で，口唇部と外面上部に指頭による押圧を連続して施し，胴部上位に細い沈線文を施す。Ⅵa類と考えられる。90は口縁部小片で外面上位に浅い凹点を連続して施す。89は指頭による浅い押線文が描かれる。曲線的なモチーフの一部が残る。Ⅴ類の範疇と考えられる。竪穴建物跡２号出土土器の口縁部片は，やや外傾しながら直線的に開く傾向がみられる。91は口縁端部が内



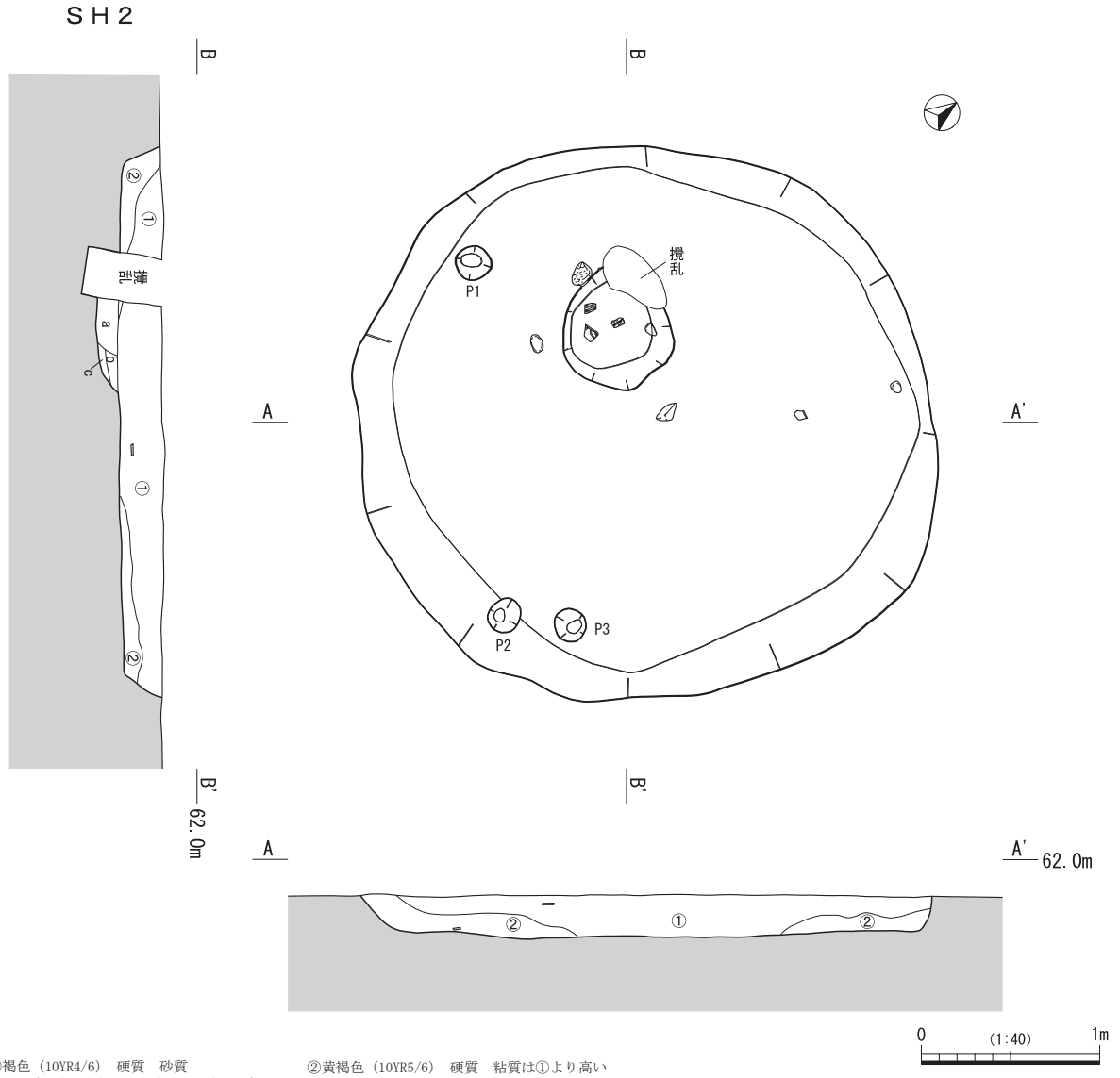
①灰黄褐色（10YR4/2）　硬質　やや砂質
　大粒の池田降下軽石を含む　微粒の白パミスを多く含む
　微粒・細粒の黄パミスを含む
　微粒の炭化物を含む
②にぶい黄褐色（10YR4/3）　①より軟質　やや砂質
　①より池田降下軽石少ない　①よりやや明るく黄色味が強い色調
③褐色（10YR4/6）　②と同等の軟質　やや砂質
　大粒の池田降下軽石をごくわずかに含む
　黄パミス・白パミスわずかに含む
　微粒の炭化物をわずかに含む　Va層土がモザイク状に混じる

第45図　竪穴建物跡１号

第46図　竪穴建物跡１号出土遺物（１）

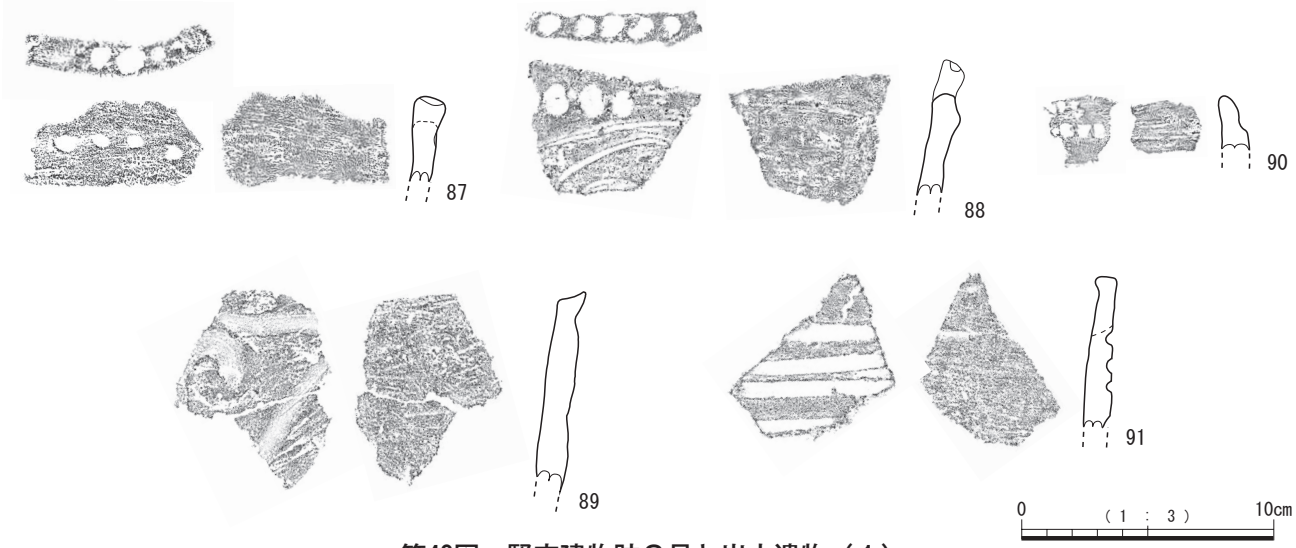


第47図　竪穴建物跡１号出土遺物（２）

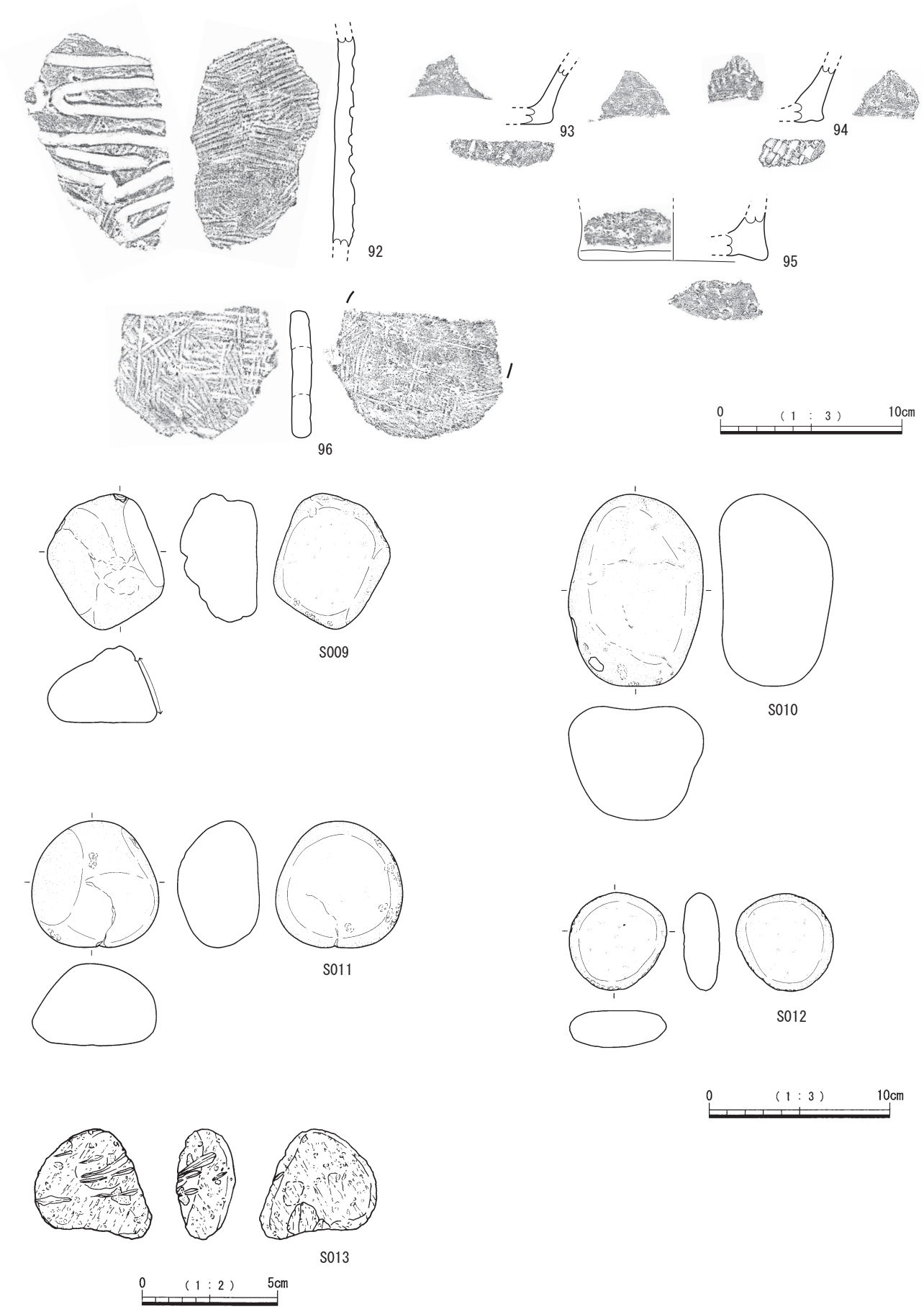


①褐色（10YR4/6）　硬質　砂質
　池田降下軽石（20mm以下）をまばらに含む
　黄色パミス（3mm以下）を含む
　炭化物（1mm以下）をごくわずかに含む
　Ⅳb層がまばらに混じる

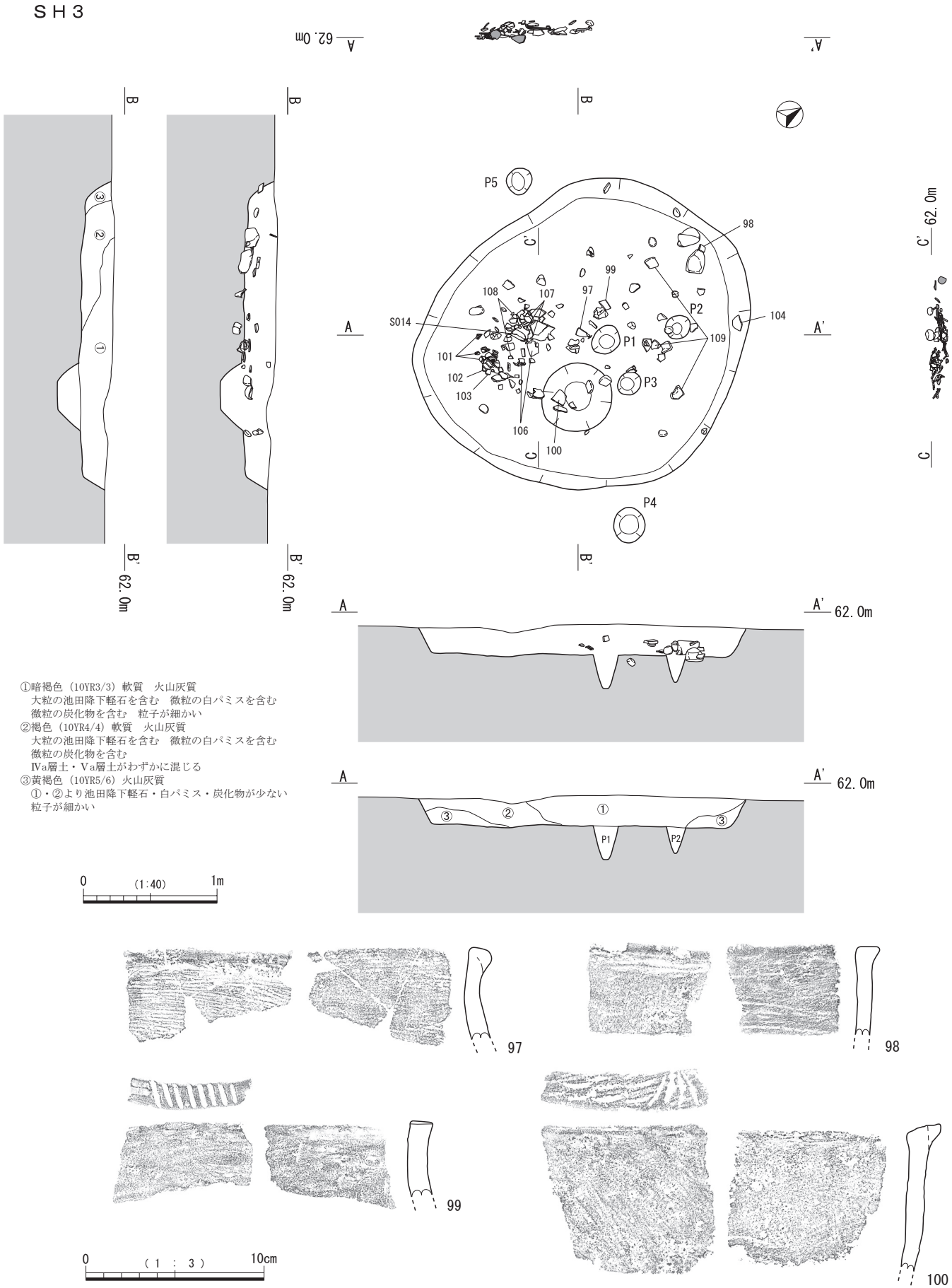
②黄褐色（10YR5/6）　硬質　粘質は①より高い
　池田降下軽石（5～20mm）をごくわずかに含む
　黄色パミス（3mm以下）を含むが①より少ない
　炭化物（1mm以下）をごくわずかに含む　Ⅳa層がわずかに混じる



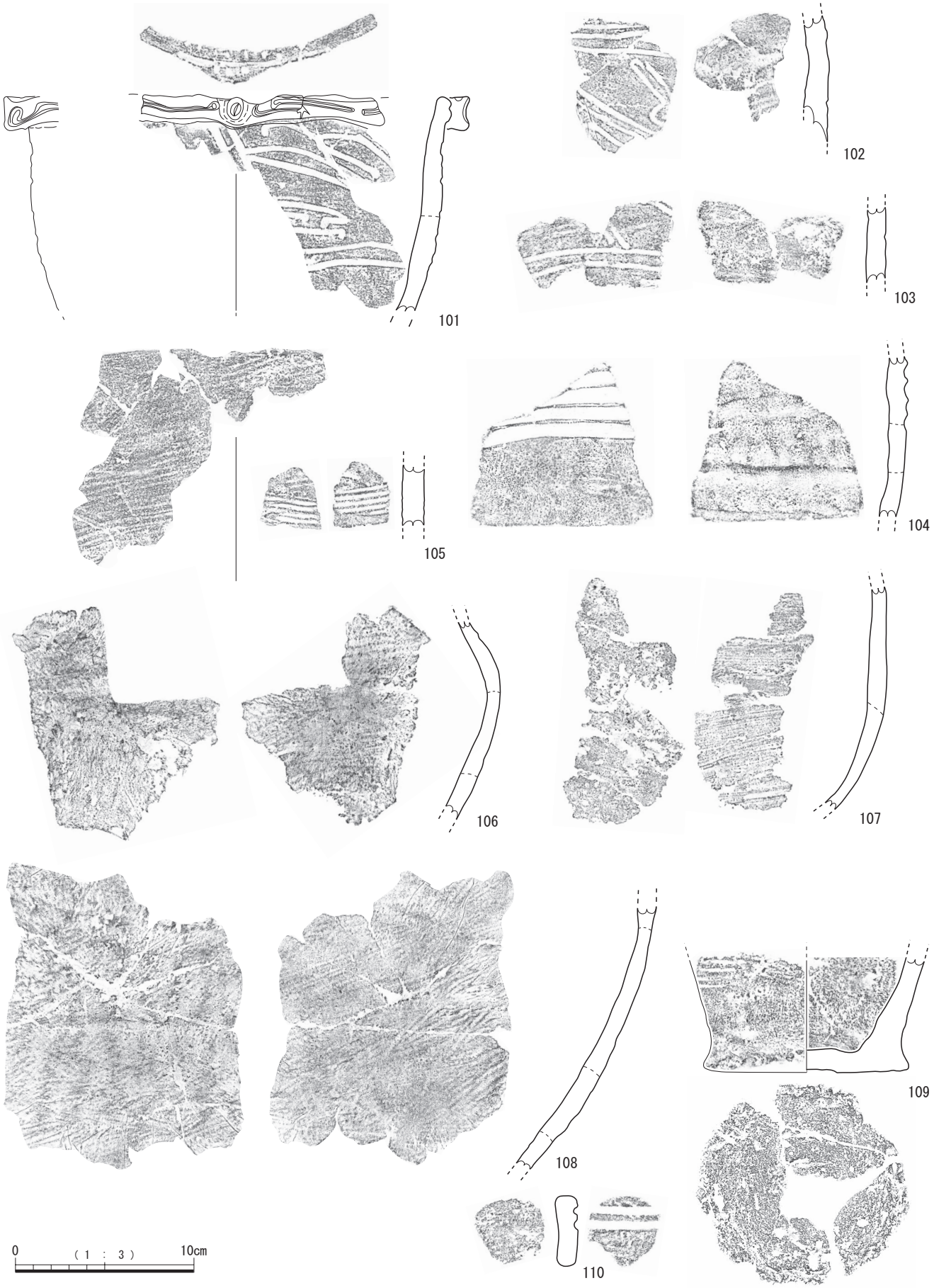
第48図　竪穴建物跡２号と出土遺物（１）



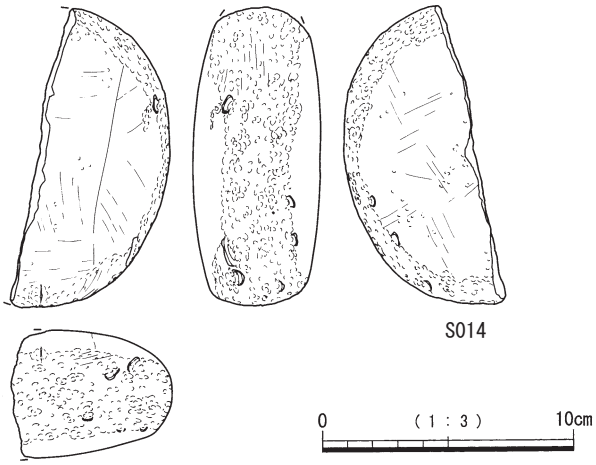
第49図　竪穴建物跡２号出土遺物（２）



第50図　竪穴建物跡３号と出土遺物（１）



第51図　竪穴建物跡３号出土遺物（２）



第52図　竪穴建物跡３号出土遺物（３）

面側にやや張り出す。口縁部直下に縦位の貝殻腹縁刺突文が確認できるためⅥc類に該当する可能性が高い。明瞭な横位の平行な凹線が確認できる。92は胴部片で，明瞭な凹線文を描き，貝殻条痕が内外面に残る特徴からⅥ類と考えられる。93～95は網代痕が残る底部小片で，裏に白色付着物がみられる。96は深鉢の胴部を用いた円盤状土製加工品が欠損したものである。内外面に方向性がやや不規則な貝殻条痕を残す。

S009～S012は磨・敲石で，S010はホルンフェルス製でそのほかは安山岩Ｂ類製である。形態としては，４点ともにⅠ類に属し，弱い敲打痕が部分的に確認できるのみで，使用の痕跡はごく薄いが，煤が付着することから被熱の痕跡が窺える。S013は三角形状の軽石製品で，正面・背面ともに平坦に面取られ，正面に線状の溝が数条確認できる。手持砥石の可能性もある。

竪穴建物跡３号（第50～52図）

検出状況

SH３は，Ｅ－３区のⅣb層において検出された。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は2.45m，短軸は2.31mを測る。長短比は0.94，深さ約23㎝，遺構の推定面積4.39㎡であった。外周に径約0.2m，深さ約0.1mのピット２基，中央部に径約0.2m，深さ約0.3mのピット３基，土坑１基を検出した。遺構内に炉跡，硬化面は確認されなかった。

遺物は北側の床面から，土器と石器が少数と，南側上層から土器片が多数，まとまりを持って出土した。

埋土

埋土は，暗褐色・褐色・黄褐色の３枚である。池田降下軽石，白パミスや炭化物を含み火山灰質である。一部Ⅳa層土・Ⅴa層土が混じる。

出土遺物

97～101は深鉢の口縁部片である。97～99は口縁端部をわずかに肥厚させ，口唇部に平坦面を形成する。97は口縁端部の外面側の稜は，丸みを帯びる。98・99は明瞭に角づけられ，99の口唇部には縦位・横位の沈線による文様帯が確認できる。胴部は無文であると推測され，器面は貝殻条痕により調整される。98の胴部上位には穿孔の痕が認められる。Ⅷc類に該当すると考えられる。100は幅広の口唇部を形成し，縦位・横位の貝殻腹縁刺突文を施す。口唇部はやや内傾しており，Ⅸa類の範疇と考えられる。101は，口縁部外面を肥厚させ，沈線を巡らせる。口縁部外面には大きな円形刺突を施し，口唇部はその直上で外側に張り出す。口唇部にも沈線文・刺突文を巡らせる。Ⅷa類と考えられる。102～108は胴部片である。文様の特徴から，104はⅥ類，102・103はⅧ類である可能性が高い。105～108は文様の特徴による分類は難しかったが，106・107のように丸みを帯びた胴部の形態は，本遺跡の場合はⅧ類土器に類例が多く出土している。109は底部で，底面は網代をナデ消し，白色付着物がみられる。110は胴部を用いた円盤状土製加工品である。

S014は砂岩製の磨・敲石Ⅱa類で，左半分程を欠損する。

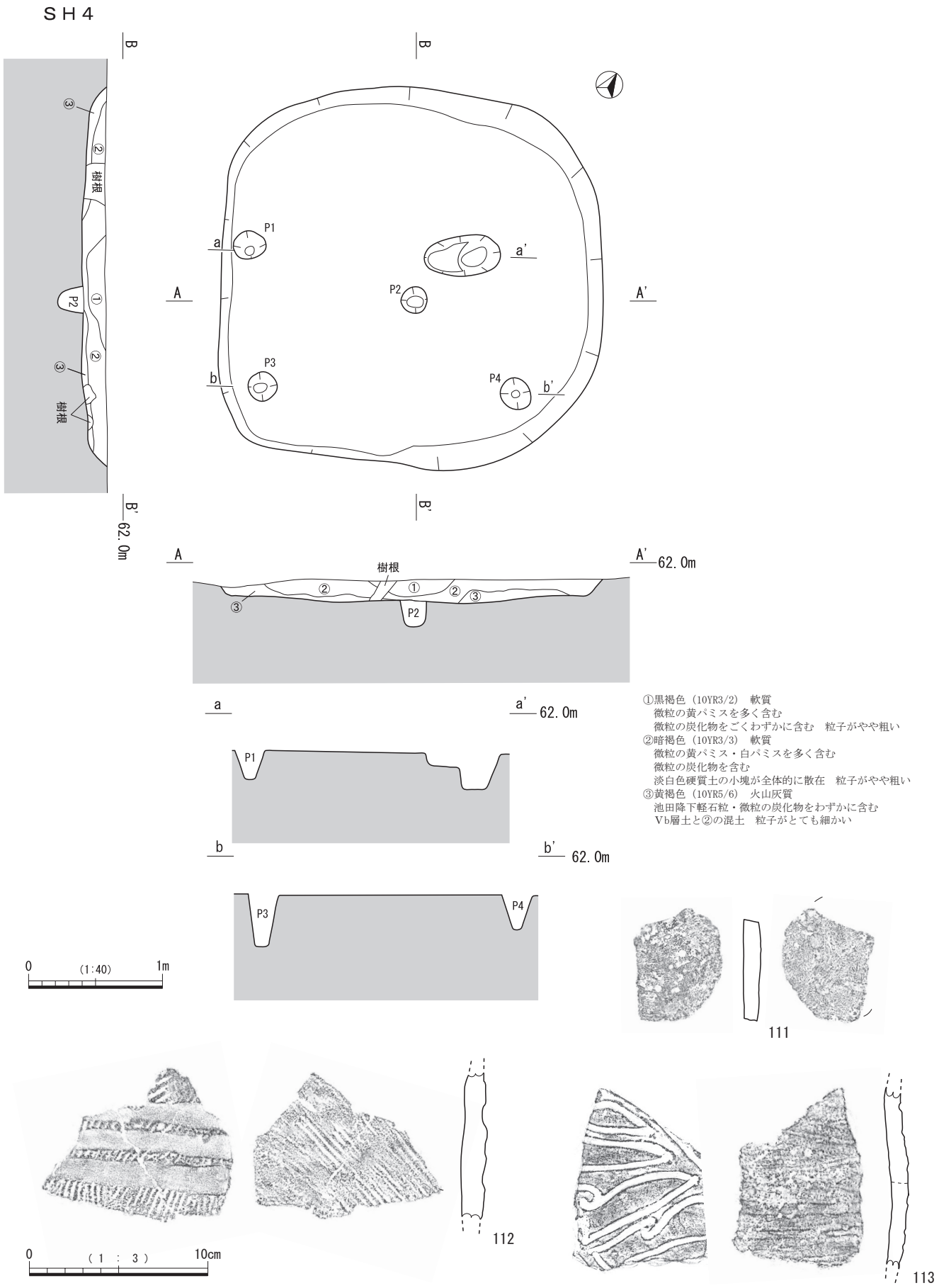
竪穴建物跡４号（第53・54図）

検出状況

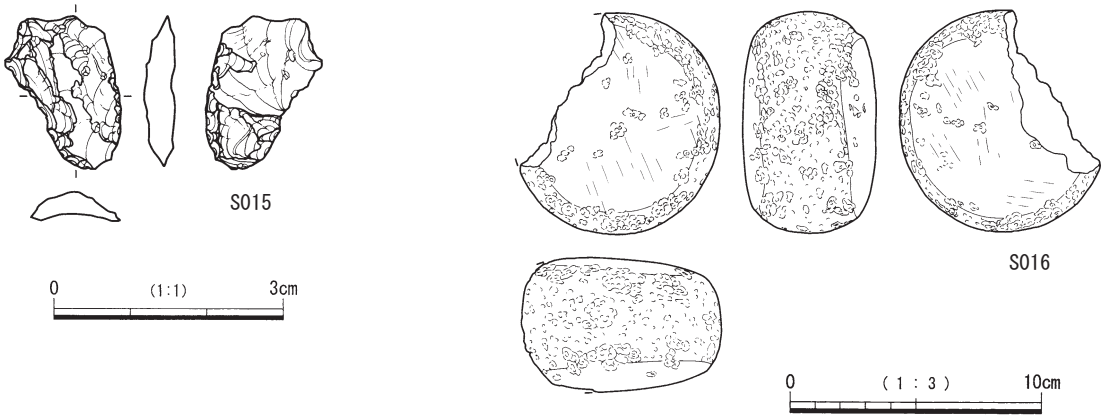
SH４は，Ｅ－３区のⅤ層において検出された。

規模と形状

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.87m，短軸は2.86mを測る。長短比は1.00，深さ約18㎝，遺構の推定面積は6.83㎡であった。壁面付近に径約0.2m，深さ約0.2～0.4mのピット３基，中央部に径約0.2m，深さ約0.2mのピット１基と土坑１基を検出した。土坑からは焼土・炭化物等は確認されず，炉跡とは考え難い。遺構内に硬



第53図　竪穴建物跡４号と出土遺物（１）



第54図　竪穴建物跡４号出土遺物（２）

化面は確認されなかった。

埋土

埋土は，黒褐色・暗褐色・黄褐色の３枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含みレンズ状に堆積している。一部Ｖb層土が混じる。

出土遺物

埋土から出土した土器は小片のみであったが，文様や形態に特徴があるものは，図化した。石器も数点出土した。

112・113は深鉢の胴部片で，112は指頭による太い凹線文を施し，器面に貝殻条痕を残す特徴からＶb類と考えられる。113は細めの沈線による平行沈線文を密に施し線の一部が入組状に描かれる。Ⅷ類と考えられる。111はやや大型の円盤状土製加工品で，無文である。内外面を粗くなでて仕上げられる。

S015は，黒曜石Ｃ類製の二次加工剥片である。石鏃未製品で石材に混じる不純物が影響し，製作中に欠損した可能性もある。S016は安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ⅱa類である。石鹸型で左上半を欠損する。

竪穴建物跡５号（第55・56図）

検出状況

SH５は，Ｅ-３・４区のＶ層において検出された。北側のSH６を切っている。

規模と形状

平面プランは楕円形で，長軸は3.28m，短軸は2.37mを測る。長短比は0.72，深さ約27㎝，遺構の推定面積は6.58㎡であった。壁面南西に径約0.2m，深さ約0.2mのピット１基，土坑１基を検出した。土坑からは焼土・炭化物等は確認されず，炉跡とは考え難い。硬化面は確認されなかった。

埋土

埋土は，にぶい黄褐色３枚・褐色・黄褐色の計５枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含み火山灰質である。

出土遺物

遺物は埋土①の上層から散片的に出土した。

114は大型の深鉢の胴部片である。胴部の最大径のあたりに細い沈線による矩形や渦巻き状のモチーフを横位に展開させる。色調は黄褐色で，角閃石の目立つ胎土を使用し，焼成は硬質で，Ⅵ類かⅧ類に該当する。115は口縁部片で，外面には指頭によって曲線的な凹線文が描かれる。117～120は底部片で，底面のごく一部が残存する。119の底面には網代痕が残り，120の底面には白色付着物がみられる。116は無文の胴部を用いた円盤状土製加工品で２つの破片の接合資料である。胴部は直線的に開くことが推測され，外面には粗い貝殻条痕を残す。

S017～S019は安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ｉ類である。煤の付着や被熱の痕跡が確認できる。S018は下面をよく使用している。S019は，下半分ほどを欠損し，破断面を敲打に使用している

竪穴建物跡６号（第57～59図）

検出状況

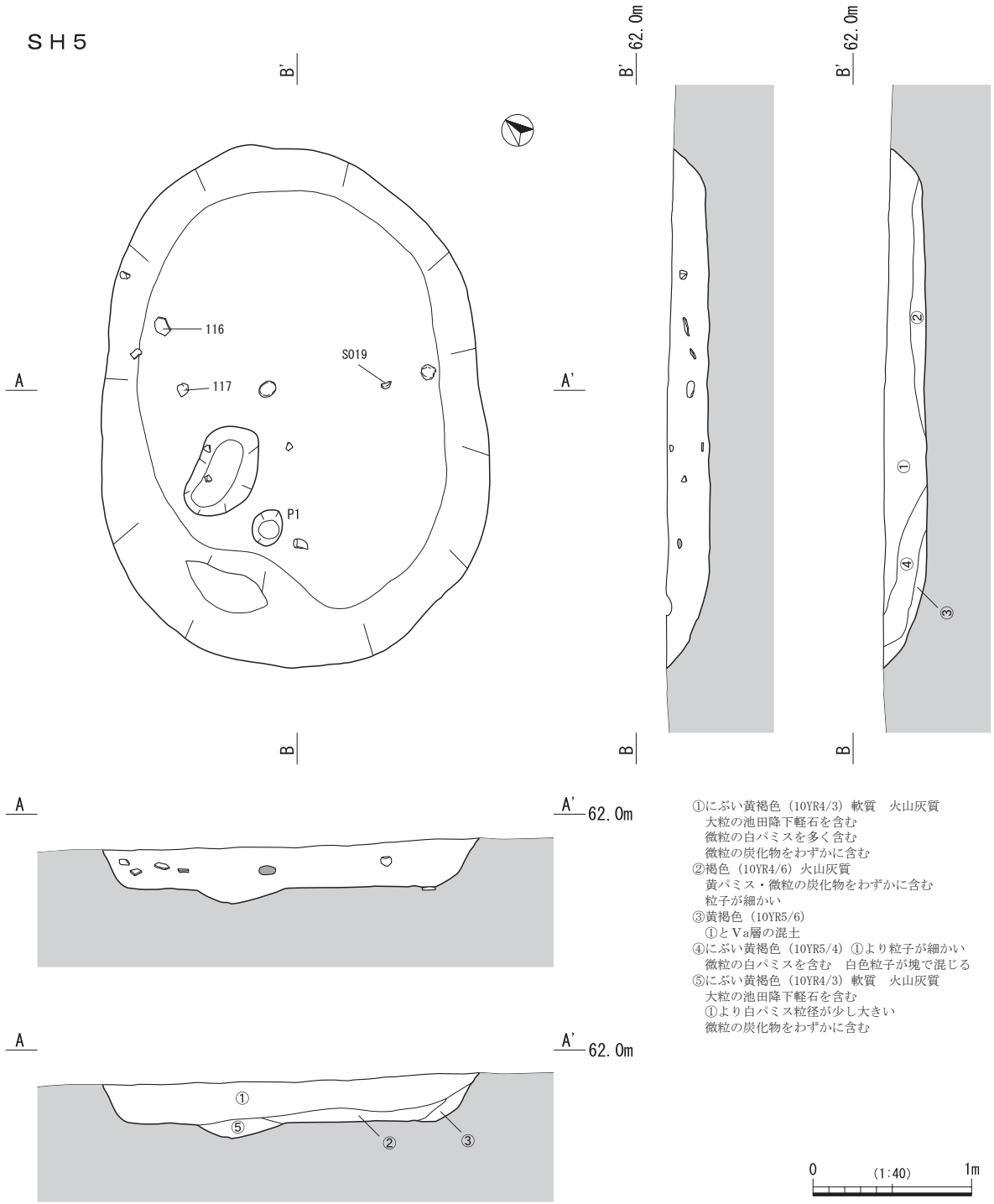
SH６は，Ｅ・Ｆ-３区のＶ層において検出された。北側をトレンチに，南側をSH５に切られる。

規模と形状

平面プランは，SH５との切り合いやトレンチによる削平のため不明で，長軸は2.96m，短軸は2.63＋αmを測る。深さ約43㎝，遺構の推定面積は6.30㎡であった。遺構内及び周囲からピット，炉跡，硬化面等は検出されなかった。遺物は全体的に上層から中層にかけ土器，石器等が出土した。

埋土

埋土は，褐色４枚・にぶい黄褐色の計５枚である。白パミス・黄パミスや炭化物を含み砂質で粒子が細かい。



第55図　竪穴建物跡５号

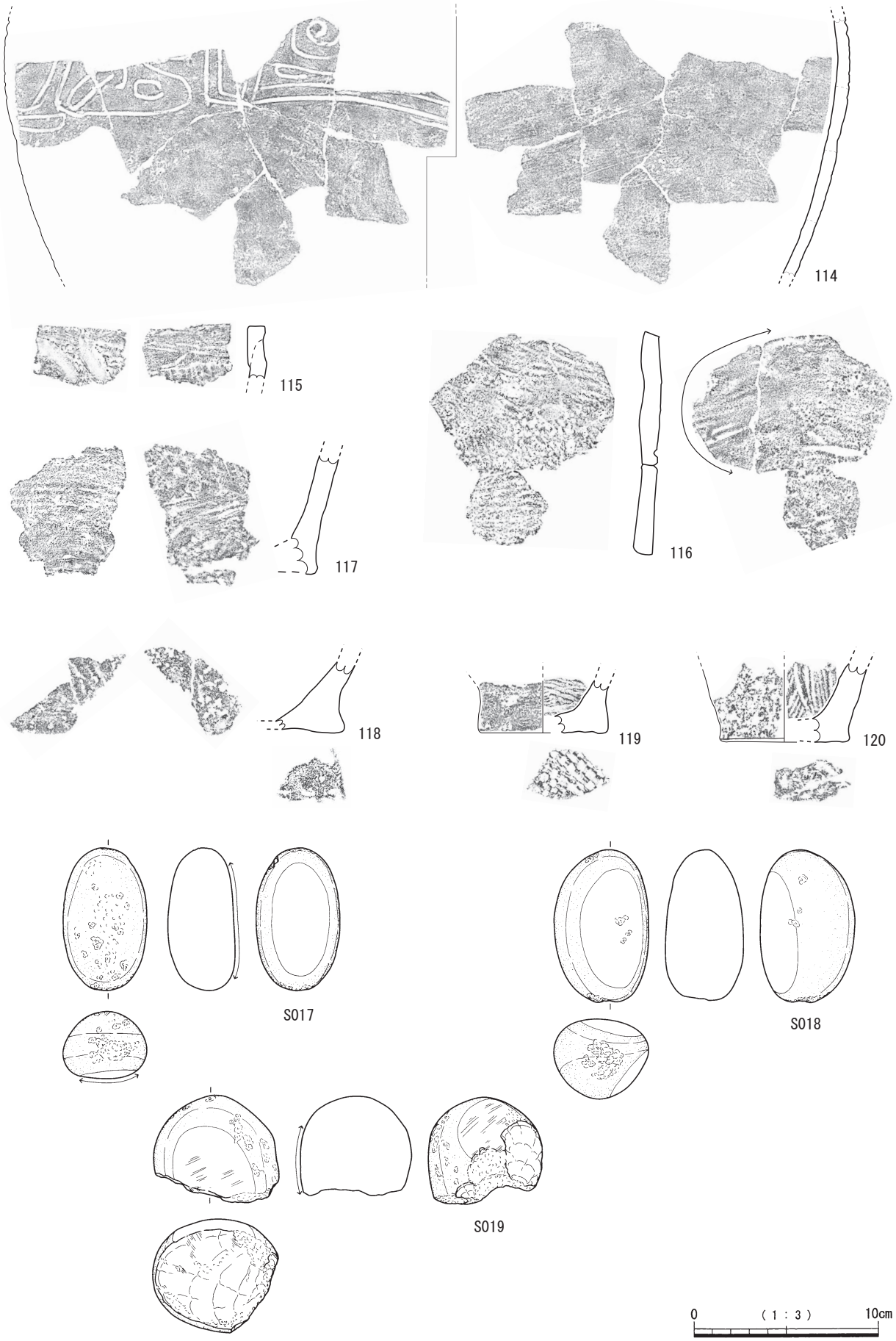
一部にⅤb層由来の軽石細粒を含む。

出土遺物

遺物は主に埋土②の下位に散在して出土した。

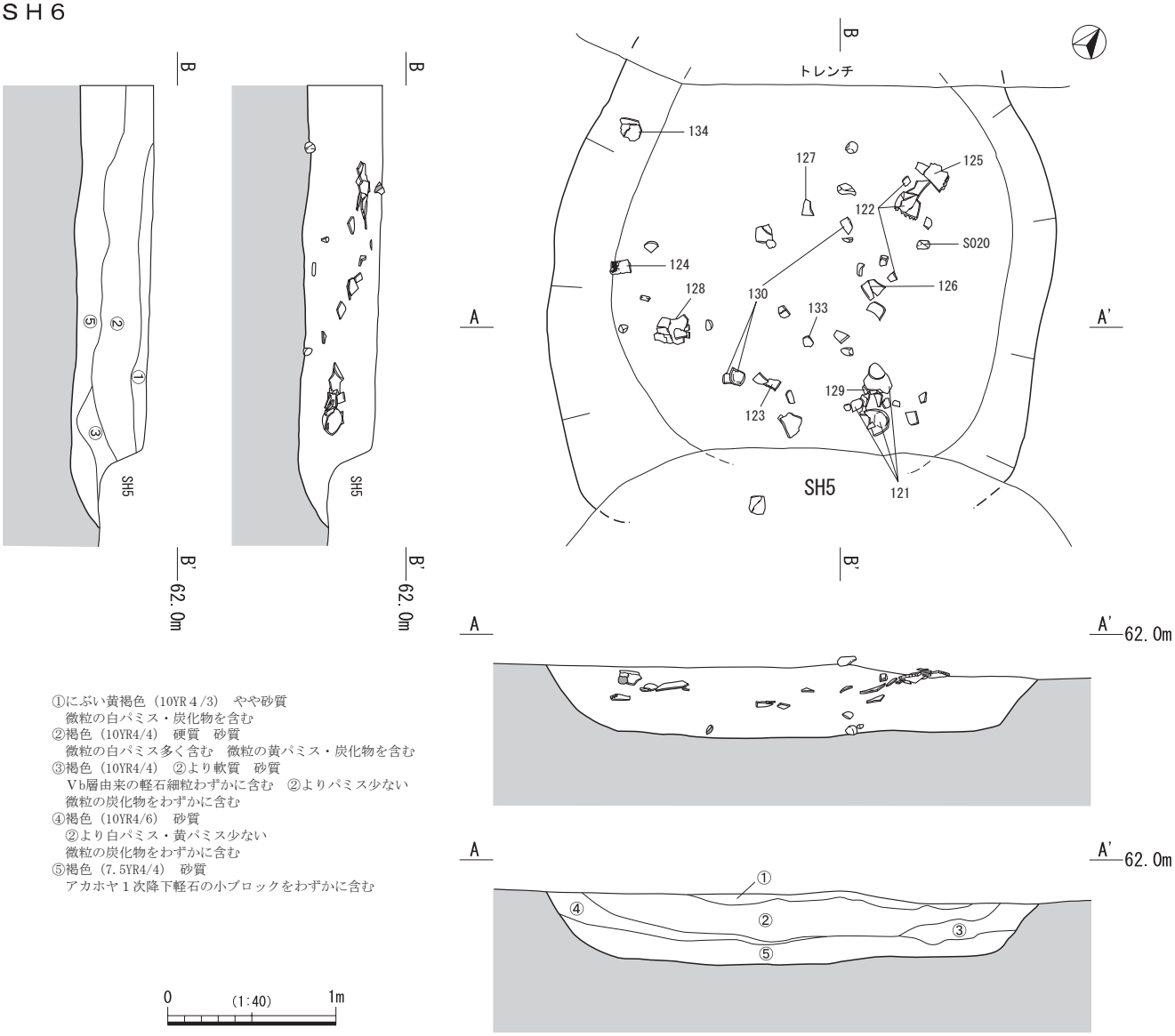
121は中型の深鉢で，平坦口縁の上端の一部に突起を付け，突起の外面と上面に棒状の工具による押圧と円形の刺突を組み合わせた文様を描く。上面のモチーフは人面様にも見える。残存部の状況から，モチーフは２つ単位で作られたものと推測される。外面の胴部上位には浅い凹線による曲線文が横位に巡らされ，胴部下位には格子状の線刻が部分的に施される。底面には白色付着物がみられる。Ⅵb類に該当すると考えられる。

122～127は上胴部片で，口縁部が残存する。胴部の器壁は直線的に開き，口縁端部でわずかに内湾する傾向が顕著である。122・123・126・127は平坦口縁で，124・

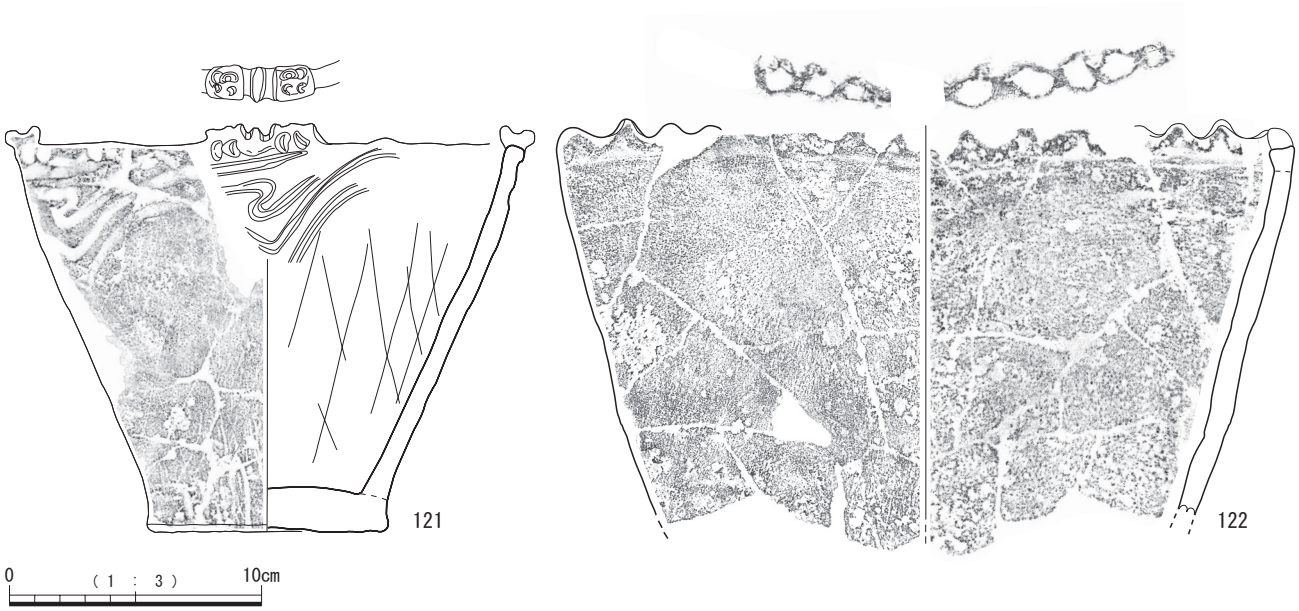


第56図　竪穴建物跡５号出土遺物

ＳＨ６

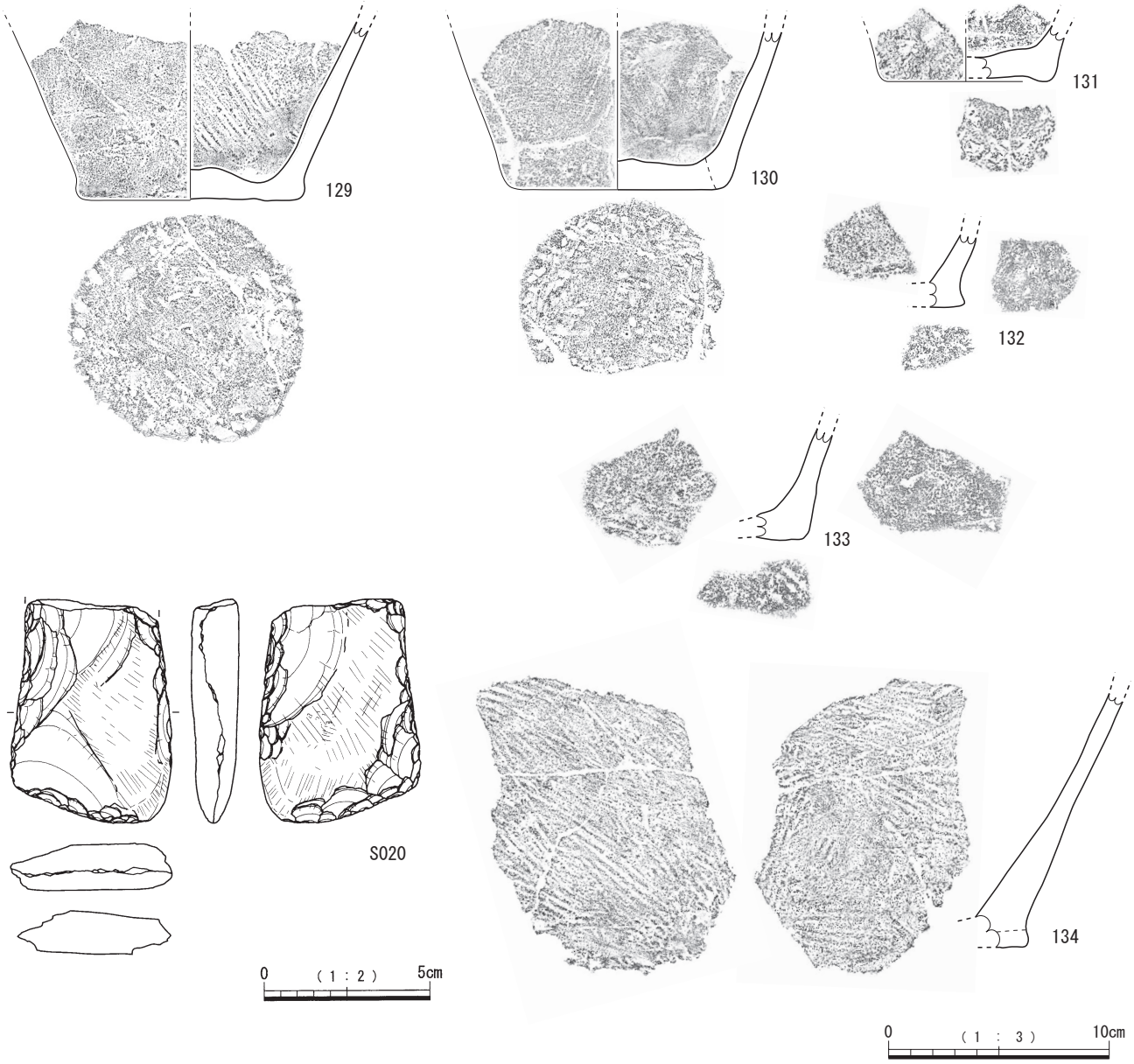


①にぶい黄褐色（10YR４/3）　やや砂質
　微粒の白パミス・炭化物を含む
②褐色（10YR4/4）　硬質　砂質
　微粒の白パミス多く含む　微粒の黄パミス・炭化物を含む
③褐色（10YR4/4）　②より軟質　砂質
　Ｖb層由来の軽石細粒わずかに含む　②よりパミス少ない
　微粒の炭化物をわずかに含む
④褐色（10YR4/6）　砂質
　②より白パミス・黄パミス少ない
　微粒の炭化物をわずかに含む
⑤褐色（7.5YR4/4）　砂質
　アカホヤ１次降下軽石の小ブロックをわずかに含む



第57図　竪穴建物跡６号と出土遺物（１）

第58図　竪穴建物跡６号出土遺物（２）



第59図　竪穴建物跡６号出土遺物（３）

125は波状口縁である。122・123は口唇部を指頭により連続して深く押圧し波状に形成する。124は口縁部には細い粘土紐を器面になじませるように貼り付けて巡らせる。胴部最上位に沈線と円形刺突による細い文様帯をもつ。125は口唇部にねじり紐状の装飾を施し，126は紐状の装飾を貼り付けた痕跡が残る。128は深鉢の胴部で内外面ともに貝殻条痕後にナデ調整を施す。129～134は底部である。131はやや上げ底で，他は平底を呈する。底面は網代痕をナデて仕上げる。129～131の底面には白色付着物がみられ，130には種子様の圧痕が残る。

S020はホルンフェルス製の磨製石斧Ⅵ類である。刃部側が残存する。磨製石斧の両側縁部と下辺部に表裏から打撃を行い刃部を形成する。基部を欠損した後で二次加工を施したと推測される。

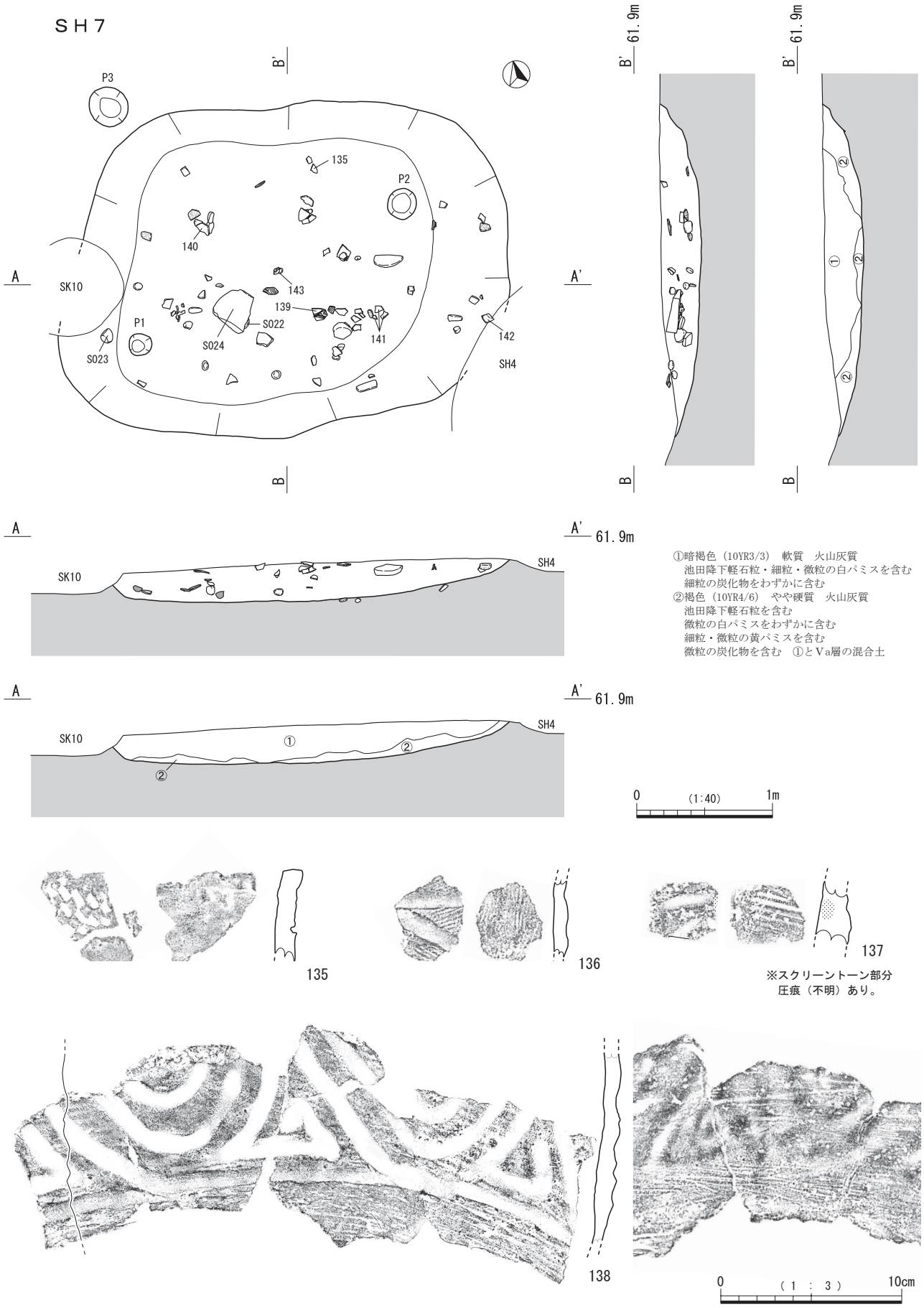
竪穴建物跡７号（第60～62図）

検出状況

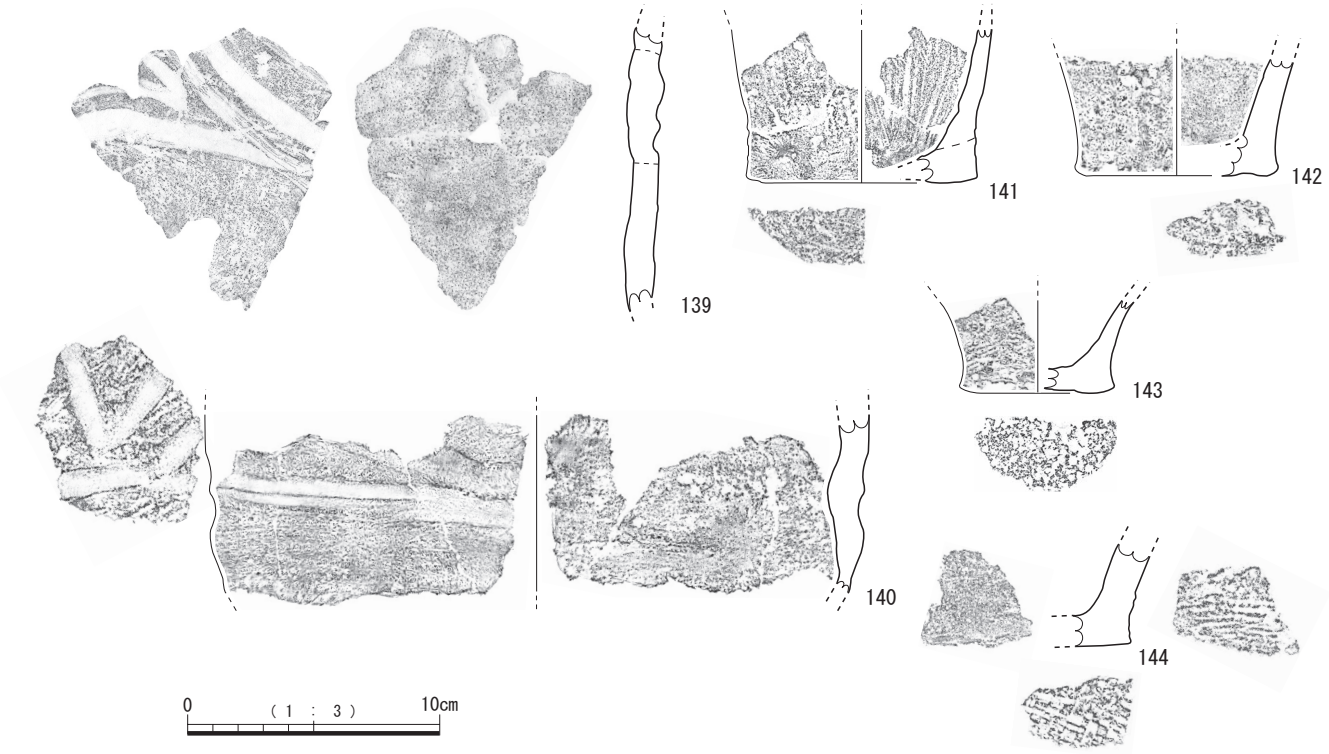
SH７は，Ｅ・Ｆ－３区のＶ層において検出された。SH７は，縄文後期の竪穴建物跡で最西部に位置している。北西隅をSK10に，南東隅をSH４に切られる。遺物は用途的に対をなす石皿と磨・敲石とが一緒に検出されている。遺物は全体的に上層から中層にかけ土器，石器等が出土した。

規模と形状

平面プランは，隅丸方形で，長軸は3.14＋αｍ，短軸は2.44ｍを測る。長短比は0.78，深さ約27㎝，遺構の推



第60図　竪穴建物跡７号と出土遺物（１）



第61図　竪穴建物跡７号出土遺物（２）

定面積は6.84㎡であった。外周北西に径約0.3m，深さ約0.2mのピット１基，壁面付近に径約0.2m，深さ約0.1mのピット２基を検出した。遺構内に炉跡，硬化面は確認されなかった。

埋土

埋土は，暗褐色・褐色の２枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含み火山灰質である。一部Ⅴa層が混じる。

出土遺物

埋土の上～中位からまとまって出土し，下位にむかって数が減少する傾向がみられた。中央部分から台石が出土した。

135は深鉢の口縁部片で，口唇部に棒状工具による浅い刻みを連続して施す。外面の口縁部直下に文様帯を形成し，曲線の上位に連続刺突を密に施す。Ⅵb類と考えられる。136～140は指頭によって浅い押線文を描いたⅤ類土器の胴部片である。136・138・140は器面の一部に貝殻条痕を残すⅤb類に該当する可能性がある。137の断面には，堅果類の種子と思われる圧痕が確認される。141～144は底部である。胴部の器壁の開く角度がやや小さい傾向がみられる。141～143は底面の網代痕をナデ消し，144は明瞭に残す。141・144の底面には白色付着物がみられる。

S021～S023は安山岩Ｂ類製の磨・敲石で，Ⅰ類に属する。３点ともに使用の頻度は低かったことが想定され，被熱の痕跡が窺える。S024は花崗岩製の石皿Ⅳ類（台石）である。上面･両側面が折れた後で正面･裏面の磨面（砥面）が形成された痕跡が観察できるため完形と判断した。正裏面に平坦な使用面をもつ。正面に赤色顔料が付着している可能性がある。

竪穴建物跡８・９号（第63～66図）

検出状況

SH８・SH９は，Ｆ-３区のⅤ層において検出された。

規模と形状

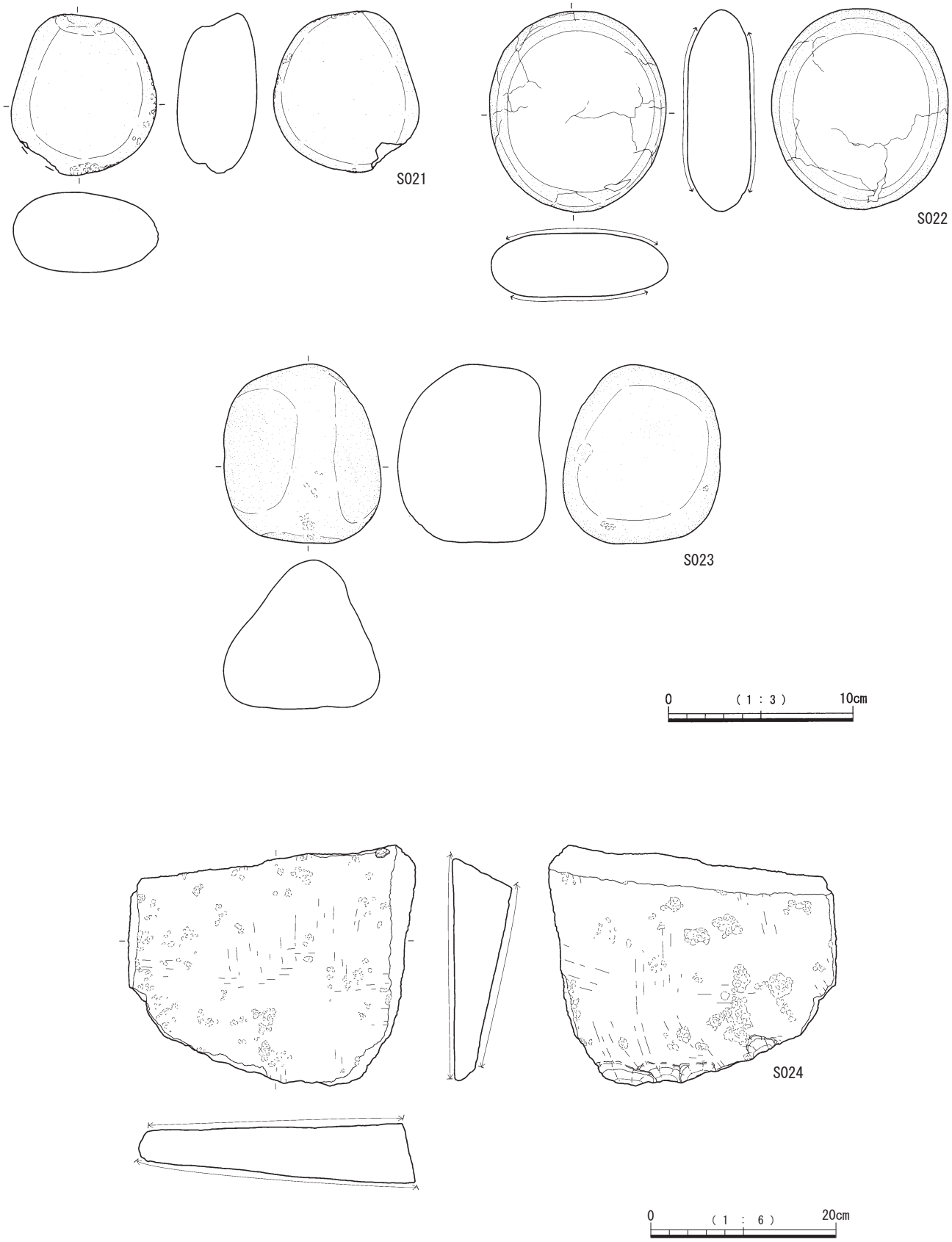
SH８の平面プランは，隅丸方形で，長軸は3.72m，短軸は3.04mを測る。長短比は0.82，深さ約24㎝，遺構の推定面積は10.53㎡であった。南東部を中世土坑９号（『小牧遺跡１』掲載）によって削平される。中央部に硬化面が確認された。外周南側に径約0.2m，深さ約0.2mのピット４基を検出した。遺物は床面直上から遺構内に散乱した状態で土器が多数出土した。

SH９の平面プランは隅丸方形で，長軸は4.10＋αm，短軸は3.43mを測る。長短比は0.83，深さ約24㎝，遺構の推定面積は15.12㎡であった。南部をSH８によって削平される。

SH８とSH９の床面のレベルや埋土の状況にはほとんど差はなく，SH９はSH８の拡張の可能性もある。

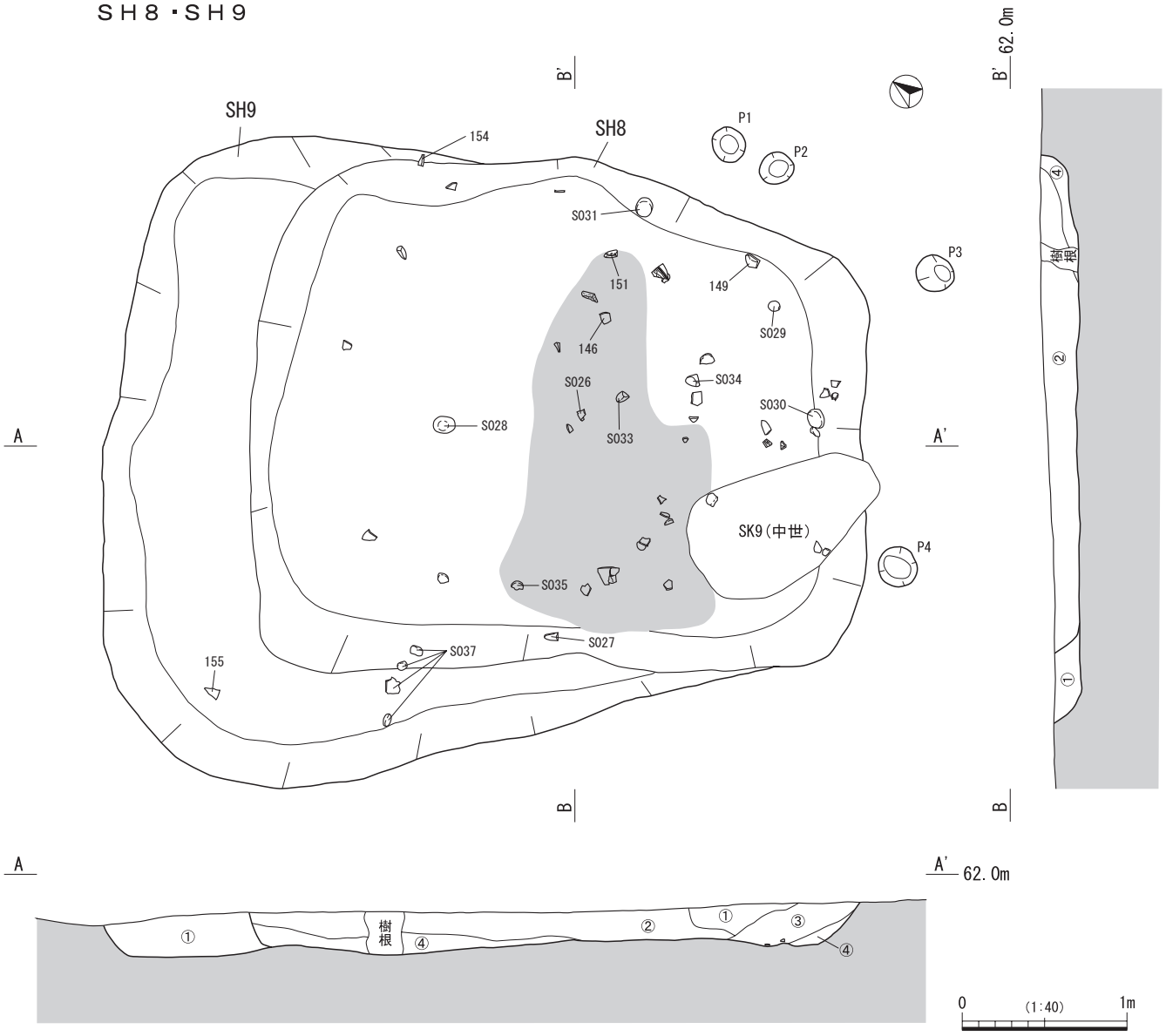
埋土

SH８の埋土は黄褐色２枚・褐色１枚・にぶい黄褐色１



第62図　竪穴建物跡７号出土遺物（3）

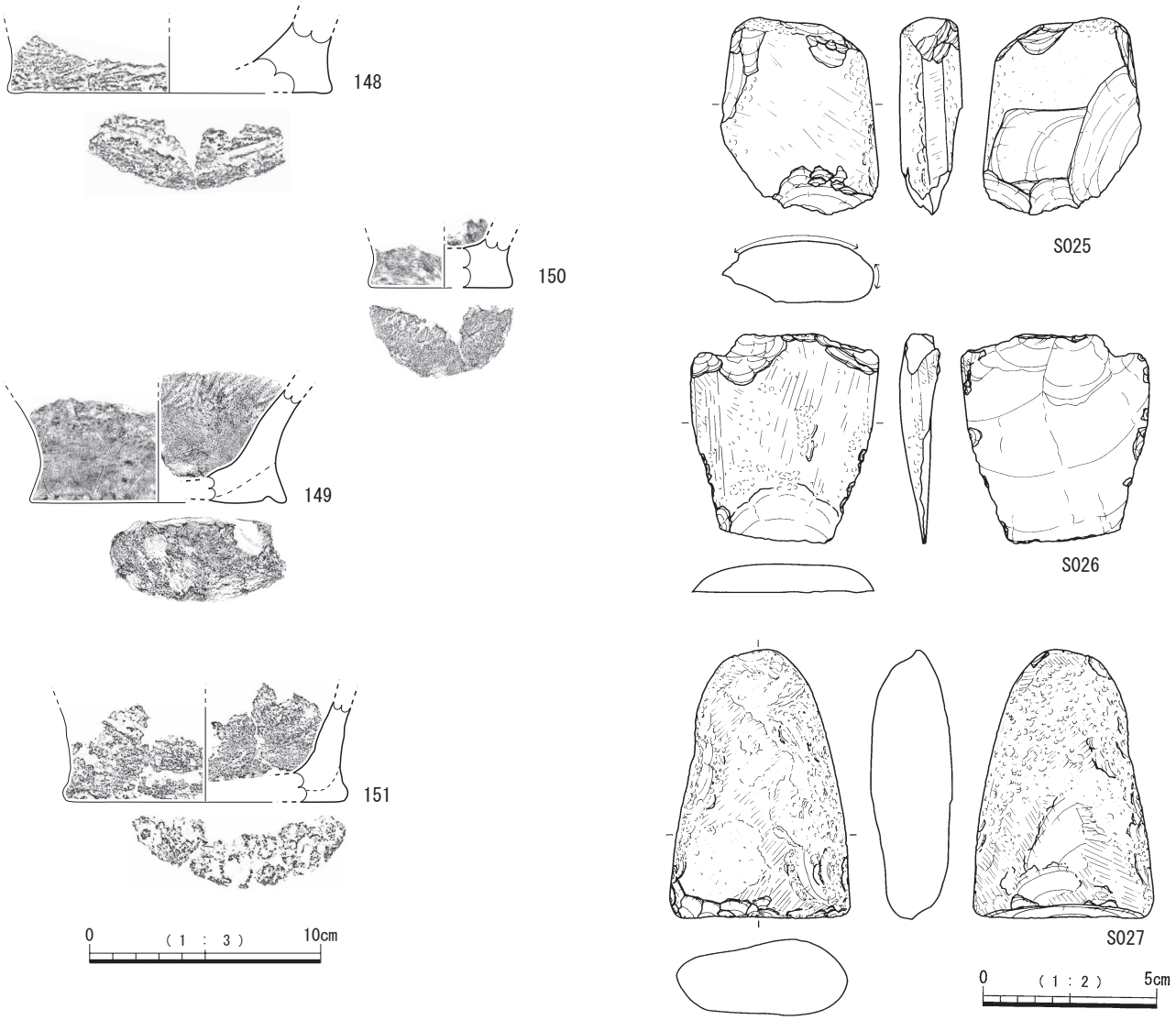
ＳＨ８・ＳＨ９



SH8
①黄褐色（10YR5/6）　軟質　火山灰質
　細粒の池田降下軽石・微粒の炭化物をわずかに含む　粒子が細かい
②黄褐色（10YR5/6）　硬質　火山灰質
　やや①より黒味濃い　池田降下軽石粒をごくわずかに含む
　微粒の白パミス・細粒と微粒の黄パミスを多く含む
　微粒の炭化物を含む　粒子が細かい
③にぶい黄褐色（10YR5/4）　②とほぼ同じ
④褐色（10YR4/6）　軟質　火山灰質
　ほぼＶa層に②が混じる

SH9
①褐色（7.5YR4/4）　火山灰質
　微粒の黄パミスを含む　細粒の黄パミス・微粒の炭化物をわずかに含む
　ほぼＶa層に混じる　粒子がやや粗い

第63図　竪穴建物跡８・９号と竪穴建物跡８号出土遺物（１）



第64図　竪穴建物跡８号出土遺物（２）

枚の計４枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含み火山灰質である。SH９の埋土は１枚である。SH８の一部・SH９にⅤa層土が混じる。

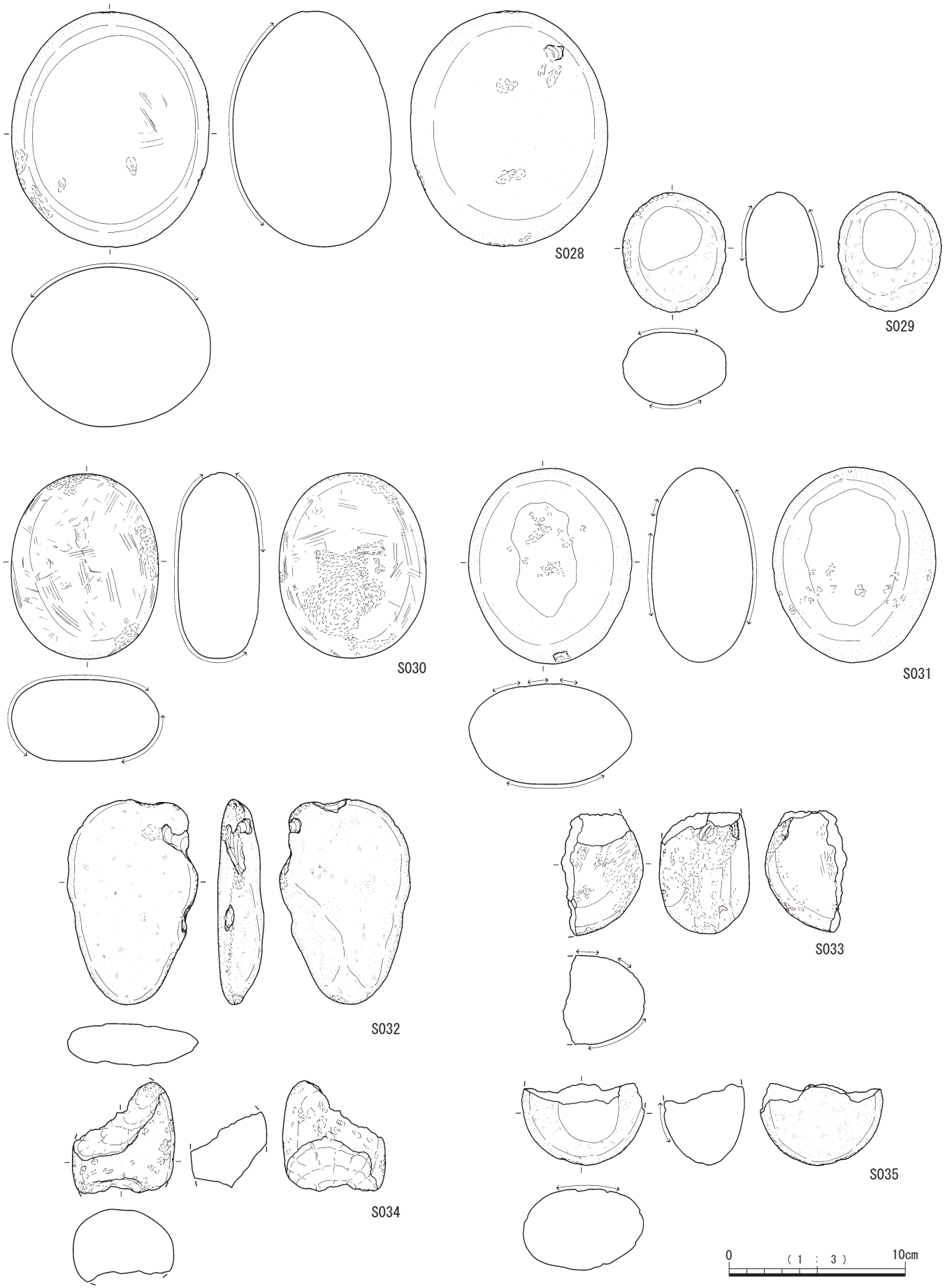
竪穴建物跡８号出土遺物

遺物は少なく小片が多い。埋土の中～上位から出土した。

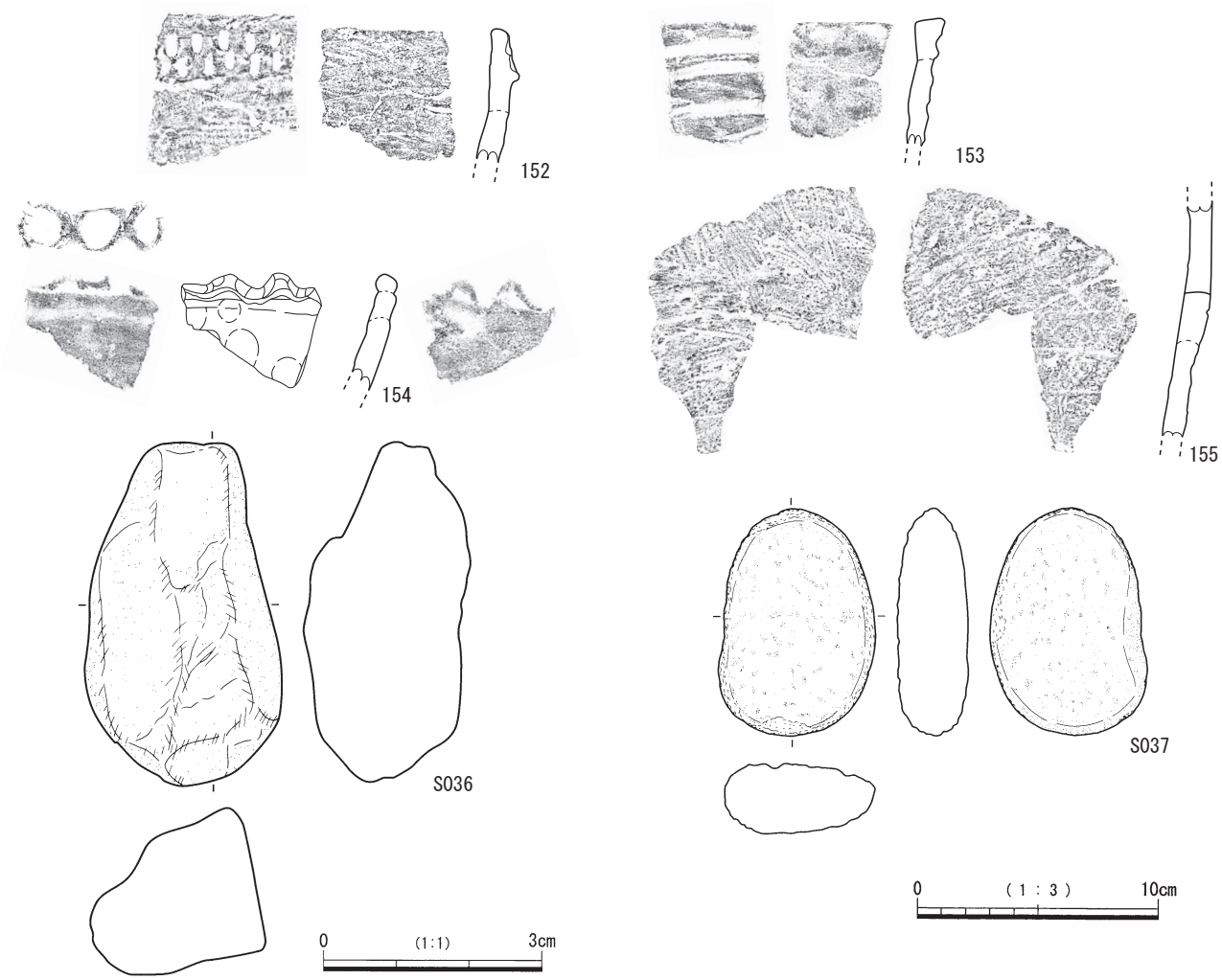
145・146は深鉢の口縁部片である。145は緩い波状口縁を呈し，波頂部に２本の粘土紐状の装飾を縦位に貼り付ける。粘土紐や口唇部に浅い刻目を施す。146は丸みを帯びた器形と推測され，口縁は端部がわずかに肥厚する。口唇部には棒状工具による連点文を施す。ともに文様の特徴からⅥb類と考えられる。147は指頭による凹線文を描いたⅤ類土器の胴部片である。内外面はナデ調整である。

148～151は平底を呈する底部片である。148・150の底面は網代の痕を丁寧にナデ消し，151は網代痕を若干残す。148・151の底面には白色付着物がみられる。149の底面には指頭圧痕が多く残り，堅果類種子様の圧痕が検出された。

S025はホルンフェルス製の磨製石斧Ⅵ類に属する。欠損後敲石へ転用している。S026はホルンフェルス製の磨製石斧Ⅵ類である。正面は研磨され，裏面は剥離面をそのまま残す。上面・下面は主に正面側から打ち欠かれ，周縁部に微細な剥離痕が残ることから磨斧片を二次的に加工し，使用したものと考えられる。S027は，砂岩製の磨製石斧Ⅵ類に属する。磨製石斧の刃部欠損品を敲石へ転用し，下面の破断稜に剥離・敲打痕がみられる。S028～S035は磨・敲石である。S030はホルンフェルス製で，そのほかは安山岩Ｂ類製である。形態としては，S030はⅡa類で，そのほかはⅠ類である。S029・S031・S033～S035には煤の付着や赤化などの被熱の痕跡が認められる。



第65図　竪穴建物跡８号出土遺物（３）



第66図　竪穴建物跡９号出土遺物

また，S033には赤色顔料が付着し，蛍光Ｘ線分析の結果，鉄を多く含むためベンガラの可能性がある。

竪穴建物跡９号出土遺物

SH８と同様に，埋土の中～上位から，小片や磨敲石が出土した。

152～154は深鉢の口縁部片である。152は口縁部外面を帯状に肥厚させ，肥厚帯に棒状工具による連続刺突を二重に施す。153は口縁端部を肥厚させ平坦に形成する。太めの凹線による３条の平行線が描かれる。154は平坦な口縁部に細い粘土紐状を貼り付け，口唇部を指頭により強く連続して押圧する。器壁が大きく外傾し，浅鉢状の形態となる可能性もある。文様・口縁部形態の特徴からⅥb類と考えられる。155は胴部片で，内外面に粗い条痕を施す。

S036は石英製の原石で，被熱の痕跡がみられる。S037は，安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ｉ類である。周縁に弱い敲打痕がみられ，被熱の痕跡がみられる。

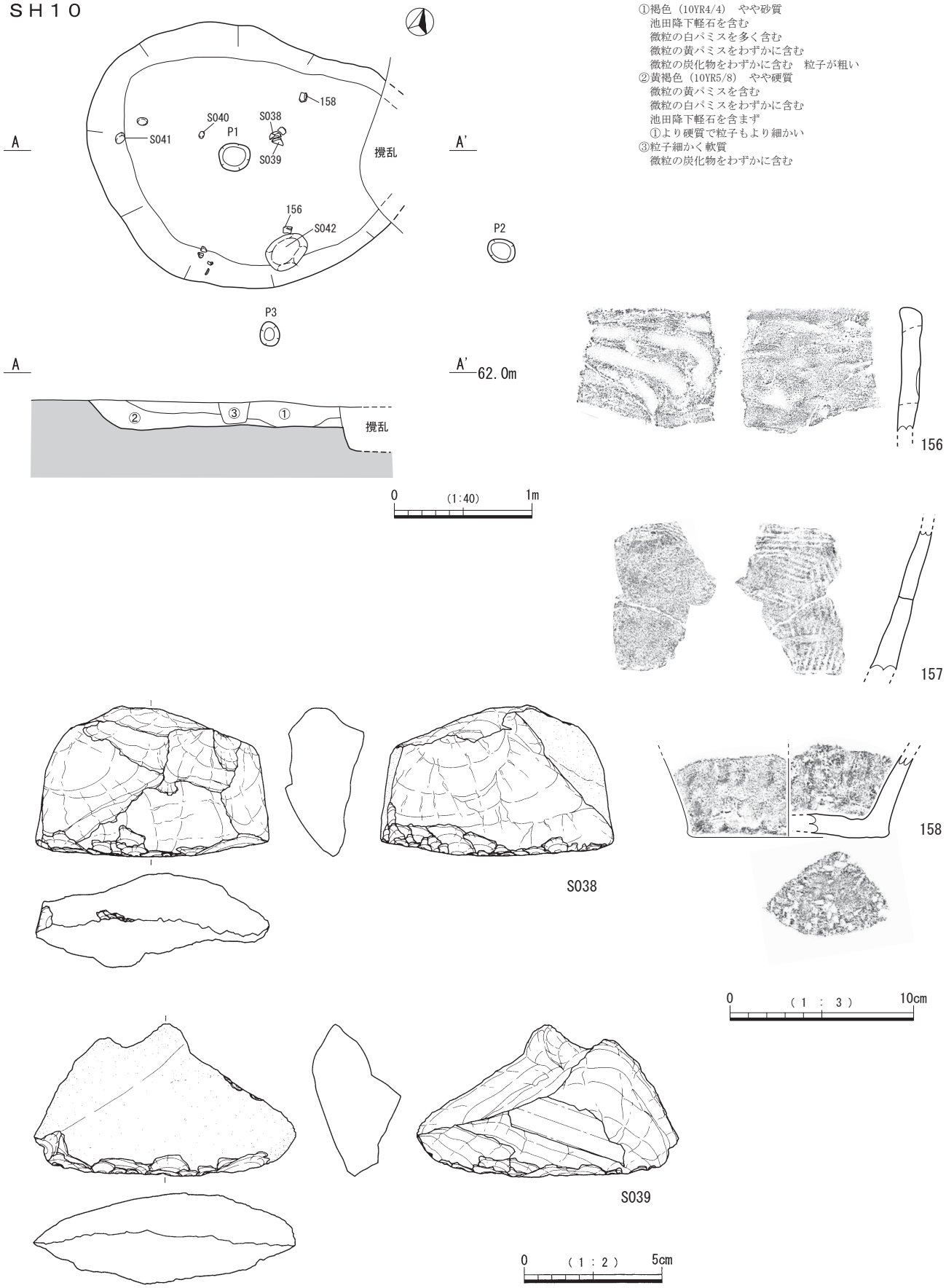
竪穴建物跡10号（第67・68図）

検出状況

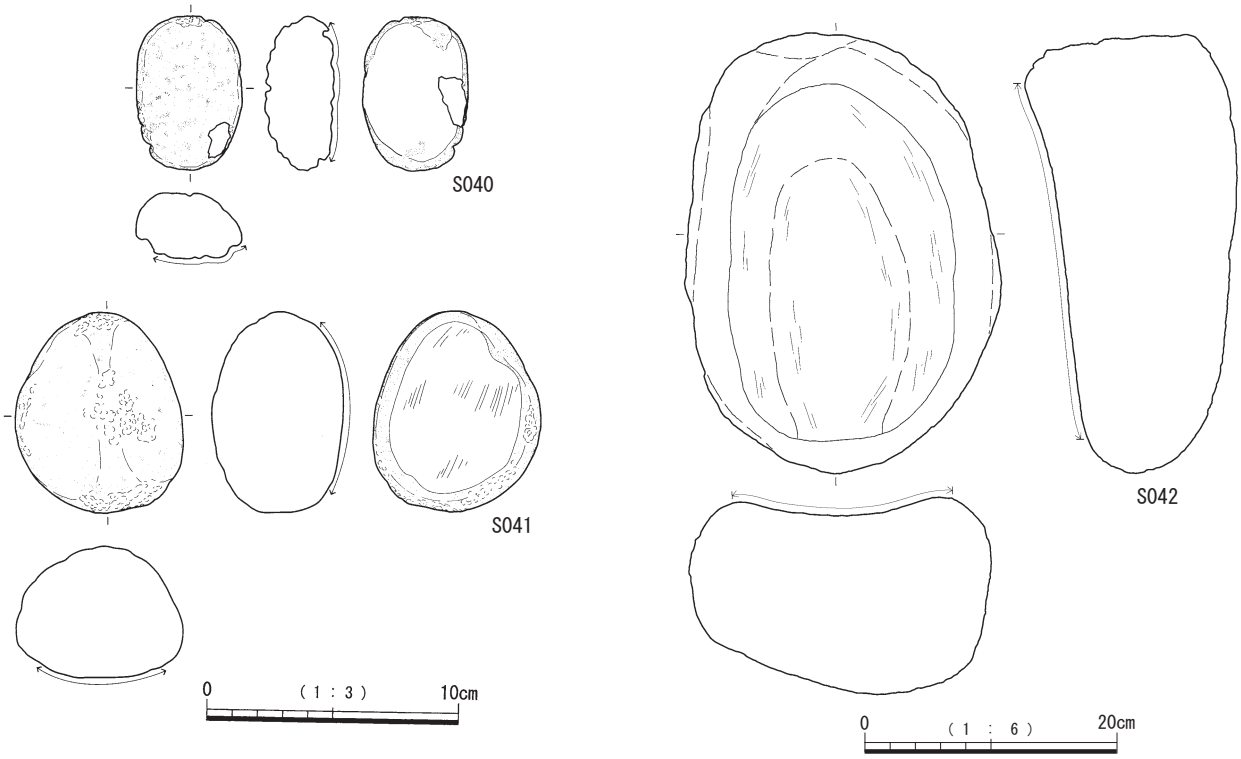
SH10は，Ｅ－４区のＶ層において検出された。縄文時代後期前半の竪穴建物跡における長軸・短軸・面積において最小値である。遺物は用途的に対をなす石皿と磨・敲石とが一緒に検出されている。遺物は主として中央部に集中し，石皿は南壁面から出土した。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は2.40m，短軸は1.90mを測る。長短比は0.79，深さ約17㎝，遺構の推定面積は3.58㎡であった。東側を攪乱によって削平される。外周南側に径約0.2m，深さ約0.2mのピット２基，中心部に径約0.2m，深さ約0.2mのピット１基を検出した。



第67図　竪穴建物跡10号と出土遺物（1）



第68図　竪穴建物跡10号出土遺物（２）

埋土

埋土は，褐色・黄褐色の２枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含んでいる。

出土遺物

遺物は少なく，主に埋土①から出土した。床面からは軽石とわずかな土器片のみ出土した。

156は深鉢の口縁部で，口縁端部が内面側にわずかに張り出す。外面には，指頭によって太い押線文が曲線的に描かれる。157は胴部下半片で，器壁は直線的に開く。外面は丁寧なナデ調整で，内面には貝殻条痕を明瞭に残す。158は底部で，底面は網代痕を粗くナデ消す。白色付着物がみられる。胎土の特徴から156と158は同一個体の可能性が高い。

S038・S039はホルンフェルス製で，粗製のスクレイパーで厚みのある石材を使用する。ともに原礫を粗く加工した後で，下面に表裏両側からの打撃により水平な刃部を形成する。S039は刃部に擦痕が確認できる。S040・S041は安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ｉ類でともに煤が付着する。S040は裏面はよく磨られ，平坦面を形成する。S041は主に正面の中央部分を敲打に使用する。S042は花崗岩製の石皿Ｉa類である。中央に浅い「Ｕ」字状の凹みを形成し，下面側に掻き出し口を作る。デンプン分析の結果，デンプン粒子が検出されたが，植物の種類の識別は困難であった。

竪穴建物跡11号（第69・70図）

検出状況

SH11は，Ｅ－４区のＶ層において検出された。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は2.49m，短軸は2.48mを測る。長短比は1.00，深さ約18㎝，遺構の推定面積は4.91㎡であった。外周南側に径約0.3m，深さ0.2mのピット1基，西壁に径約0.3m，深さ0.2mのピット１基を検出した。遺構内に炉跡，硬化面は確認されなかった。遺物は南側に土器，石器等が集中して出土した。

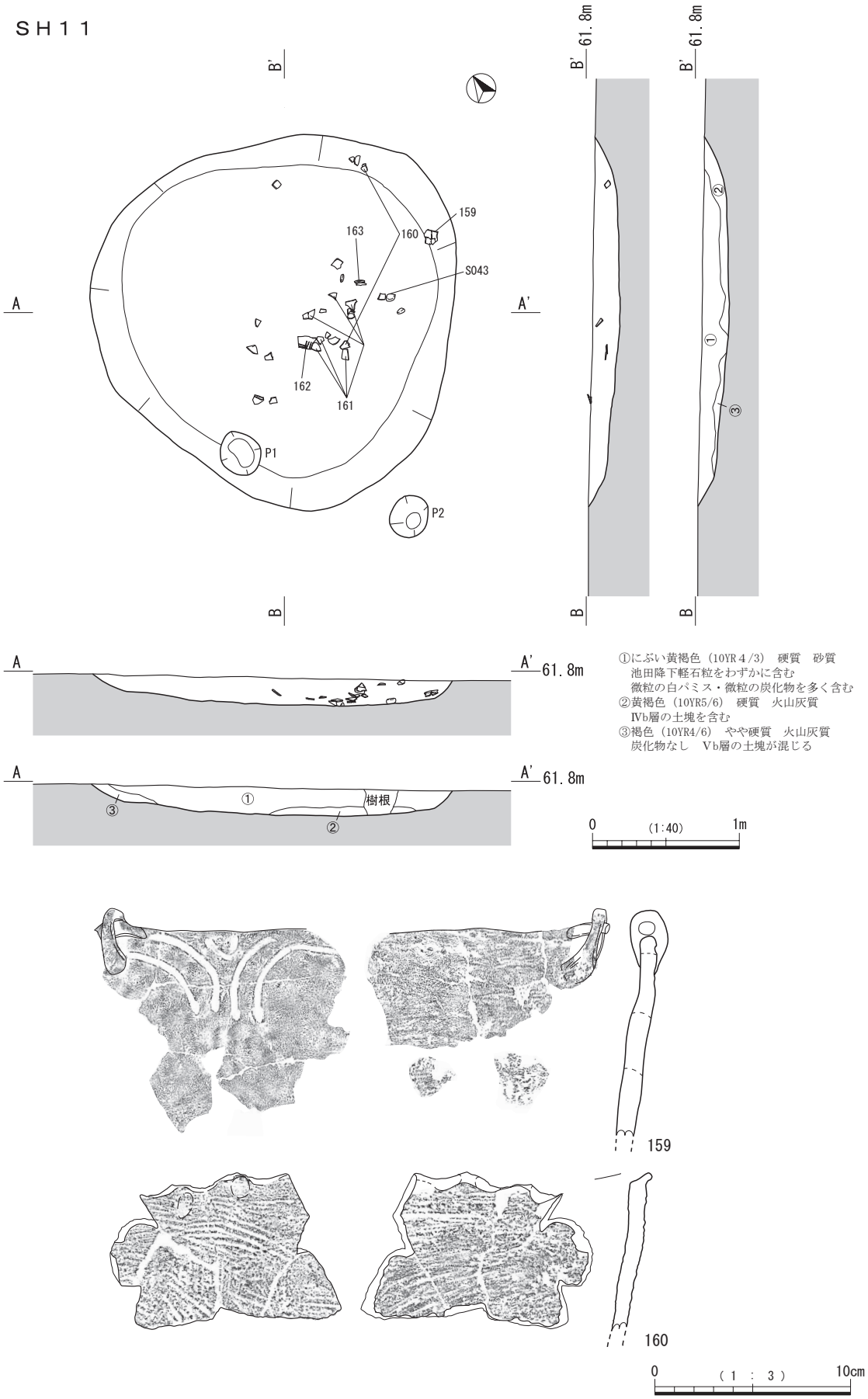
埋土

埋土は，にぶい黄褐色・黄褐色・褐色の３枚である。池田降下軽石，白パミスを含み火山灰質である。一部Ⅳb層・Ⅴb層が混じる。

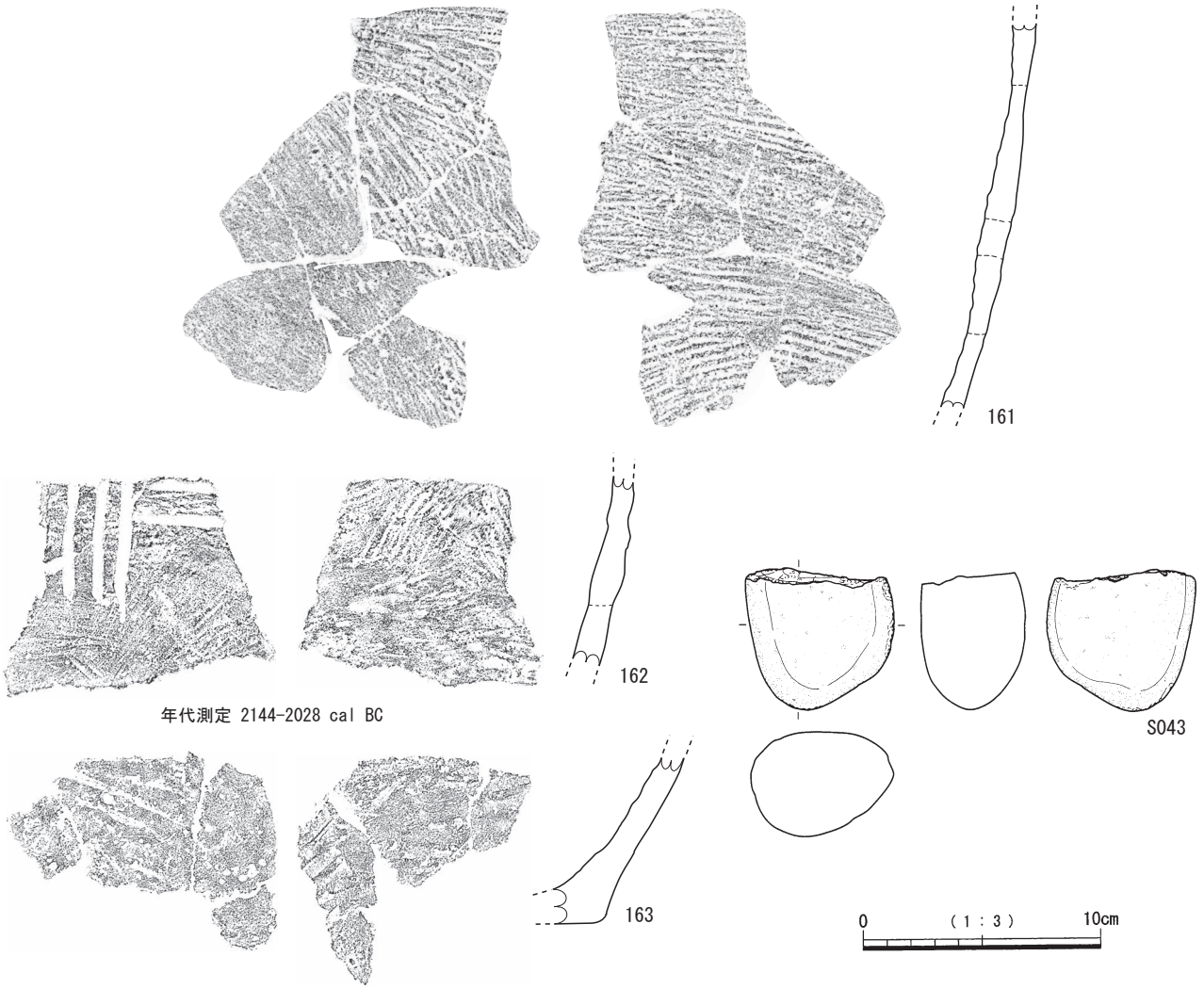
出土遺物

土器片は，SH11の中央部分の埋土①と埋土②の境目付近に集中して出土した。

159・160は深鉢の口縁部片である。159は平坦口縁を呈し，口縁部に粘土紐による装飾を施す。胴部最上位に平行沈線によるアーチ状のモチーフを連続させた文様帯を有すると推測される。160は口唇部に指頭による強い押圧を連続させ波状にしたもので，内外面に粗い貝殻条痕を残す。161・162は下胴部片である。ともに内外面に貝殻条痕を明瞭に残し，162の残存部上位には凹線により縦横の直線が描かれる。162の土器付着炭化物は放射



第69図　竪穴建物跡11号と出土遺物（１）



第70図　竪穴建物跡11号出土遺物（２）

性炭素年代測定により，暦年較正で3700±20yrBP，2144－2028calBC（確率89.93％）との結果が出ている。159～162は形態・文様・胎土の特徴からⅥb類に該当すると考えられる。163は底部片で，底面のごく一部が残存する。胴部は大きく開きながら立ち上がる形態と推測される。

S043は，安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ｉ類である。破断面も弱く磨られ，使用の痕跡がみられる。

竪穴建物跡12号（第71～73図）

検出状況

SH12は，Ｅ・Ｆ－４区のＶ層において検出された。堆積の状況から埋土③を床面と判断した。遺物は用途的に対をなす石皿と磨・敲石とが一緒に検出されている。石皿は南東部隅床面から出土した。床面に炉跡，硬化面は確認されなかった。

規模と形状

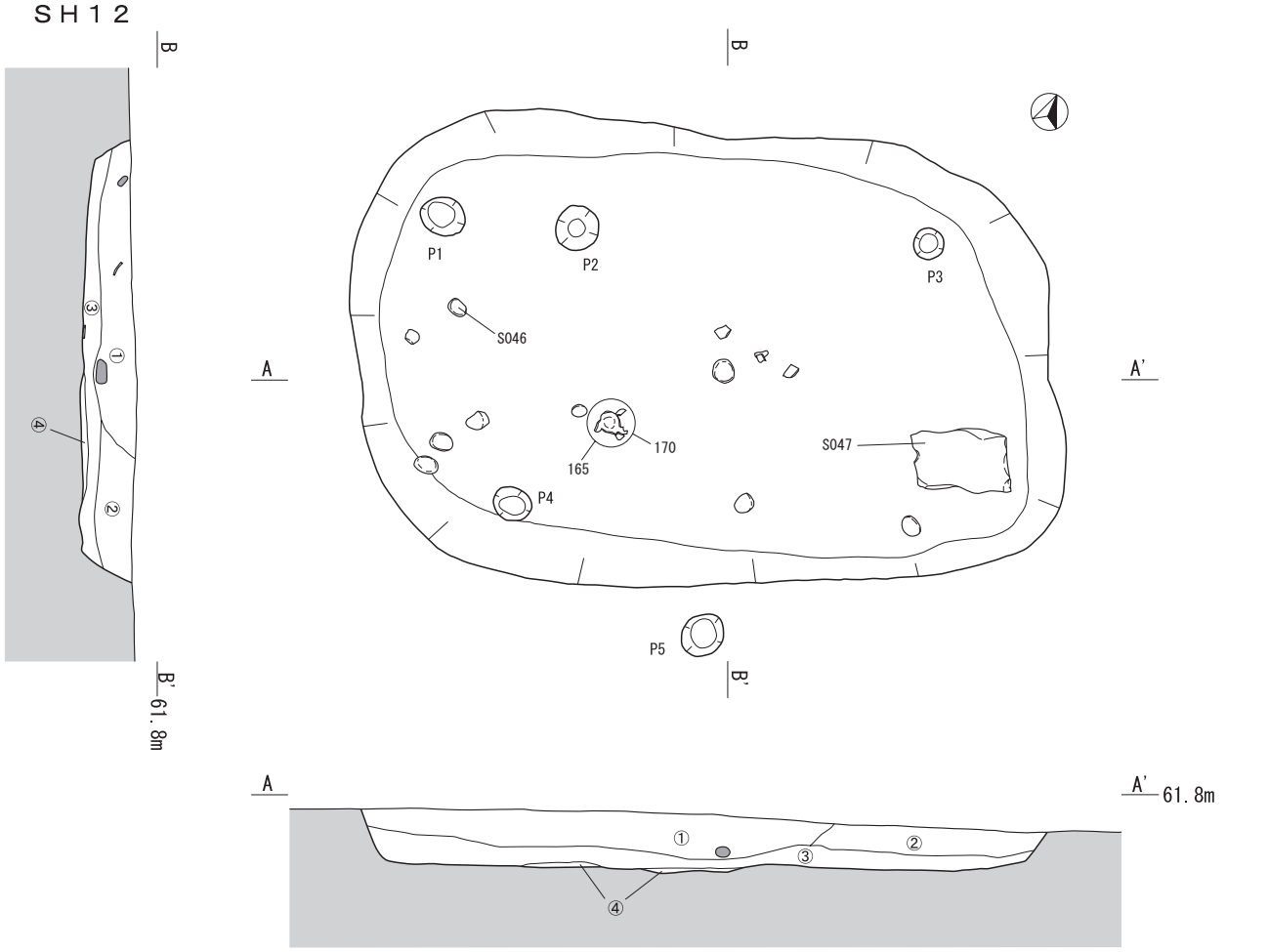
平面プランは，隅丸長方形で，長軸は3.80m，短軸は2.45mを測る。長短比は0.64，深さ約32㎝，遺構の推定面積は8.59㎡であった。外周南側に径約0.2m，深さ約0.1mのピット１基，壁面付近に径約0.2m，深さ約0.1mのピット４基を検出した。

埋土

埋土は，褐色系の４枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含み火山灰質である。多くにＶa層が入り，一部ⅣaやⅦaが混じる。

出土遺物

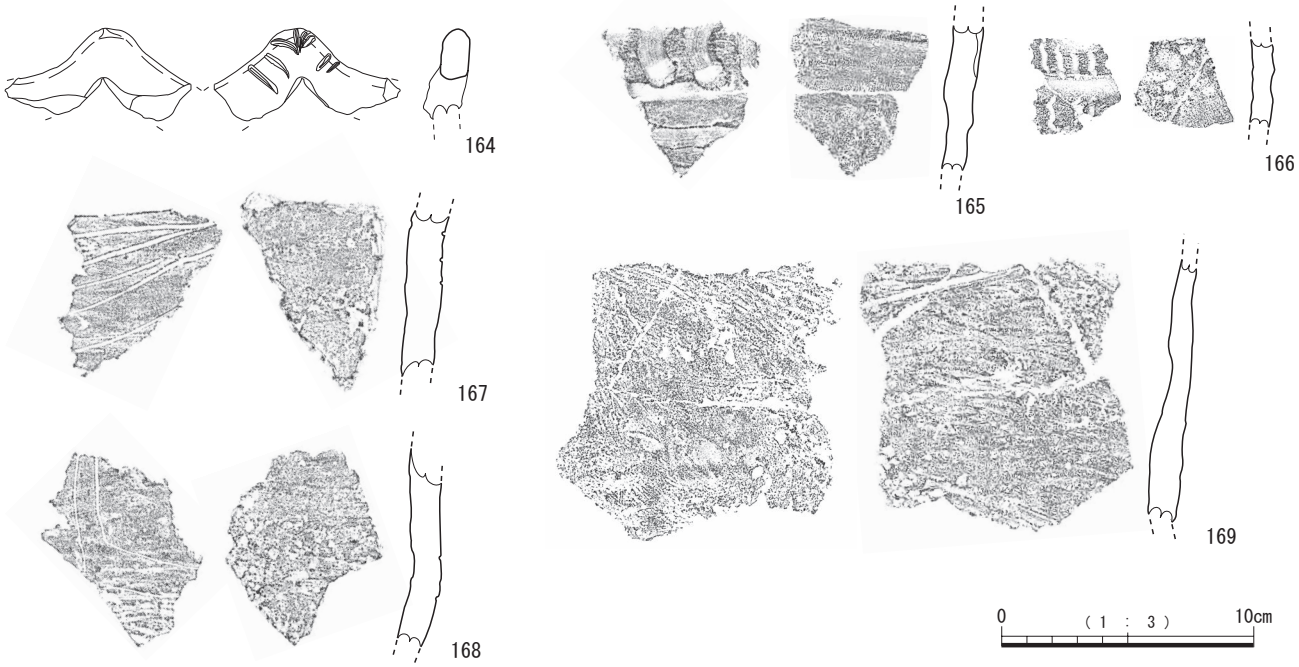
164は中央を山型に屈曲させ，両端を口縁部に貼り付ける深鉢の口縁部の装飾の一部である。165・166は口縁部片で，口縁端部を欠損する。165は指頭によって，166は貝殻腹縁によって縦位の連続刺突が施される。164～166はⅥa類と考えられる。167～169は胴部片である。167・168は細沈線によって文様が描かれ，168には平行



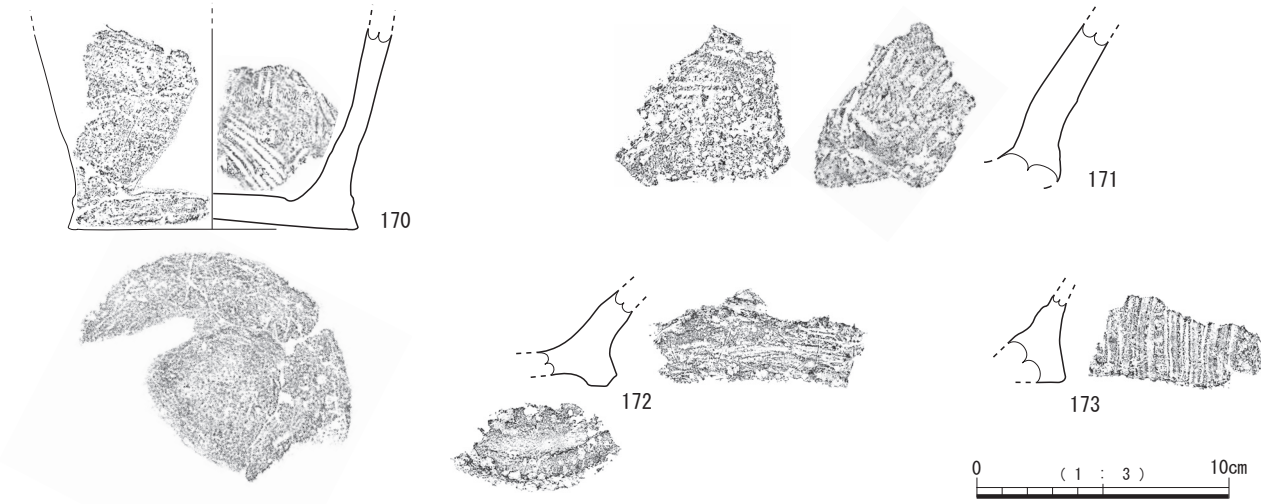
①褐色（10YR4/4）　硬質　火山灰質
　小礫・池田降下軽石粒をわずかに含む
　細粒・微粒の黄パミス・白パミスを含む
　微粒の炭化物をわずかに含む
　Va層の小土塊がまばらに入る　粒子がやや粗い

②①とほぼ同じだが，Va層の小土塊と池田降下軽石粒を含まない
③褐色（10YR4/6）　軟質　火山灰質
　微粒の黄パミス・細粒を多く含む　微粒の白パミスを含む
　ほぼV層にIVa層土が混じる　粒子が細かい
④VIIa層小土塊とVa層の混土　軟質　粘質

0　(1:40)　1m



第71図　竪穴建物跡12号と出土遺物（1）



第72図　竪穴建物跡12号出土遺物（２）

沈線文が描かれ，その線はごく細く，弱く描かれる。Ⅷ類の範疇と考えられる。170～173は底部片である。170はやや上げ底で，胎土には多量の金色の雲母が混入する。172は低い高台を有し，白色付着物がみられる。

S044はホルンフェルス製の打製石斧Ⅳ類の基部である。全面・側面に敲打痕が確認されるため，刃部を欠損した後で敲石に転用された可能性も考えられる。丸みを帯びた形態となっている。S045・S046は磨・敲石で，S045は砂岩製で，S046は安山岩Ｂ類製である。２点ともにⅡb類に属する。S046には被熱の痕跡が窺える。S047は花崗岩製の石皿Ⅳ類（台石）である。長方形の板状の形態である。上面を欠く。正面・背面の中央から下部に磨面や敲打痕が確認できる。床面から，作業面を下に向けて出土した。接地面にはやや赤化した土粒が散見された。

竪穴建物跡13号（第74～76図）

検出状況

SH13は，Ｆ－７区のⅥ層において検出された。

規模と形状

平面プランは，隅丸方形に近い形状で，長軸は2.96m，短軸は2.82mを測る。長短比は0.95，深さ約40cm，遺構の推定面積は7.18㎡であった。外周東側に径約0.2m，深さ約0.2mのピット２基を検出した。遺構内に炉跡，硬化面は確認されなかった。SH13の北西には，ステップ状の段がみられる。

埋土

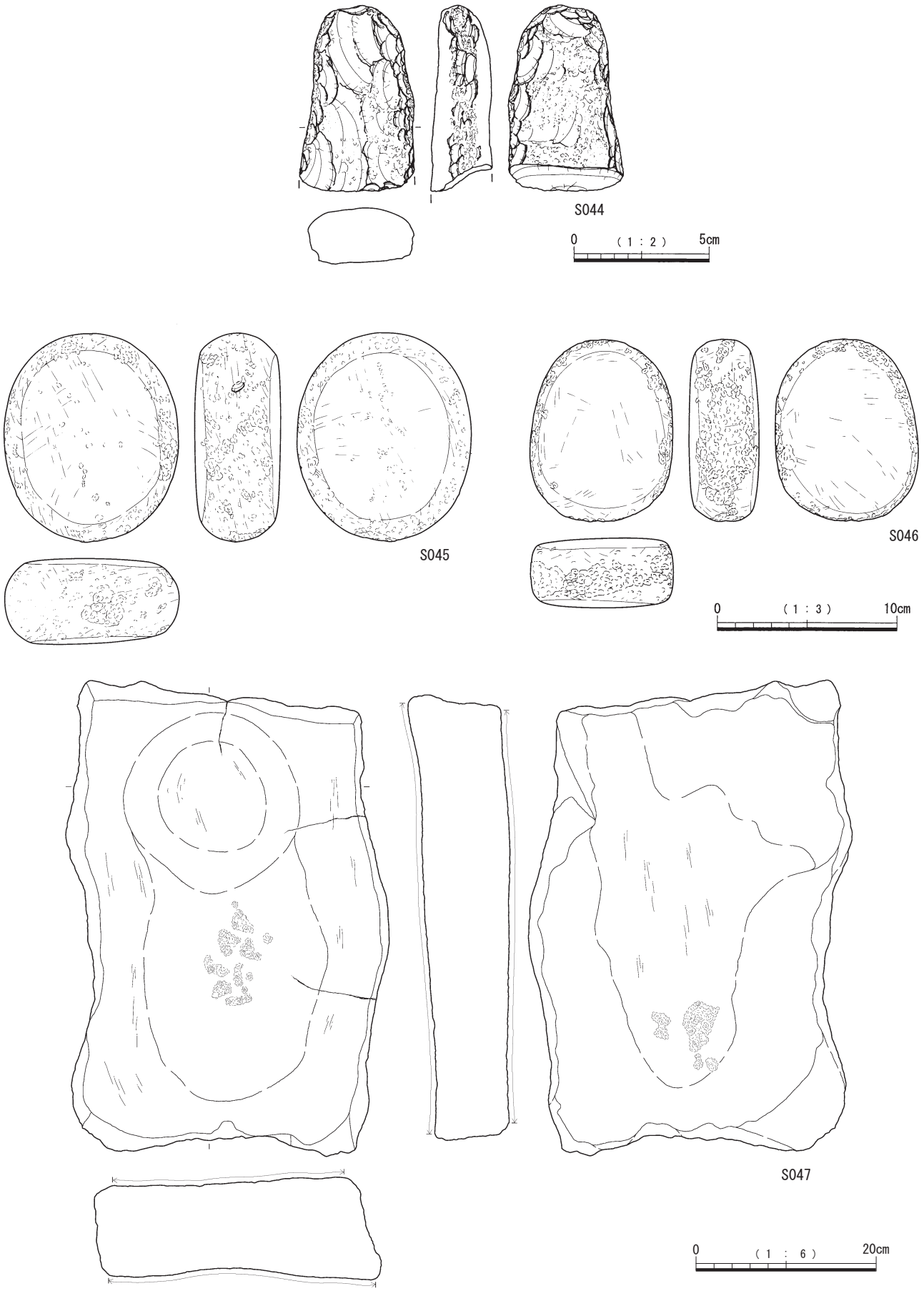
埋土は，にぶい黄褐色４枚・暗褐色の計５枚である。池田降下軽石，白パミス・黄パミスや炭化物を含む。一部薩摩火山灰硬化層ブロックが混ざる。

出土遺物

遺物は土器，礫等が散乱した状態で，主に埋土①から出土した。

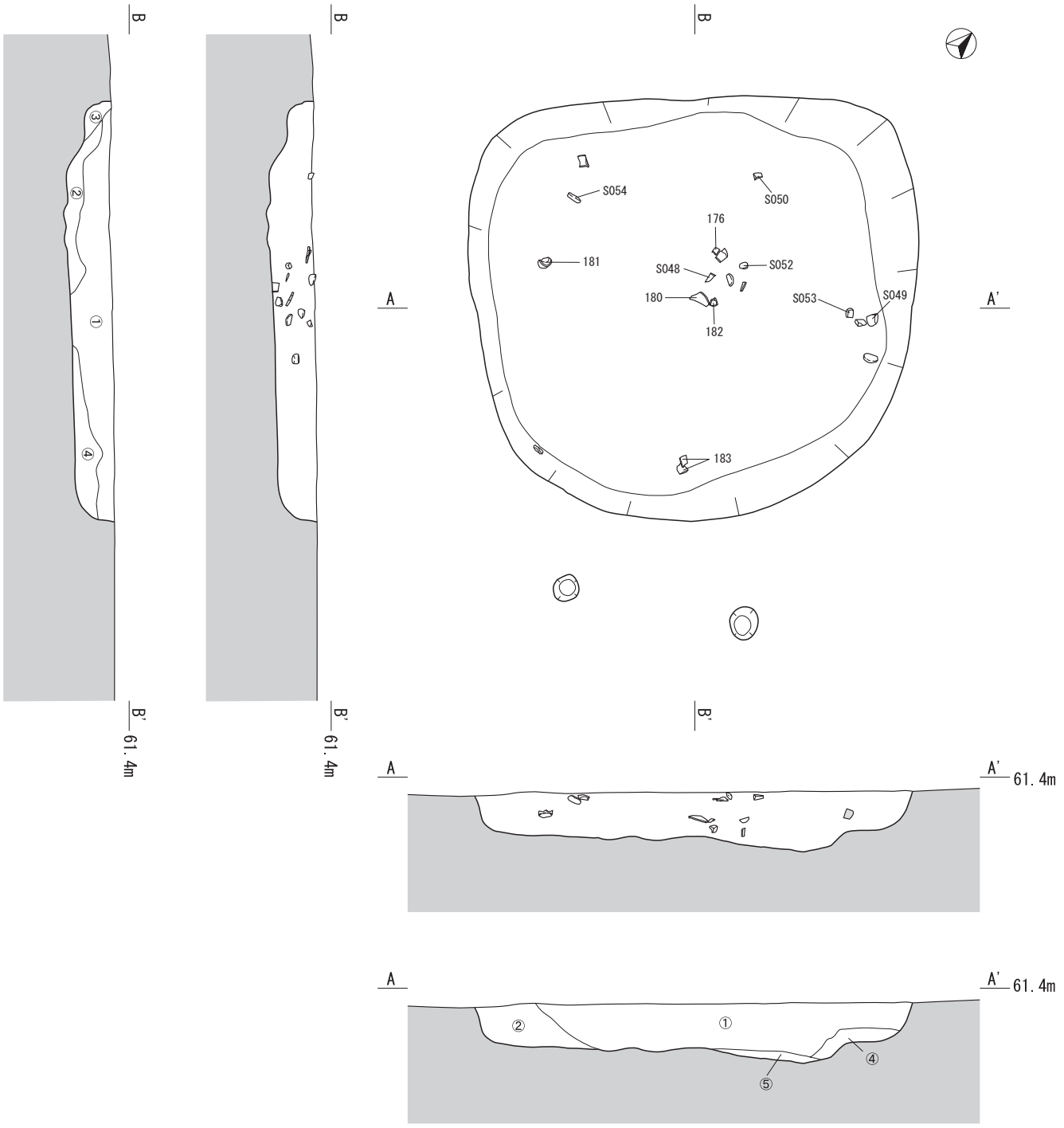
174～178は口縁部を含む胴部片である。174は口縁部外面の最上位に貝殻腹縁刺突文を縦位に巡らせ，その直下を２条の平行な凹線で区画し胴部上位に平行凹線文を描く。Ⅵc類に分類したが，文様パターンはⅧ類の要素も含まれる。175は口唇部と胴部上位に貝殻あるいは二叉状の工具による押引文を施す。Ⅵb類の範疇と捉えた。176～178は頸部がやや大きく外反する器形である。176・178は口縁部直下を無文とし，頸部を平行な沈線で区画する。凹線の特徴からⅥb類の範疇と捉えたが，文様パターンはⅧ類の要素も持ち合わせる。177は口縁端部を丸くおさめて，口唇部に小さな円形刺突を連続して施す。多重の弧状の文様が横位に連続して施されると推測され，Ⅷb類の範疇と捉えた。178の口縁部内面には，堅果類の種子様の丸い圧痕が残る。179・180は胴部片である。残存部の上辺にのみ，人為的に擦られた痕跡がみられた。179は器壁の厚みが不均一で，内外面に貝殻条痕を残す。Ⅴ類土器の可能性もある。180は文様の特徴からⅥb類に分類した。なお，180は付着炭化物の放射性炭化物年代測定によって，暦年較正で3755±23yrBP，2209－2128calBC（確率69.09％）という結果が出ている。181～184は底部である。181・182は接地面近くでくびれを形成する。４点ともに胴部に向かい開く角度はやや小さい。181・182・184の底面は網代をナデ消す。185・186は円盤状土製加工品である。185はⅦb類，186はⅧ類土器と考えられる。186の文様は３本単位の沈線によって描かれると推測され，福田Ｋ２式の影響を受けた文様パターンである。

S048は，安山岩Ｃ類製の剥片で，両側縁に微細な剥離がみられ，使用の痕跡が窺える。S049は，ホルンフェルス製の磨製石斧Ⅲ類の片刃の刃部である。欠損後に敲石



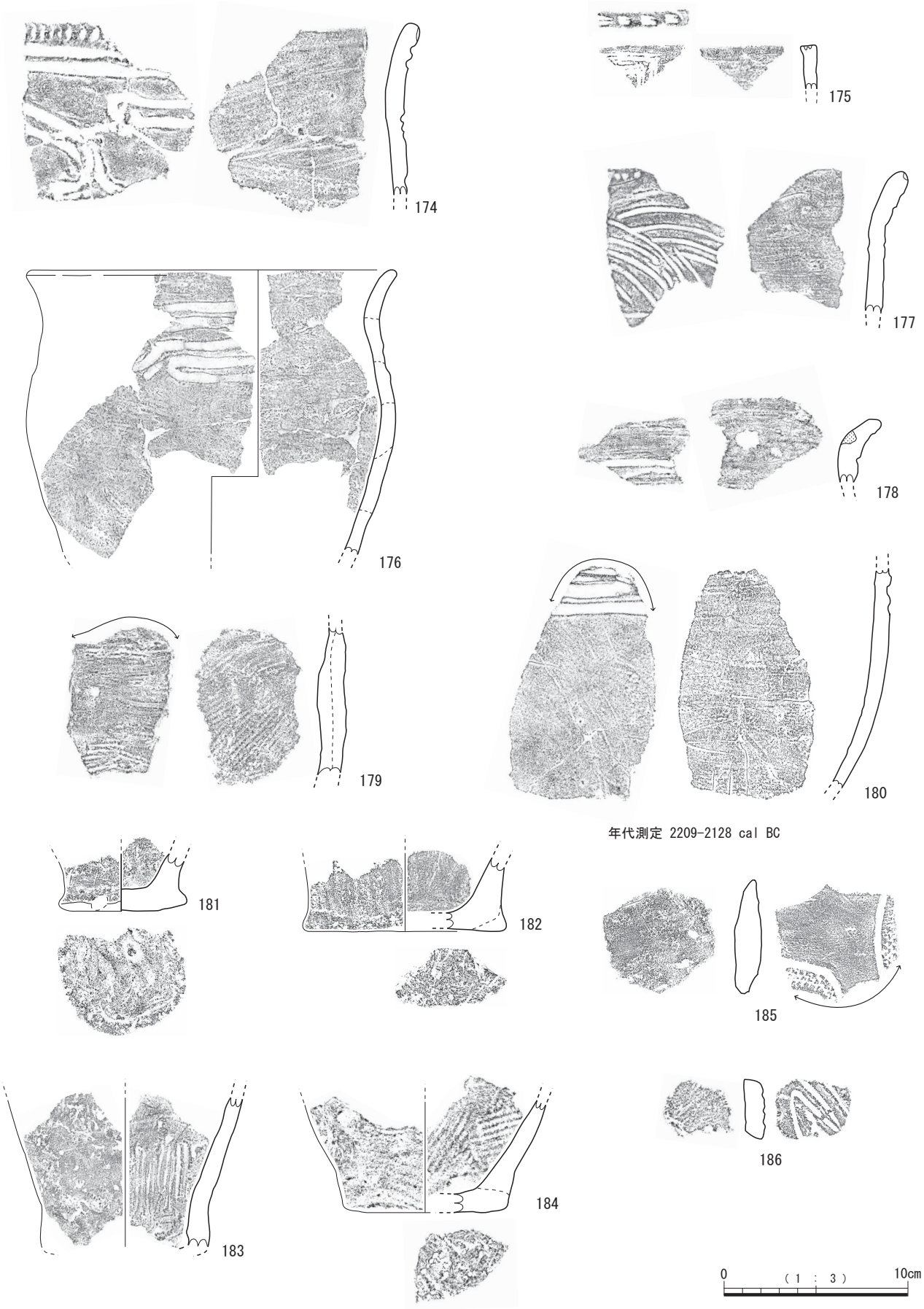
第73図　竪穴建物跡12号出土遺物（3）

ＳＨ１３

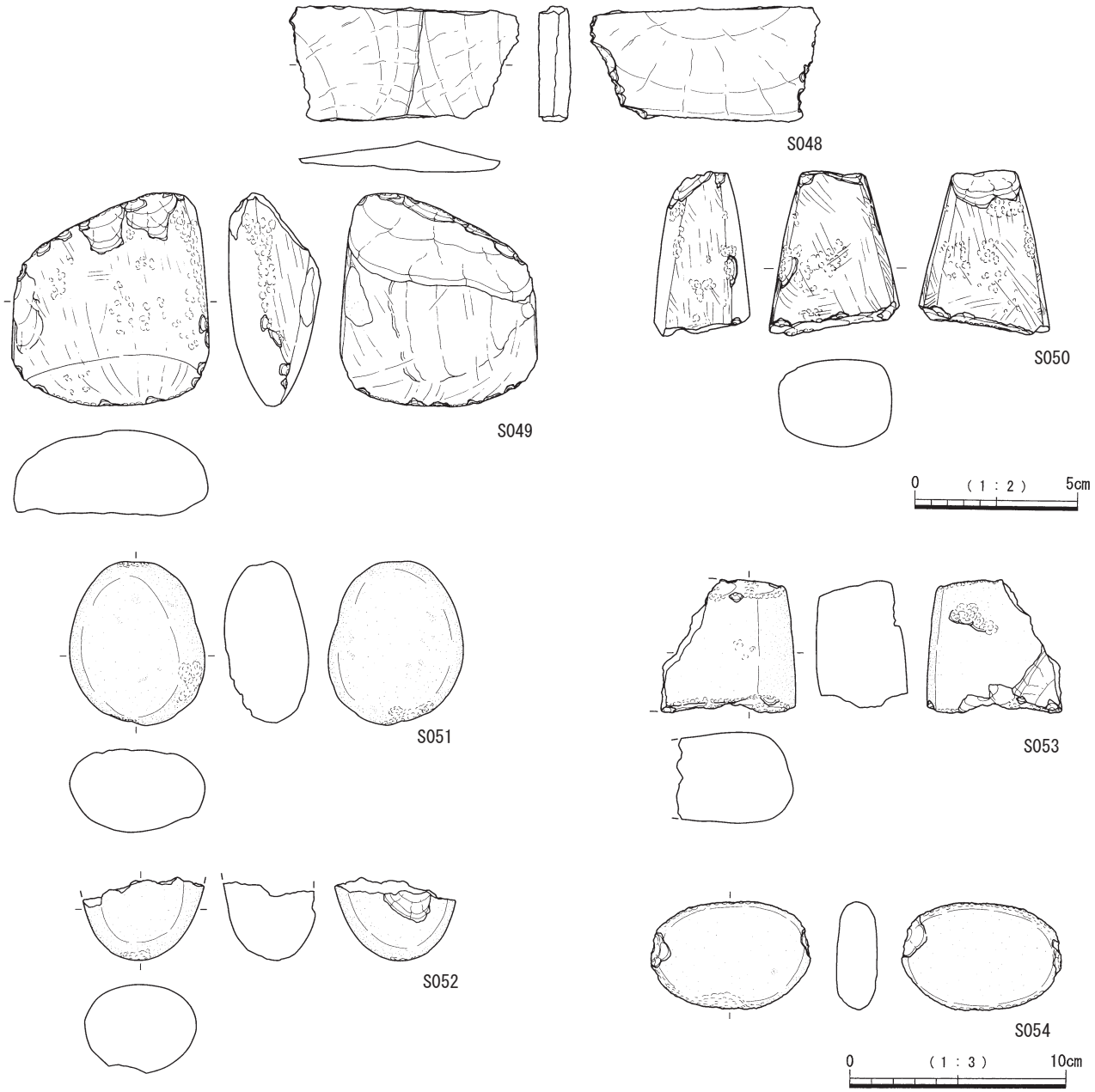


①にぶい黄褐色（10YR４/3）　軟質
　大粒の池田降下軽石・黄パミス・微粒の白パミスを含む
　微粒の橙色パミス・炭化物をわずかに含む
　薩摩火山灰硬化層ブロックがわずかに混じる　粒子がやや粗い
②にぶい黄褐色（10YR5/3）　やや粘質
　微粒の炭化物をごくわずかに含む
　パミス類ほとんどなし　粒子がやや粗い
③にぶい黄褐色（10YR４/3）
　②に近いが，パミス類をほぼ含まない
④にぶい黄褐色（10YR5/4）　粘質
　微粒の黄パミスを含む
　微粒の炭化物をごくわずかに含む　粒子がやや粗い
⑤暗褐色（10YR3/4）　硬質　やや粘質
　微粒の黄パミスを含む　炭化物なし

第74図　竪穴建物跡13号



第75図　竪穴建物跡13号出土遺物（1）



第76図　竪穴建物跡13号出土遺物（２）

に転用しているが使用頻度は少ないと推測される。S050はホルンフェルス製の磨製石斧Ⅵ類の基部である。下面を敲打に使用しており，敲石へ転用している。S051・S052は安山岩Ｂ類製の磨・敲石で，使用の痕跡は薄い。Ⅰ類に属する。S052は一部が残存し，破砕後に被熱した痕跡が窺える。S053は安山岩Ｂ類製で，大型の磨・敲石の破片であると推測されるが，形態を分類することは難しかった。破砕後の断面を敲打に多用したことが窺える。S054は安山岩Ｂ類製の石錘Ⅰa類である。紐がかりの部分は打ち欠いて形成する。風化が著しい。

竪穴建物跡14号（第77～80図）

検出状況

SH14は，Ｃ－９区のⅣb層において検出された。縄文時代後期前半の竪穴建物跡における長軸・短軸・面積において最大値である。遺物は北側に被熱を受けた石皿等が出土した。

規模と形状

平面プランは，北側の一角が角張る楕円形で，長軸は4.48m，短軸は4.15mを測る。長短比は0.92，深さ約35㎝，遺構の推定面積は15.38㎡であった。壁面付近に径約0.2～0.3m，深さ約0.3mのピットが６基，中央部に径約0.2m，深さ約0.5mのピット１基が確認された。そ

の北東側にも土坑が検出されたが，焼土・炭化物等は確認されず炉跡とは考え難い。中央部には硬化面が認められ，その下部から同規模の掘方も確認された。

北側隅に花崗岩製の石皿片を含む礫がまとまって出土した。他には，凝灰岩の礫もみられ，被熱しているものとしていないものが混在した。

埋土

埋土は，黒褐色５枚・暗褐色３枚・褐色２枚・黄褐色の計11枚である。黄色軽石・灰白色粒子・火山ガラスや炭化物を含む硬質の粘質土である。Ⅴ層のアカホヤやⅦ層土・Ⅷ層土が混ざる。

出土遺物

出土遺物の量は多く，Ⅸ類土器を主体とした。ただし，床着の遺物はなく埋土中位から出土したものが多かった。

187は，深鉢の口縁部～胴部である。波状口縁を呈し，推定口径は32.0cmを測り，やや内傾する口唇部に棒状工具による連続刺突と，半截竹管による連続刺突，貝殻腹縁部による連続刺突を施す。口唇部と器面の境目の稜は不明瞭で丸みを帯びる。188・189は口唇部上面に平坦面を形成し，そこに沈線文や円形刺突文・貝殻腹縁刺突文などによる文様帯を有する。188は細幅の，189は幅広の口唇部を有する。187～189はⅨa類に該当すると考えられる。190～194は口唇部の文様帯が外形するⅨb類に分類されるタイプの口縁部～胴部である。施文具や文様パターンは187～189と共通する。文様帯の幅が狭い190～192は平坦口縁で，幅の広い193･194は波状口縁を呈する。190は口唇部を平坦に形成し，貝殻腹縁刺突文を密に連続して施す。残存部分の大きな194は波頂部が４か所で上からみると口縁部は四角形状に形成される。195は口縁部片で，器壁を逆「く」の字状に強く屈曲させ，その外面に文様帯を形成する。平坦口縁と推測され，口唇部を平たく形成し，貝殻腹縁刺突文を連続して施す。胴部は大きく張り出すと推測される。内外面に粗い貝殻条痕を残す。現行の南九州の縄文時代後期の土器編年によりⅨ類土器に後続すると考えられる（1983本田など）市来式土器に口縁部形態・施文法が類似する。本報告では，口唇部が市来式土器のように先細らず，口唇部文様帯がやや内傾し上面施文型に近いことから，Ⅸb類とした。196は波状口縁を呈し，口縁部外面を幅広く肥厚させる。波頂部は４か所で頂点は左側に軽く曲げて成形される。肥厚帯には細い平行沈線と沈線の上下に連点文を施し，波頂部の直下で沈線を弧を描きながら繋ぎ合わせる。胴部～口縁部の器壁は，やや外傾しながら直線的に立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整で仕上げられる。本遺構で共伴して出土する土器から推察してⅨ類の時期の遺物と判断したい。197は脚部片で，２か所の透かしが外側から施され，小形の深鉢または台付皿状の特殊な器種の脚と推測する。外面接地面近くを肥厚させて沈線と貝殻腹縁刺突文をめぐらせる。外面には平行沈線文を縦位に描き貝殻腹縁刺突文で充填する。Ⅶb類と考えられる。外面に赤色顔料が付着し，蛍光Ｘ線分析の結果，鉄分が多く検出されたことからベンガラの可能性がある。

S055は，頁岩Ｂ類製の剥片で，下辺と右側縁に使用の痕跡がわずかに窺える。S056はホルンフェルス製の磨製石斧Ⅵ類片で，上面・下面が階段状に剥離しており，楔へ転用した可能性も考えられる。S057は砂岩製の剥片を縦長の石斧状に成形した使用痕剥片である。左右両縁部と下面に二次的な加工を行い使用の痕跡が窺える。被熱の痕跡もみられる。S058は黒曜石Ａ類を素材とする石核である。自然面を広く残し，不純物を多く含む。S059は花崗岩製の石皿Ⅰa類である。上部を欠く。ほぼ中央が凹み，凹みの真下に掻き出し口を形成する。中央部分の土坑あたりの埋土の上位から使用面を上にして出土した。

竪穴建物跡15号（第81図）

検出状況

SH15は，Ｄ・Ｅ－９区のⅥ層において検出された。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は2.74m，短軸は2.64mを測る。長短比は0.96，深さ約10cm，遺構の推定面積は5.94㎡であった。遺構内及び周囲からピット，炉跡等は確認されなかった。

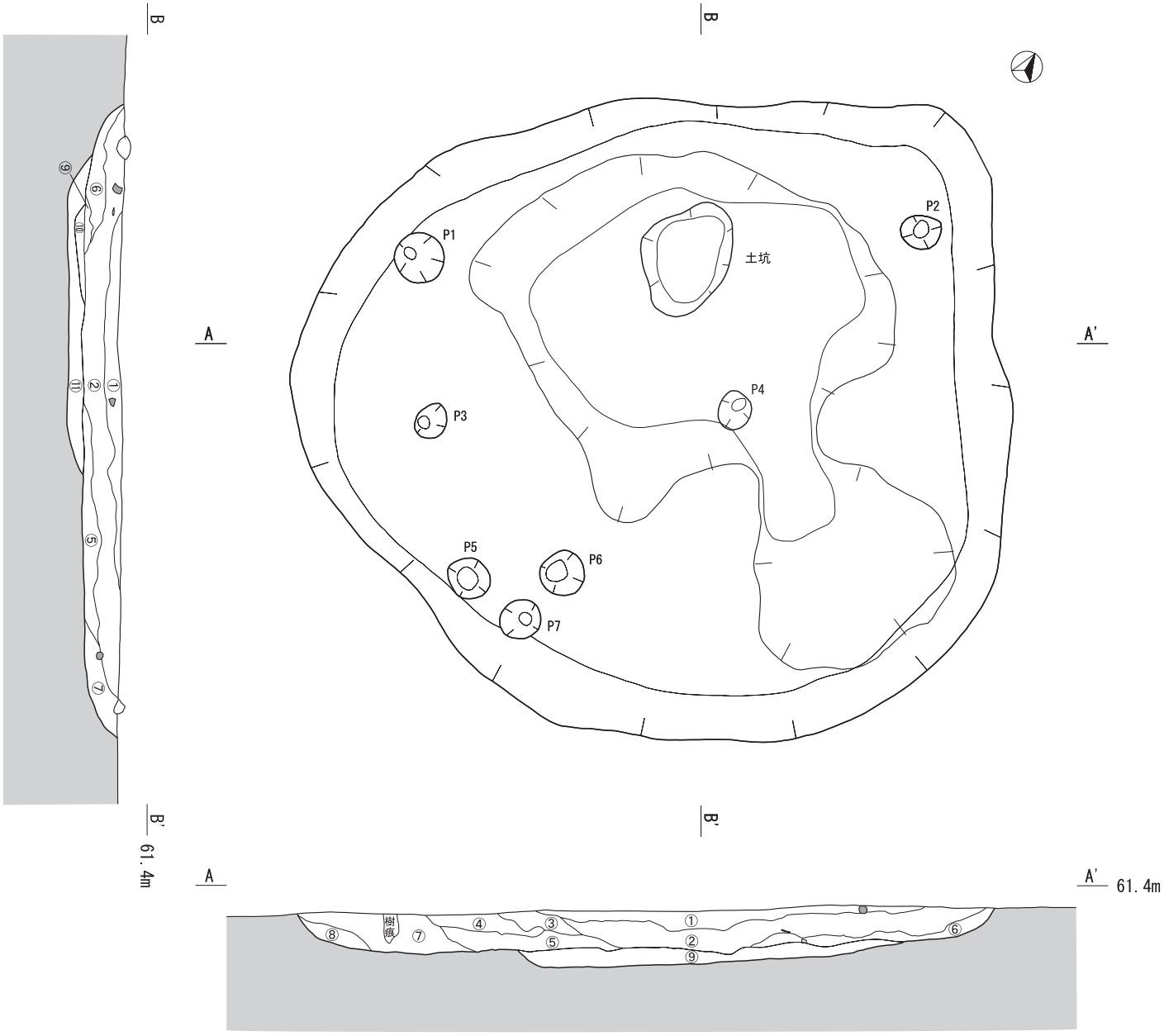
埋土

埋土は，褐色・暗褐色２枚である。橙色粒・黄白色粒を含んでいる。

出土遺物

199は深鉢の口縁部片で，Ⅸb類に分類したが，市来式に比定できる可能性もある。口唇部の角は丸みを帯びる。裏面が大きく剥落する。器面は貝殻条痕により調整される。200・201は底部片である。200の底面にはスダレ状のモジリ編みの圧痕がみられる。201は底面がわずかに残存し，白色付着物がみられる。202は円盤状土製加工品で，口縁部～頸部片を使用する。S060は安山岩Ｃ類製のスクレイパーである。両側縁は破断で作出され，下辺に表裏両側から微細な剥離を施し，直線的な刃部を形成する。

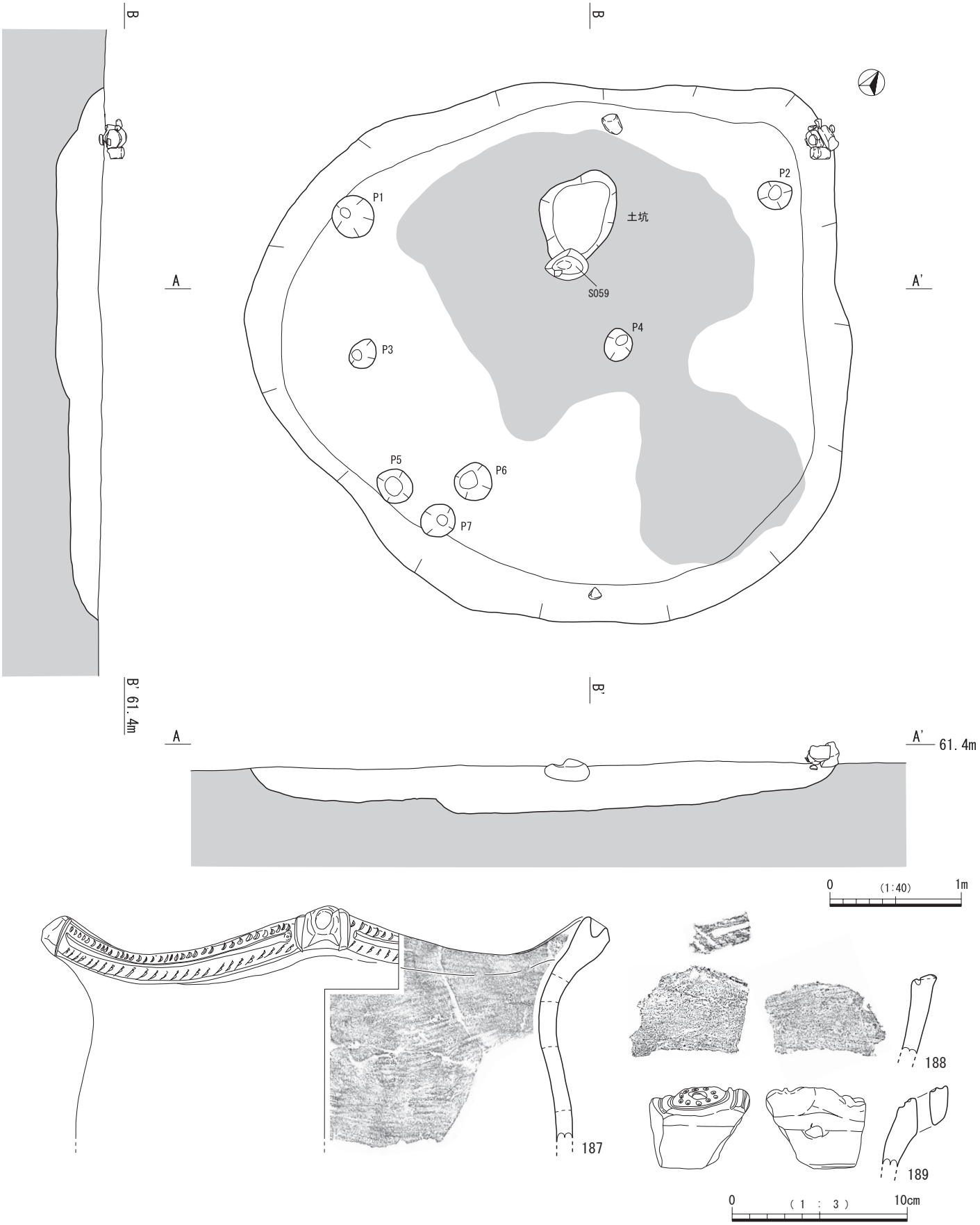
ＳＨ１４（堀方状況）



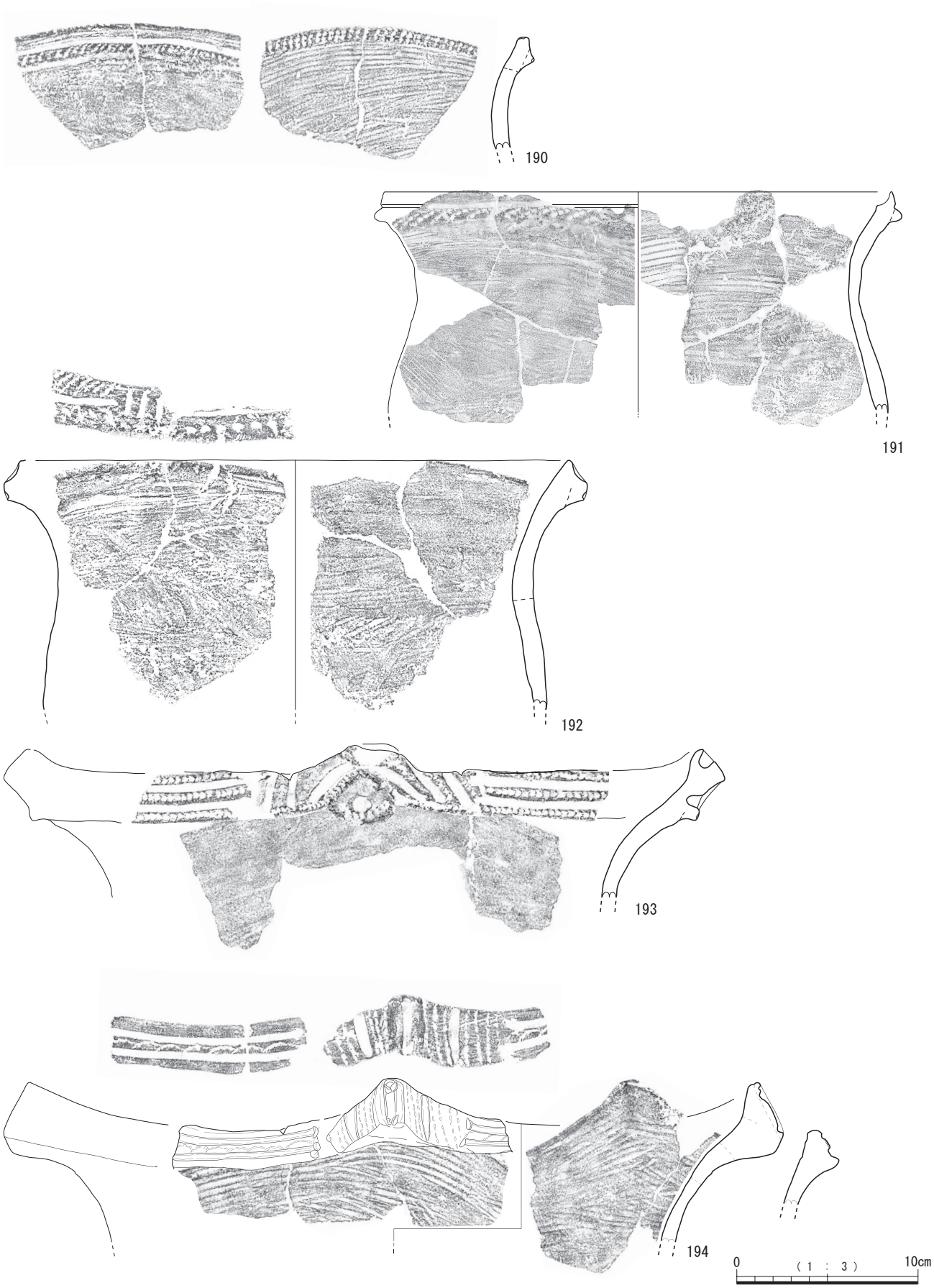
①暗褐色（10YR3/3）　硬質　やや粘質
　白色軽石（0.2～1cm）・微細な火山ガラス・
　炭化物（0.3cm以下）少量含む
　暗褐色粘土（10YR3/4）ブロック（0.3～1cm）が少量混じる
②黒褐色（10YR3/2）　やや硬質　やや粘質
　黒褐色粘土（10YR3/2）ブロック（0.5～1.5cm）が中程度混じる
　黄色軽石（0.2～1cm）・白の小粒軽石を含む
　炭化物（0.2cm以下）・焼土（0.3cm）を含む
③黒褐色（10YR3/2）　硬質　粘質
　黄色軽石（0.3cm以下）・白の小粒軽石をやや多く含む
　炭化物（0.2cm以下）を含む
④黒褐色（10YR3/2）　やや硬質　粘質
　軽石（0.2～0.5cm）を含む　灰白色粒子（0.2cm以下）を少量含む
⑤黒褐色（10YR3/1）　硬質　粘質
　黄色軽石(0.2～1cm)・微細な灰白色粒子を含む
　炭化物（0.2cm以下）を少量含む　焼土が混じる
⑥暗褐色（10YR3/3）　硬質　粘質
　黄色軽石（0.2～1.5cm)を少量含む
　微細な灰白色粒子・微細な火山ガラスを少量含む
　Ｖ層の黄褐色粘土（10YR5/6）ブロック（0.3～2.5cm）が多量混じる
⑦暗褐色（10YR3/3）　硬質　粘質
　軽石（0.3～0.8cm）をやや多く含む
　微細な灰白色粒子（10YR7/2）を少量含む
　焼土（0.2～1cm）を含む
⑧黒褐色（10YR3/2）硬質　強粘質
　軽石（0.3～0.5cm）を少量含む
⑨黄褐色（10YR5/6）　やや硬質　粘質
　黄色軽石（0.2cm以下）を少量含む
　Ｖ層土のにぶい黄褐色（10YR5/4）ブロック（0.5～2.5cm）が多量混じる
⑩褐色（10YR4/4）　やや軟質　やや粘質
　橙色粒（5～10mm）10%・黄白粒（0.1～1mm）５%
　暗褐色土のブロックを含む
⑪褐色（7.5YR3/4）　硬質
　橙色粒（5～10mm）20%・黄白粒（0.1～1mm）20%・Ⅷ層土のブロック
　(2cm程)
　Ⅶ層土が混じる

第77図　竪穴建物跡14号

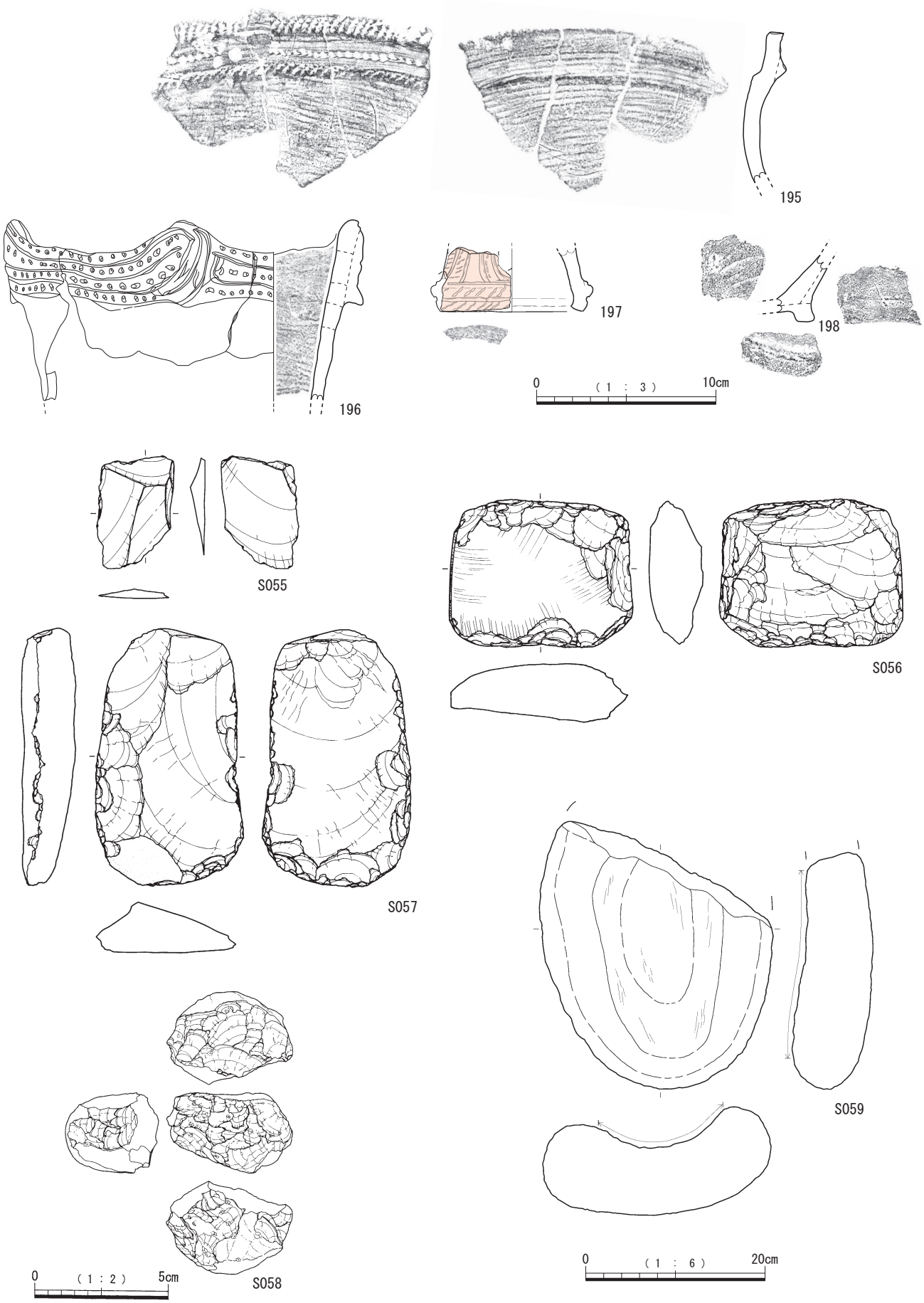
ＳＨ１４



第78図　竪穴建物跡14号と出土遺物（１）

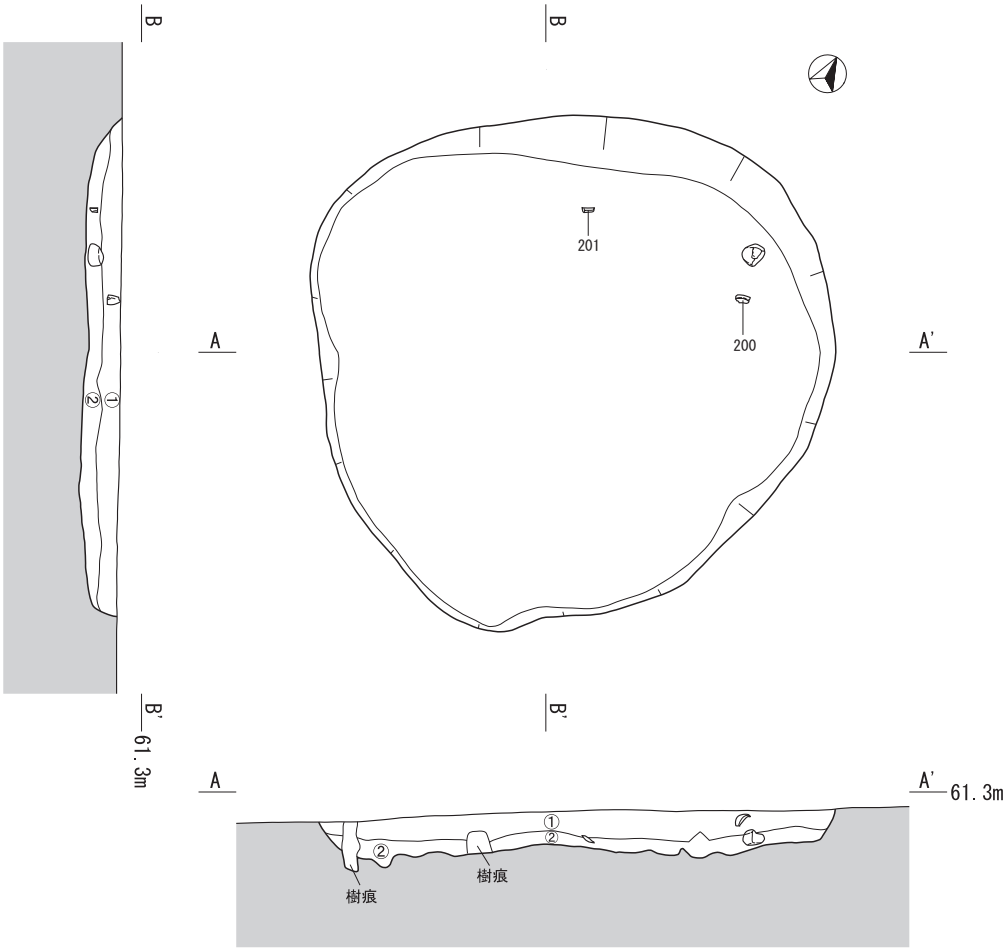


第79図　竪穴建物跡14号出土遺物（2）



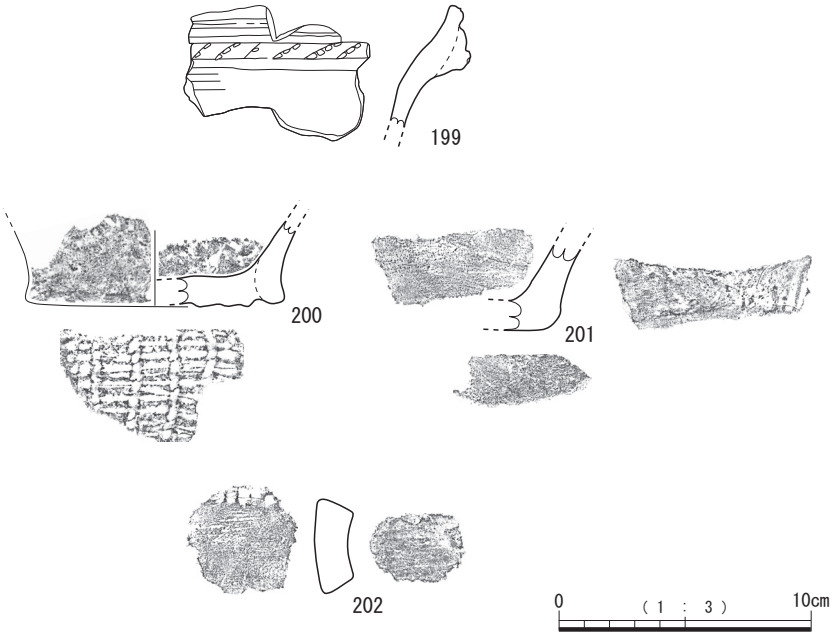
第80図　竪穴建物跡14号出土遺物（3）

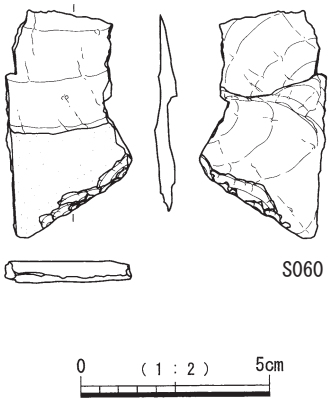
ＳＨ１５



①褐色（7.5YR4/4）　やや軟質
　橙色粒（0.5～10mm）30%・黄白色粒（0.1～1mm）50%を含む
②暗褐色（7.5YR3/3）やや硬質
　橙色粒（0.5～5mm）20%，黄白色粒（0.1～1mm）20%を含む

0　(1:40)　1m





第81図　竪穴建物跡15号と出土遺物

竪穴建物跡16号（第82～85図）

検出状況

SH16は，Ｅ－９・10区のⅥ層において検出された。北西側を竪穴建物跡７号（『小牧遺跡３』掲載）によって切られる。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は4.23m，短軸は4.04mを測る。長短比は0.96，深さ約30㎝，遺構の推定面積は13.39㎡であった。南側の外周には径約0.3m，深さ約0.3mのピット４基，壁面付近に径約0.3m，深さ約0.3mのピット３基，中央部に径約0.26m，深さ約0.3mのピット３基を検出した。中央部に硬化面が認められ，その下部から同規模の掘方が確認された。

埋土

埋土は褐色６枚・暗褐色５枚・黄橙色・にぶい褐色・灰褐色の14枚である。橙色粒・黄白色粒・軽石を含む。複数Ⅴ層土が混じり，一部Ⅵ層土が混ざる。

出土遺物

204～206は深鉢の口縁部片である。203は波頂部片で，波頂部に粘土紐の装飾を施す。口縁部外面と上面に凹線が確認できる。Ⅷa類と考えられる。204・205は口縁部を緩く外反させ，口縁の内側に沈線文や貝殻腹縁刺突文による文様帯を形成する。Ⅸa類に分類した。204の付着炭化物は，放射性炭素年代測定によって暦年較正で3856±23yrBP，2410－2278calBC（確率66.59％）という結果が出ている。206は口唇部の文様帯の一部が残存する。口縁端部を明瞭に角張らせ，平坦面に沈線文・円形刺突文が確認できる。Ⅸa類に相当する可能性が高い。207・208は胴部片である。207は細沈線による斜格子が描かれる。Ⅷ類の範疇である可能性がある。208の器壁は丸みを帯び，器面に細い微隆起線状の突帯により曲線文を描き，その上と縁を貝殻腹縁によって刺突し，施文する。209・210は脚の小片で，残存部の状況から透かしを有すると推測できる。台付皿などの特殊な遺物の脚である可能性が高い。209の外面には細い沈線文が描かれ，ともにⅧ・Ⅸ類に該当すると考えられる。211・212は底部片で，211には網代痕が，212にはスダレ状のモジリ編みの痕が付く。213～222は円盤状土製加工品である。213～216は有文で，216は口縁部片を利用する。213～215はⅧ類と考えられ，216はⅨa類と考えられる。無文のものは内外面に貝殻条痕とナデ調整が施されるが，219の外面の調整には板状の工具が用いられている。

S061・S064は頁岩Ｂ類製の，S062・S063は安山岩Ｃ類製の剥片である。総じて使用痕跡の図上に矢印で示した部分は擦れて滑らかになっている。S064は左側縁の裏面側を加工し，浅い抉りを形成する。S065・S066はホルンフェルス製の打製石斧Ⅳ類である。石材は同質ものを使用する。ともに厚みのあるタイプである。S065は基部で，正面の右半分と裏面の中央に自然面を広く残し，上面と両側辺に表裏から加工を加えている。刃部を欠損した後に下辺も使用した痕跡が窺える。自然礫の形状を活かし，少ない加工で打斧を製作したと推測される。S066は刃部である。右側面が敲き潰れ，その対角線上の左側面が階段状に剥離することから，欠損後に敲石や楔へ転用したことが考えられる。S067は，ホルンフェルス製の磨製石斧Ⅱ類の基部である。上面・下面に使用や二次的な加工の痕跡がみられ，下面側は表裏両側から加工し丸みをもつ刃部様に成形する。本来の刃部を欠損した後に磨・敲石に転用したことが窺える。S068は，安山岩Ｂ類製の磨・敲石で，1/4程度の破片である。形態の分類は難しい。割れた後に破断面を敲打に使用する。被熱による赤色化がごく薄く確認できる。S069は，安山岩Ｂ類製の石錘Ｉd類である。上半部が残存する。上部に両極の剥離で抉りを作り，敲打して角を潰している。被熱の痕跡が認められる。

竪穴建物跡17号（第86図）

検出状況

SH17は，Ｅ－９区のⅥ層で検出された。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は2.65m，短軸は2.59mを測る。長短比は0.98，深さ約23㎝，遺構の推定面積は5.45㎡であった。壁面西側に径約0.2m，深さ７㎝のピット１基を検出した。遺構内に炉跡，硬化面は確認されなかった。

埋土

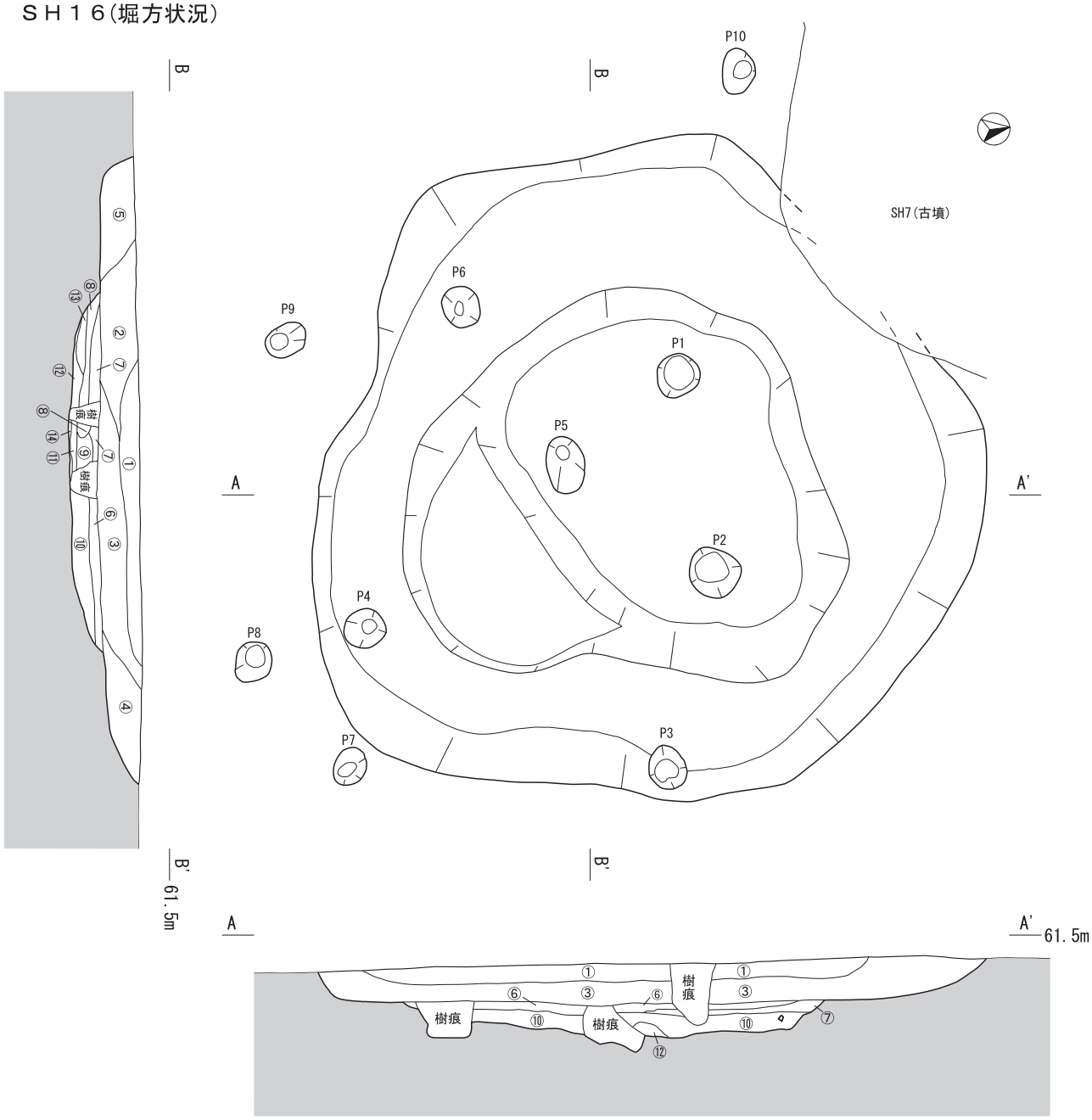
埋土は，褐色系の３枚である。橙色粒・黄白色粒を含む。Ⅳb層土やⅦ層土が混ざる。

出土遺物

223・224は口縁部片である。223は頸部を緩く外反させて開く。口縁端部を丸く成形する。頸部に二重の平行沈線を巡らせ沈線間に連続刺突文を施す。その下に別の文様帯があることが推測される。Ⅷb類と考えられる。224は外傾しながら開き，口縁端部はわずかに内湾する。口縁部外面を肥厚させて二重の沈線を巡らせ，口唇部には凹線を巡らせる。Ⅷa類土器に分類した。225は胴部辺で，器壁は薄く，厚みは不均一で，内外面に粗い貝殻条痕を施す。内面上端に堅果類種子様の丸い圧痕が残る。226～228は円盤状土製加工品である。有文の226・228はシャープな沈線文が描かれ，Ⅷ類の範疇の可能性がある。226の文様は３本単位の平行沈線により描かれる。

S070・S071は頁岩Ｂ類製の小さな剥片である。縦型のS070は周縁部に使用の痕跡が残るが，その頻度は少なかったと推測される。横剥ぎの剥片を利用したS071は下辺を片刃の刃部様に加工している。下面の稜以下には擦れた痕跡がみられ，下辺を鋭利にするために研いだ可能

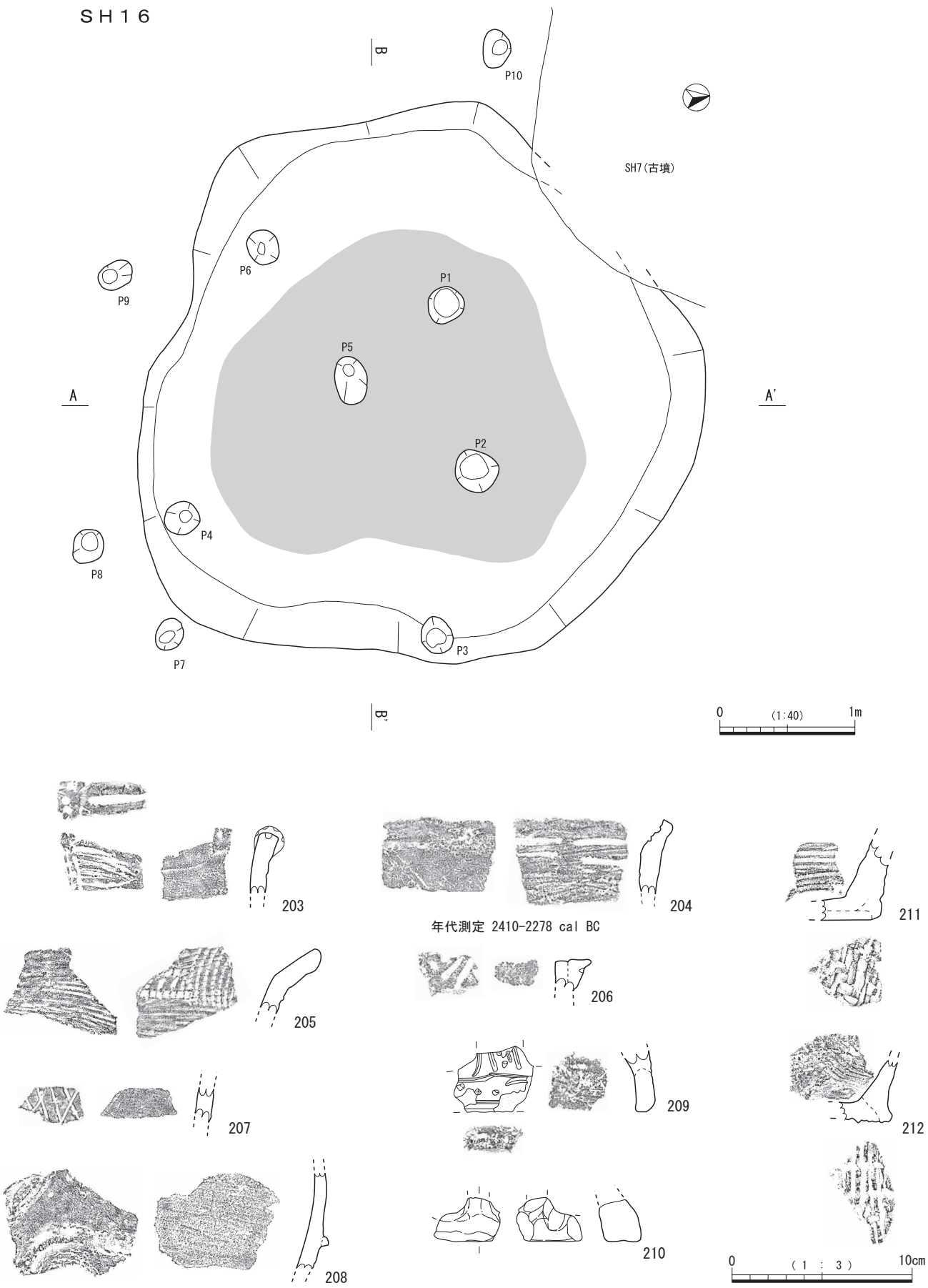
ＳＨ１６(堀方状況)



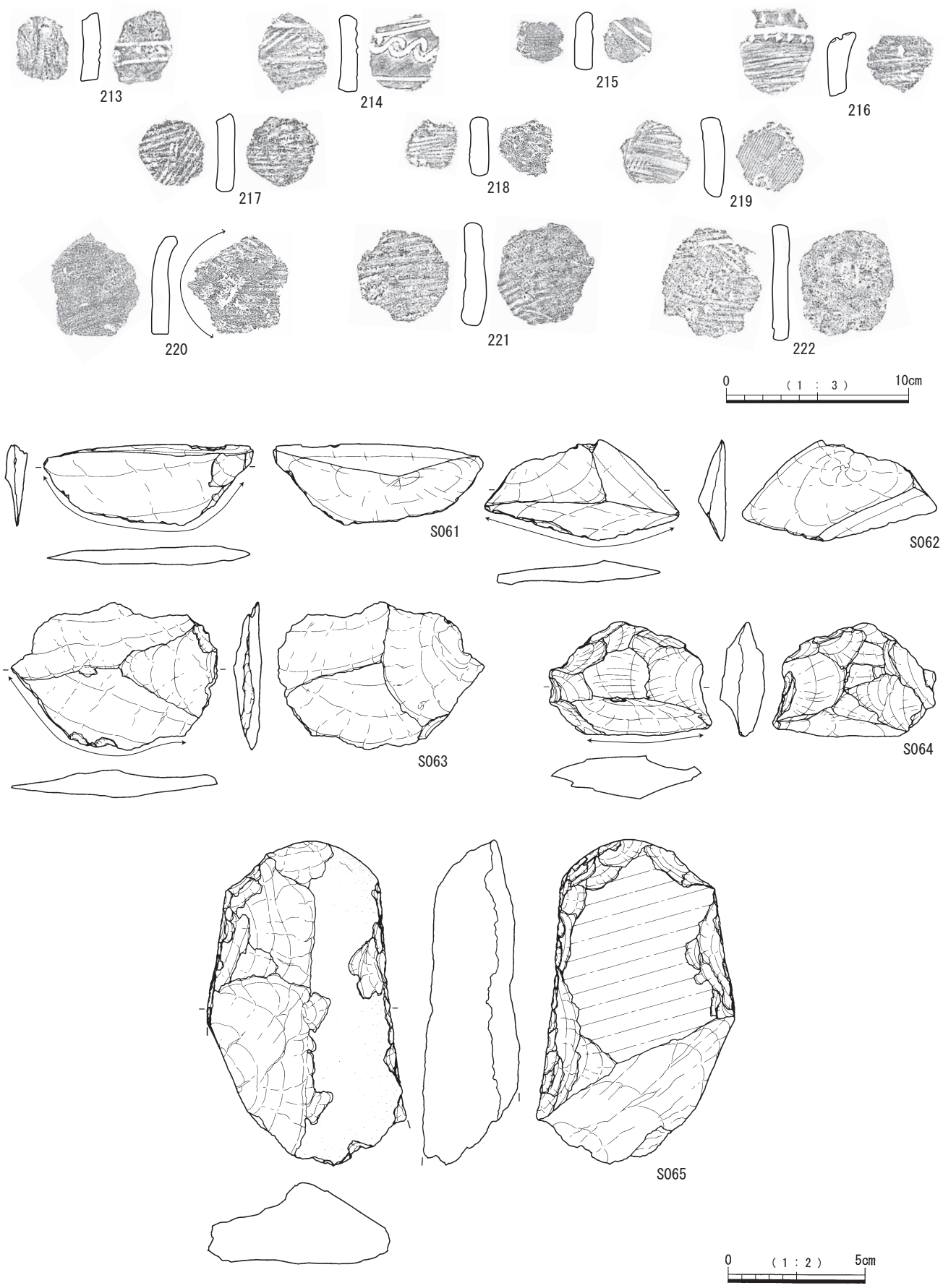
①褐色（7.5YR4/4）　やや軟質
　橙色粒（0.5～２cm）30%・黄白色粒（0.1～1mm）30%を含む
②褐色（7.5YR4/4）　やや硬質
　やや硬質　橙色粒（0.5～２cm）30%・黄白色粒（0.1～1mm）40%を含む
③暗褐色（7.5YR3/4）　やや硬質
　橙色粒（0.5～２cm）10%・黄白色粒（0.1～1mm）20%を含む
④褐色（7.5YR4/6）　やや軟質
　橙色粒（0.5～２cm）20%・黄白色粒（0.1～1mm）20%を含む
⑤褐色（7.5YR4/3）　やや硬質
　橙色粒（0.5～２cm）10%・黄白色粒（0.1～1mm）20%・軽石（5mm程度）
　を含む
⑥褐色（7.5YR4/4）　やや硬質
　橙色粒（0.5～1cm）30%・黄白色粒（0.1～1mm）30%を含む
　Ⅴ層土のブロック（1～10cm）10%が混じる
⑦にぶい褐色（7.5YR5/4）　硬質
　橙色粒（0.5～1cm）30%，黄白色粒（0.1～2mm）30%を含む
　Ⅴ層のブロック（1～10cm）20%が混じる
⑧黄橙色（7.5YR7/8）　粘質
　0.5～1cmの単位でⅤ層とⅥ層が交互に堆積
⑨灰褐色（7.5YR4/2）　硬質
　Ⅴ層・Ⅵ層が部分的に互層となる黄白色（0.1～1cm）20%を含む
⑩暗褐色（7.5YR3/3）
　橙色粒（0.5～2cm）20%・黄橙色（0.1～1mm）20%・
　黄白色（0.1～1mm）20%・軽石（0.5～1cm）をわずかに含む。
⑪暗褐色（7.5YR3/3）　やや硬質
　橙色粒（0.5～2cm）10%・黄橙色（0.1～1mm）10%を含む
　Ⅵ層がブロック状に混じる
⑫暗褐色（7.5YR3/4）
　橙色粒（0.5～2cm）5%・黄白色粒（0.1～1mm）10%を含む
⑬褐色（7.5YR4/3）　やや軟質
　橙色粒（0.5～1cm）10%・黄白色粒（0.1～1mm）20%を含む
⑭暗褐色（7.5YR3/3）　やや硬質　やや粘質
　橙色粒（0.5～2cm）5%・黄白色粒（0.1～1mm）10%・軽石（5～10mm）
　をわずかに含む

0　(1:40)　1m

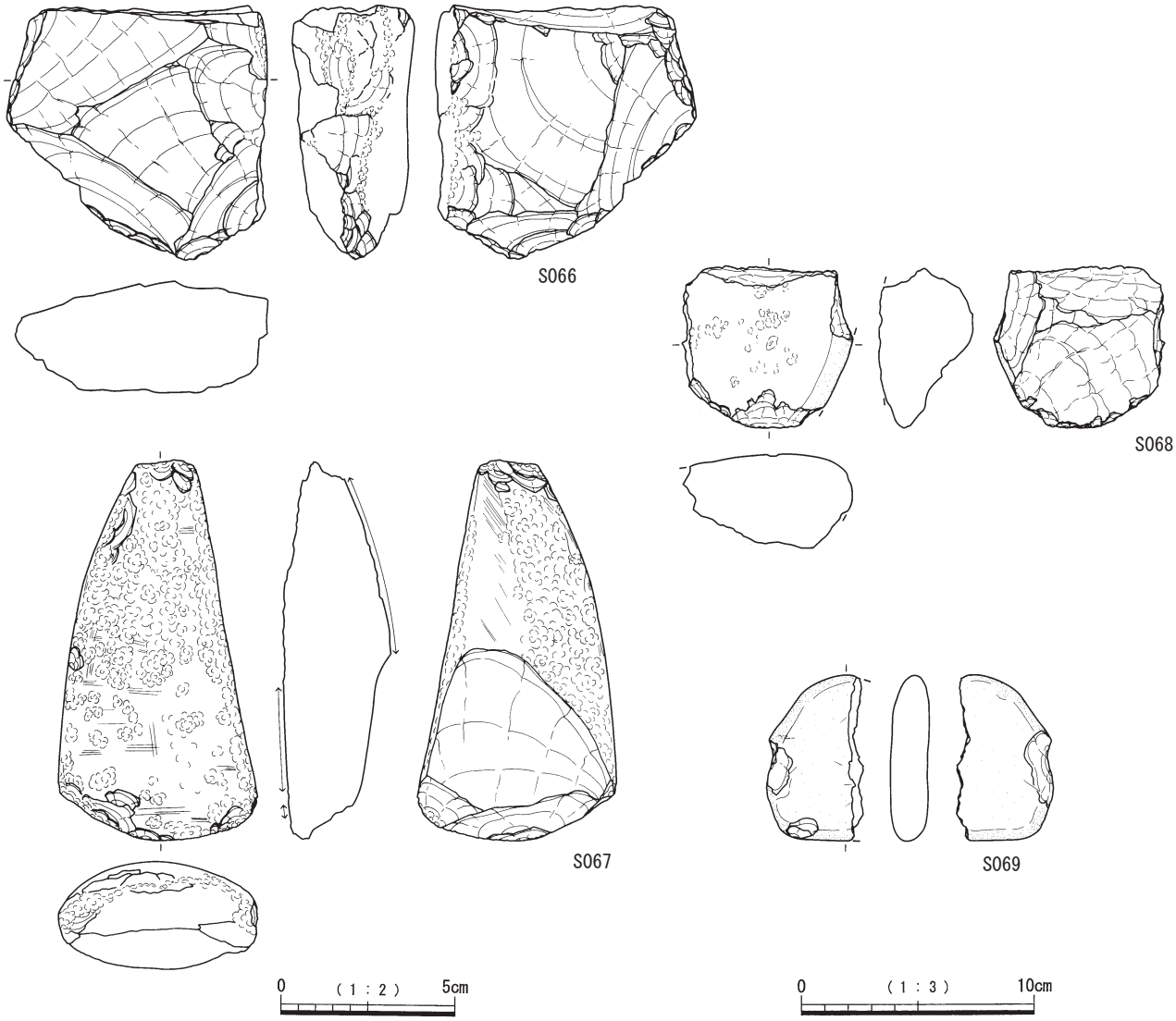
第82図　竪穴建物跡16号



第83図　竪穴建物跡16号と出土遺物（1）



第84図　竪穴建物跡16号出土遺物（2）



第85図　竪穴建物跡16号出土遺物（3）

性も考えられる。

竪穴建物跡18号（第87図）

検出状況

SH18は，F－9区のV層において検出された。北側半分は調査区外にある。

規模と形状

平面プランは，北側半分は調査区外にあるため不明であるが3.7×1.8mの楕円形の可能性もある。長軸は3.71m，短軸は1.79＋αmを測る。深さ約30cm，遺構の推定面積は5.32㎡であった。壁面南側に径約0.2m，深さ約20～40cmのピット4基を検出した。遺構内に炉跡，硬化面は確認されなかった。

埋土

埋土は，暗褐色4枚・黒褐色2枚の計6枚である。橙色粒・黄白色粒や炭化物を含む。一部Ⅶ層土・Ⅷ層土が混ざる。

出土遺物

229は無文の胴部片で，埋土の特徴から縄文時代後期前半の遺物と判断したが，調整の方法と胎土の特徴から弥生時代以降の遺物の流れ込みの可能性ものある。

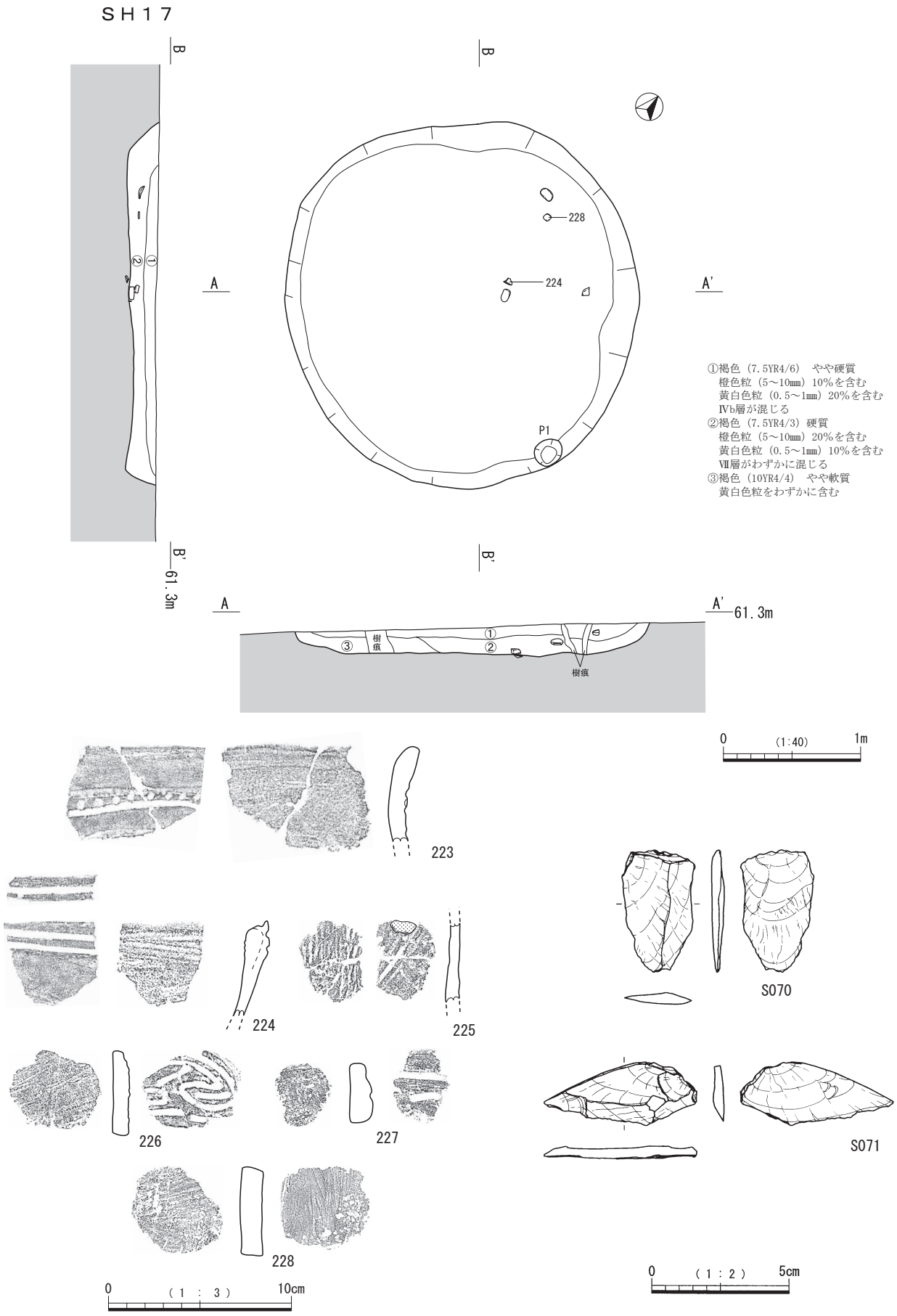
竪穴建物跡19号（第88図）

検出状況

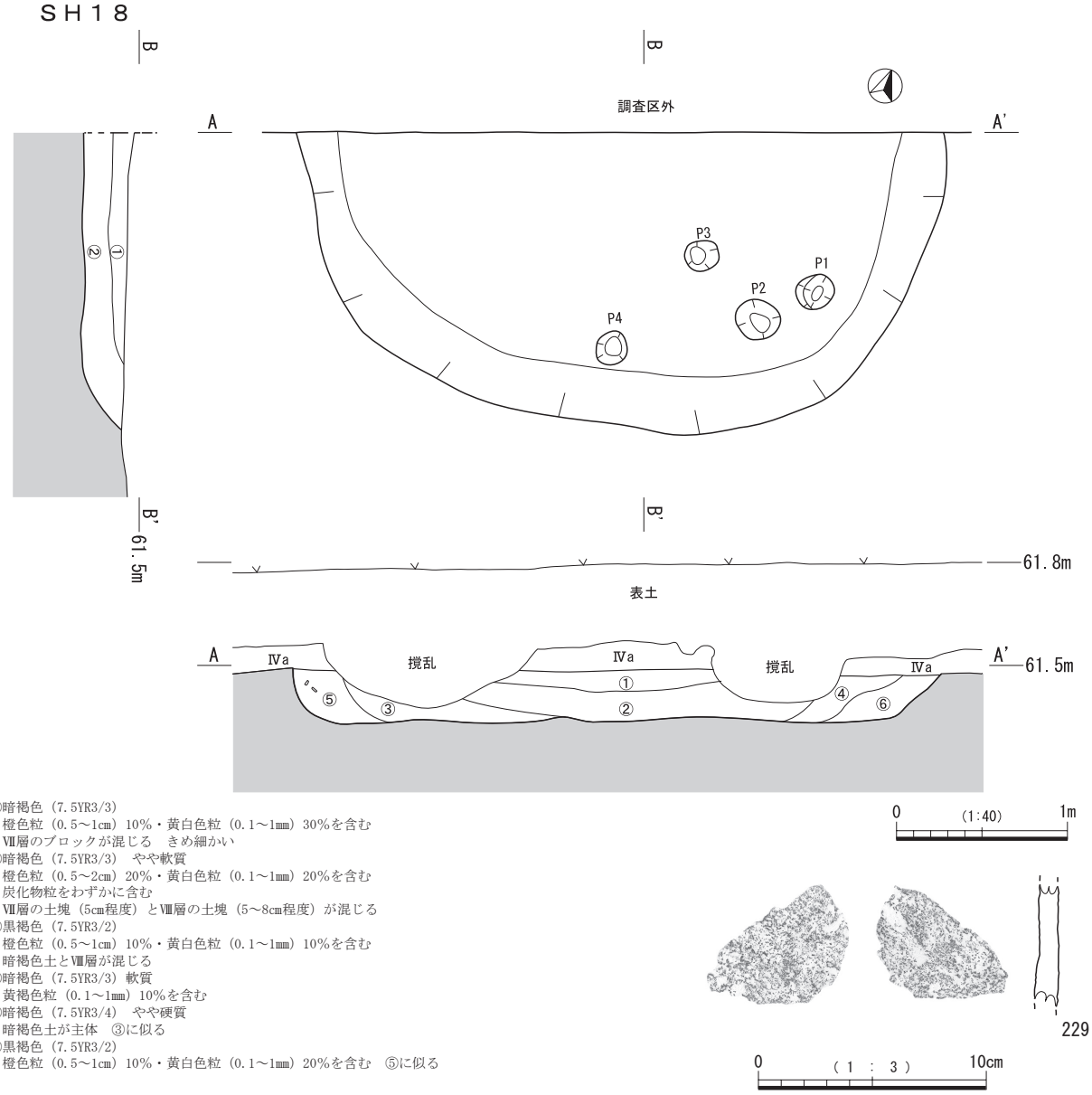
SH19は，C・D-10区のⅦ層において検出された。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は3.70m，短軸は3.65mを測る。長短比は0.99，深さ約22cm，遺構の推定面積は11.35㎡であった。遺構内及び周囲からピット，炉跡，硬化面等は検出されなかった。北西側が1段高く上がる。遺物は床面からやや浮いた状態で出土した。埋土・形状



第86図　竪穴建物跡17号と出土遺物



第87図　竪穴建物跡18号と出土遺物

から後期のものとした。

埋土

埋土は１枚である。池田降下軽石を含み基本層はⅣa層である。

出土遺物

S072は花崗岩の磨・敲石Ⅳ類である。左半を欠損し，半球状になった断面を敲打に使用した痕跡が残る。S073はホルンフェルスの敲石である。下面を使用しており，深い傷状の敲打痕が多数確認できるため，硬質なものが敲打の対象であったことが窺え，石器製作に使用された可能性も考えられる。破断面の再使用は認められず，使用時に割れて廃棄されたと推測される。

竪穴建物跡20号（第89図）

検出状況

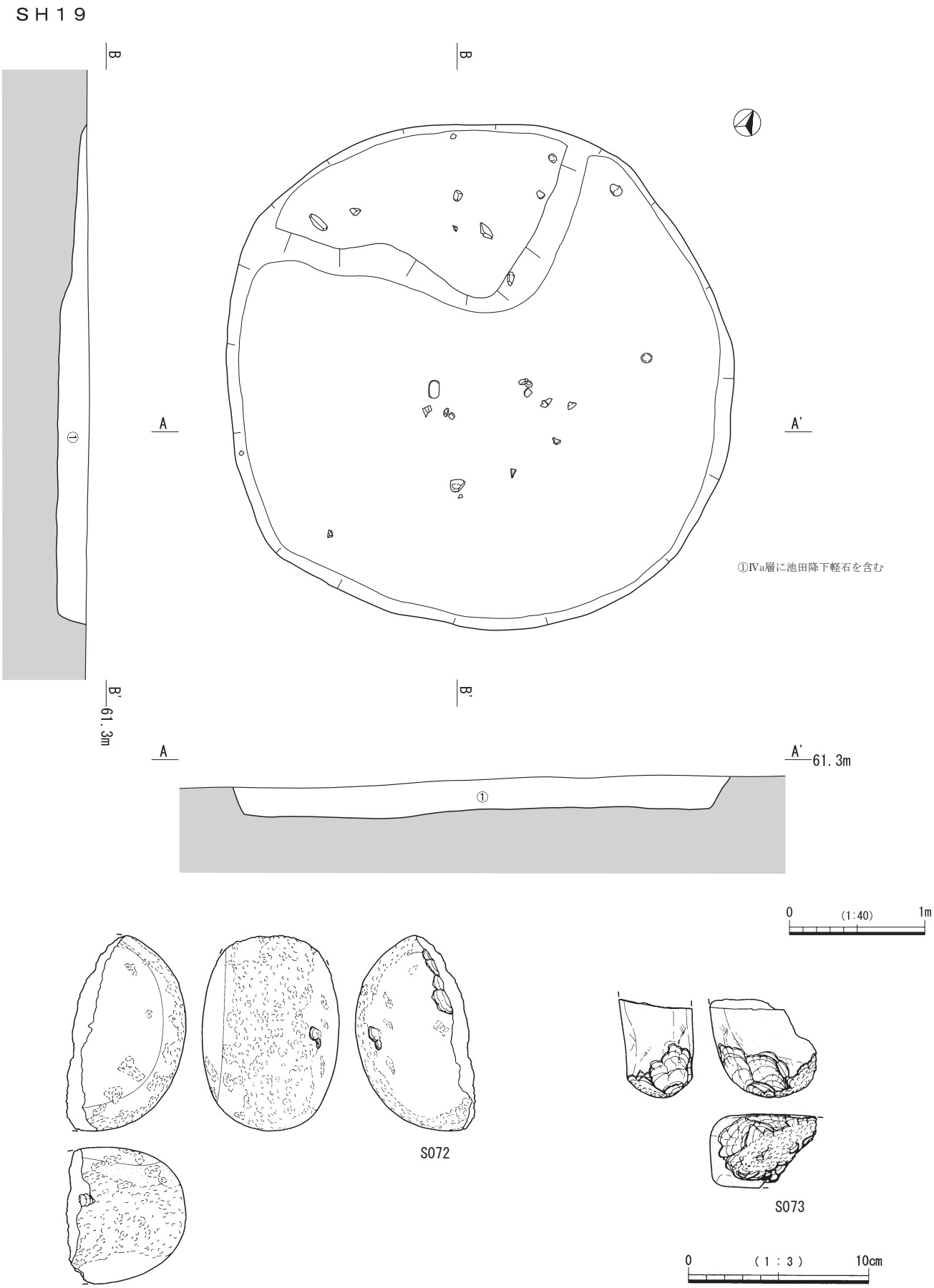
SH20は，D-10区のⅣb層において検出された。

規模と形状

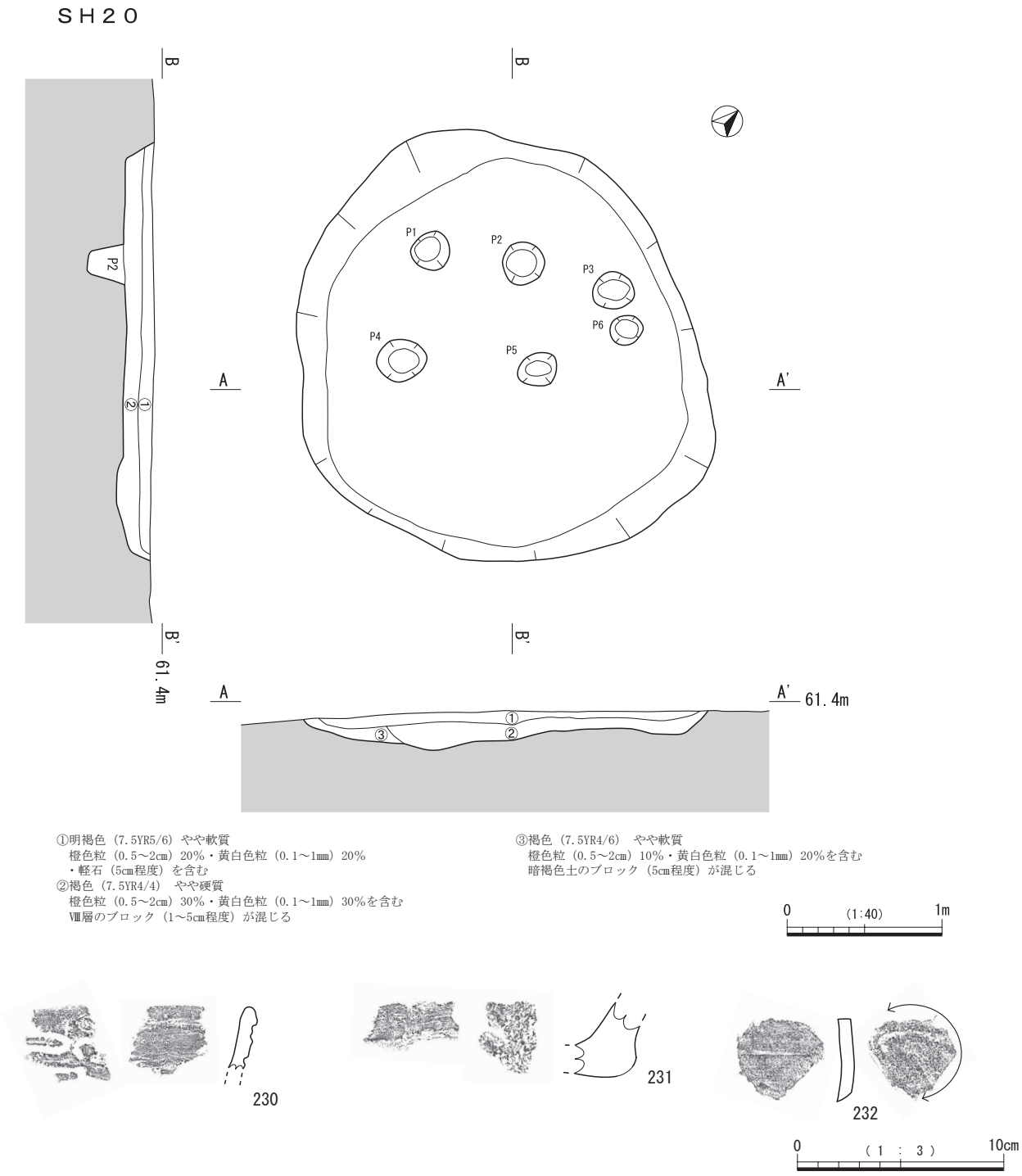
平面プランは，楕円形で，長軸は2.72m，短軸は2.63mを測る。長短比は0.97，深さ約25cm，遺構の推定面積は5.87㎡であった。およそ北半分には径約0.3m，深さ約0.2mのピット６基が認められるも柱穴としての規則性は窺われない。炉跡，硬化面は確認されなかった。

埋土

埋土は褐色２枚・明褐色の計３枚である。橙色粒・黄白色粒・軽石を含む。一部Ⅷ層土が混じる。



第88図　竪穴建物跡19号と出土遺物



第89図　竪穴建物跡20号と出土遺物

出土遺物

230は口縁部片で，凹線により曲線的なモチーフを横位に展開させると推測される。Ⅵb類と考えられる。231は底部片，232は円盤状土製加工品である。

竪穴建物跡21号（第90図）

検出状況

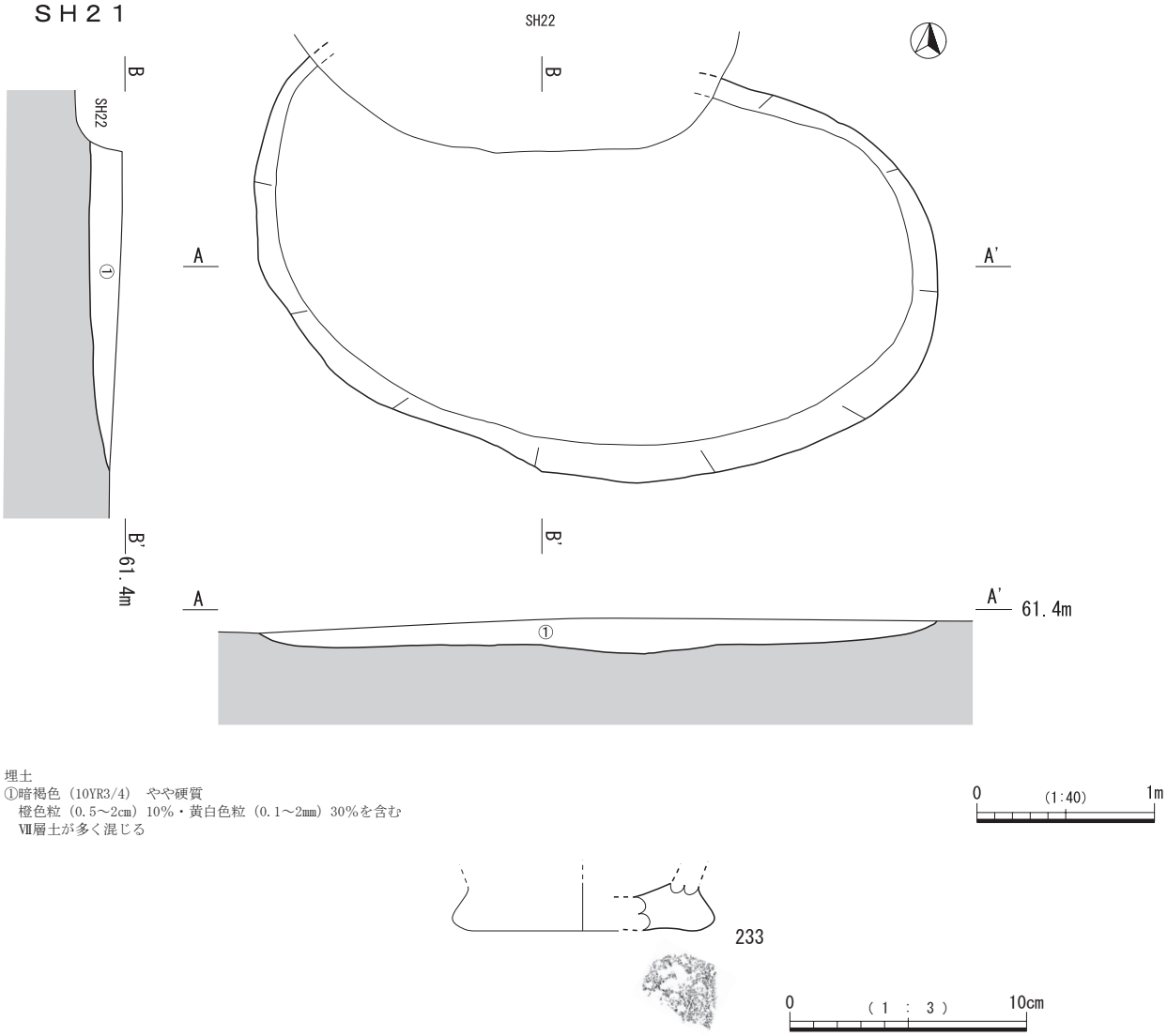
SH21は，D・E-10区のⅥ層において検出された。北側をSH22によって切られる。

規模と形状

平面プランは，扁平な楕円形で，長軸は3.82m，短軸は2.22＋αmを測る。深さ９cm，遺構の推定面積は6.45㎡であった。遺構内及び周囲からピット，炉跡等は確認されなかった。

埋土

埋土は，暗褐色の１枚である。橙色粒・黄白色粒を含



第90図　竪穴建物跡21号と出土遺物

む。Ⅶ層土が多く混じる。

出土遺物

233は深鉢の底部である。接地面近くにくびれを形成する。底面は網代痕をナデ消す。

竪穴建物跡22号（第91図）

検出状況

SH21はＤ・Ｅ－９区のⅥ層において検出された。SH21の北側を切る。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は2.61ｍ，短軸は2.28ｍを測る。長短比は0.87，深さ約27㎝，遺構の推定面積は4.92㎡であった。炉跡，硬化面等は検出されなかった。

埋土

埋土は，暗褐色２枚・褐灰色・灰黄褐色・にぶい黄褐色の計５枚である。池田降下軽石・橙色粒・白色粒を含む。Ⅶ層土やⅧ層土が混ざる。

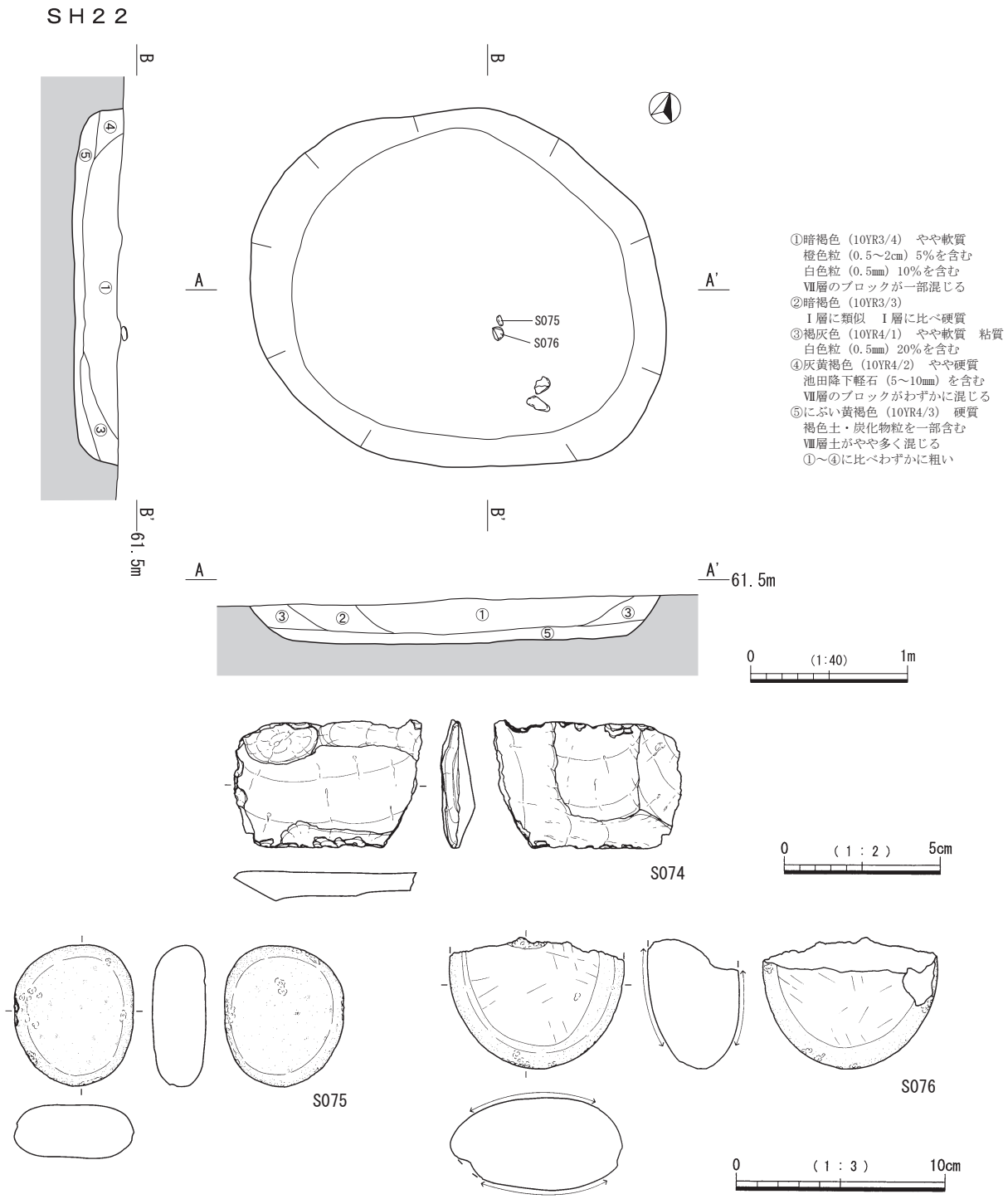
出土遺物

S074は安山岩Ｃ類製の二次加工が認められる剥片で，右辺側を欠損する。上辺は表裏両側から，下辺は主に表側から微細な剥離を連続して施し，水平な刃部状に成形する。下面側の刃部稜はごく浅い「Ｕ」の字状に作られ，擦れており彫器のように使用された可能性も考えられる。裏面の稜線も擦れる。S076・S077は安山岩Ｂ類製の磨・敲石Ⅱa類である。S076は半分が残存する。ともに使用の頻度は低いと推測される。

竪穴建物跡23号（第92～94図）

検出状況

SH23は，Ｃ-15・16区のⅣb層において検出された。南側を古墳時代の土坑13号（『小牧遺跡３』掲載）によって切られる。遺物は用途的に対をなす石皿と磨・敲石と



第91図　竪穴建物跡22号と出土遺物

が一緒に検出されている。

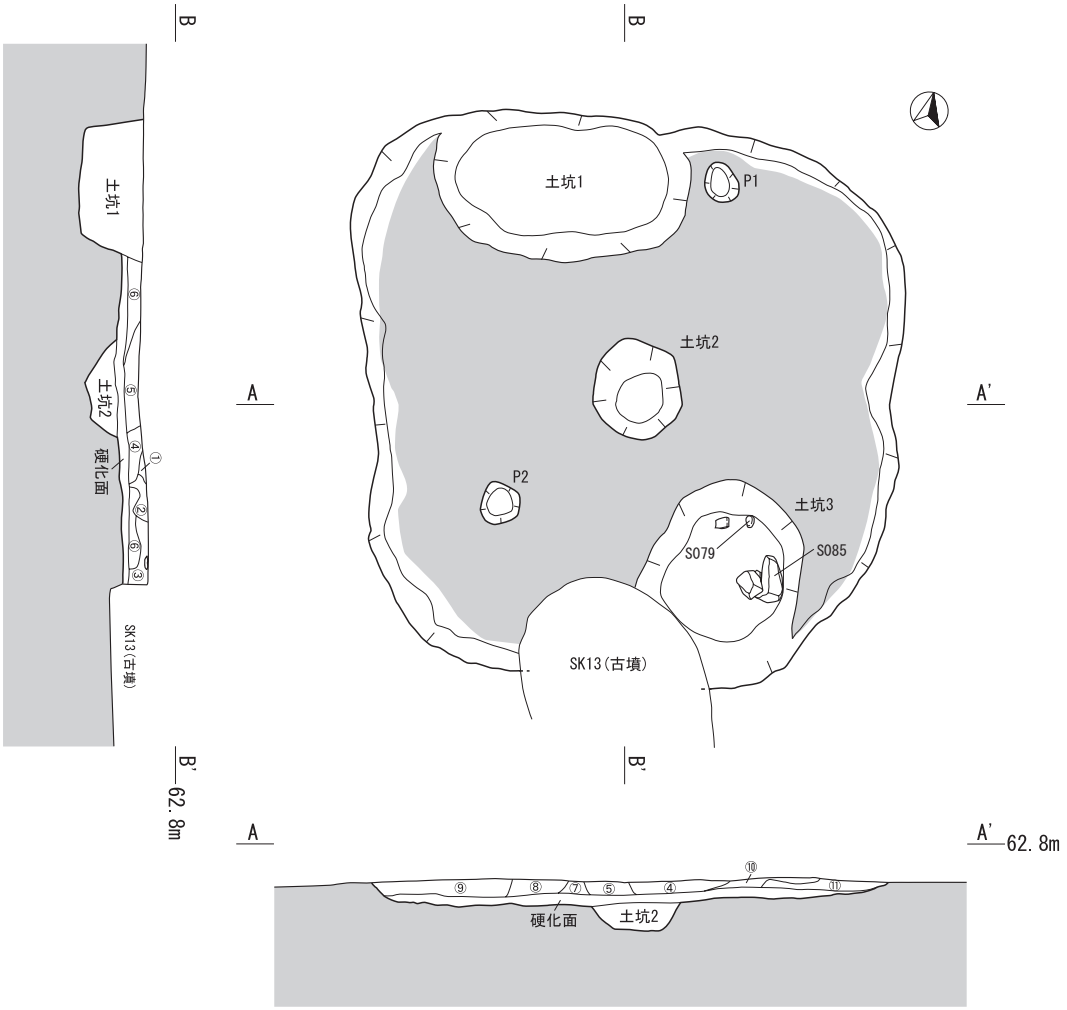
規模と形状

平面プランは，隅丸方形で，長軸は3.27m，短軸は2.73mを測る。長短比は0.83，深さ約13cm，遺構の推定面積は7.20㎡であった。遺構内に径0.2m，床面からの深さ0.10mのピット２基が確認された。床面がほぼ全体的に硬化した状態で認められる。硬化面下からは，土坑２が確認された。焼土，炭化物は認められなかったが，遺構の中央にあることから，炉跡の可能性が考えられる。SH23内の土坑１，３は，当初，SH23に付随する施設と思われたが，別遺構の可能性も考えられる。

埋土

埋土は，黒褐色３枚・にぶい黄褐色３枚・オリーブ褐色２枚・灰黄褐色・暗灰黄色・暗褐色の計11枚である。

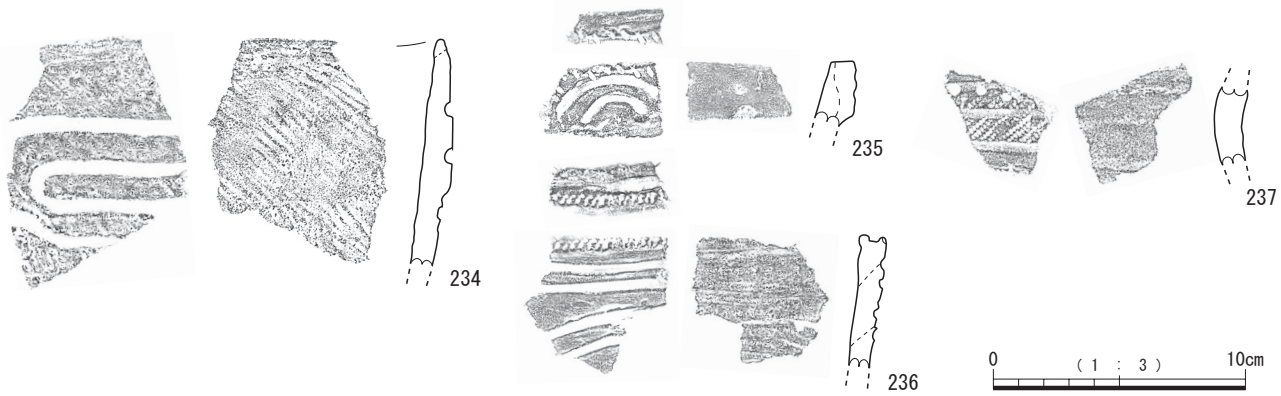
ＳＨ２３



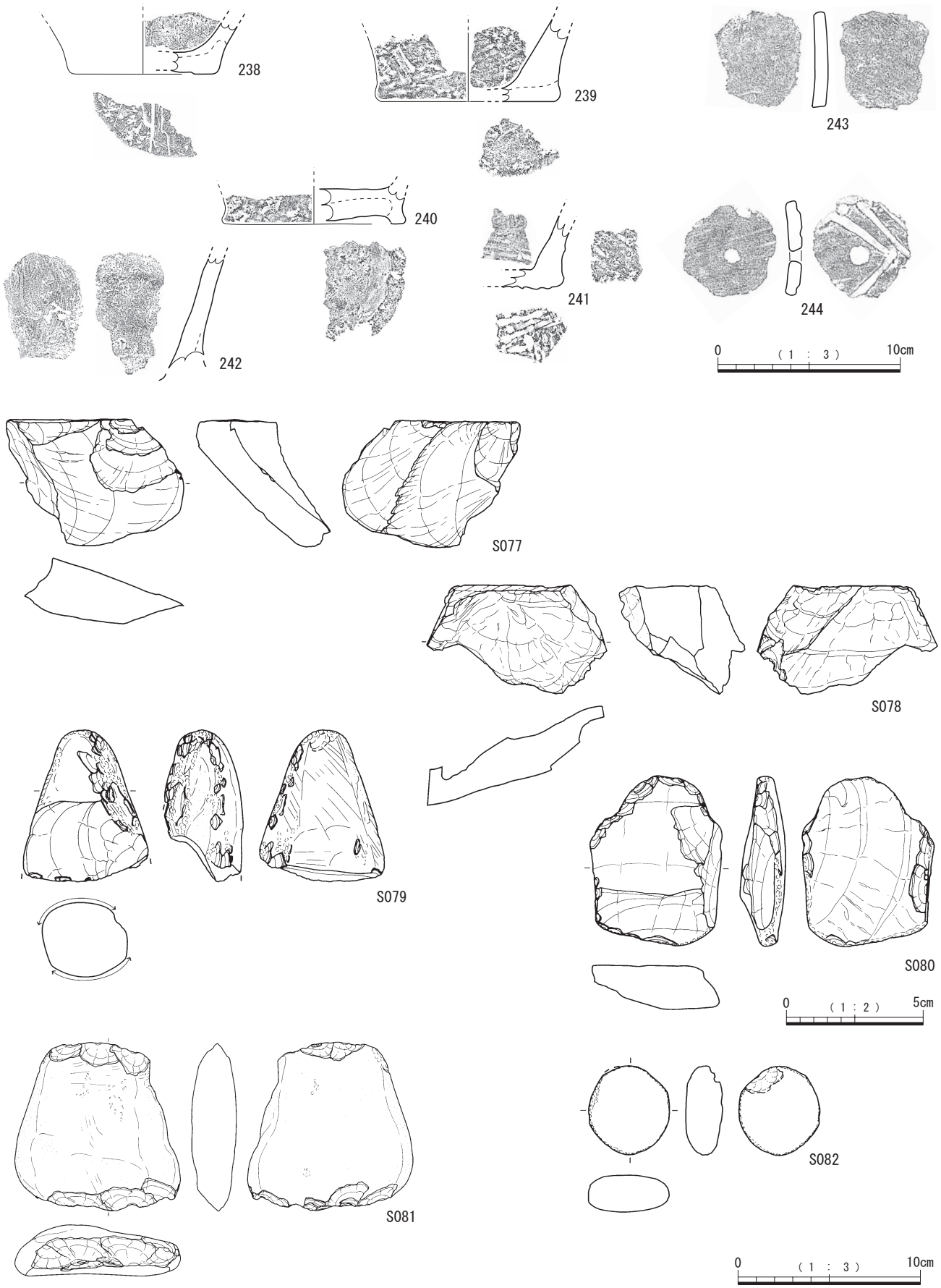
①黒褐色（10YR2/3）　やや砂質
　アカホヤ火山灰2次堆積層の塊を含む　炭化物なし
②にぶい黄褐色（10YR4/3）
　池田降下軽石・アカホヤ火山灰2次堆積層をごくわずかに含む
　炭化物粒をわずかに含む
③にぶい黄褐色（10YR4/3）②に類似
　②よりアカホヤ火山灰2次堆積層が混じる
④黒褐色（10YR2/2）
　アカホヤ火山灰2次堆積層塊・炭化物粒を含む
⑤灰黄褐色（10YR4/2）①に類似
　①よりも炭化物粒の含有が多い
⑥暗褐色（10YR3/4）
　細粒の白色パミス・炭化物を含む　硬質の土塊が埋土上位に散在
⑦にぶい黄褐色（10YR4/3）やや硬質　粘質
　細粒の白色パミスを多く含む
⑧黒褐色（10YR2/3）
　微粒の白色パミス含む　混ざり少なく均質
⑨暗灰黄色（2.5Y4/2）　やや硬質
　池田降下軽石・アカホヤ火山灰2次堆積層・微粒の白色・黄色パミスを含む
　炭化物を含まない
⑩オリーブ褐色（2.5Y4/3）
　軽石やパミスなどの混ざりが少ない
⑪オリーブ褐色（2.5Y4/3）
　池田降下軽石含む　微粒の白色パミス多く含む
　アカホヤ火山灰2次堆積層ブロック・黒色土の小塊がやや多く混じる

土坑１埋土
①灰黄褐色（10YR4/2）　硬質　砂質
　池田降下軽石をごくわずかに含む　細粒の白色パミスを多く含む
　炭化物粒をわずかに含む　部分的に硬化土塊が混じる

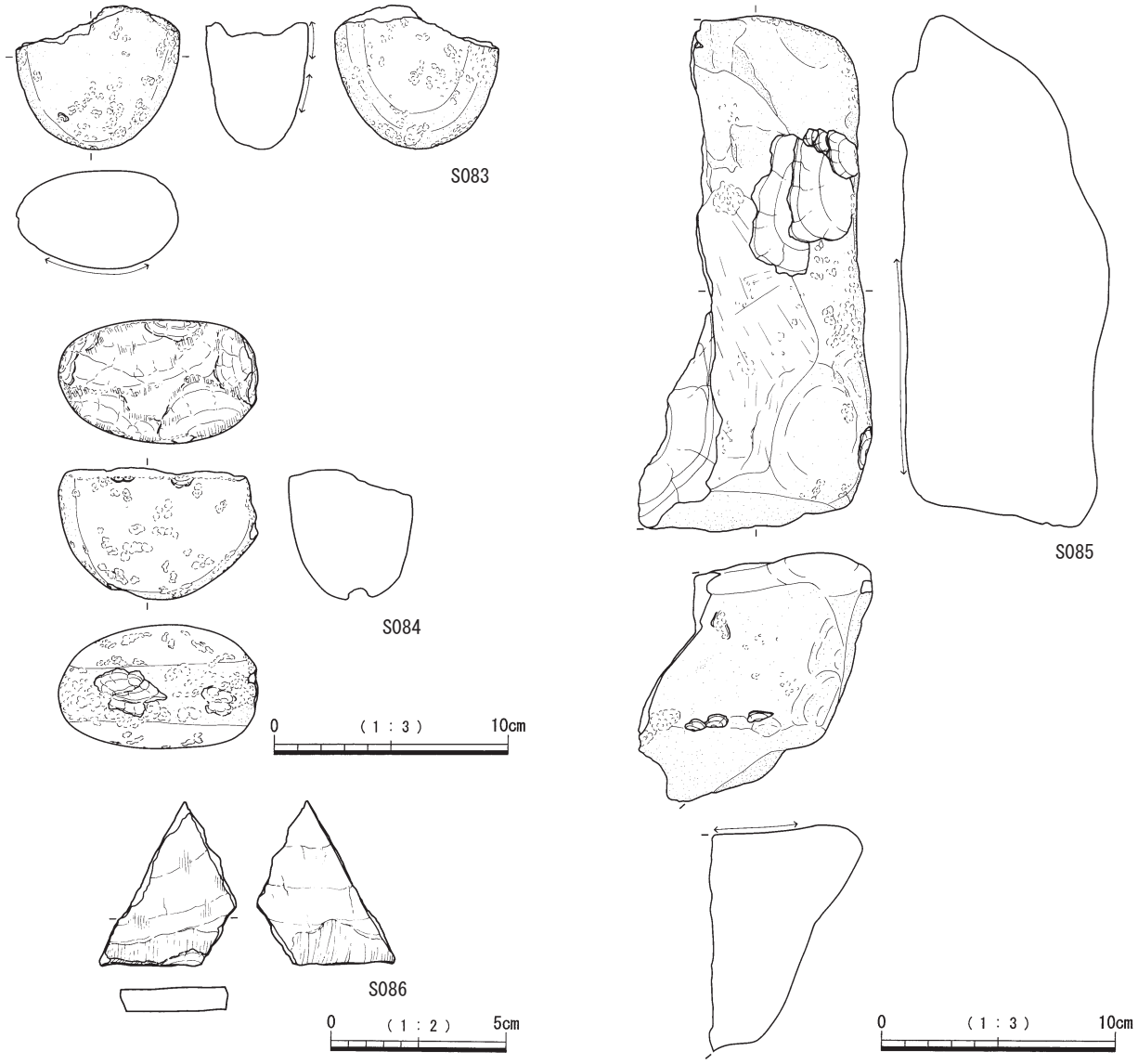
0　(1:40)　1m



第92図　竪穴建物跡23号と出土遺物（１）



第93図　竪穴建物跡23号出土遺物（２）



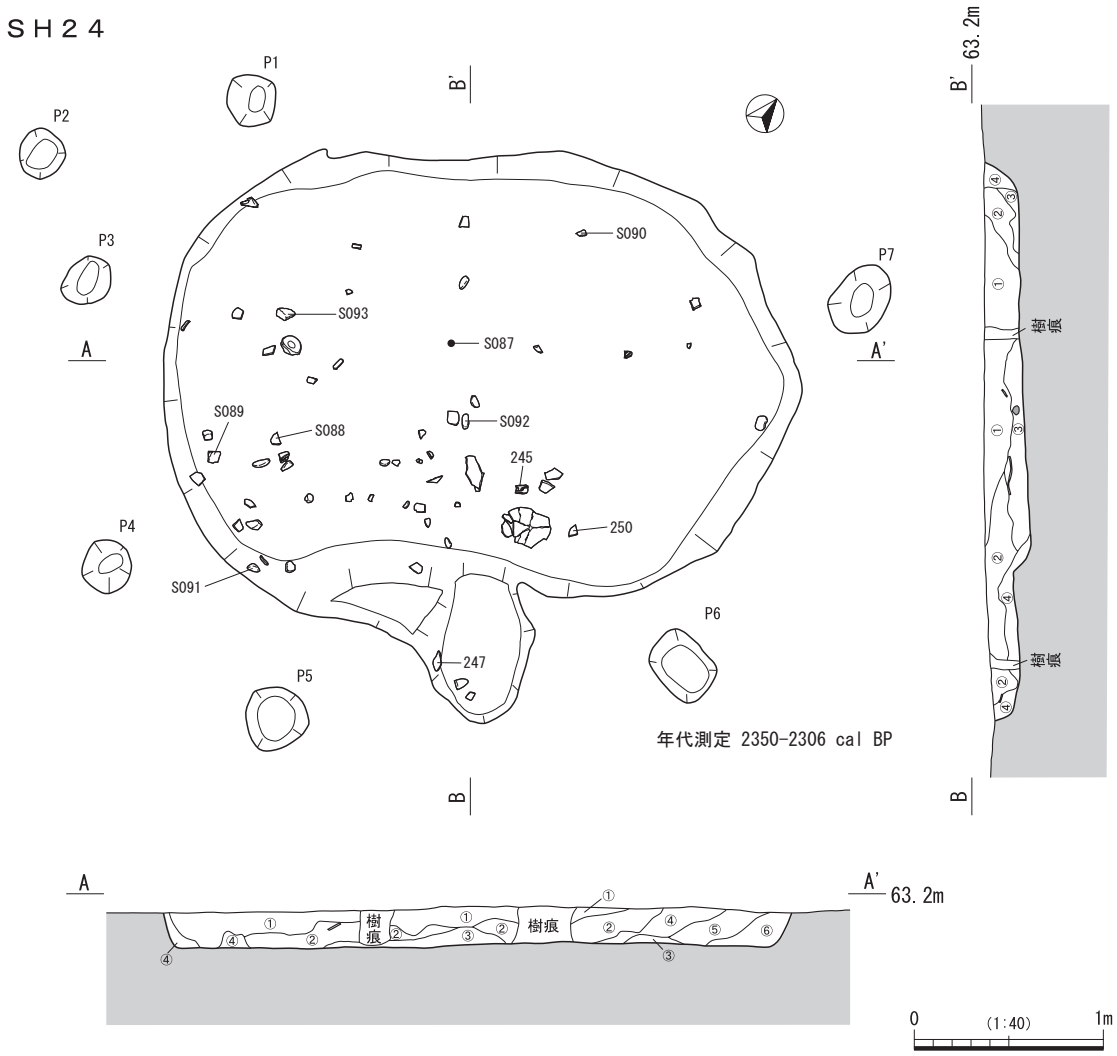
第94図　竪穴建物跡23号出土遺物（３）

池田軽石・白色パミスが含まれる。アカホヤ火山灰２次堆積層が混じる。

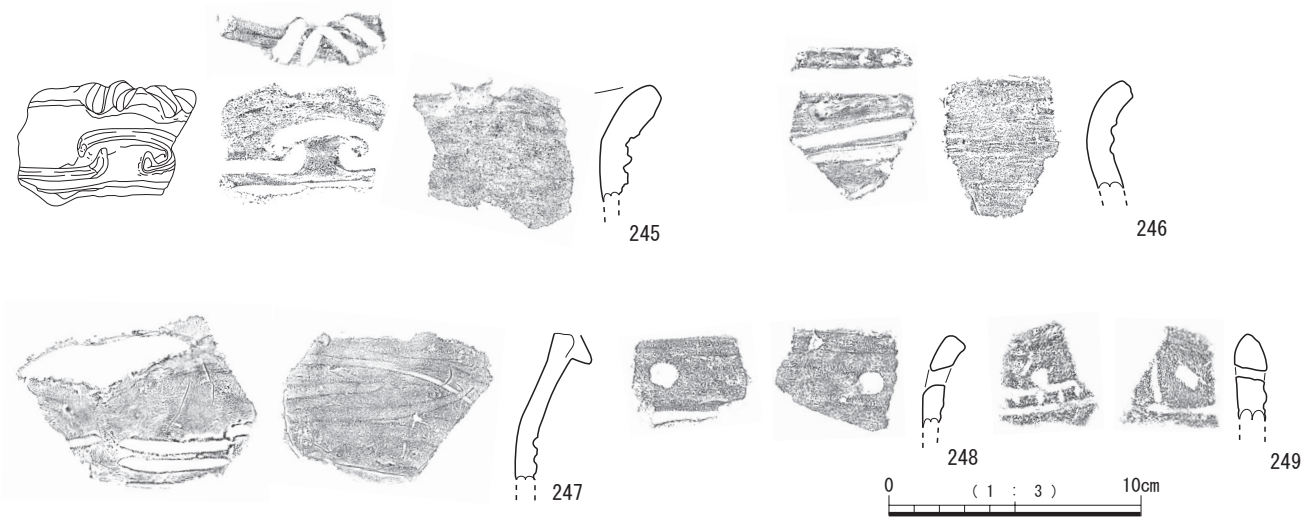
出土遺物

234～237は口縁部片で，口縁端部を欠損する。234はごく緩い波状口縁を呈し，胴部～口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。凹線による幾何学文が横位に展開すると推測される。内外面は貝殻条痕後ナデ調整で，条痕が残る。Ⅵb類と考えられる。235は口縁部を肥厚させ，口縁端部を明瞭に角張らせ，口唇部に平坦面を形成する。肥厚帯には平行沈線によってアーチ状のモチーフを描く。Ⅷa類と考えられる。236は口唇部に明瞭な凹線を巡らせ，凹線の外側に貝殻腹縁刺突文を緻密に施す。口縁部外面は肥厚させず平行沈線文を描く。Ⅶa類と考えられる。237は口縁部を外反させ，屈曲部以下に３条の平行沈線を巡らせ，沈線間に単節縄文を回転し，充填させる。屈曲部の沈線の下部に連点文を施す。238～241は底部片で，239・241は接地面近くをわずかに張り出させてくびれを形成する。底面には，238は葉脈痕が，239はナデ調整を施し白色付着物が，241は網代痕が確認できる。240は低い高台を有する。242は底部近くの破片である。243・244は円盤状土製加工品である。244は丸みをもつ胴部片を使用し中央に表裏両側から穿孔を施す。文様の特徴からⅧ類と判断できる。

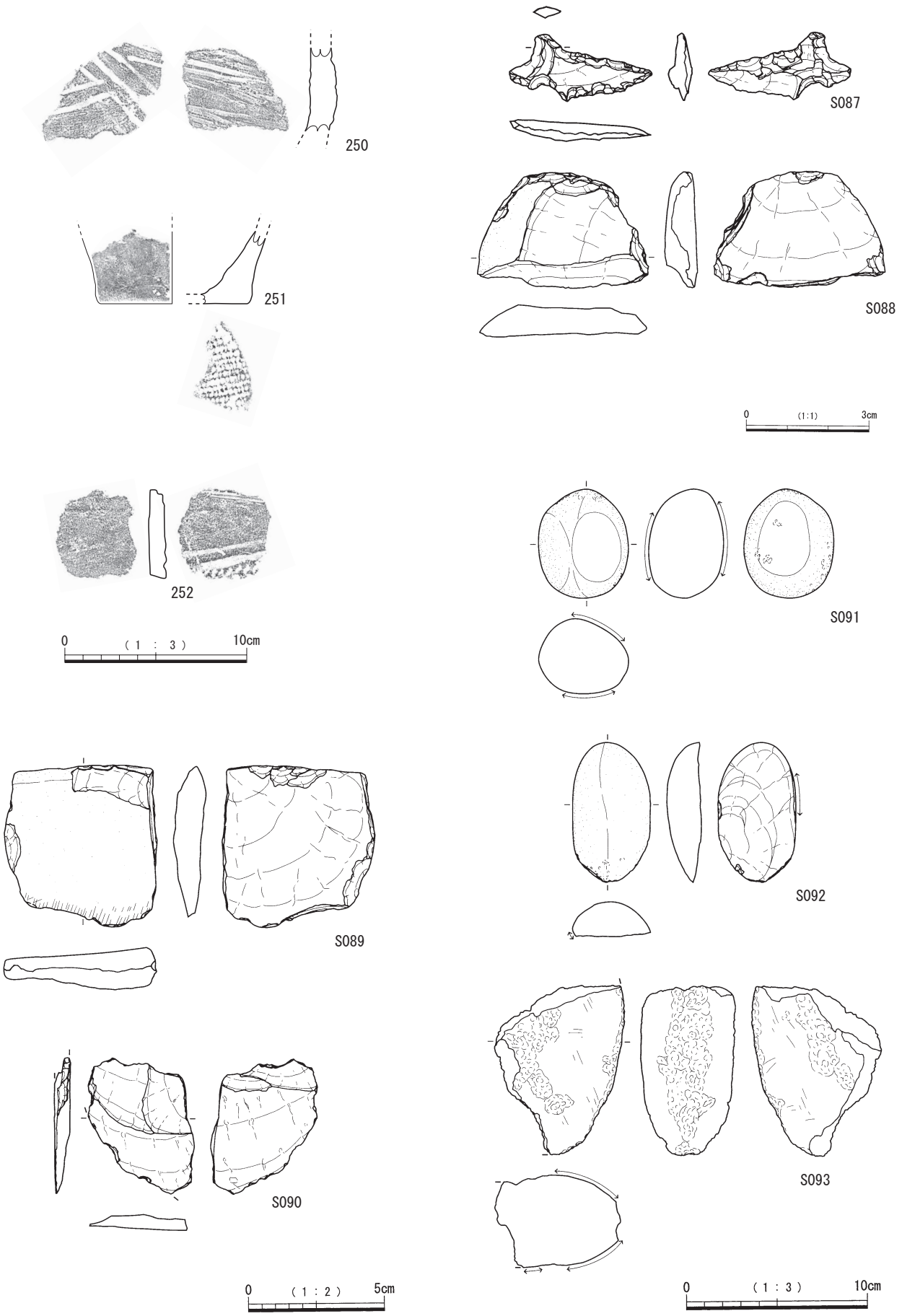
S077とS078は頁岩Ｂ類製で，同質な石材である。同じ母岩からの産物である可能性も否定できない。S077は石核から直接剥ぎ取った剥片の，下面側の鋭利な部分に使用の痕跡がみられるものである。S078は残核である。本遺跡では，同様の石材の剥片に二次的な加工や使用痕跡が認められる遺物が多く出土している。S079は，ホルンフェルス製の磨製石斧Ⅵ類で基部がわずかに残存する。



①にぶい黄褐色（10YR4/2）やや砂質
　池田降下軽石・細粒炭化物をごくわずかに含む
②にぶい黄褐色（10YR4/3）　やや砂質
　微粒の白色・黄色パミスを多く含む
　細粒の炭化物を含む　濃茶色土粒を含む
③褐色（10YR4/4）　やや粘質
　アカホヤ火山灰を含む　炭化物を含まない　粒子は他より細かい
④にぶい黄褐色（10YR4/3）　やや砂質
　②よりもパミス微粒の入りが少ない　炭化物あり
⑤にぶい黄褐色（10YR4/3）
　②とほぼ同じでパミス等を含む　濃茶色土粒を含まない
⑥褐色（10YR4/6）　やや火山灰質
　微粒の炭化物わずかに含む　⑤にアカホヤ火山灰を含む
　Ⅵ層の土塊わずかに混じる



第95図　竪穴建物跡24号と出土遺物（1）



第96図　竪穴建物跡24号出土遺物（２）

S080は，ホルンフェルス製の使用痕剥片である。打製石斧からの転用品であり，上面は連続して微細な剥離を施し円形に成形され，先端部分が敲き潰れる。下面は敲打により潰れる。上下を返し，楔として使用した可能性も考えられる。S081は礫器で，上面・下面を粗く打ち欠き刃部を形成する。S082～S084は安山岩Ｂ類製の磨・敲石で，形態はS082はⅡa類，S083・S084はⅥ類に属する。S082は小形で扁平な円礫を使用する。S085は砂岩製の石ⅢⅣ類（台石）である。1/2の破片の一部で全体形状は不明だが，砥石の可能性もある。下部と右側縁下部で叩打を行っている。叩打に際し，鋭利な個所を求めたと推測される。S086は，砂岩製の扁平な砥石の破片である。下辺部は表裏両面を使用され，断面が尖ることから擦切石器と考えられる。被熱の痕跡が窺える。

なお，S085は，土坑３の壁に沿うように検出されている。

竪穴建物跡24号（第95・96図）

検出状況

SH24は，Ｄ・Ｅ-16区のⅣb層において検出された。調査区の中央部であり，縄文後期の竪穴建物跡で最東部に位置する。

規模と形状

平面プランは，楕円形で，長軸は3.35m，短軸は2.97mを測る。長短比は0.89，深さ約24㎝，遺構の推定面積は7.14㎡であった。南東側には床面から0.1mの段差で高い張り出し部があり，両側には対をなす径約0.3m，深さ約0.3mのピット２基が認められることにより，出入口の可能性が考えられる。外周には，径約0.3m，深さ約0.3mのピット５基があり，SH24に付随するものと考えられる。遺構内に炉跡・硬化面等は確認されなかった。

埋土から検出されたカラスザンショウ種子の^{14}C年代は2285±20YRBP１σ，２σの暦年代範囲が2350-2360calBPで弥生時代前期末から中期前半頃のやや新しい値を得た。

遺物は床面直上を主として張り出し部付近に集中し，P３から磨・敲石が出土した。

埋土

埋土は，にぶい黄褐色４枚・褐色２枚の計６枚である。池田降下軽石，白色パミス・黄色パミスや炭化物を含む。Ⅴ層のアカホヤ火山灰やⅥ層土塊が混じる。

出土遺物

245～249は口縁部片で，249は小片のため形態の判断ができないが，そのほかは外反しながら開く形態である。245・246・248・249は口縁部直下を無文とし，頸部を平行沈線で区画する特徴からⅧb類に分類した。247は，口縁部最上位に横位の突起を貼り付け，その一部が器面に残存する。突起はやや下垂し，断面形は三角形状である。口唇部には別のパーツが剥落した痕跡が窺え，装飾を持つことが推測される。外面屈曲部には短い平行凹線を描く。Ⅷ類の範疇と考えられる。248・249は口縁部上位に内面側から穿孔を施す。250はⅧ類土器の胴部片で胴部が丸く張り出す器形と推測される。251は深鉢の高台状の底部で，底面にはモジリ編み痕がみられ，白色物質が付着する。252は胴部を用いた円盤状土製加工品である。外面に沈線と貝殻腹縁刺突による擬似縄文が施され，Ⅶb類と考えられる。

S087は，安山岩Ａ類製の異形石器とした。石匙に類似した形状をもつが詳細は不明である。下面にノッヂ状の抉りをもつ。S088～S090は二次的な加工や使用の痕跡が認められる剥片である。S088・S089はホルンフェルス製で，S088は上面と右側縁に階段状の剥離がみられ，楔に使用された可能性も考えられる。S089は，主に上面・左側縁に二次的な加工が施されている。下面には使用によると思われる磨耗がみられる。S090は安山岩Ｃ類製の使用痕剥片である。上端を欠損し，左側から下端部にかけて微細剥離を施す。左上部はつまみを意識して加工した可能性もある。S091は磨・敲石Ｉ類で，S092・S093はⅣ類である。S092・S093は部分的に残存するものである。S091・S093は安山岩Ｂ類製でS093はそのうち多孔質のものを使用する。S091は使用の痕跡が薄い。S092は人為的に割り，その剥片を再利用したもので，下面に使用の痕跡が窺える。元の形状が推測できることからＩ類の可能性もある。S093は大型のものの破片で，正面，背面の中央部分と側面を敲打に使用し，擦痕も表裏に確認できる。よく使用されている。

埋土上位から刻目突帯を持つ壺の破片が，中位から弥生時代の中実脚が出土し，帰属時期の判断に迷ったが，埋土の特徴から後期と捉えた。

（２）土坑（第97～140図）

縄文時代後期の土坑は，52基検出された。層堆積が不明瞭な状況があるため，遺構内から出土した土器の特徴により帰属時期を判断した。竪穴建物跡の周囲からも検出されたが，多くは竪穴建物跡集中エリアの内側からの検出であった。また，22区～28区の調査区中央部分にも散在する。

これらの土坑を平面形から分類している。内訳は，タイプⅠ（長楕円）１基，タイプⅡ（楕円）25基，タイプⅢ（円形）15基，タイプⅣ（不明）11基であった。

土坑７号（第97図）

検出状況

SK７は，Ｂ-２区のⅣb層で検出された。長軸は0.78m，短軸0.67m，深さ20㎝，推定面積は0.42㎡を測る。平面形は楕円率0.86の円形で，断面形はレンズ状である。

分類：タイプⅢ

埋土

埋土は単層で土色や性質については不明である。

出土遺物

253は大型の深鉢の完形品である。平坦口縁で口縁部は外反しながら開く。口縁端部を丸くおさめ，口唇部には４か所に４個単位の指頭による強い押圧を施す。胴部をわずかに張り出し，胴部上位に３本の平行沈線文を巡らせ，沈線の繋ぎ目を入り組ませる。内外面は貝殻条痕後ナデ調整である。内面頸部屈曲部あたりに横位の条痕を残す。底部にはごく低い高台を有し，底面には白色物質が付着する。胴部の最大径部分より上位に煤が付着する。Ⅷb類と考えられる。

土坑７号の中央部分から，253のみが纏まって出土した状況である。土器片の多くは埋土上位からの出土で，一部が床着である。出土状況から破砕後に埋納された可能性も考えられる。

土坑８号（第98・99図）

検出状況

SK８は，Ｂ－３区のⅣb層で検出された。長軸は1.20＋αｍ，短軸1.12m，深さ21cmを測る。平面形は円形に近いと推測され，掘り込みの断面形はレンズ状に近いが西側に段を有する。東側をトレンチによって削平する。北側から254の土器が横転した状態で出土した。

分類：タイプⅣ

埋土

埋土は，褐色土の単層で，大粒の池田降下軽石，微粒の白パミス，炭化物微粒を含む硬質で火山灰質土で，Ｖa層と類似する。

出土遺物

254は深鉢で，口縁部を北側に向けた倒位の状態で出土した。底部を欠く。明瞭な波状口縁を呈し，対角線上に４つの波頂部を形成する。口縁部は頸部でくびれを形成して大きく開き，波頂部あたりでわずかに内湾する。やや長胴気味のプロポーションである。口縁端部は明瞭に角付けられ，口唇部には平坦面を形成し凹線を巡らせる。波頂部上面には大きな円形刺突を施し，直下に径1.5cm程の孔を表裏両側から施し貫通させる。上胴部に細い平行沈線文をシャープに描き，一部の沈線間を巻貝頂部によって刺突し充填する。外面は，丁寧にナデて仕上げられ，精緻な作りである。口縁部の形態の特徴からⅧa類に分類したが，施文法はⅦb類の特徴をもつ。土坑８号の底面着遺物である。胎土の色調は赤みの強い明るめの褐色で，搬入品の可能性も考えられる。255はⅧ類土器の口縁部片で，橋状の把手を有する。貝殻腹縁刺突文・沈線文を組み合わせて施文する。上端下部には穿孔が２つ見られる。256は無文土器の上胴部片で，口縁部が短く外反し胴部に丸みを帯びた器形である。口縁部外面をわずかに肥厚させる。内外面の上位に横位の貝殻条痕を施す。257は底部片で，底面に網代痕が残り白色物質が付着する。258は円盤状土製加工品で棒状工具による細い沈線と刺突を施す。Ⅷ類土器の可能性がある。

土坑９号（第100図）

検出状況

SK９は，Ｅ－３区のⅣb層で検出された。長軸は1.43m，短軸0.90m，深さ15cm，推定面積は0.99㎡を測る。平面形は，楕円率0.63の楕円形状である。埋土の上位から土器が出土した。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は，にぶい黄褐色土２枚・暗褐色・褐色の計４枚である。池田降下軽石粒，微粒の白パミス，微粒炭化物を含む。

出土遺物

259～261は深鉢の口縁部片である。259は内湾する形態で，口唇部に粘土紐を貼り付ける。外面上位に指頭によって沈線と円形刺突を組み合わせた文様帯を形成する。Ｖa類と考えられる。260は直線的に立ち上がり，内外面をわずかに肥厚させる。口唇部には平坦面をつくり，端部の角は丸みを帯びる。口縁部外面の直下を平行沈線文で区画するタイプと推測され，その下には胴部文様帯のモチーフの一部が確認できる。Ⅷb類と考えられ，角閃石を多く含むやや桃色の胎土や焼成の状態から南薩地方からの搬入品である可能性もある。261は口縁端部の外面に薄い肥厚帯を形成し，口唇部に棒状工具による刻目を施す。Ⅵa類，Ⅷ類の口縁部に類例が出土する。262は大きく開く器形であると推測されるため，台付皿の波頂部装飾と判断した。筒状の孔を形成し，器面には微隆起線上の突帯を貼り付けてその上に貝殻腹縁刺突文を密に施す。内面はミガキ様のナデ調整により丁寧に仕上げられる。

土坑10号（第101図）

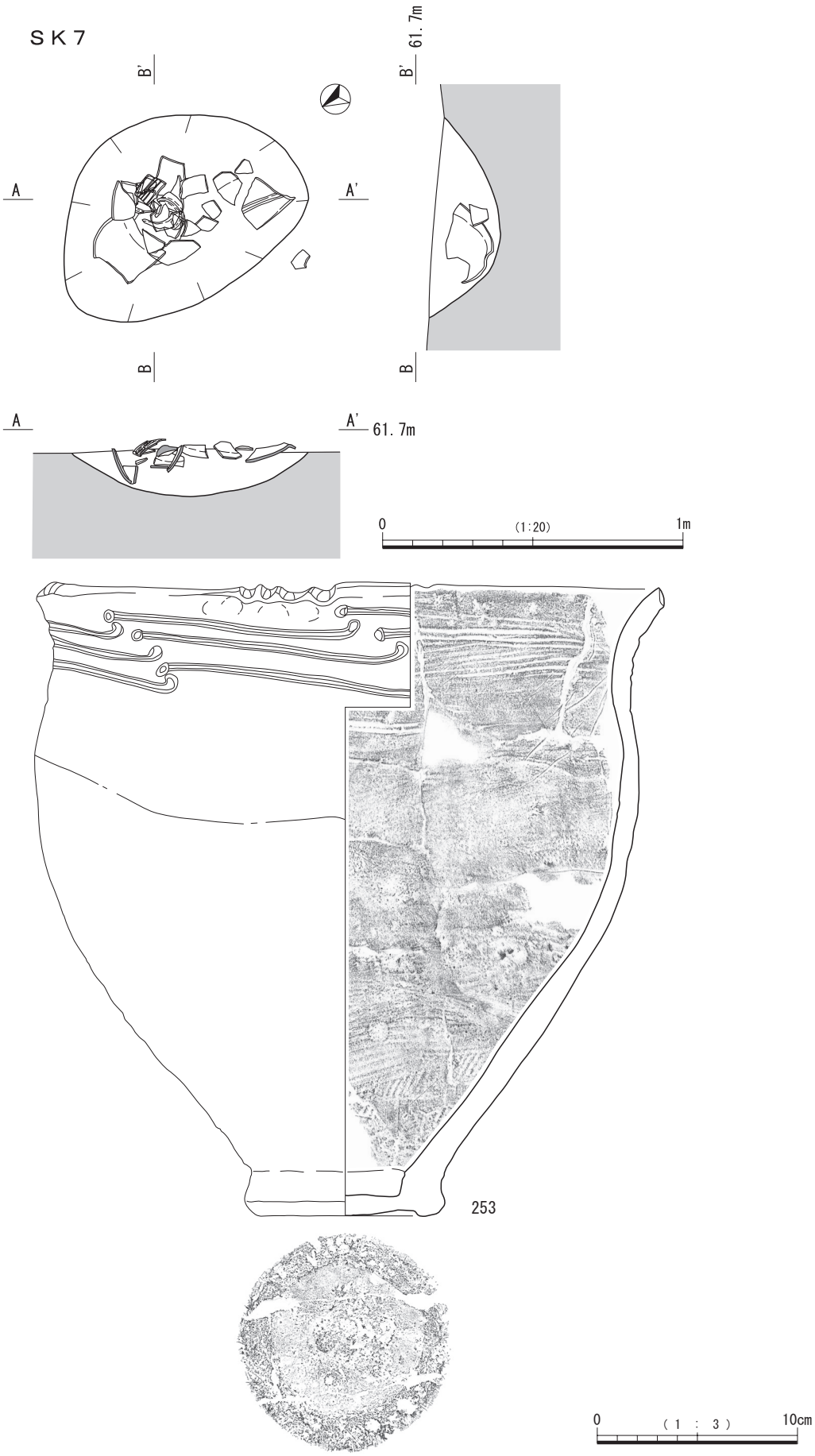
検出状況

SK10は，Ｅ・Ｆ－３区のＶ層で検出された。長軸は0.77m，短軸0.70m，深さ17cm，推定面積は0.44㎡を測る。楕円率0.91の円形である。主に埋土①と埋土②の上位から中位にかけて土器片が出土する。

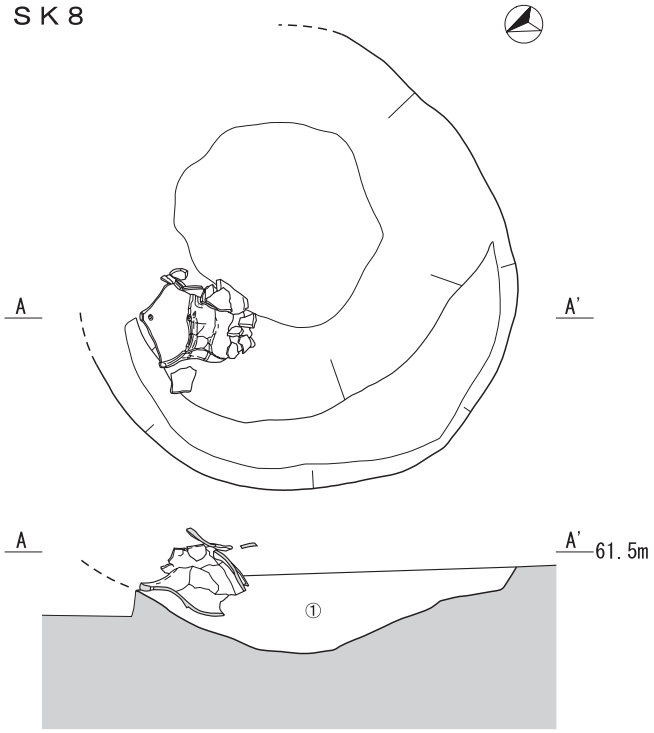
分類：タイプⅢ

埋土

埋土は，褐色土2枚・褐色土の計３枚である。アカホヤ火山灰の小土塊，アカホヤの微粒パミスとを炭化物を含むやや軟質の粒子の細かい土である。

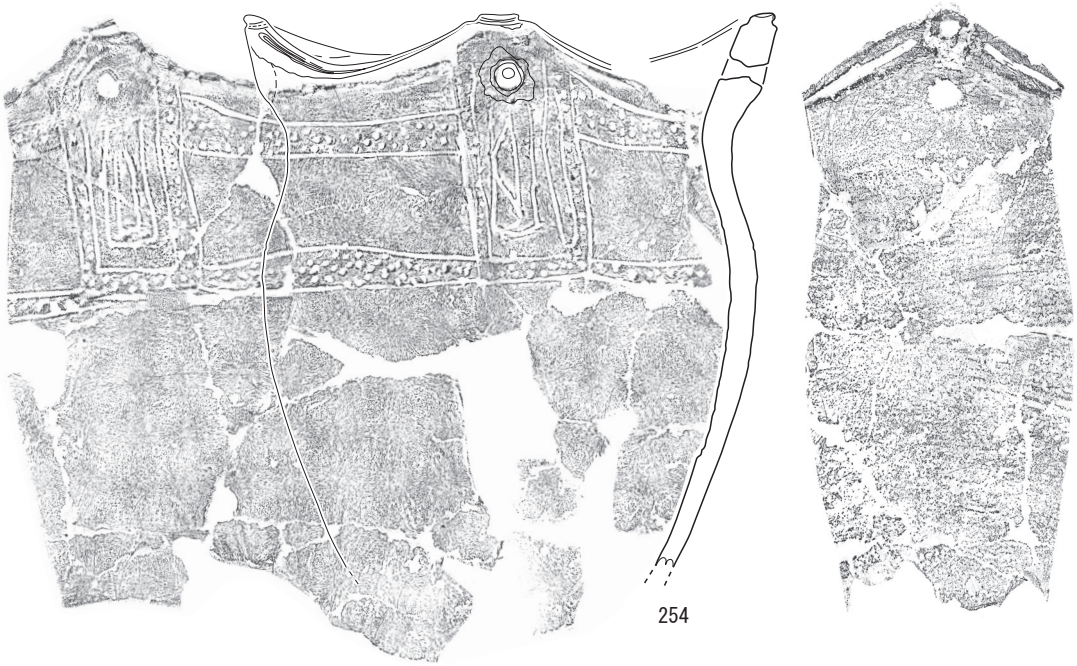


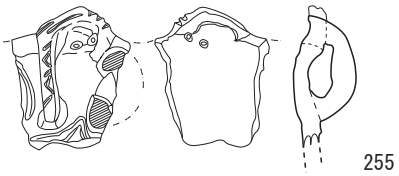
第97図　土坑７号と出土遺物



①褐色（10YR4/6）　硬質　火山灰質
　大粒の池田降下軽石を含む　微粒の白パミスを多く含む
　微粒の炭化物をわずかに含む　Va層と似ている

0　(1:20)　1m





0　（1：3）　10cm

第98図　土坑８号と出土遺物（１）

第99図　土坑８号出土遺物（２）

出土遺物

263～265は口縁部片で，内湾気味に立ち上がる。263は薄手の器壁で，口縁部直下に指頭による縦位の刺突を巡らせ，その下に別の文様帯をもつことが確認できる。口唇部には浅い凹みを形成する。胎土には多量の金色の雲母を含む。264は無文で,内外面ともにナデ調整である。265はやや大きく内湾する器形で，器壁が厚い。外面には方向性の整わない横位・斜位のごく浅い沈線が確認できるが，残存部分からは文様として意図的に描いたものかは判断できなかった。口縁端部を内側に張り出させる。267・268は胴部下位片である。266・267は外面には指頭による太めの凹線文を描き，ナデ調整で仕上げる。文様帯の広さが窺える。Ｖa類に該当する。268は無文で，内面に輪積みの粘土の接合痕を明瞭に残す。

土坑11号（第102図）

検出状況

SK11は，Ｇ－３区のＶ層で検出された。長軸は1.72m，短軸1.12m，深さ27㎝，推定面積は1.55㎡を測る。平面形は楕円率0.65の楕円である。埋土からは土器片や石皿等の石器類が出土した。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は，にぶい黄褐色土単層で，池田降下軽石や微粒炭化物を含む粒子の細かい火山灰質の砂質土である。

出土遺物

269は深鉢の口縁部片で外反する。外面には指頭による凹線が施される。器面には貝殻条痕を残し，施文状況の推測は難しいが，Ｖb類に該当する可能性がある。270は底部片で，底面は磨耗が著しいが，白色物質の付着が確認できる。

石器は磨敲石も少量出土するが使用の痕跡は薄く，石皿全点を図化した。S094は花崗岩製の石皿Ｉb類である。上面左側を欠く。中央に凹みを形成する。凹みの中央には敲打痕が顕著である。全体に赤色化が認められ被熱が著しい。下面側と左側面下方に掻き出し口を作る。土坑の南側から作業面を壁側として立った状態で出土したことから立石の可能性も捨てきれないが，花崗岩製石皿立石遺構と捉えた例と比較して，出土エリアが離れていることや，石皿の大きさに対して掘り込みが大きすぎることなどを踏まえて土坑であると判断した。

土坑12号（第103・104図）

検出状況

SK12は，Ｃ－４区のⅣb層で検出された。長軸は1.73m，短軸1.54m，深さ44㎝，推定面積は2.14㎡を測る。平面形は楕円率0.89の円形である。底面はほぼ平坦で，西側がやや深く落ち込む。

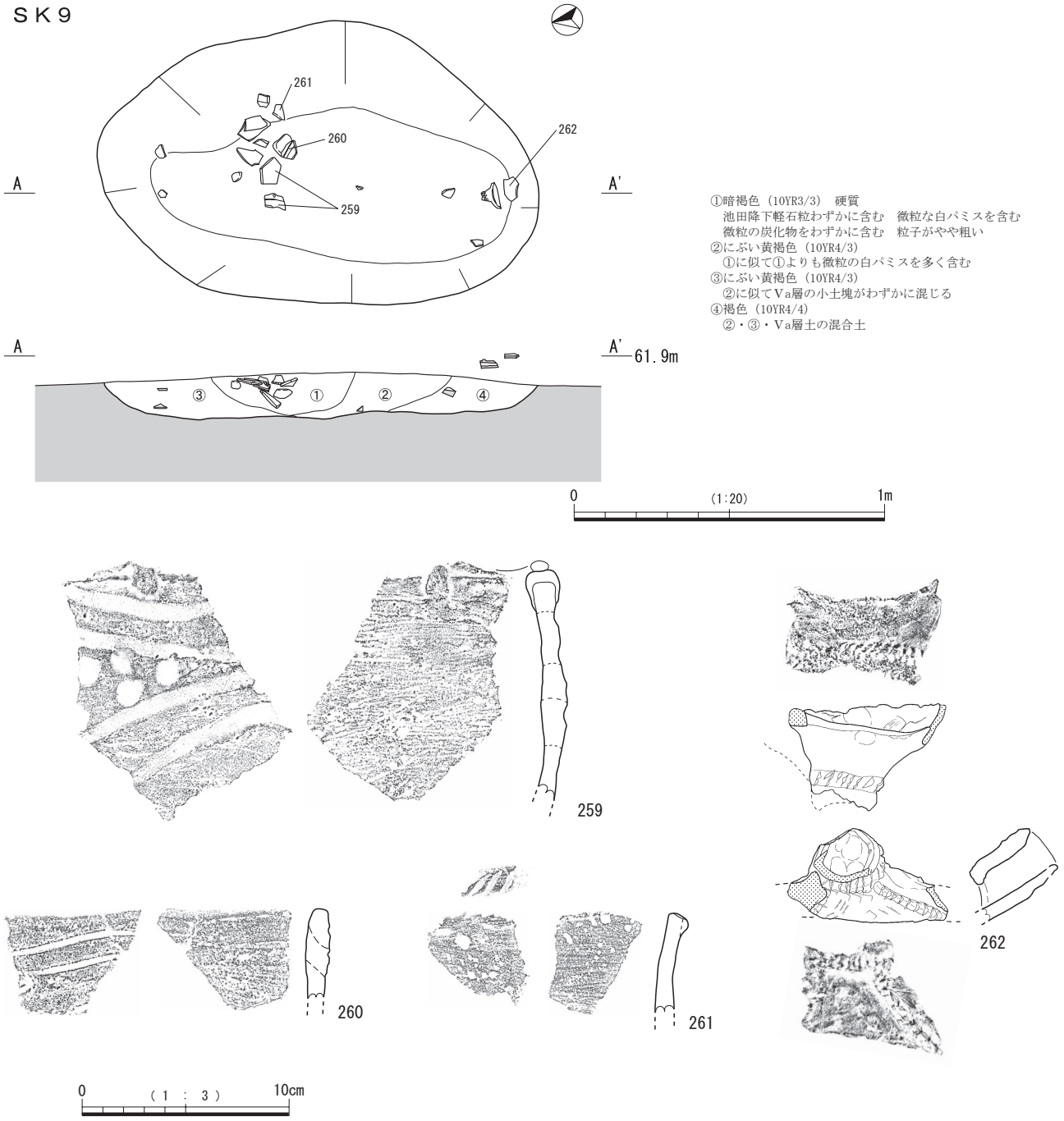
分類：タイプⅢ

埋土

埋土は，暗褐色土と褐色土の４枚である。池田降下軽石,微粒の白パミスや微粒炭化物を含む。Ｖa層が混じる。

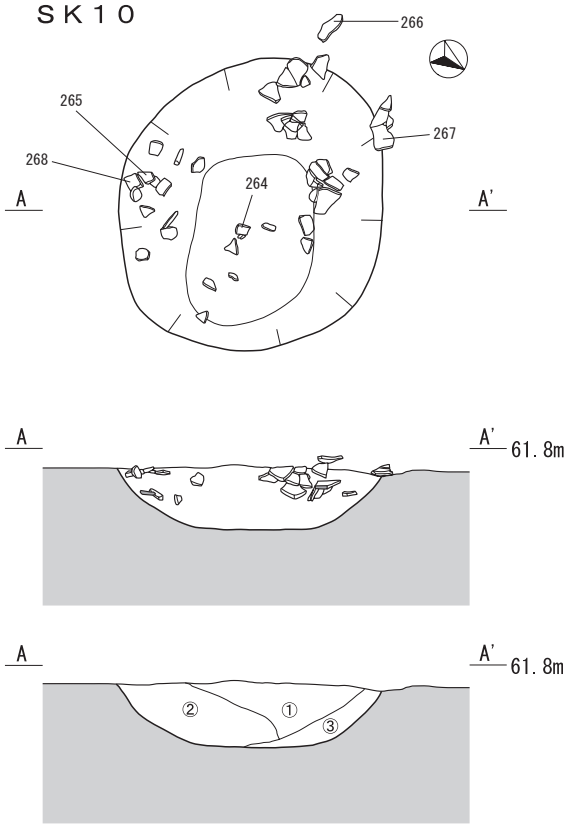
出土遺物

271～274は口縁部片である。271は口縁部直下に指頭



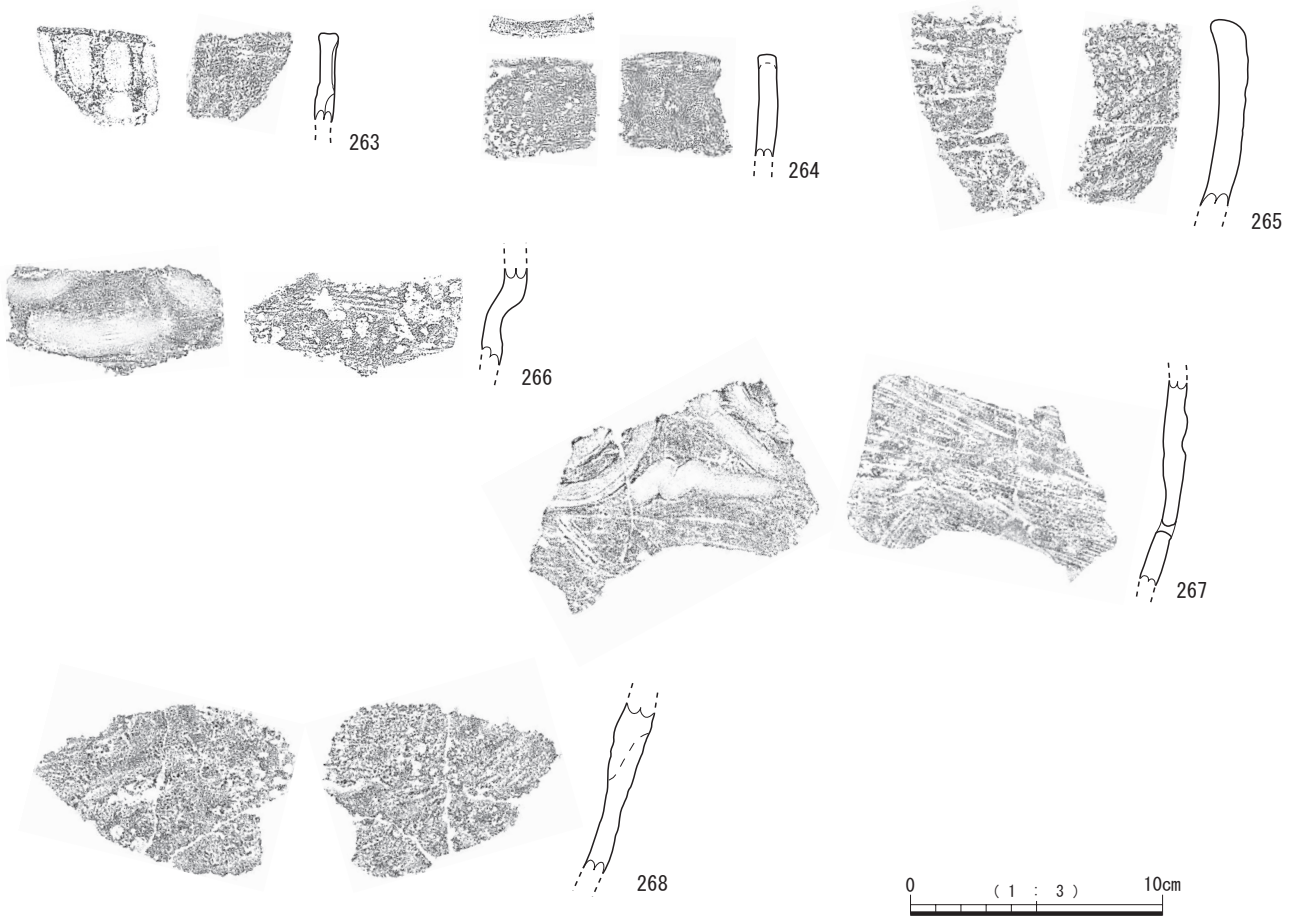
第100図　土坑９号と出土遺物

による縦位の連続刺突を施す。器面には貝殻条痕を残す。Ⅴa類と考えられる。272は口縁端部を肥厚させ，口唇部を幅広く形成し，ごく浅い凹みを巡らせる。Ⅵb類と考えられる。273は直線的に立ち上がり，口唇部に棒状工具による刺突を連続して施す。刺突の中には赤色顔料の付着が確認できる。口唇部はやや内径する。Ⅵ類の範疇と捉えた。274は強く外反する。屈曲部内面には角を付けない。口縁端部の外面側に棒状工具による刺突が確認できるが，小片のため規則的に巡らせたものかは不明である。外面の下端に頸部を区画し巡らせた沈線の一部が残るためⅧ類であると判断した。275は口縁部を含む胴部片で，破片の多くは東側上層からまとまって出土し，埋土中上位にも散在して出土した。口縁部はごく緩く外反し，口唇を平たく形成する。胴部はあまり張らず，底部に向かって直線的にすぼまる器形である。凹線により足のようなモチーフを横位に連続して描き，残存部の状況から左右対称に展開させると推測される。内外面ともに貝殻条痕を明瞭に残す。Ⅵb類と考えられる。色調は

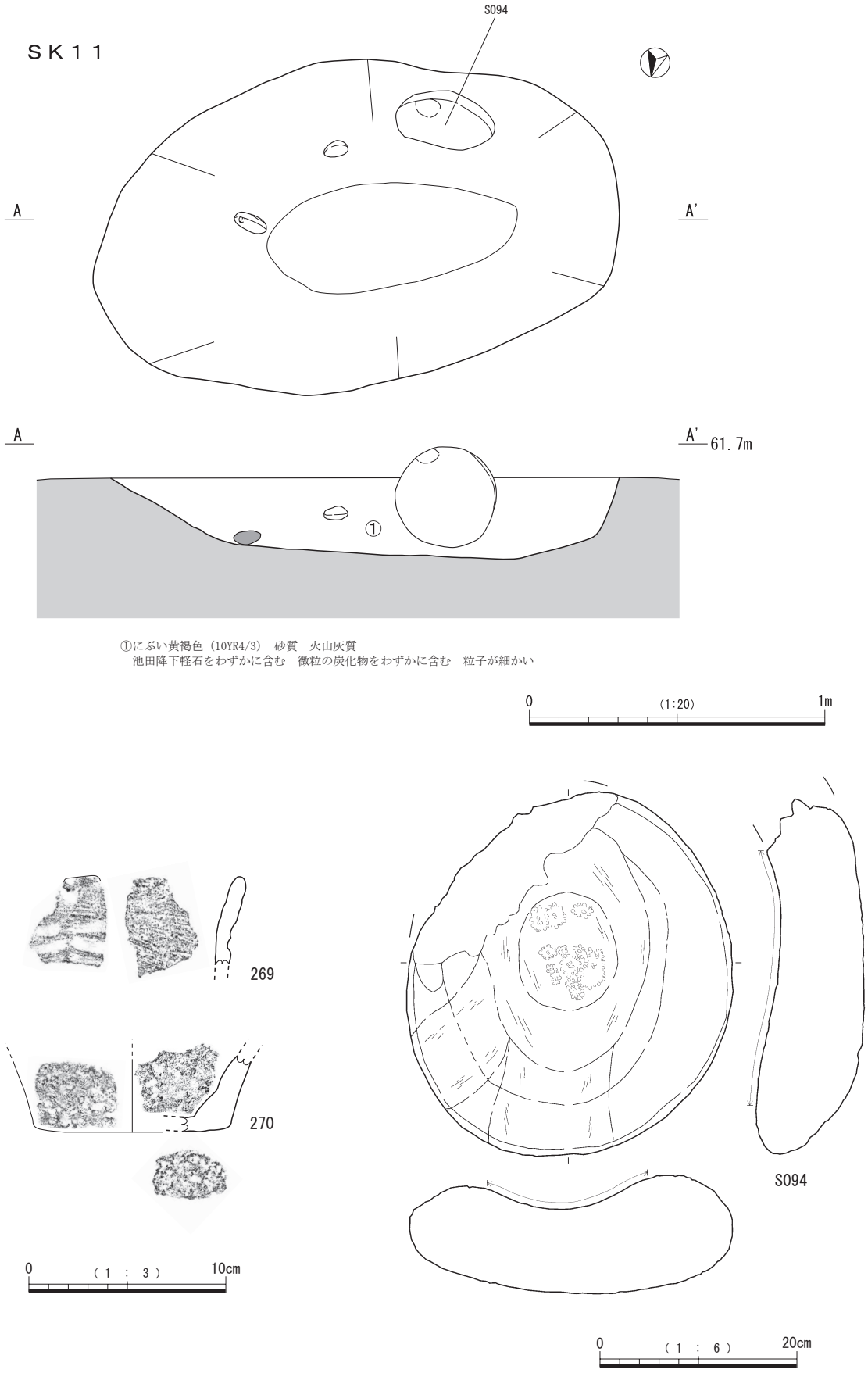


①暗褐色（7.5YR3/4）　やや軟質
　アカホヤ火山灰の小土塊とアカホヤ火山灰の微粒パミスを含む
　白色パミス（5～10mm）を含む
　炭化物をわずかに含む　粒子は細かい
②暗褐色（7.5YR3/3）　やや硬質
　微粒のアカホヤ火山灰パミスをわずかに含む
　極小の白色パミス（1mm以下）を含む
　炭化物をやや多く含む　粒子は細かい
③褐色（7.5YR4/4）　①よりもやや軟質
　アカホヤの小土塊を斑状に含む　アカホヤの微粒パミスと
　炭化物をわずかに含む　粒子が細かい

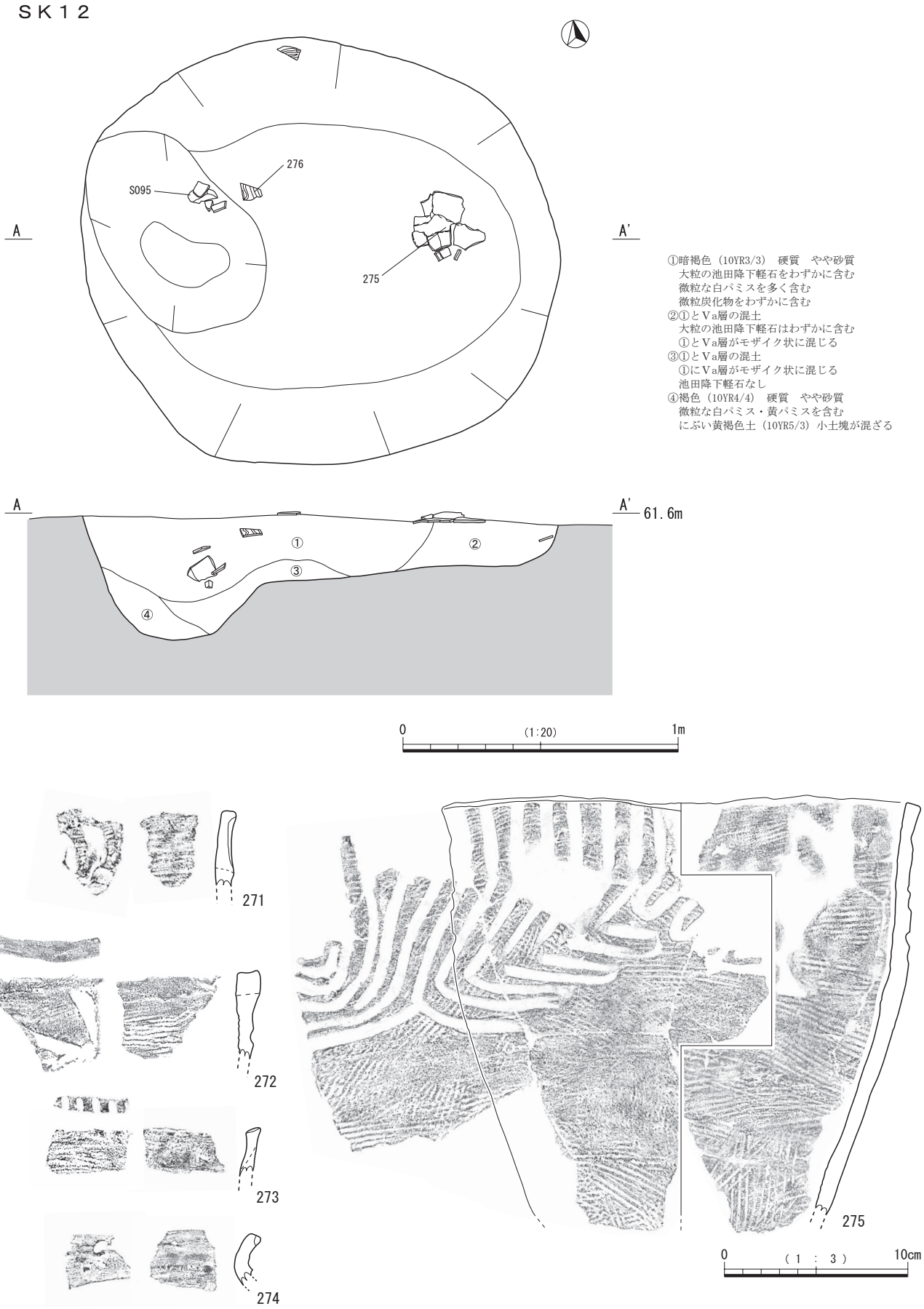
0　(1:20)　1m



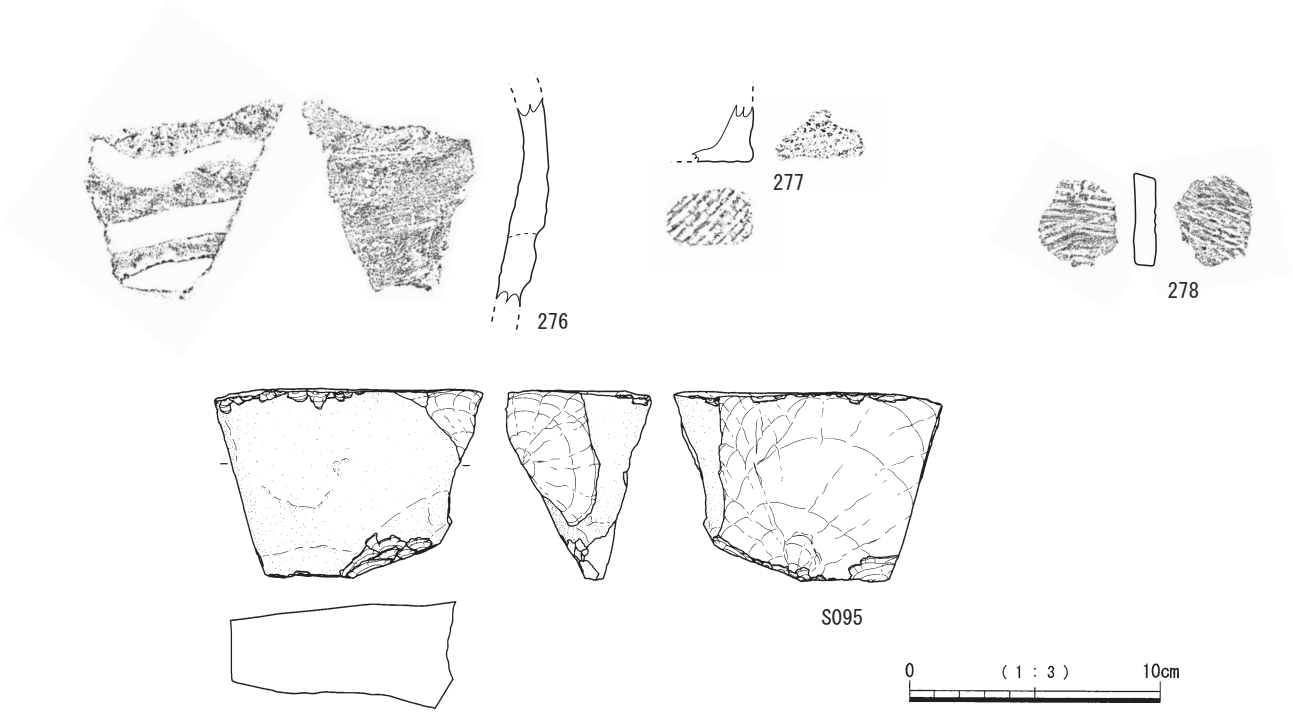
第101図　土坑10号と出土遺物



第102図　土坑11号と出土遺物



第103図　土坑12号と出土遺物（１）



第104図　土坑12号出土遺物（２）

やや灰色がかり，硬質である。276は胴部片で指頭により施文する。Ｖ類と考えられる。277は網代痕が残る底部である。278は円盤状土製加工品である。

S095は砂岩製の礫器である。正面と裏面の上端および下面側に二次加工痕がある。上面は摂理面であり，正面・側面に自然面を残す。下面は表裏両面から連続して剥離を施し直線的な刃部を形成する。

土坑13号（第105・106図）

検出状況

SK13は，Ｄ・Ｅ－４区のＶ層で検出された。長軸は2.32m，短軸1.64m，深さ14cm，推定面積は2.97㎡を測る。平面形は楕円率0.71の楕円である。遺物は埋土の北側から土器片や磨・敲石類が少数出土した。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は，褐色土１枚である。池田降下軽石粒，微粒の白パミスや炭化物を含む。やや砂質土である。包含層より炭化物を多く含む。

出土遺物

279～281は深鉢の口縁部である。279は緩い波状口縁であることが想定される。口唇部は平たく成形され，明瞭に角付けられる。口縁部直下には指頭による円形の刺突を少なくとも２段以上巡らせる。Ⅵa類と考えられる。280は直線的に立ち上がり，口縁端部でわずかに内湾する。口縁部外面に細幅の肥厚帯を形成する。竹管状の工具による刺突を口唇部と肥厚帯の外面に巡らせる。その直下には凹線による幾何学文を密に施す。掘り込み北側の埋土中位から出土した。Ⅵa類の範疇と考えられる。281は無文で，口縁部最上位に細い粘土紐をナデ付けて巡らせる。器面は丁寧にナデて仕上げられ，断面からは輪積み痕が明瞭に観察できる。Ⅵb類と考えられる。282は二叉状の工具による凹線文を施し，凹線の稜を丁寧にナデる。円形の刺突も確認できる。裏面に小さな種子圧痕様の凹みがみられる。283は胴部を使用した円盤状土製加工品である。

S096～S098は磨・敲石である。S096・S097はⅠ類に属する。S096は安山岩Ｂ類製で被熱の痕跡がみられた。全面的によく使用され，被熱の痕跡が確認できる。掘り込み北側の埋土床面から出土した。S097は安山岩Ｂ類製で半分ほどが残存し，使用の痕跡は薄い。S098は安山岩Ｂ類製で，残存部分は少ないもののⅡa類であることが推測できる。

土坑14号（第107図）

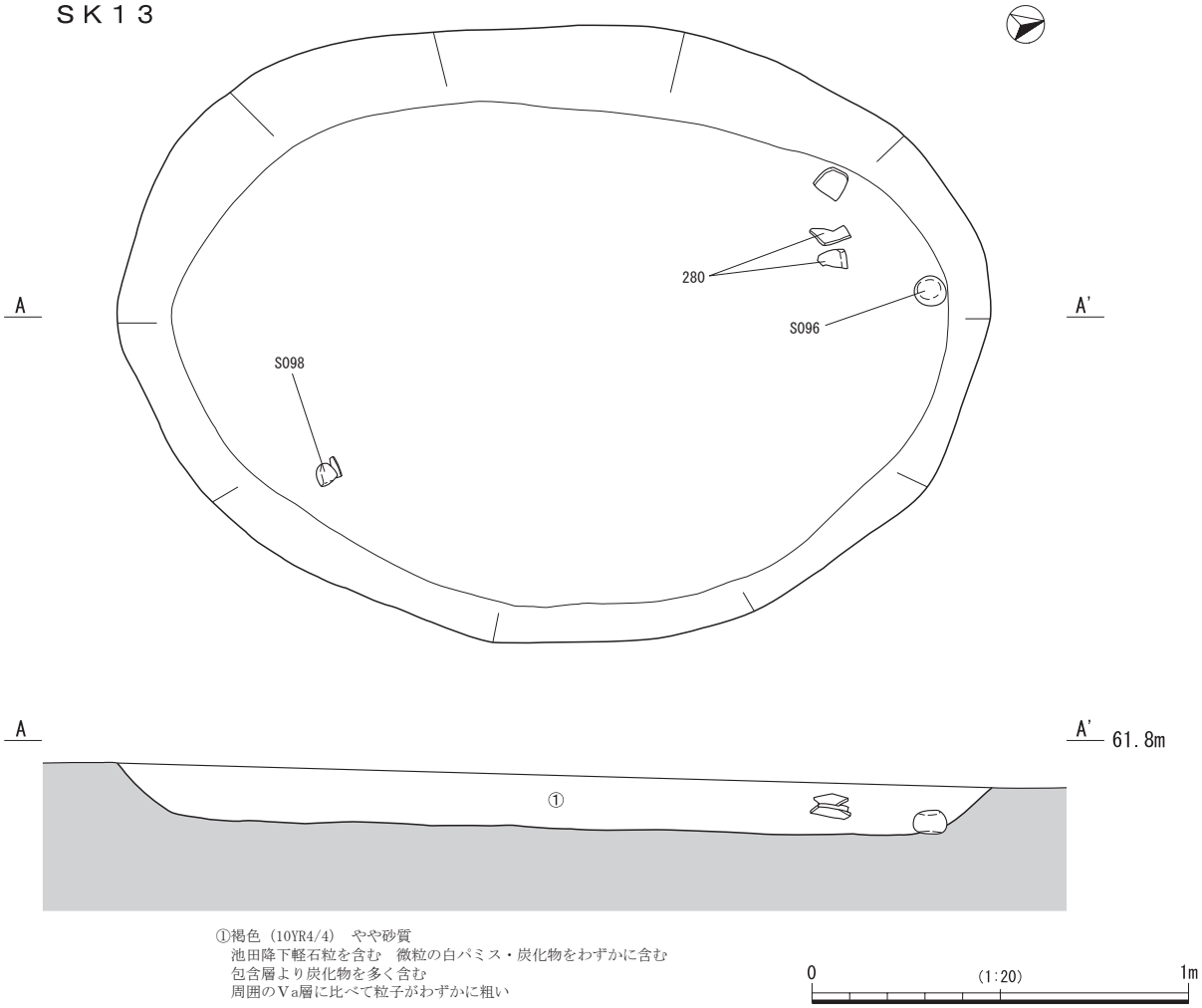
検出状況

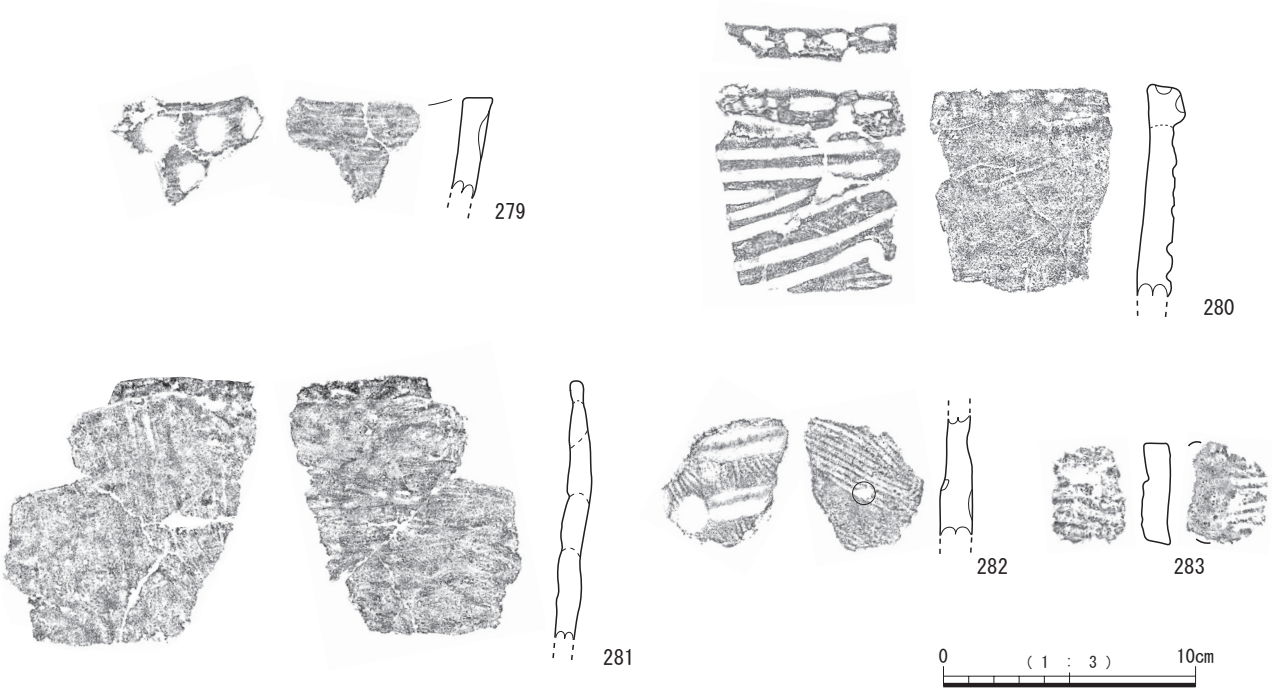
SK14は，Ｅ－４区のⅣb層で検出された。長軸は1.19m，短軸0.61m，深さ43cm，推定面積は0.58㎡を測る。平面形は楕円率0.51の楕円である。深めの土坑で，底面はほぼ水平である。土坑内からは磨・敲石類や土器片が少数出土したが，そのうち有文の土器片１点を図化した。

分類：タイプⅡ

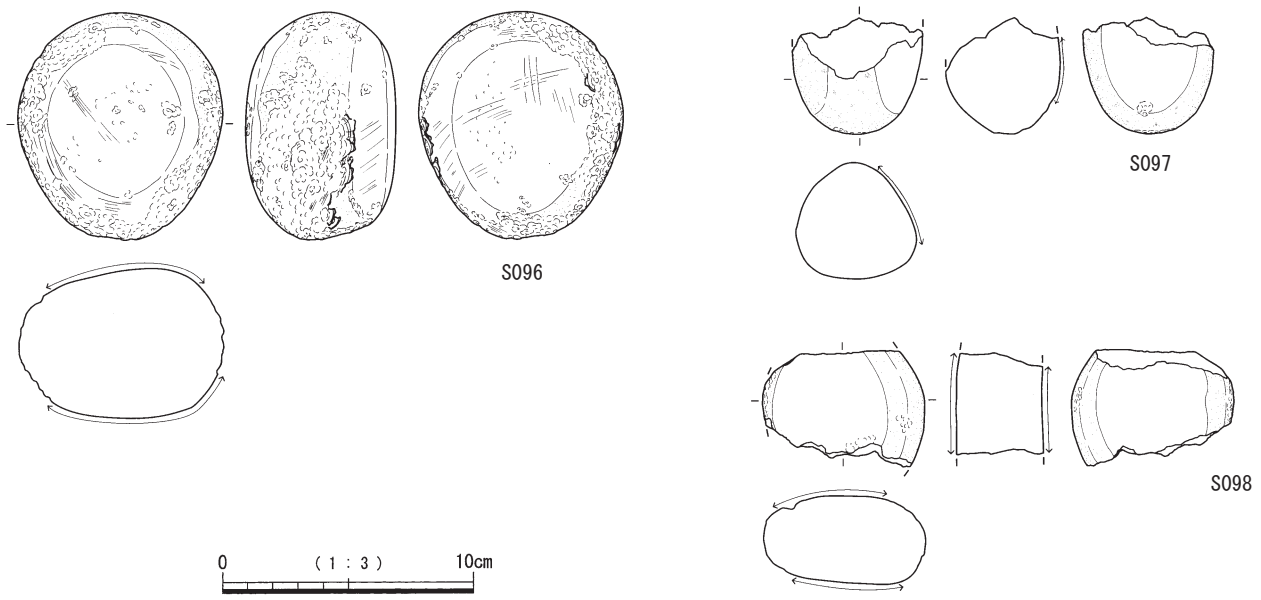
埋土

埋土は，褐色土単層である。微粒の白パミス，小礫や





第105図　土坑13号と出土遺物（１）



第106図　土坑13号出土遺物（２）

微粒の炭化物を含む，やや硬質の砂質土である。

出土遺物

284は上胴部片で，残存部の状況から口縁部はごく緩く外反すると推測される。器壁の厚みは不均一である。外面には指頭によって縦位の浅い凹線が数条描かれる。内外面ともにナデ調整を施し，Ｖa類に該当する。

土坑15号（第108・109図）

検出状況

SK15は，Ｅ－４区のＶ層で検出された。長軸は0.85m，短軸0.68m，深さ14cm，推定面積は0.45㎡を測る。平面形は楕円率0.80の円形である。底面は平坦である。埋土の上層から，口縁部片とその直下に円盤状土製加工品が20枚ほど重ねられ，外面を上にした状態で出土した。器面・文様・調整および胎土の観察から，これらのほとんどが285の深鉢から加工されたと判断される。

また，埋土上層から軽石様の礫が出土しており，遺構図面に示しているが，詳細な特徴は不明である。

分類：タイプⅢ

埋土

埋土は，褐色土１枚である。池田降下軽石，黄パミス，白パミスや微粒の炭化物を含む。やや粗い粒子の軟質土である。

出土遺物

285は口縁部片で，286～304は285と同一個体の円盤状土製加工品である。286～288は口縁部片を含む接合資料で，290は胴部片同士の接合資料である。器形は頸部を緩やかに外反させ，長い印象の口縁部を形成する。緩い波状口縁を呈し，波頂部を内外面に大きく隆起させる。波頂部の内外面と上面には棒状工具による大きな円形刺突を多数施す。波頂部内面は鉤状に強く内湾する。胴部がやや張り出し，底部に向かって急にすぼまる丸みを帯びた器形である。口縁部以下を無文とし，頸部屈曲部から下に平行沈線文を多重にかつ密に施した文様帯を有する。文様帯は上胴部に集約される。平行沈線間に横位の貝殻腹縁刺突を部分的に連続させる。口縁部外面の無文部分の幅は広く，胴部の平行沈線の密な特徴は，本遺跡から出土したⅧ類とは若干異なるが，施文方法，形態は共通するためⅧb類に該当すると判断した。305～307は胎土や推定される施文具の違いなどから別個体と判断した。このうち有文のものはⅥa類の可能性が考えられる。

土坑16号（第110図）

検出状況

SK16は，Ｂ－６区のⅣb層で検出された。長軸は0.58m，短軸0.43＋αm，深さ17cmを測る。南側をトレンチによって削平する。遺物は遺構の中央部の検出面よりやや上位にまとまって出土しており，本来の掘り込み面はさらに上位であった可能性も考えられる。

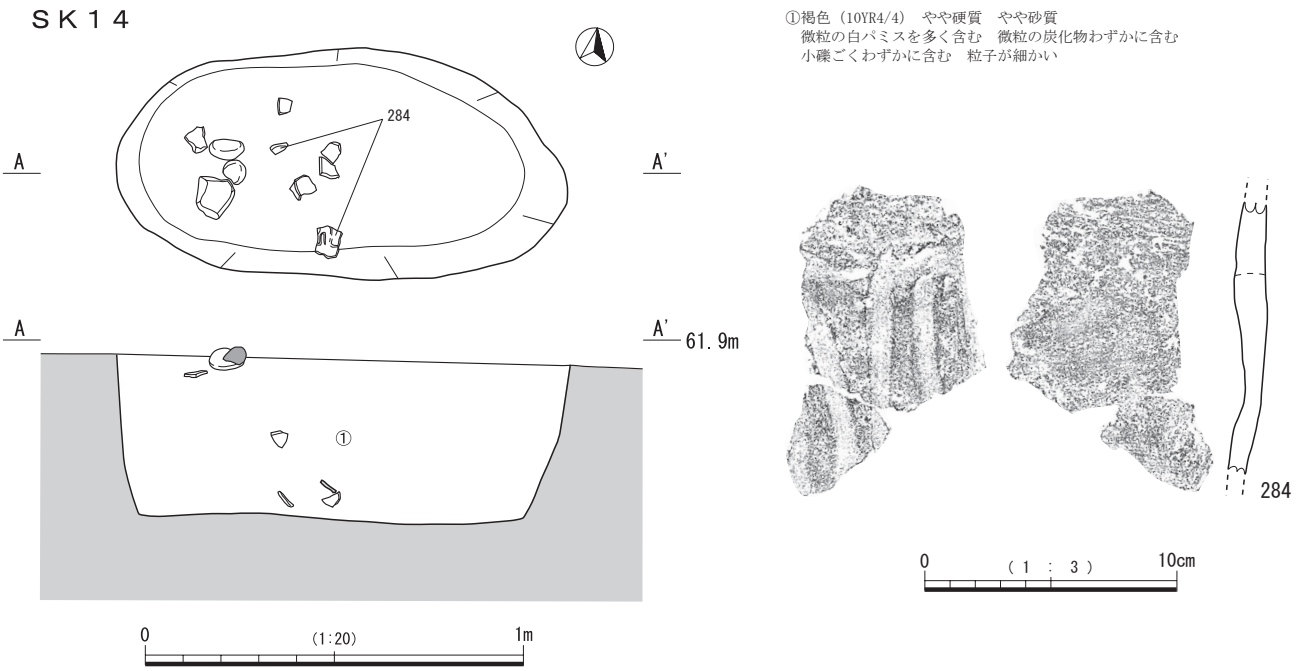
分類：タイプⅣ

埋土

埋土は，暗褐色土単層である。池田降下軽石・白色パミス・黄色パミスや微粒の炭化物を含むやや粗い粒子の火山灰質土である。

出土遺物

308は深鉢の上胴部片で，平坦口縁を呈し，口唇部の



第107図　土坑14号と出土遺物

一部を幅広く成形しその上面に棒状工具による深い刻みを数箇所施す。口縁部上位には粗い平行沈線文をやや太めの線で描いた文様帯を持ち線の始点と終点を深く刺突する。残存部下位にも横位の沈線が確認できるため，さらに下位に文様が及ぶ可能性もある。付着炭化物の放射性炭化物年代測定により，暦年較正で3961±23yrBP，2500－2439calBC（確率49.64％）という結果が出ている。309・310は外反しながら開く口縁部片で，310は口縁端部を欠く。310は胴部に向かって大きく張り出す丸みのあるプロポーションと推測される。ともに頸部屈曲部を横位の凹線によって区画する。Ⅷb類と考えられる。311・312は胴部片でともに平行沈線文が描かれ311は沈線間に棒状工具による連続刺突文を施す。Ⅷ類の範疇と考えられる。313は胴部片から作られた円盤状土製加工品の破片である。

土坑17号（第111・112図）

検出状況

SK17は，B・C－６区のⅣb層で検出された。長軸は1.93m，短軸1.09m，深さ43㎝，推定面積は1.64㎡を測る。楕円率0.56の楕円である。遺物の土器片は埋土①と埋土②～④の境目付近から出土した。

分類：タイプⅡ

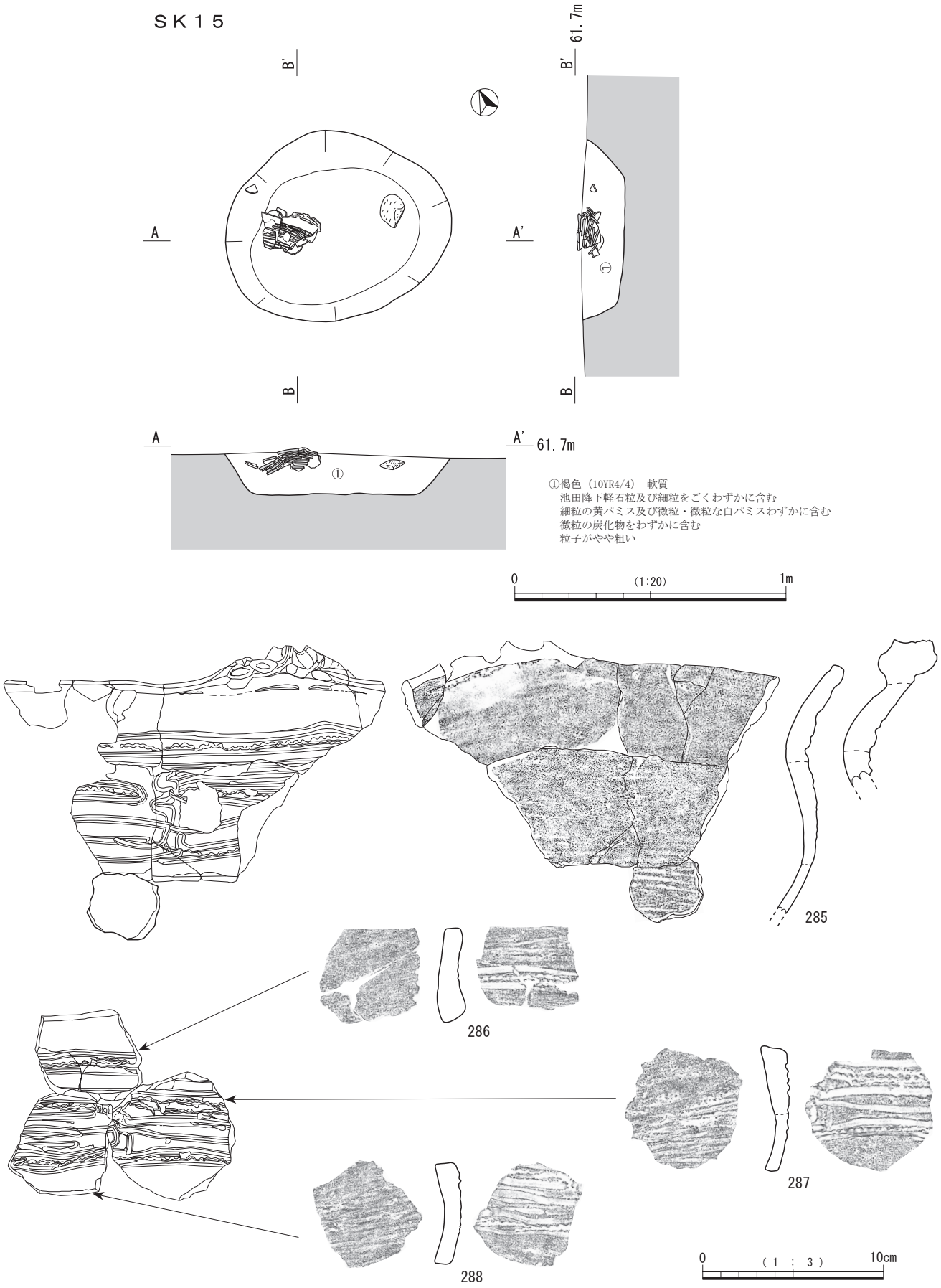
埋土

埋土は，暗褐色土２枚・褐色土・黄褐色土の計４枚である。池田降下軽石・微粒の白パミスや炭化物粒を含み粒子がやや粗い。一部Ⅳb層が混じる。

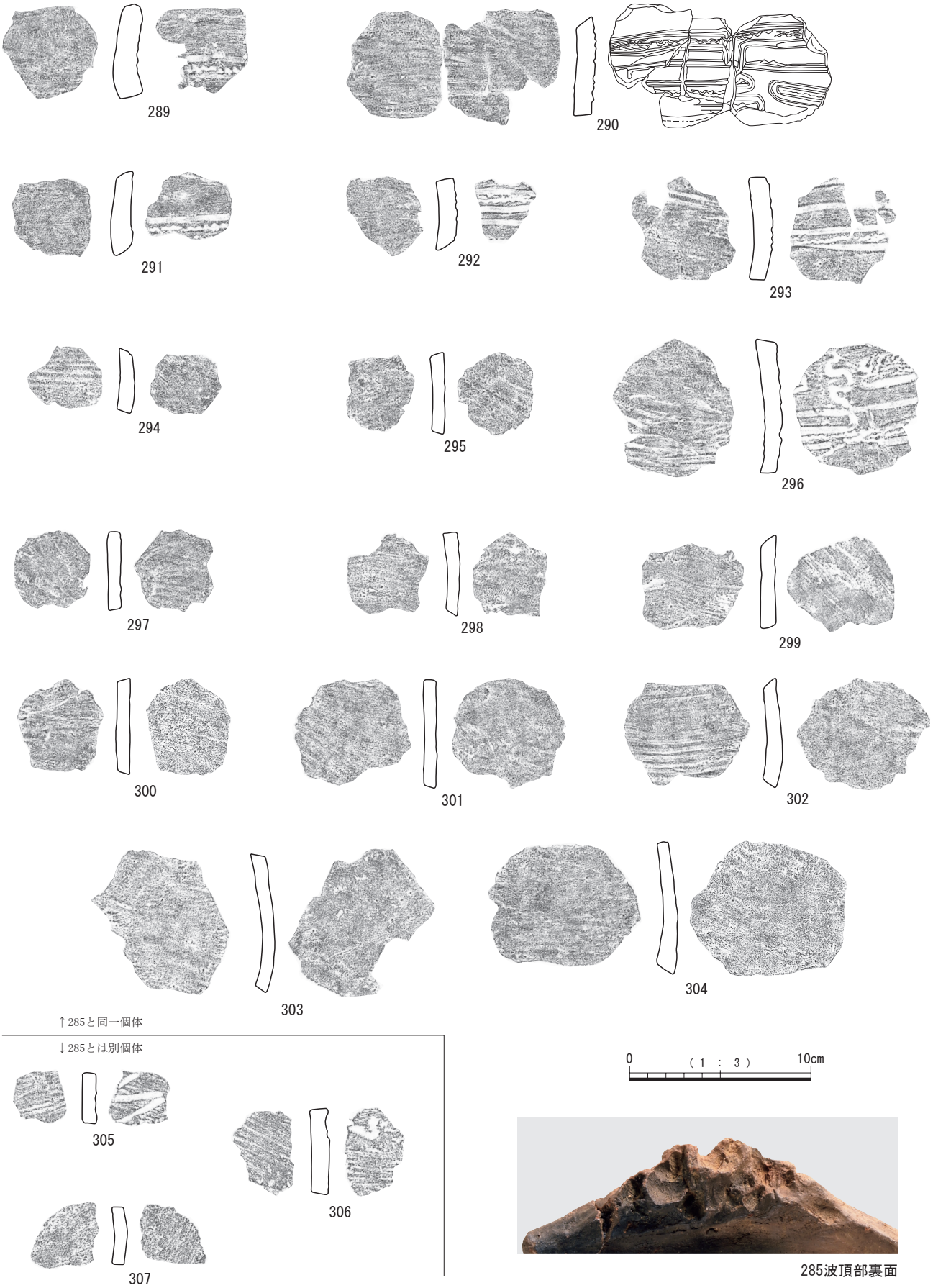
出土遺物

314は口縁部が内湾し，緩い波状口縁を呈する。口唇部は平坦に形成され，波頂部上位でやや幅広くなる。口縁部直下に棒状工具による縦位の短い刺突文を施し波頂部直下には同心円状のモチーフを描く。波頂部のまわりには枠状のモチーフを横位に細長く描く。文様帯は胴部上位に集約され，その最下位に凹線を巡らせ，直下に短い刺突を連続させる。器形･文様の特徴からⅥa類とした。包含層に同一個体の可能性をもつもの（第２分冊564・565・567）が出土しており，土坑の廃絶後に流れ込んだ可能性もある。315は外面を肥厚させた口縁部の小片で，肥厚帯とその下に文様帯をもち，口唇部に凹線を有する。Ⅷa類と考えられる。316はⅧ類土器の胴部片である。317は小型の深鉢の底部で，低い高台を有する。外面には縦位の平行沈線間に棒状工具による連続刺突を施した文様を２条単位で数箇所等間隔に施し，間を横位の曲線文で装飾する。線の始点と終点を入り組ませる。Ⅷa類の範疇と考えられる。318は推定径10.4㎝の脚片である。外面には棒状工具による横位の沈線と連続刺突を施す。底面に網代痕が残る。台付皿などの特殊な形態の土器の脚であると推測され，中津野遺跡に似た形態の土器の出土が報告される（県理セ（217）『中津野遺跡』1366，1367）。

S099・S100は磨・敲石Ⅰ類で，S099はホルンフェルス製で，S100は安山岩Ｂ類製である。ともに被熱の痕跡が窺える。S101はホルンフェルス製の打製石斧Ⅳ類である。左側縁を欠損した後で，下面側に刃部を再加工する。



第108図　土坑15号と出土遺物（１）



第109図　土坑15号出土遺物（2）